

昭和 60 年度

京都市埋蔵文化財調査概要

1988 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



カラー図版一解説

栗栖野瓦窯跡

栗栖野窯跡は京都盆地北方の丘陵に展開する二大窯跡群の一つ、岩倉幡板瓦窯跡群中に所在し、『延喜式』記載の栗栖野瓦屋に比定される窯跡である。今回新たに10基の窯跡を検出した。中には飛鳥白鳳期の管窯が2基含まれ、そのうち1基は天井部の崩落により放棄された結果、窯詰め状態で500枚以上に上る丸・平瓦が遺存していた。

6号窯窯詰め状況（東から）

カラー図版二解説

平安京跡

この人形は、平安京西市に南接する地点で多数の祭祀具と共に出土した。一つ一つの人形に目を移すと、切り込みや墨描きなどによる表現は個性的で、中には優れて写実性に富むものもある。人間の罪穢を一身に背負い、時には呪咀の道具として、人形は人間世界の陰の部分でその役割を演じた。西市に集散する人々がそれぞれの思いを込め、この薄板に託したのだろう。

右京八条二坊跡調査出土人形



序

平安京を造営し、そこに遷都されたのは桓武天皇で、延暦13年(794)のことである。その京の規模は、約110年後に定められ、『延喜式・左右京職』の内に示されている。その通り施工されたかどうか。施工されたとすれば、その痕跡を残しているものとみななければならない。文献と遺跡の両面から、その平安京の全体像を浮かび上がらせる必要がある。

平安京遷都1100年の明治27年には京都市参事会はその記念事業の一つとして『平安通志』を編纂している。それは当時として精密なものと賞賛を受けたことであろうが、それによって作られた大極殿碑の位置が、正確でなく、そのことから復原に使われた尺度とそれを測る基点と、基線とした方角のことが違うことを指摘された。これら指摘された点を正確に求めるにはいかなる方法があるのだろうか。その方法として上記の遺跡の状況を知ることによるべきであろう。

しかし、遺跡を調査するとは言えば、今では考古学の範疇に属する。その考古学が、明治・大正の間にはなかった学問である。この学問が、今のような形態と内容を持つようになったのは、戦時中・戦後のことで、ここ五十年の間のものである。しかも埋蔵物、すなわち、地中の文化財それを埋蔵文化財というが、その概念が生まれたのは、今の重要文化財保護法が昭和25年に制定された後のことである。その法律の保護を受けて、埋蔵文化財が歴史或は文化を考える上に大きな資料となってきたのである。結局、この資料に基づき、平安京を考えることになり、明治末・大正の年代の時に到り得なかった分野を開拓するようになってきた。

ところで、平安京を問題にする限り、その埋蔵文化財を知るには、地中のものという限り、障害となっているのは、その土地が千年の都ということで、後世の破壊が当初の平安京を壊し、断片に残っているのが普通である。その断片として残っているものに重要なものがあるなら良いが、そうでない場合もある。それがなぜ重要であるかの判断も、可能な限り正確にしなければならない。そのような資料の繋ぎ合わせができれば、更に高い資料が得られよう。調査してそのようになることが望ましいのであるが、平安京の場合は、1箇所を調査できても、繋ぎ合わせの調査は何年かを待たなければならない。この年度の報告として取り上げたものも、そのような資料ばかりである。この中の一例を取り上げると「平安宮・京跡」の章で、2・3の項で取り上げた「大極殿院」のことである。ここでみつけた凝灰岩は、前々年にみつけた基壇北側と繋ぐなら、南側を為すもので、合わせて大極殿院北廊の一部と考えることができた。すると大極殿院の位置の北端を出したことになる。このことから推して、片々とした資料ながら、今回報告したことが、大きな意味を持っていることを悟っていただきたい。

昭和63年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 杉 山 信 三

凡 例

1. 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和 60 年度に実施した、発掘調査（第 1 章）、試掘・立会調査（第 2 章）、資料（第 3 章）、事務報告（第 4 章）の年次報告である。
2. 試掘・立会調査のうち、調査継続中のため次年度に報告する分は表 2 に示した。
3. 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系 VI によった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。標高は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
4. 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図（2,500 分の 1、25,000 分の 1、30,000 分の 1）を修正して使用した。
5. 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
6. 遺構のうち表記記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。S A（柵）、S B（建物）、S D（溝）、S E（井戸）、S F（道路）、S G（池）、S K（土壙）、S X（その他の遺構）
7. 各調査位置図に示した黒塗り部分が本年度実施した調査地点で、網目は前回の調査地点である。
8. 昭和 60 年度の発掘調査のうち、文化庁国庫補助事業による調査は、昭和 60 年 4 月～12 月実施分は昭和 60 年度の各調査概報に、昭和 61 年 1 月～3 月実施分は昭和 61 年度の各調査概報に報告してある。
9. 図版一～七の調査地点番号の I は発掘調査、II は試掘・立会調査を表す。試掘・立会調査は付表 2 の番号を用いており、第 2 章の報告番号とは一致しない。
10. 本年度の調査並びに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。また本年度の調査のうち、京都市埋蔵文化財調査センターと平安京調査会の協力によって実施した調査については文末に記した。
11. 写真は、遺物写真及び一部を除く発掘調査の遺構写真は牛島 茂が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
12. 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。編集と調整は、永田信一、久世康博、辻裕司が行った。

目 次

第1章 発掘調査	24 鳥羽離宮跡第115次調査……………64
	25 鳥羽離宮跡第116次調査……………65
I 昭和60年度の発掘調査概要……………1	26 鳥羽離宮跡第117次調査……………66
	27 鳥羽離宮跡第118次調査……………67
II 平安宮・京跡	28 鳥羽離宮跡第119次調査……………69
1 平安宮長殿……………4	
2 平安宮大極殿院1……………5	IV 中臣遺跡
3 平安宮大極殿院2……………6	29 中臣遺跡第61次調査……………70
4 平安京左京三条二坊1……………7	30 中臣遺跡第63次調査……………71
5 平安京左京三条二坊2……………8	31 中臣遺跡第64次調査……………72
6 平安京左京四条四坊……………15	32 中臣遺跡第65次調査……………73
7 平安京左京七条二坊・八条二坊…18	
8 平安京左京八条二坊……………23	V 長岡京跡
9 平安京左京八条三坊……………24	33 長岡京左京一条三坊・二条三坊…74
10 平安京左京九条三坊……………31	34 長岡京左京二条三・四坊……………77
11 平安京右京二条三坊1……………36	35 長岡京左京四条二・三坊……………81
12 平安京右京二条三坊2……………41	
13 平安京右京二条三坊3……………42	VI その他の遺跡
14 平安京右京三条一坊……………44	36 栗栖野瓦窯跡……………86
15 平安京右京三条二坊……………46	37 北野鳥居前町遺跡……………88
16 平安京右京三条三坊……………48	38 双ヶ岡中学校内遺跡……………90
17 平安京右京八条二坊……………50	39 伏見城跡1……………91
18 平安京右京九条二坊……………55	40 伏見城跡2……………95
	41 深草坊町遺跡……………100
III 鳥羽離宮跡	42 大宅廃寺……………102
19 鳥羽離宮跡第110次調査……………59	43 大藪遺跡……………108
20 鳥羽離宮跡第111次調査……………60	44 円山古墳……………110
21 鳥羽離宮跡第112次調査……………61	
22 鳥羽離宮跡第113次調査……………62	
23 鳥羽離宮跡第114次調査……………63	

第2章 試掘・立会調査

第3章 資料整理

I 昭和60年度の試掘・ 立会調査概要……………	112	1 遺跡測量……………	155
II 平安宮・京跡		2 コンピュータ……………	155
1 平安宮主殿寮・大宿直……………	115	3 写真撮影……………	156
2 平安京左京八条二坊1……………	116	4 保存科学……………	160
3 平安京左京八条二坊2……………	119	5 報告書の刊行……………	163
4 左京九条三・四坊……………	122	6 遺物の貸出し……………	163
5 平安京右京八条二坊……………	124	第4章 事務報告	
6 平安京右京九条一坊……………	125	1 人事異動……………	164
III 平安京域外の遺跡		2 普及啓発及び技術者養成事業…	164
7 鳥羽離宮跡1……………	126	3 全国埋蔵文化財法人連絡 協議会研修会の開催……………	167
8 鳥羽離宮跡2……………	131	4 シリア沖古代遺跡発掘調査 への派遣……………	168
9 鳥羽離宮跡3……………	132	5 京都市考古資料館の状況……………	168
10 鳥羽離宮跡4……………	133	6 組織及び役職員……………	170
11 白河街区1……………	134	付表	
12 白河街区2……………	136	1 昭和60年度発掘調査一覧表 ……	171
13 白河街区3……………	137	2 昭和60年度試掘・立会 調査一覧表……………	174
14 久我東町遺跡……………	139	3 外部からの委託事業その他 一覧表……………	177
15 森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡	140		
16 広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・ 和泉式部町遺跡……………	143		
17 山田桜谷古墳群……………	146		
18 極楽寺跡……………	149		
19 西飯食町遺跡……………	153		

図版目次

図版1	調査地点位置図(1)	平安京跡調査地点位置図
図版2	調査地点位置図(2)	鳥羽離宮跡調査地点位置図
図版3	調査地点位置図(3)	中臣遺跡調査地点位置図
図版4	調査地点位置図(4)	市内遺跡調査地点位置図
図版5	調査地点位置図(5)	市内遺跡調査地点位置図
図版6	調査地点位置図(6)	市内遺跡調査地点位置図
図版7	調査地点位置図(7)	市内遺跡調査地点位置図
図版8	平安京左京三条二坊2	1 遺構面1全景(北から) 2 遺構面5全景(北から)
図版9	平安京左京四条四坊	1 南グリット遺構面1-2全景(北から) 2 北グリット遺構面1-2全景(東から)
図版10	平安京左京七条二坊・八条二坊(1)	1 No.1最終遺構面全景(南から) 2 No.1最終遺構面路面跡(南西から)
図版11	平安京左京七条二坊・八条二坊(2)	1 No.2遺構面1全景(南から) 2 No.3遺構面2全景(北から)
図版12	平安京左京七条二坊・八条二坊(3)	1 No.4最終遺構面全景(南から) 2 No.5最終遺構面全景(北から)
図版13	平安京左京八条三坊	1 遺構面2-4全景(東から) 2 遺構面6全景(東から)
図版14	平安京左京九条三坊	1 No.91調査区全景(南から) 2 ㊦30調査区全景(西から) 3 ㊦31調査区全景(東から)
図版15	平安京右京二条三坊1(1)	1 調査区西半部全景(東から) 2 西半部主要建物(北から)
図版16	平安京右京二条三坊1(2)	1 調査区東半部全景(西から) 2 東半部主要建物(北から)
図版17	平安京右京二条三坊1(3)	1 SK1262遺物出土状況(南東から) 2 ピット153遺物出土状況(西から) 3 SK1499遺物出土状況(北東から)

図版 18	平安京右京二条三坊 1 (4)	出土輸入陶磁器
図版 19	平安京右京二条三坊 1 (5)	出土輸入陶磁器・石鏃・銭貨
図版 20	平安京右京二条三坊 1 (6)	出土須恵器・鉄製品
図版 21	平安京右京三条二坊 (1)	1 1区全景 (北から) 2 井戸SE 18 (北から)
図版 22	平安京右京三条二坊 (2)	1 2区全景 (南から) 2 溝 SD01 (東から)
図版 23	平安京右京三条三坊	1 調査区全景 (北東から) 2 SD19 遺物出土状況 (北東から)
図版 24	平安京右京八条二坊 (1)	調査区全景 (東から)
図版 25	平安京右京八条二坊 (2)	1 区画溝内遺物出土状況 (東から) 2 東側溝内牛・馬骨出土状況 (北から) 3 流路内犬骨出土状況 (北東から)
図版 26	平安京右京八条二坊 (3)	区画溝・流路出土木製品
図版 27	平安京右京八条二坊 (4)	区画溝・流路出土木製品
図版 28	平安京右京八条二坊 (5)	区画溝・流路出土木製品
図版 29	平安京右京八条二坊 (6)	区画溝・流路・側溝出土木製品
図版 30	平安京右京八条二坊 (7)	区画溝・流路・側溝出土木製品
図版 31	平安京右京八条二坊 (8)	区画溝・流路・側溝出土木製品
図版 32	平安京右京八条二坊 (9)	区画溝・流路・側溝出土木製品
図版 33	平安京右京八条二坊 (10)	区画溝・流路・側溝出土木製品
図版 34	平安京右京九条二坊 (1)	1 調査区全景 (北から) 2 SB7～10・1～4号住居址全景
図版 35	平安京右京九条二坊 (2)	出土土器
図版 36	鳥羽離宮跡第 118 次調査	1 園池跡と基壇跡 (東から) 2 基壇周囲の凝灰岩据付溝 (東から)
図版 37	長岡京左京一条三坊・二条三坊 (1)	1 全景・バルーン撮影 (北から) 2 調査区北半部全景 (北から)
図版 38	長岡京左京一条三坊・二条三坊 (2)	1 調査区南半部全景 (北から) 2 暗渠 SX107 (西から)

- | | | |
|-------|-----------------|--|
| 図版 39 | 長岡京左京二条三・四坊 (1) | 1 1区SD88, SB1・2全景 (東から)
2 2区SA3, SB4・5全景 (東から) |
| 図版 40 | 長岡京左京二条三・四坊 (2) | 2区SE134 他出土木製品 |
| 図版 41 | 長岡京左京四条二・三坊 (1) | T区长岡京期建物SB4・5・6 (東から) |
| 図版 42 | 長岡京左京四条二・三坊 (2) | 1 T区平安時代遺構面全景 (東から)
2 T区长岡京期SE150 (北西から)
3 T区长岡京期SB6 (東から) |
| 図版 43 | 長岡京左京四条二・三坊 (3) | 1 U区长岡京期遺構全景 (南西から)
2 U区奈良時代流路全景 (東から) |
| 図版 44 | 長岡京左京四条二・三坊 (4) | T区出土土器 |
| 図版 45 | 長岡京左京四条二・三坊 (5) | T区出土人面墨書土器・墨書土器 |
| 図版 46 | 長岡京左京四条二・三坊 (6) | T・U区出土木製品 |
| 図版 47 | 北野鳥居前町遺跡 (1) | 1 調査区全景 (東から)
2 井戸SE71 (南から) |
| 図版 48 | 北野鳥居前町遺跡 (2) | 井戸SE71 出土土器 |
| 図版 49 | 伏見城跡1 | 1 東グリット全景
2 西グリット全景 (北から) |
| 図版 50 | 伏見城跡2 (1) | グリット門址出土状況 (北東から) |
| 図版 51 | 伏見城跡2 (2) | 1 東グリット・南東グリット全景 (西から)
2 南東グリット全景 (北から) |
| 図版 52 | 伏見城跡1・2 | 出土木簡 |
| 図版 53 | 深町坊町遺跡 (1) | 1 飛鳥時代の川 (東から)
2 土器埋納墳 (西から) |
| 図版 54 | 深町坊町遺跡 (2) | 溝58 出土土師器 |
| 図版 55 | 深町坊町遺跡 (3) | 溝58 出土須恵器 |
| 図版 56 | 深町坊町遺跡 (4) | 溝58 出土木製品 |
| 図版 57 | 大宅廃寺 (1) | E区全景・バルーン撮影 (西から) |
| 図版 58 | 大宅廃寺 (2) | 1 全景・航空撮影 (南から)
2 全景・航空撮影 (東南から) |

図版 59	大宅廃寺 (3)	1 E区東半 (西南から)
		2 E区西半 (西南から)
図版 60	大宅廃寺 (4)	1 E区竪穴住居址 (北から)
		2 TB区竪穴住居址 (南から)
図版 61	大宅廃寺 (5)	1 E区縄文・弥生時代土壌群 (東から)
		2 土壌 90 (西南から)
		3 土壌 17 (東北から)
図版 62	大宅廃寺 (6)	出土軒瓦
図版 63	大宅廃寺 (7)	出土軒瓦
図版 64	大藪遺跡	1 調査区全景 (東から)
		2 溝SD2断面 (東から)
図版 65	鳥羽離宮跡1 (1)	1 A区 No.19 ~ 21SX - 2 (北から)
		2 A区 No.19 ~ 21SD - 1 (北から)
図版 66	鳥羽離宮跡1 (2)	1 B区 No.25 地業東肩土留全景 (北から)
		2 B区 No.25 地業東肩土留 (北から)
		3 No. 18 井戸 (東から)
図版 67	白河街区1	1 A区縄文時代土壌検出状況 (東から)
		2 A区縄文土器出土状況 (東から)
図版 68	白河街区3	1 調査区全景 (西から)
		2 柱穴1など (西から)
図版 69	森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡	1 航空写真
		2 調査風景 (南から)
図版 70	森ヶ東瓦窯跡	出土軒瓦
図版 71	森ヶ東瓦窯跡	出土軒瓦
図版 72	森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡	出土遺物
図版 73	山田桜谷古墳群	出土埴輪
図版 74	保存科学	聖護院地区出土植物種実

第1章 発掘調査

I 昭和60年度の発掘調査概要

昭和60年度に当研究所が京都市域で実施した発掘調査件数は44件である。本年度も都城遺跡を始めとして、各遺跡で新発見並びに従来の研究成果を更に補強する遺構・遺物を検出しており、特記すべき資料も多い。次に本年度の調査成果の概略を述べる。

平安宮・平安京跡 当遺跡で実施した発掘調査は18件あり、その内訳は、平安宮跡3件、平安京跡左京域7件、平安京跡右京域8件である。本年度の調査では、条坊遺構及び宅地内の地割りや建物等の検出例に注目すべきものが多い。また左京域では鎌倉時代以降の遺構・遺物についても貴重な成果を数多く挙げることができ、当遺跡の調査研究に新たな資料を示した。

まず平安宮跡の調査では、宮の中心建造物である大極殿院の占地及び構造の一端に迫る手懸かりを得た。大極殿院1(2)では凝灰岩の延石を検出し、昨年度の調査成果と合わせ、大極殿北廊の規模を明らかにすることができた。また大極殿院2(3)では大極殿院東軒廊と推定できる遺構を検出している。

次に平安京跡左京域では、左京七条二坊・八条二条(7)で北小路及び四行八門制に関連する道路を検出した。この北小路は平安時代前期に属し、遺存状態も良好で、当該期の条坊機構として数少ない貴重な資料といえる。左京八条二坊(8)では油小路の路面と西側溝、左京九条三坊(10)では烏丸小路東側溝と九条坊門小路北側溝を検出した。

一方右京域の調査では、右京二条三坊1(11)で宇多小路に面する築地内溝や、宅地内の区画施設、建物など多数を検出した。この調査では合わせて祭祀遺構を複数検出している。右京二条三坊2(13)では恵止利小路西側溝、右京三条一坊(14)では二条大路南側溝、右京三条二坊(15)及び右京三条三坊(16)では姉小路南側溝を検出した。これらの調査では建物なども多数検出している。右京八条二坊(17)では西鞆負小路及び宅地内で区画施設を検出し、溝などから木簡や祭祀遺物を始め多量の木製品が出土した。右京九条二坊(18)では宅地内の区画施設及び建物多数を検出した。

平安京造営前の遺構・遺物については、左京四条四坊(6)で、平安時代のベースとなる砂礫層より弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が比較的まとまって出土した。また右京九条二坊(18)では古墳時代後期の竪穴住居址、流路を検出した。この流路最下層から

は弥生時代前期の遺物が出土し、当該期の遺跡を復原する上で重要な資料となった。

鎌倉時代以降の遺構・遺物は左京域の調査で多数検出している。平安京の歴史的な変遷過程を再構築する資料として重要である。なお左京三条二坊1（4）では室町時代から戦国時代の二条通と堀川旧流路を検出し、遺構の変遷を知る手懸かりを得た。

鳥羽離宮跡 本年度は当遺跡で10件の発掘調査を実施した。まず、110次調査（19）は、昭和46・47年度に調査が実施された推定舟着場地域内に位置する。今回の調査では、舟着場とされた石積み遺構は建物の地業であることが判明、その規模から金剛心院の九躰阿弥陀堂に匹敵する建物が想定されている。111次調査（20）、113次調査（22）の地域は従来鳥羽離宮期の遺構の空白地域とされていたが、111次調査では新たに庭園遺構を検出することができた。しかし発掘調査直前に土木業者によって遺跡の一部が破壊されるという事態が起こっている。112次調査（21）、114次調査（23）、115次調査（24）、117次調査（26）、118次調査（27）の各調査では、池、洲浜、島、庭石などの庭園遺構を検出した。このうち112次調査では東接する近衛天皇陵を廻る突堤状遺構、118次調査では園池西岸及び建物基壇を検出している。119次調査（28）では田中殿北限の溝を検出し、その構造を明らかにした。またこの調査では縄文時代の土壌を検出しており、当該期では2例目の検出例として貴重な資料となった。

中臣遺跡 当遺跡では本年度4件の発掘調査を実施した。61次調査（29）、64次調査（31）付近一帯は、これまでの調査で方形周溝墓や古墳が検出されている地域であり、中臣遺跡における墓域を考える上で重要な地域である。61次調査では弥生時代後期の方形周溝墓を検出し、新たな資料を提供した。また63次調査（30）では古墳時代後期の竪穴住居址、掘立柱建物などを検出した。63次調査の周辺ではこれまでに多数の竪穴住居址などが検出されており、古墳時代後期の集落の展開を補強する資料として重要である。

長岡京跡 本年度当遺跡では3件の発掘調査を実施した。左京一条三坊・二条三坊（33）は、西羽東師川河川改修に伴い継続して実施している調査で、これまでに条坊遺構など多数検出している。今回は南一条大路、一条第2小路を検出した。また注目すべき遺構として南一条大路と築地内溝間で暗渠排水施設を検出している。同大路側溝からは、木簡と共に墨書人面土器などの祭祀遺物が出土した。次に左京二条三・四坊（34）はこの地域では初の発掘調査である。条坊遺構としては東三坊大路を検出し、同大路に面した宅地内では複数の建物を検出している。更に下層遺構として縄文時代から弥生時代の流路を検出するなど、新たな資料を多数得ることができた。左京四条二・三坊（35）は、外環状線建設に

伴い継続中の調査である。建物や井戸などの遺構と共に、経文の一部とみられる漆紙文書や木簡、墨書土器などを多数検出した。これらは昨年度検出した礎石建物などと合わせ、「川原寺」跡と推定される当遺跡の、更に的を絞り込む資料として極めて貴重なものである。なおこの調査では、下層で奈良時代の水田や古墳時代の流路なども検出した。

その他の遺跡 上記の遺跡の他、本年度は各遺跡で9件の発掘調査を実施している。

栗栖野瓦窯跡（36）は国指定の史跡であるが、今回は東接する指定地域外で飛鳥時代から平安時代後期に至る10基の窯を検出した。飛鳥白鳳期の窯では窯詰め状態で瓦が出土、また平安時代前期の窯では緑釉陶器の素地が出土するなどの成果を得た。大宅廃寺（42）は昭和33年度の名神高速道路建設に伴う調査で明らかになった遺構である。今回の調査は南接する地域で中学校分校新設に伴い実施し、同廃寺に関連する遺構・遺物を多数検出した。更に縄文時代中期から弥生時代前期の土壙を始め、同寺建立直前までの竪穴住居址・掘立柱建物を検出するなど多岐にわたる重要な資料を得ることができた。深草坊町遺跡（41）では平安時代の土器埋納壙や飛鳥時代の川跡を検出した。川跡からは良好な状態で木製品や土器類が出土し、「深草屯倉」を想起させる資料として重要な成果である。この他大藪遺跡（43）では既往の調査で検出された流路の延長部を検出し、杭列の構造を明らかにした。

一方、中・近世の遺跡でも数多くの成果を得ている。北野鳥居前町遺跡（37）は、この地域では初の発掘調査である。調査では鎌倉時代から室町時代の遺構・遺物を多数検出した。伏見城跡では2件の発掘調査を実施した。伏見城跡1（39）では桃山時代から江戸時代の遺構・遺物を検出したが、特筆すべき資料には、この地域では初出の木簡を始めとする木製品がある。また伏見城跡2（40）では遺存状態の良い大名屋敷に付属する門址を検出した。この調査でも木簡が出土し、当屋敷主を推定する手懸かりとして注目されている。更にこれらの調査では平安時代に遡る遺構・遺物も検出している。この地域では室町時代以前の資料には極めて乏しく、特に伏見城跡2では近接する御香宮廃寺の存続期間を示唆する資料として重要な成果と言えよう。

（辻 裕司）

II 平安宮・京跡

1 平安宮長殿

経過 調査地点は長殿跡北縁付近と推定されている。試掘調査では長殿北面の築地・溝らしき遺構が認められた。平安宮では築地遺構の調査例は少なく、その様態を明らかにする目的で約100㎡を発掘調査した。

遺構・遺物 平安時代の遺構は、調査区の北部で検出できた大土壌のみであった。東西5m、南北9m以上の規模を有し、西辺及び南辺は約55cmの段差を持って急激に下がる。北縁及び東縁は確認していない。底面は平らで、砂礫の基盤を掘り込むため、粘土採掘場とはみられない。室町時代の溝が近接して、東西方向に5条延長する。当時の耕作土層が付近に認められ、耕作区画の溝であろう。なお江戸時代の柱穴・井戸・石室・土壌・溝も確認している。

遺物は、平安時代・室町時代のものが微量出土した。江戸時代のものは、量は多くはないが、土壌から比較的まとまって出土した。中には、江戸時代前期の有田柿右衛門窯の製品とみられる染付磁器皿がある。

小結 試掘調査で築地遺構と認められたものは、室町時代の溝群とその間の高みであった。平安宮は平安時代を持ってほぼ機能を停止したのち、聚楽第が営まれる桃山時代までは、内野として荒廃していたと一般に考えられているが、調査地付近は室町時代に耕地として使用されていた。(梅川光隆)

『平安京跡発掘調査概報』 昭和60年度 1986年報告

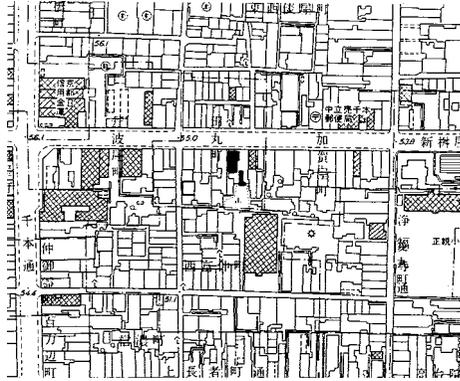
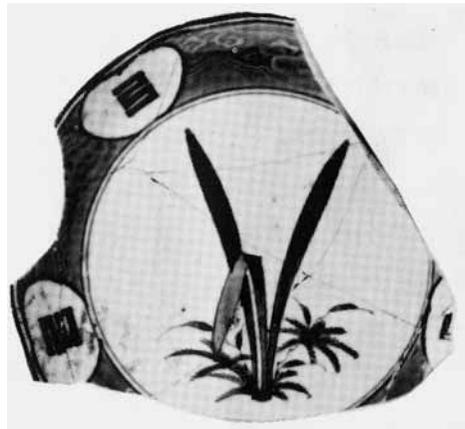


図1 調査位置図 (1:5000)



染付磁器皿

2 平安宮大極殿院 1

経過 調査地点は58年度に実施した大極殿院内の建物基壇北縁検出地点より民家一軒南に隔てた地点にあたる。このため、ビル新築工事に先立ち本調査地点の試掘調査を行い、基壇南縁部を確認するに至り、これを受け継いで発掘調査を実施した。調査は、試掘調査の結果から比較的残存状況の良好な敷地東部に東西10m、南北7mの調査区を設定した。

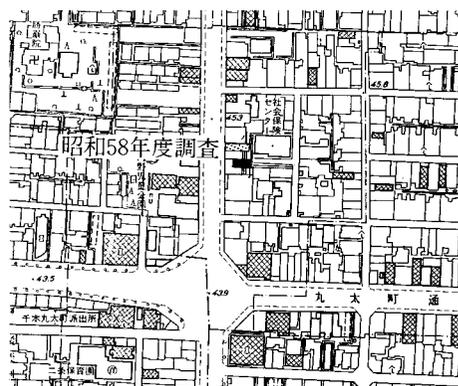


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 検出した遺構は、平安時代の基壇及び室町時代の溝である。現代層を除去するとすぐ地表下40cmで基壇を検出した。基壇は上部がかなり削平され、西部が現代攪乱で切断されている。南北2.6m、東西4mを確認した。基壇南縁の東隅には、原位置を保つ凝灰岩の延石が一つ残存していた。延石は長さ64cm、幅38cm、厚さ15cmあり、基壇北縁出土の小さい凝灰岩の寸法値に一致している。基壇は地山を削り出し、側縁を溝状に掘り窪めそこに粘土を詰め、延石を据え付け、裏込めする。この構築法は北縁基壇の状況と同様である。延石上面の標高は44.3mあり、北縁のものとは比べ0.1m低い。以上の事実から両基壇は同一のものと考えられ、結果を総合すると基壇幅は延石内端間で11.58m(4丈)ある。

遺物 平安時代から江戸時代に至る遺物が整理箱24箱ある。その大半は平安時代の瓦である。基壇整地層から平安時代後期の土師器、溝から室町時代の陶磁器、土取り穴から江戸時代の染付磁器、陶器、鏡等が出土している。

小結 調査で検出した基壇南縁は、前年度に検出した基壇縁の状況と同様であることが判明し、両遺構は同一基壇の北及び南縁であることを確認した。これにより、この基壇幅は11.58mあり、築地と考えるには幅広過ぎることから、中和院南築地ではなく大極殿院の北回廊であると断定した。この基壇心は平安京条坊復原による方位、造営尺の数値で計算すれば朱雀門心より北へ200丈(597m)の位置になる。以上の成果から朝堂院の占地が、中御門大路までではなく、中御門大路中心よりも17丈北へ広がることが判り、平安宮の復原作業にとって重要な資料となった。(辻 純一)

『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度 1986年報告

3 平安宮大極殿院 2

経過 昨年度及び本年度の二度にわたる大極殿院北廊の調査で、北廊の位置が明らかになった。その結果、大極殿院の南北中心は、中御門大路の延長線と一致する可能性が強まった。調査地点は、大極殿院の東部で、中御門大路の延長線上に位置することから、大極殿に取り付く東軒廊を検出できる期待があった。試掘調査で凝灰岩片の混じる土層が認められ、東軒廊の基壇縁ではないかとみられた。発掘調査はこれに主眼を置き調査を進めた。

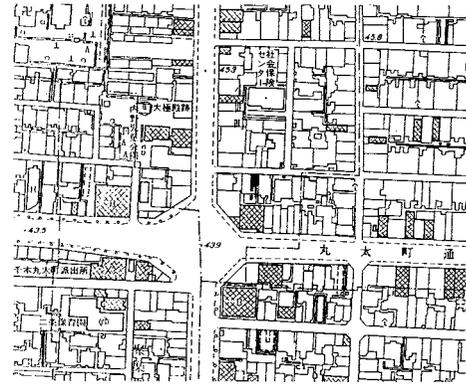


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 調査で明らかにしたのは基壇の北縁である。北縁には、幅1mの凝灰岩据付掘形が東西方向に延びる。掘形基底から26cm高い位置で、原位置を保った凝灰岩の痕跡を2箇所を確認した。凝灰岩の痕跡は、基壇外整地土層上面の高さと等しく、大極殿院北廊南縁の延石基底高とも等しい。基壇外では、雨落ち・旧表土層・化粧土層・整地土層をその層順で認めた。旧表土層は9世紀末から10世紀初めにかけての特徴を示す土師器微細片を含む。基壇縁と接する付近に旧表土層を軽く窪める二時期の雨落溝がある。雨落溝南寄りには室町時代の溝に破壊される。

基壇内では、盛土などの痕跡は全く検出していない。北縁から約12m南に基壇南縁の可能性のある遺構がある。北縁の凝灰岩痕跡よりも低い高さで、礎石掘方に対応できる幅70cmの土層、抜取跡に対応できる幅60cmの土層を部分的に認めた。ただし、原位置を保った凝灰岩は検出していない。

小結 大極殿院東部の中御門大路延長線の付近で、基壇の北縁を明らかにした。南縁については、北縁の約12m南にその可能性のある遺構を検出した。基壇の想定南北幅は大極殿院北廊の幅と等しく、大極殿東軒廊基壇とみて良いが、他地点での再検証を経た確定も必要である。

(梅川光隆)

『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度 1986年報告

4 平安京左京三条二坊 1

経過 調査地点は左京三条二坊九町の北西隅及び二条大路にあたる。南に隣接するホテル建設に伴う発掘調査によって、堀河院に付属する庭園跡が検出されており、今回の調査でも関連の遺構の検出が期待できた。調査は敷地内の各種の埋設管を避け、南と北の2箇所に分けてトレンチを設定して実施した。

遺構・遺物 基本層序は上から、近・現代層が約90cm、江戸時代の整地層が約90cmで室町時代の遺構面となる。北トレンチでは、室町時代の路面・土壌・柱穴・溝・江戸時代の井戸・土壌などを検出した。路面は砂利敷の固く締まった面を持つ室町時代の二条通で、平安時代の二条大路は検出できなかった。南トレンチでは、室町から戦国時代の堀川の旧流路と考えられる南北流路及び江戸時代の井戸・土壌を検出した。流路は東肩部のみの検出で幅は不明であるが深さは約2mである。

出土遺物には、室町時代の土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・銭貨、江戸時代の土師器・陶磁器・瓦などがある。遺物の大半は流路から出土したもので、磨滅したものが多い。

小結 今回の調査では平安時代の二条大路・堀川小路・堀河院などの検出を予想したが、後世の削平のために平安時代の遺構は検出できず、主に室町時代から江戸時代の遺構・遺物の検出に止まった。しかし、北トレンチで検出した路面は二条大路の変遷、南トレンチの流路は堀川の変遷を考察する上で重要である。

なお、近世京都の絵図では、当地は越前松平藩の藩邸と記されている。両トレンチで検出した江戸時代の井戸や土壌は、この藩邸に伴う可能性が高い。

(木下保明・丸川義広)

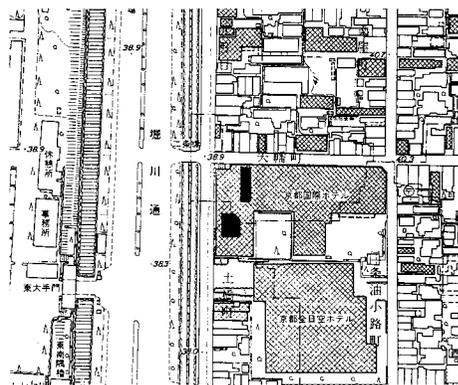


図1 調査位置図 (1:5000)

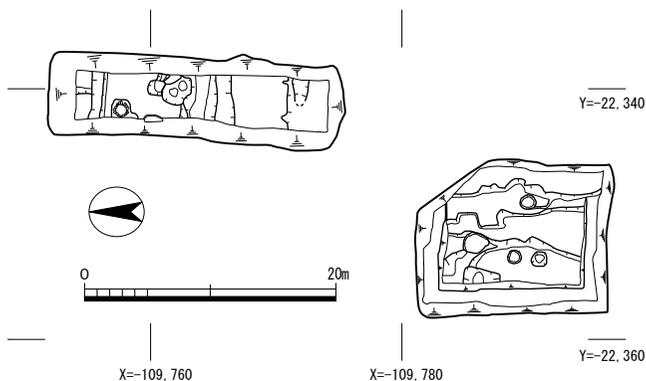


図2 遺構配置図(1:600)

降の井戸、溝、溝状遺構、ピット、落込、攪乱壙などを多数検出した。

井戸1は、井戸側として桶を数段積み上げている。井戸2は、下部で桶を確認しているが、上部は素掘りの状態で検出した。深さは両井戸とも検出面から4mをこえる。井戸1の埋没年代は、出土遺物から江戸時代後期、井戸2は江戸時代前期とみられる。ピットの中には、礎石が設置されているものも多く、また、溝状遺構（1, 2など）・攪乱壙（46, 50など）とした掘り込みの中にも建物等の基礎掘りとみられる遺構があり、これは武家屋敷もしくは町屋に関連するものであろう。攪乱壙として扱った多くの遺構（攪乱4～8, 21, 35, 40, 51, 57, 85, 88など）は、規模が大きくそのほとんどは地山を深く掘り込んでいる。それらの遺構内堆積土中には、焼土、炭、灰、焼け瓦、陶磁器片などが多く含まれている。同様の遺構を近辺の既調査地点で多数検出しているが、その掘削状況や堆積物などから判断して、土取穴と火災時の瓦礫処理穴を兼ねた遺構とみている。この攪乱壙群によって、上述の町屋跡なども破壊されている部分が多く、建物などの全体像を明らかにすることは難しい。

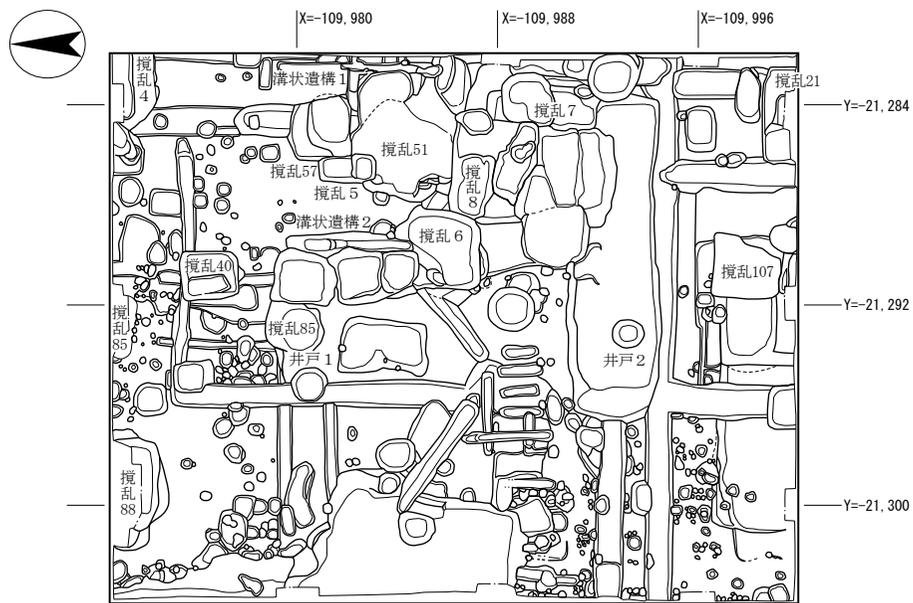
遺構面2は褐色泥砂層などをベースとする鎌倉時代後半から桃山時代までの比較的時期幅のある遺構面である。井戸、土壙、ピット、溝、溝状遺構、池状遺構など多数を検出した。

井戸3・9は素掘りの状態で検出した。井戸3は桃山時代までに、井戸9は室町時代中頃に埋没しその機能が失われている。井戸4・7・8は円形の石組井戸である。構内堆積土出土遺物から判断して、鎌倉時代末期から室町時代間の各時期に埋没したと考えている。石組みは3基とも20～50cm大の河原石を使用してほぼ垂直に組まれている。井戸4・8の石組みは作りが丁寧で堅固であるが、井戸7は非常に雑な石組みであった。井戸4は石組みの下部に桶が、7・8は方形木枠組みが設置されていた。

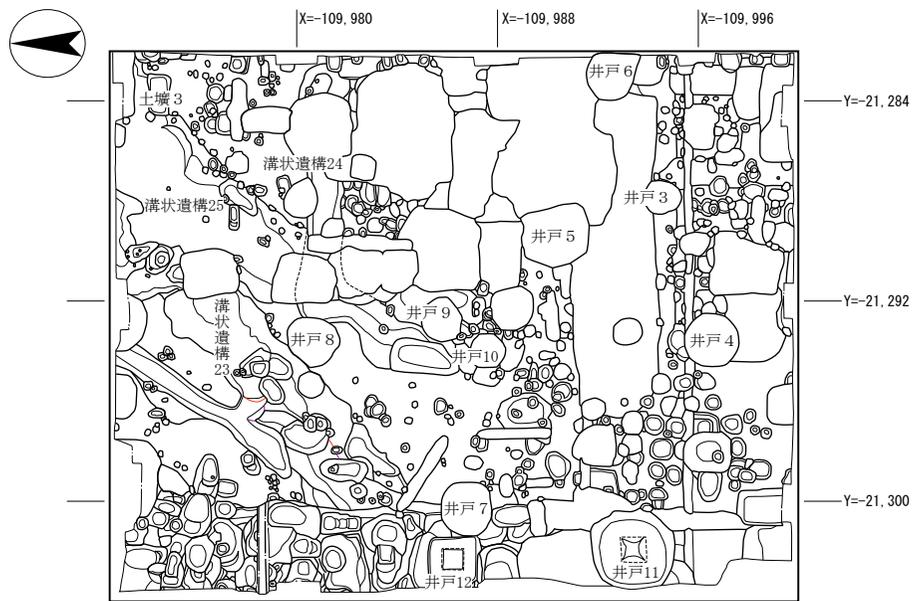
東壁沿いで検出したピットには、河原石を礎石として据えた柱穴が多く、心々間で1.95mを測り南北に並ぶものを確認している。また柱穴と礎石の重複から建て替えを想定できるものもある。調査区北東部で検出した土壙21は、東西方向に溝状の掘形を持ち、底部に礎石・礎板が4基据えられており、その上には柱根が残存していた。柱根は方形で12cm角であり、柱心々間は1.05mを測る。土壙、ピット群の埋没年代は室町時代と推定される。またこれらの遺構の近辺には、同時期の遺物が出土する土壙も点在している。

これらの遺構は、中世町屋の建物とそれに関連する諸施設であろう。検出状況と道路推定位置からみて、建物の主要部は調査区東側と考えられる。

調査区北東コーナー部で検出した土壙3は、上部の平面形が東西約1.8m、南北約



遺構面 1



遺構面 5



図 2 調査区平面図 (1:300)

0.8m ではほぼ長方形を呈する室町時代末期の遺構である。底部は平坦で深さは検出面から 70cm 前後を測る。構内からは調査時の概算で数千枚の土師器皿が出土した。土師器皿の堆積状況は、上面中央部は窪むが、検出面から底部までぎっしり詰まっており、数枚以上が重なっている部分も多く、完形品を一括で埋めたものとみられる。土師器皿以外には、備前の播鉢小片、瀬戸の施釉陶器小鉢片などが少量出土している。

池状遺構 1 及び溝状遺構 14 は、調査区南東部で検出した。池状遺構 1 は、東肩部から西方への傾斜面と底の一部を検出したに止まる。この遺構は遺構面 3 の段階には形成されており、肩部の形状は入れ土などによって変わるが、遺構面 2 の段階まで存在している。溝状遺構 14 とした遺構もその成立は遺構面 3 の段階である。池状遺構 1 の検出部分が埋められた際に同時に入れ土されて浅くなるが、池状遺構とした遺構の一部は調査区外に残存するらしく、その後も機能は保っている。溝状遺構 14 は南壁から北方へ直線的に延び、途中で西方へほぼ直角に折れ曲がり、池状遺構へ流れこむ溝とみられる。

遺構面 3 は褐色泥砂層・にぶい黄橙色泥砂層などをベースとする平安時代末期から鎌倉時代の遺構面である。井戸、土壙、ピット、落込、掘込、溝状遺構、池状遺構など多数の遺構を検出している。

井戸 5・10 は素掘りの状態で検出した。井戸 5 は木枠組みの井戸であった可能性もあるが、痕跡が不明瞭であったため断定はできない。両者とも鎌倉時代前半代までに埋没し、その機能が失われている。井戸 6 は石組みの井戸で、その下部は方形の木枠組みである。石組みは井戸 4・7・8 とは様相が異なり、上部が外方へ大きく開く。このスタイルの石組井戸は、京域内では今のところ類例の少ない資料である。

池状遺構は、遺構面 2 で記した池状遺構 1 とした部分と、遺構面 3 で北側に広がっていた部分とは併存していたとみられる。遺構面 3 の段階では、池状遺構 1 とした部分の東肩から東側の一定範囲と、池状遺構 2 とした部分の東肩から西へ落ちる傾斜面は礫面となっている。溝状遺構 19 は同 14 と同様、池状遺構に流れこむ溝の残欠とみられる。ピットには柱当たりが残るものもあるが、建物跡等と断定できる群は確認できなかった。他の遺構も同じく発掘調査時点で性格が明らかにできるようなものは少なかった。

遺構面 4 はにぶい黄橙色泥砂・黄褐色泥砂混層が堆積して形成された遺構面であるが、検出した遺構は、土壙が 4 基のみである。これらの土壙からは、平安時代後期の遺物が出土している。現時点ではこの遺構面は、5 とする遺構面の部分的な変遷と考えている。

遺構面 5 の上面では、平安時代中期後半から後期の遺構を多数検出した。井戸、土壙、ピッ

ト、落込、掘込、溝状遺構など各種の遺構を確認している。

井戸 11・12 は両者とも縦板横棧組の井戸である。井戸 11 は木枠組みの形状が土圧で非常に变形しており、そのために放棄された可能性が大きい。埋土から出土遺物を見ると、井戸 12 の方がやや新しいが、両者とも平安時代後期内には埋没しその機能が失われている。

溝状遺構 23・25 は北東から南西方向へ走り、同 24 は東から西へ走る浅い溝状の遺構である。シルト質土や砂の堆積状況から、ある時期に流水があったとみられる。しかし地形や形状からみると、機能が明確な溝とは思われない。

遺物 平安時代以降、江戸時代までの各時期の遺物が、層・遺構から多量に出土した。出土遺物は各時代を通じて土器類が最も多い。その他、瓦類、木製品、金属製品、銭貨な



井戸 4 出土木製品

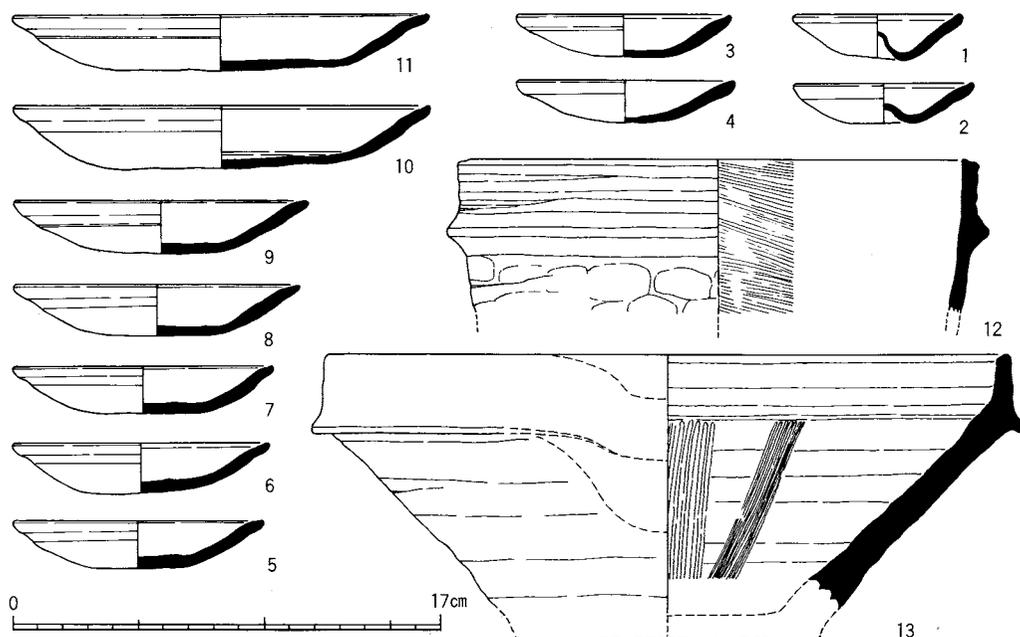


図 3 土壙 3 出土土器実測図 (1:3)

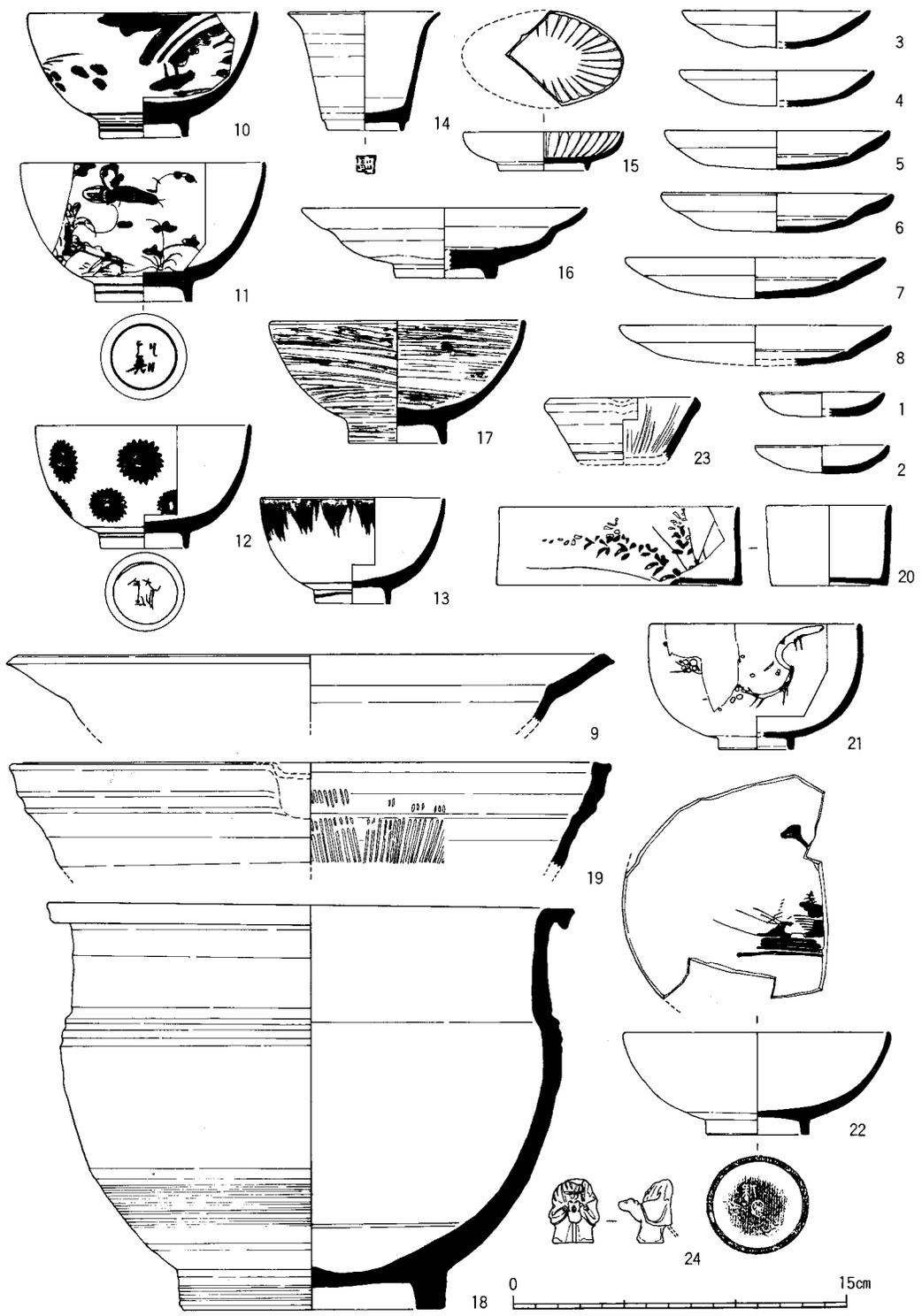


图4 搅乱坑7出土土器实测图(1:3)

ど各種の遺物が出土している。以下、出土資料を若干紹介して置く。

攪乱墳とした遺構から出土した江戸時代の遺物は、質・量ともに豊富で注目に値する。「仁清」の印銘のある椀や、赤楽水差しなどは、個体としてもその資料的価値は高い。しかしそれらの資料が、当時に使われていたその他の茶器や日常雑器類とまとまって一括出土していることがより重要な点である。単に土器編年の資料として重要であるということに止まらず、近世の京文化を理解して行く上で必要な資料となるであろう。

土壙3からは、室町時代末期の土師器皿が多量に出土した。出土状況からみて一括して埋められたものとみられ、同一用途に使用された後、一括廃棄された可能性も大きい。今後整理を進めれば、土師器皿の構成とその総数などを明らかにでき、使用集団の規模等が推測できるものと考えている。

室町時代の井戸4からは比較的一般的な土器類と共に、今までに類例をみない木製遺物が出土している。前ページにその写真を掲載した。楕円の頭部状の部分と、腕状に内湾する部分は一木でその最大幅は33cm、厚さ3cmを測る。この部分と三葉形の部分は長短3箇所柄による組合せ式である。三葉形の一方の表面には墨書きの横線文様が残る。現時点では、用途不明とせざるを得ないが、民俗資料などにも注意して用途の解明を計りたい。

平安時代中期後半から鎌倉時代の出土遺物中にも多くの良好な一括資料が含まれているが、上述の資料と共にその詳細は整理、研究作業を経た後に報告したい。

小結 今回実施した発掘調査においては、平安時代から江戸時代にわたる計5面の遺構面を検出し、各遺構面に展開する各時代の遺構群を調査した。

遺構面3・4・5で検出した井戸、土壙、ピット、溝状遺構、掘込等の各遺構は、それらの推定年代からみて、平安時代の堀河院を構成する諸施設と位置付けられると考えている。遺構面2で検出した柱穴や石組井戸、その他の土壙、溝、掘込などの遺構は、中世の町屋とそれに直接関連する遺構と推測される。調査区西側で遺構面2～3にわたり検出した池状遺構は、堀河院の池庭が一部変形しつつ残存した可能性も考えられるが、遺構の全体を検出しておらず、その性格を断定できない。遺構面1において検出した江戸時代の遺構群やそこから出土した多量の遺物は、当地が数度の大火にみまわれたが、そのつど再生した姿を物語る資料と言える。

(平安京調査会 原山充志・小森俊寛)

6 平安京左京四条四坊 (図版9)

経過 調査対象地は、四条通と堺町通の交差点の西北に位置する。平安時代においては、平安京左京四条四坊五町の南西部分にあたる。平安時代には特に著名な邸宅などは推定されていないが、平安時代後期には稠密に都市化する左京の一画である。四条大路付近では、東洞院大路以東の発掘調査例は少なく、本調査への期待は大きいといえる。『京都の

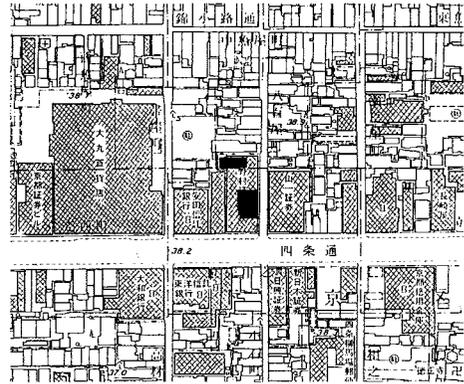


図1 調査位置図 (1:5000)

歴史』によれば、鎌倉時代には同町の南西部付近に、「藤公卿」の屋敷地が推定されているが、詳細は明らかではない。

当地は調査前にビルが建っており、今回の発掘調査はその建て替え工事に伴う調査である。このため旧ビルの基礎により、遺構面が完全に削平されている可能性が考えられたが、試掘調査の結果、基礎の地中梁部分については、現表土下2m強までしか達しておらず、その下に平安時代から中世の包含層及び遺構が残存していることが明らかになった。このため、極めて限定された部分ではあるが、2箇所に分割した調査区を設けて、発掘調査を実施することになった。

遺構 平安時代前期から中期の遺構は、主に南部グリットで検出した。平安時代前期後半に比定できるものが中心である。ピットには柱穴もあるが、建物等を想定できるほどまとまっては確認していない。しかし土壙14のように少量ではあるが、ほぼ完形のまとまった遺物を意図的に埋設したとみられる遺構や、輸入陶磁器を含む多数の土器、陶磁器類が出土した遺構(土壙38)等は注目すべきものも含まれている。

これら平安時代前期から中期の遺構は、地山の砂礫層上面の浅い窪地に埋めるように堆積している浅黄色泥砂層、及びにぶい黄色泥砂層上面の遺構面上で検出した。両層は基本的には南部グリット南東部で厚く、北西部で徐々に薄くなり、北部グリットでは上層のにぶい黄色泥砂層が南東部で確認できるに止まる。両層によって、平安時代前期の遺構面は緩い平坦面を為すようになる。両層とも汚れは強くないが、出土遺物やその堆積状況から、平安時代前期の整地土層と考えている。

平安時代後期以降の各時代の遺構も多数検出したが、このうち鎌倉時代末期から室町時

代前半代に比定できるものは少ない。井戸を含む中世の遺構は、室町時代後半代から再び検出数が増え始める。近世に入ると検出遺構総数は、非常に増加する。これら検出遺構の時代別変遷は、この地の歴史を反映したものと見えるが、その詳細は整理後に譲る。

遺物 弥生時代から古墳時代の遺物は、土器類が主に砂礫層から出土しているが、他に新しい時期の遺構や包含層中にも混入して一定数が出土している。弥生土器では畿内第V様式に属するもの、古墳時代では布留式の土師器甕や6世紀末から7世紀初頭に比定できる須恵器杯身などが比較的多い。砂礫層からの出土遺物は、流れ堆積したものであろうが、磨滅が少なく、遺存状況が良好なものが多い。各時代の遺跡が非常に近いことを示している。

平安時代前期から中期の遺物には、遺構からまとまって出土した一括資料も多い。この時代幅に収まる土器群では、前期後半代及び中期後半代に比定できるものが中心である。

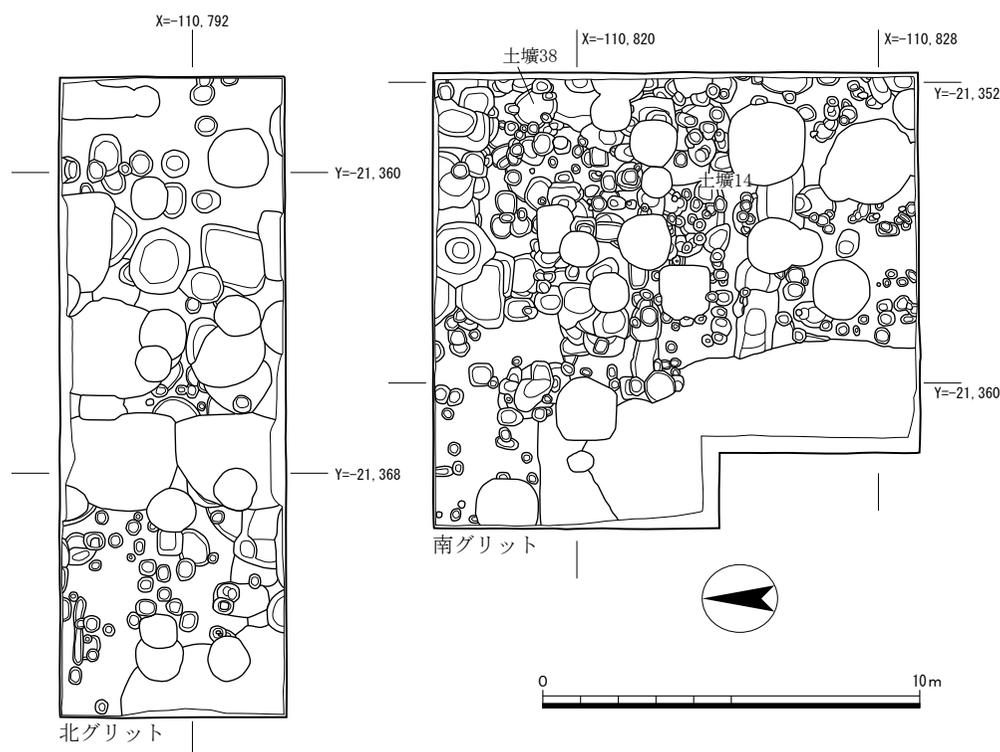


図2 調査区平面図 (1:200)

前期後半代の遺物では、土壙 14・38 から出土した一括資料が注目される。土壙 14 では遺物の量は少ないが、土師器甕の上に灰釉陶器皿が蓋状に被るような状態で検出している。検出状況を含めて興味ある資料である。土壙 38 からは土師器杯・皿・高杯、黒色土器 A 類碗・B 類小壺、須恵器杯・壺・鉢・甕、灰釉陶器碗、緑釉陶器碗、中国越州窯産の青磁碗などの土器、陶磁器類、他に瓦類など各種のものが多数出土しており、平安時代前期から中期初め頃の土器編年の恰好な資料となるであろう。中期後半の遺物は、土壙 32～36 などからまとまって多数出土している。出土品には土師器皿・甕、黒色土器 B 類碗、瓦器碗、須恵器鉢・甕、灰釉陶器碗、輸入白磁碗・皿・壺など各種の土器類の他、瓦類なども少量含まれている。出土状況は良好なものも多い。

平安時代後期以降の出土遺物にも、各遺構からの一括出資料が多い。中でも、遺構の検出数を反映し、平安時代後期から鎌倉時代、室町時代後半以降から江戸時代の出土資料は、型的的にもまとまっており、各個体をみても注目すべきものが多数含まれている。

小結 今回実施した発掘調査によって、平安時代前期の遺構面及び整地層の一部と考えられる遺物包含層が、現表土から 2.4m 以上の深さで予想より良好な状態で残存していることが明確となった。この遺構面上で土壙、ピット等の遺構を一定数検出している。これらの調査成果は、左京の平安時代前期の様相を解明する上で重要な資料といえる。なお、平安時代遺構面の深さには注意して置く必要がある。この遺構面の深さは、近・現代の積土の厚さに起因するものであるが、平安京跡の中ではトップクラスの深さである。加えて、深い遺構面のベースである砂礫層中からも、流れ堆積によるとみられるが、弥生土器片などが出土したことも注目したい。

今後の隣接地域での発掘調査には、この遺構面の相対的な深さ、及び下層の遺物包含層を配慮した調査が必要となろう。

(平安京調査会 長戸満男)

7 平安京左京七条二坊・八条二坊 (図版10～12)

経過 今回、堀川通りの道路上で実施した発掘調査は、建設省が実施する堀川共同溝建設工事に伴う調査である。

堀川共同溝は、堀川五条～堀川九条間の堀川通道路センターを利用して建設され、工事は分割した区間を年度ごとに、順次実施する予定とされる。今年度の工事は初年度にあたり、七条通りを挟み北側150m(北限堀川北小路付近)、南側150m(南限堀川木津屋橋付近)約300mの区間で行われる。

堀川共同溝建設予定ラインは、平安京にあっては、左京六条～九条の各二坊における堀川小路と油小路間の各町を縦断することになる。発掘調査は、工事対象ラインに対してほぼ等間隔に一定規模の南北トレンチを設定し、各地区の遺跡の様相を解明して行く方法で実施する。対象ラインを東西に横断する平安京の各大路小路の推定位置など、重要地点は調査区設定に際して考慮し、位置決定を行う。

今年度の調査対象区間の内、七条通以北は平安京左京七条二坊十二町、七条通以南は左京八条二坊九町にあたり、左京七条二坊十二町は東市の外町となっていたとされる。調査区は七条以北にNo. 1～No. 3トレンチの3箇所、以南はNo. 4・No. 5トレンチの2箇所の計5箇所にトレンチを設けた。No. 1～No. 3のトレンチは東市の外町、更にNo. 1トレンチでは北小路についても主要な調査目的としている。No. 4・No. 5トレンチは平安京左京八条二坊九町内の町割及び邸宅等の調査を主な目的としている。また、平安時代後期から中世へ至る東市の解体から七条町の成立という、当地域の歴史の変遷についても、考古学的方法を持って明らかにする上で、重要な発掘調査となるだろう。

なお、平安京の七条大路については、その主要部が現七条通と重なるため、交通事情から主要部を調査することが難しく、南側溝の推定ラインを含む形でNo. 4トレンチを設定したに止まる。

遺構 各調査地点において、平安時代の遺物包含層や遺構のベースとなる自然堆積層(地山)の各層を確認した。

自然堆積層(地山)は、河川の氾濫などによる堆積層とみられ、砂礫を主とする。地山

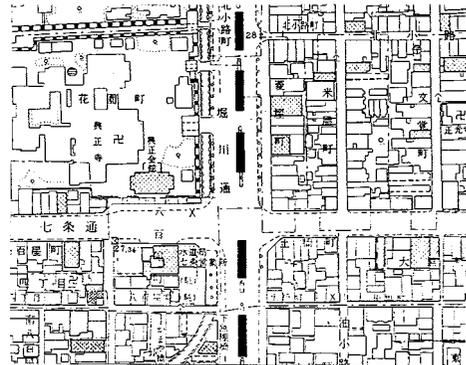


図1 調査位置図 (1:5000)

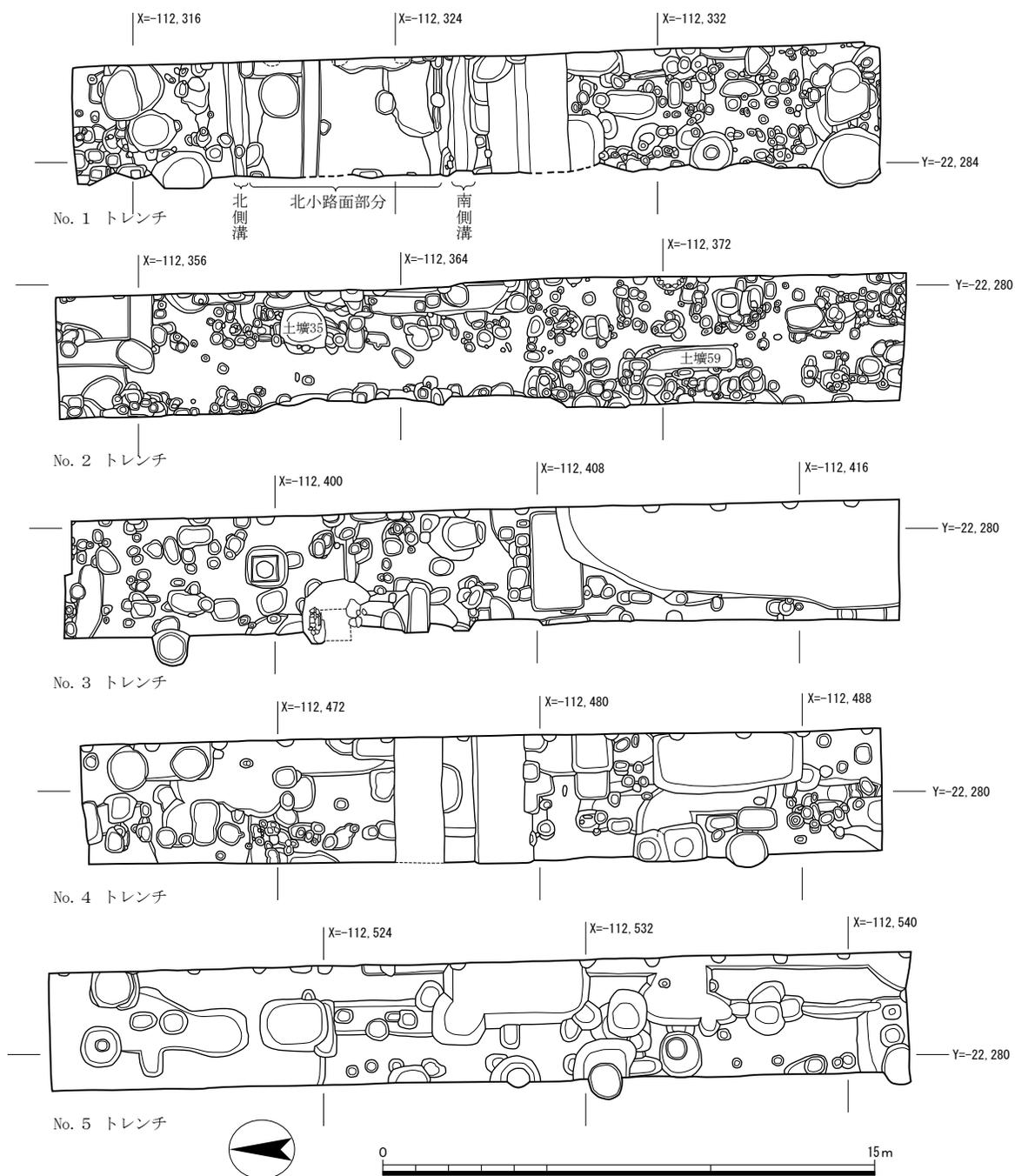


図2 No. 1～No. 5 トレンチ平面図 (1:200)

上面のレベルは、七条通りを挟んで南側の No. 4・No. 5 トレンチの方が 50～60cm 程度高い。No. 1 トレンチ南半から No. 3 トレンチにかけて、幅の広い緩い凹地形が北東から南西方向へ走っていたものとみられる。砂礫層上面の窪みには、シルトや砂が自然堆積した部分も何箇所か認められる。これらの窪みは氾濫原上に残った河川の細支流もしくは溜りとみられる。これらの自然堆積の砂礫上層部やシルト層などからは、流れ堆積したとみられる弥生時代から古墳時代の土器片が少量出土した。

平安時代前期の遺物包含層は、No. 1～No. 3 の各トレンチで確認している。これらの土層は、地山の緩やかな起伏を平坦にするように、窪地に入れられた整地土層とみられる。No. 1 トレンチで検出した平安京時代前期の北小路に対応する遺構面を形成している。平安時代中期から後期の遺物包含層は、No. 4・No. 5 トレンチにおいて確認している。No. 1～No. 3 トレンチでは平安時代中期以降、No. 4・No. 5 トレンチでは鎌倉時代以降の土層の残存状況が極めて悪い。中世から近世の土層は、No. 3 トレンチの一部などで部分的に確認したに止まる。そのほとんどは近世から現代の攪乱層や、堀川通（国道）建設に伴う基礎掘削などによって、削平されてしまっているものとみられる。

調査地点 5 箇所（No. 1～No. 5 トレンチ）で、総計 676 基の遺構を検出した。遺構の種類別にみると、土壇 153 基、ピット 415 基、井戸 25 基、路面 16 面（道路跡 2 条）、溝 5 条、掘込 37 基、落込 7 基、攪乱層 18 基となっている。時代別では、平安時代から江戸時代までの各時期の遺構が含まれている。

注目できる遺構としては、No. 1 トレンチ北半に北小路と推定できる東西方向の道路跡を検出した。路面幅は 6～6.2m を測り、両側に溝を伴う。築地の痕跡は発見できなかった。当研究所が行った条坊復原のモデル数値と比較すると、約 2m 南へずれる。検出した 3～4 面の路面及び北側溝 2 条と南側溝 1 条は、平安時代前期の幅に収まるものであるが、それより上部は攪乱されていた。

No. 5 トレンチにおいて検出した南北方向の道路跡は、平安時代中期以降のものであるが、調査幅の狭さや、攪乱が激しいこともあって、全体の構造を解明するまでには至らなかった。位置は左京八条二坊九町のほぼ中央（西二行と三行の境目）にあたる。七条以北では確認していない。

遺構の検出状況を全体的にみると、七条通以北（No. 1～No. 3 トレンチ）と、七条通以南（No. 4・No. 5 トレンチ）とでは差があることが判る。それぞれの遺構総数を調査面積で割ると、七条通以北が 2.01 基/m²、七条通以南が 0.78 基/m²となり、検出密度に約

三倍の差が出ている。遺構の状況や攪乱の規模等の要素もあり、単純に比較し結論を出す訳には行かないが、この差は東市の内（七条通以北）と外（七条通以南）の遺跡の様相、及び中世以降の都市的発展の差を端的に反映しているものであろう。

なお No. 4 トレンチ北部隅は、七条大路の南側溝の推定位置にあたるが、側溝等は検出してない。

遺物 各調査地点からは、弥生時代、古墳時代の土器類を含めて、平安時代以降から江戸時代までの各時代の遺物が多数出土している。出土遺物の中心は土器類であり、他に土製品、金属製品、銭貨、石製品、自然遺物など各種の遺物が出土している。



No.2 トレンチ土壌 59 出土須恵器

弥生時代から古墳時代の土器類は、自然堆積の砂礫層上部及び砂礫上面の窪みの自然堆積シルト層から出土している。そのほとんどは磨滅が激しく、いわゆる流れ堆積の遺物である。しかし No. 2 トレンチシルト層から出土した古墳時代の土師器甕（布留式）は、磨滅もほとんどなく1個体分がまとまって出土している。同層から他に共伴遺物は検出できなかったが、出土状況からみて、比較的近地点（北東方であろう）に同期の遺跡が想定し得る資料である。

平安時代前期から中期の遺物は、各地点から多数出土しているが、とりわけ七条通り以北の No. 1～No. 3 トレンチの出土量は非常に多く、その種類も豊富である。しかし七条以南の No. 4・No. 5 トレンチからの出土量は、以北に比べると少ない。No. 1～No. 3 トレンチから同期の遺物出土量は、平安京左京域における既発掘調査に比べて非常に多いと言えるだろう。出土遺物の中心は緑釉陶器、灰釉陶器、輸入の青磁など、当時の高級品を始めとする土器・陶磁器類である。また埴塼、鞆の羽口、鋳型の破片、鉄滓など、生産活動に関連する遺物や、土馬など祭祀に関連する遺物も多数出土している。この3トレンチの出土遺物の質、量の多様さは、東市の外町という遺跡の性格と様相を直載に反映しているものとみられる。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺物は、各調査地点ともに平安時代前期から中期に比してやや少なくなる印象はあるが、ほぼ同様の出土状況が続くといえる。No. 2 トレンチ土壌 35 のように、中国南部産の白磁椀（玉縁多い）などの輸入陶磁器が、他の共伴遺物総量を凌駕するほど多量に出土している遺構もあり、同期の資料中にも注目すべき資料は多い。

出土遺物の状況からみても、平安時代前期から鎌倉時代を通じて、都市的繁栄が続く地域といえるが、その後の室町時代から桃山時代にかけての遺物は、出土量、種類とも少なくなってしまう。江戸時代以降の遺物は井戸や攪乱層とした遺構から多数出土している。このような状況については、層位・遺構の削平による残存状況等を考慮して理解して行く必要があり、現時点では室町時代から桃山時代に、この地域が衰退していたという短絡的結論は控えるべきであろう。

小結 今回実施した発掘調査によって、平安時代前期から中期にかけて、七条大路を境に遺構・遺物の検出状況に大きな差異があることが明らかになった。この点については遺構・遺物の項で触れたように、推定平安京東市外町とその周辺部という差を端的に反映している可能性が大きい。しかし七条大路南側においても、平安時代前期から中期の遺構・遺物を検出しており、単に両地区の数量的比較で結論が出せる訳ではない。各遺構の性格や遺物の構成をより明確に把握した上で、両地区の様相差の内容を更に明確にすべきである。

No. 1 トレンチでは、平安時代前期の北小路を検出している。当研究所の平安京復原の条坊モデルに比べて約 2m 南側へずれた位置で検出しているが、推定誤差範囲内には収まっている。この北小路の道路敷は、上面に敷かれた小礫が非常に堅く踏みしめられている状態や検出枚数からみて、使用頻度が高く、何度も補修が行われたことを物語っている。

平安時代前期の平安京街路の検出例は、右京域では多いが左京域においては、平安時代中期末から後期に作りなおされた街路及びそれ以後の街路の検出例が多い。左京域では、今回の調査によって検出したような、遺存状況が良好な平安時代前期の街路を確認した例は今までほとんどない。その意味でも今回の発掘調査によって得られた北小路関係の資料は、平安京に於ける初期の条坊を研究する上では重要なものとなるであろう。

(平安京調査会 小森俊寛)

8 平安京左京八条二坊

経過 調査はビル建設工事に伴うものである。調査地点は左京八条二坊九町に推定でき、調査地点東部には油小路が通る。先に試掘調査を行い平安時代の遺構を検出したため、発掘調査を実施した。

遺構 基本層序は上から、現代盛土層（約30cm）、近世包含層（50cm）、中世包含層（70cm）、平安時代包含層（40cm）、黄灰色砂礫層（地山）が堆積する。なお調査区西部

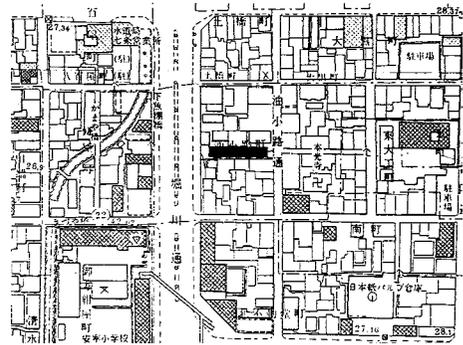


図1 調査位置図（1:5000）

では黄灰色砂礫層上に緑灰色砂泥層（平安時代整地層）が残存していた。

調査区東端部では平安時代から近世に至る、推定油小路の路面を5面検出した。路面は褐色砂礫（厚さ10～30cm）を突き固めて整地しており、よく締まっている。各路面間には灰褐色砂泥、又は黄色砂の間層（5～10cm）がみられる。各路面に対応して西側溝（幅60～90cm、深さ10～20cm）を検出した。側溝の位置は平安時代から鎌倉時代のものはほぼ推定位置にあるが、それ以降のものは約80cm東側に寄った位置にある。

路面西側の宅地内で検出した平安時代の遺構には、土壙・柱穴などがある。調査区西部では不定形の土壙を多数検出し、中期の遺物が一括して出土した。柱穴は建物としてまとまるものはない。

鎌倉時代から室町時代の遺構には、井戸・土壙・柱穴なども多数あるが、切り合いが激しく、相互の関係は不明なものが多い。井戸は方形板組みのものを5基、十角形縦板組みのものを1基検出した。

遺物 遺物は整理箱で88箱出土した。大半が土器類で、瓦類は少ない。土器類には土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・白磁・青磁などがある。時期は平安時代中頃から室町時代に及ぶが、室町時代のものが大半を占める。

小結 調査の結果、推定位置で油小路路面及び西側溝を検出した。路面は平安時代から近世に至る5面を確認し、その変遷が明らかとなった。しかしながら、宅地内では遺構が複雑に切り合っているため、路面と対応させて遺構面を検出することができなかった。

（上村和直・久世康博）

9 平安京左京八条三坊 (図版13)

経過 調査地は、国鉄京都駅西端北側で、塩小路通りに面する京都市下京区三哲通西洞院東入ル東塩小路町 843-2, 842-16 に所在する。平安京においては、左京八条三坊七町の東南部に該当する。また南端に八条坊門小路の一部を含み、西端は町尻小路に隣接する。日本生命ビル建設工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

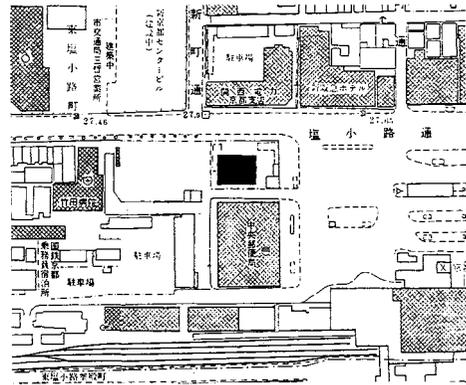


図1 調査位置図 (1:5000)

調査地周辺地域（平安京左京八条三坊）では、既に十数箇所の発掘調査が行われている。当地点の東側と西側では、八条坊門小路が検出され、また塩小路通を挟んだ北側では、平安時代前期から中期の遺物が多量に出土した南流する溝、平安時代後期から鎌倉時代の輸入陶磁器などが多数出土した溝状の土壙、その他刀装具、銭貨の鋳型等の貴重な資料が数多く発見されている。また平安時代後期から室町時代には墓とみられる土壙群が各調査地点で検出されている。これらの資料に基づいて、当調査地もしくはその近辺には、文献に記載されていない平安時代の上層階級の邸宅が存在していたものと推定されており、中世には、七条町や八条院町の近接地として職人の住居や工房等が散在していたものとみられている。しかし、東本願寺前を中心とするとみられる墓域の展開と、中世の七条町や八条院町などの商工業地域との関連や、その盛衰については、いまだ不明な点が多い。

調査対象地では、昨年1985年4月17日にテストピットを2箇所設けて試掘調査を実施した。その際、平安時代後期から鎌倉・室町時代にわたる各時代の遺物包含層や遺構を確認し、当地点での遺跡の残存状況も付近の調査地同様に良好であることを追認している。

調査区は、八条坊門小路及び町尻小路の推定位置を考慮し、できるだけ敷地の南西方向に調査区を設置した。調査の結果、奈良時代の井戸跡を始め、平安時代前期から室町時代末期まで各時代の各種遺構を多数検出した。これらの遺構群が10面に分かれる各時代の遺構面上で変遷していたことが明らかとなった。各遺構面を形成する遺物包含層（その多くは整地土層と見られる）からは、輸入陶磁器を含む土器類、土製品、金属製品、木製品、銭貨、瓦などが多数出土した。これらの調査成果は、平安京左京南部地域の歴史を明らかにして行く上で重要な資料となるだろう。

遺構 遺構面1, 2-1~4, 3~7の各面で総計1142基の遺構を検出した。内訳は、土壇354基, ピット666基, 溝16条, 井戸42基, 落込42基, 掘込6基である。

遺構面1では, 明治時代以降の攪乱1~16とした遺構も調査した。攪乱6は南北方向の幅約4mを測る堀状の掘り込みで底部は地山の砂礫層まで達している。他は, レンガ等を用いた構築物の基礎, 又はそれに関連する施設である。褐灰色泥砂・石炭殻層, にぶい黄褐色砂礫・同混泥砂層上面から切り込んでいる。遺構面1は暗褐色泥砂層をベースとして成立する遺構面で, 東西方向の溝群を検出した。江戸時代の畑の畝痕跡である。この上に直接にぶい黄褐色砂礫・同混泥砂層が被る。

遺構面2-1では, 遺構面1同様, 畑の畝溝の痕跡と思われる東西方向の浅い窪みを検出している。他にピット, 掘込等も検出しているが, この段階も畑であったと思われる。

遺構面2-2は, 室町時代後期後半の遺構面で20基の土壇を検出しているが, このうち, 石や埴などの遺物を多く含むものがあり, (土壇6~14・16~18), 東本願寺前や周辺地域で展開する中世墓域との関連で注目される。

遺構面2-3では, 焼土を含む不整形な遺構を検出した。落込1~6としたものは室町時代後半代の遺物が出土する。とりわけ, 落込1としたものは調査区南東部で検出した大型で東西方向に長い遺構で, 底部に東西約8m, 南北約2.5~3mにわたって栗石が詰まっていた。この焼土を含む遺構群は調査区東側に偏在しており, 合計11基を検出した。

遺構面2-4は, 黒褐色泥砂・焼土混層をベースとして成立する遺構面で, 溝, 落込, 土壇, 井戸, ピット等を計78基検出した。溝15は調査区南部を東西方向に走る溝で, 八条坊門小路の北側溝推定位置にあたるが, 路面は確認していない。落込11としたものは焼き締まった固い火床を持つ室町時代後期の遺構で, 少なくとも2回の作り替えが認められる。これと同様の遺構が周辺の調査でも検出されており, 「非鉄金属(青銅等)の加工, 鑄造遺構」^{註1}と考えられている。また, 本遺跡では火床を形成する際に瓦質有孔埴が使用されており, 用途の判る例として貴重な資料となった。土壇73は, 調査区北西部で検出した南北に細長い土壇で, 土師器皿が多量に埋設されており, 須恵質のこね鉢を伴う。東本願寺前等で類例の多い遺構である。

遺構面3は, 黒褐色泥砂層Iをベースとする遺構面で, 土壇, 溝, 井戸, 落込, ピットなど, 計108基を検出している。溝16は, 溝15と重なっており同じ性格のものとみられる。落込13は, 東西2.5m, 南北1.2mの長円形の堀形を持ち, 底部に東西1.6m, 南北0.45mを測る箱状の板組みの痕跡を検出した。深さは検出面から底部まで約0.5mあり, 土師器皿,

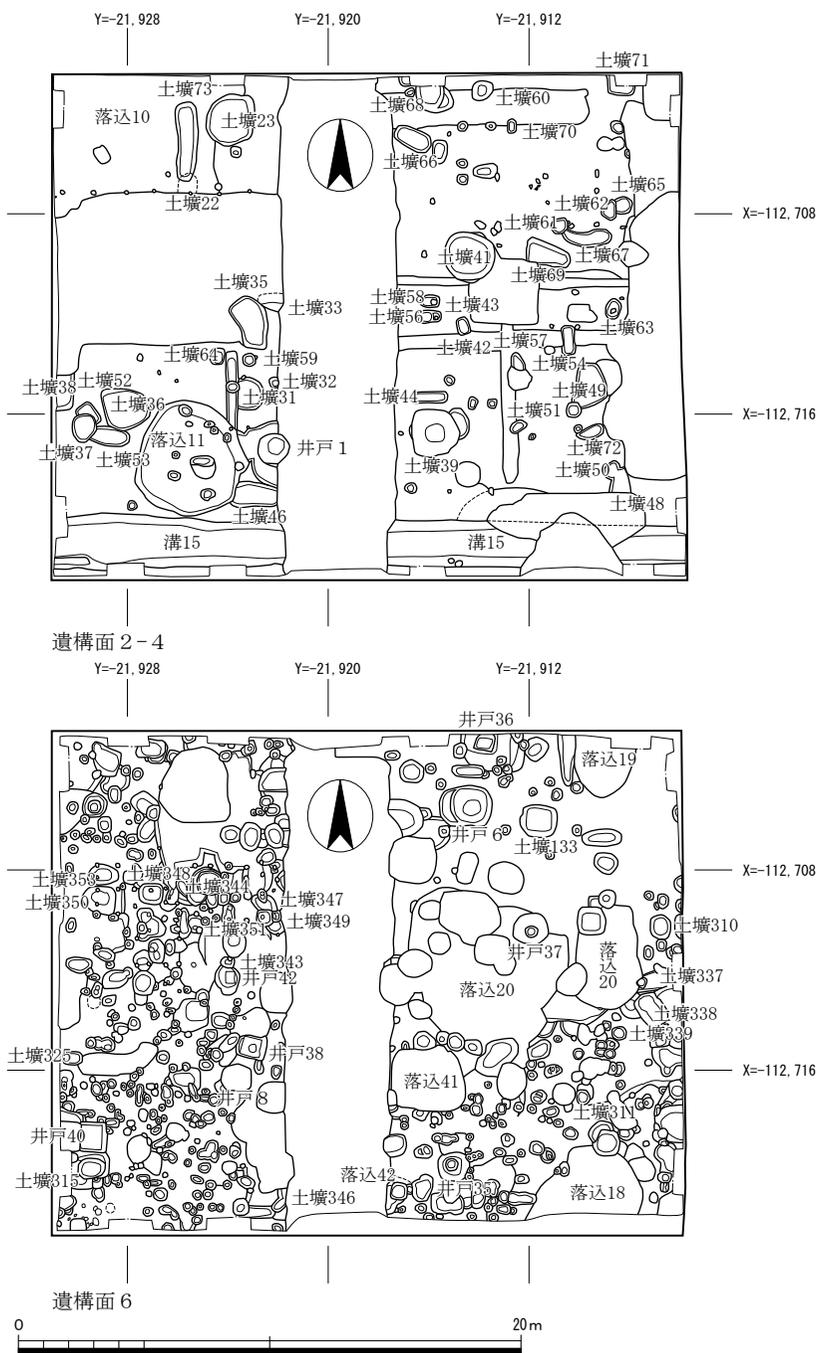


図2 調査区平面図 (1:300)

焼締陶器甕の破片等、室町時代前期の遺物が少量出土したのみであるが、形状から考えて、墓の可能性が非常に高い。土壙 133 として扱った縦板・横棧を使った井戸は、本遺跡中では木枠の状態が一番良く残っているものであったが、それでも最下段の横棧と縦板の一部のみが取り上げ可能な状態であった。

遺構面 4 では、総計 254 基の遺構を調査した。鎌倉時代前半代から後半代の遺構面と考えられ、他の遺構面と比較して井戸が 22 基と最も多く注目される。土壙 155・158、落込 28 など、後に井戸と確認されたものを加えると 25 基にも上る。このうち何等かの施設の痕跡を認めたものは 22 基ある。方形の木枠を有するものが 12 基（井戸 6・8～12・18～20・23、土壙 157、落込 28）、このうち底部に曲物の痕跡を認めたもの 4 基（井戸 6・9・10、土壙 157）、曲物の痕跡のみのもの 9 基（井戸 15・17・21・22・24～27、土壙 155）、縦板組みの十角形の井筒を有するものが 1 基（井戸 7）である。落込 20 は調査区中央東寄りで見出した径 6～7m、深さ 0.4m を測るほぼ円形の大きなもので、鎌倉時代後半の遺物が出土した。落込 18 下層・19・21 も南北 4m、東西 2.5m、深さ 1m を測る規模の大きな遺構で、これらは調査区の東側に集中している。

遺構面 5 は平安時代後期から鎌倉時代前半代の遺構面で総計 472 基の遺構を検出した。他の遺構面と比較して最も数が多く、中でもピットについては 10 面を数える遺構面で調査したピット総数の半数以上を占める。礎石を有するピットも 16 基検出したが並びを確認しているものは現在のところない。井戸は 7 基検出しており、曲物を有するもの 5 基（井戸 30～34）、このうち二段組みとなっているもの 2 基（井戸 32・33）、方形木枠組みの痕跡のあるもの 1 基（井戸 29）、施設の痕跡不明のもの 1 基（井戸 28）である。

遺構面 6 で確認できた最も古い遺構は井戸 39・40 とした奈良時代の遺物が出土する遺構で、この遺構面は少なくとも奈良時代から平安時代中期の幅で考えられる。総計 163 基の遺構を確認した。調査区西側を中心に堆積していた黄灰色泥砂層を掘り下げた段階で自然堆積層である砂礫層（地山）の上面に展開する遺構群である。井戸は 8 基検出しており、方形の木枠組みを有すると思われるもの 4 基（井戸 36・38・40・42）、曲物を有するもの 4 基（井戸 35・37・39・41）がある。井戸 39・40 は上・下に重なり合っており、造り替えが考えられる。井戸 40 からはごく少量の遺物が出土したのみである。

遺構面 7 では北東方向から南西方向に流れる流路跡を検出した。幅は 4～7m、深さもごく浅い部分から 1.5m を測る部分もあり一定でなくかなり不整形であり、遺物も出土しなかったことからみて自然の流路であろうと考えている。しかし、この流路のベースとなっ

ている砂礫層から古墳時代の須恵器が出土しており、また奈良時代の井戸に切られていることから、古墳時代から奈良時代の幅で時間が限定できる。堆積土は大半が砂層で、灰オリーブ色粗砂層、明黄褐色砂・オリーブ黄色砂混在層などである。

遺物 各遺構や遺物包含層からは、土師器などの土器類を中心に、金属製品、石製品、木製品、銭貨、自然遺物など、多種多様な遺物が多量に出土している。これらを時代別にみると一括資料を多く含み、出土量が多くなるのは平安時代後期以降であり、この時期以後から室町時代後期までの遺物が今回の調査で出土したものの大半を占める。平安時代中期以前及び江戸時代以降の遺物は一定量出土しているが、全体からみればごく少量である。

弥生時代から古墳時代の土器は、地山の砂礫層の上層から少量出土している。比較的磨滅の進んだものが主で、いわゆる流れ堆積した遺物である。

奈良時代の遺物は、土師器杯・皿や須恵器片が井戸 39・40 から出土している。出土量は少ないが明瞭な遺構に伴うものであり重要な資料といえる。井戸 39・40 出土資料以外ではまとまって出土していないが、近辺に関連遺構が存在していたことは確実であろうし、遺物整理時には新しい時期の遺構、層内へ混入した同期の遺物の点検も重要な課題となる。同時代の遺跡復原への手懸かりとなるだろう。

平安時代前期から中期の遺物は、遺構面 6 で検出した井戸などから、土師器杯・皿、須恵器杯・壺・甕、黒色土器碗、緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、銭貨などがまとまって出土している。奈良時代以前の遺物に比べると出土量は増加しているが、平安時代後期に比べると多くはない。この点については遺構の残存状況の反映と考えられる。

平安時代後期以降には、整地層とみられる遺物包含層及び遺構の残存状況が良好になると共に、それから出土する遺物の総量は急激に増加する。遺物各個体の遺存状態が良いものも多くなり、中には完形品を含む土器群もみられるようになる。遺構出土の土器群には、セット関係のそろった一括資料も数多い。このような遺物出土状況は室町時代後半まで続く。この発掘調査で出土した平安時代後期から室町時代の土器群は同期間の京都の土器編年や土器の流通問題を研究する上では貴重な資料となるだろう。以下今回出土した一括資料の一部と土器類以外の資料を若干紹介して置く。

井戸 6 からは完形品の輸入青磁碗・皿（中国同安窯産の碗・皿、竜泉窯産の皿各 1 点）などを含めて土師器皿・高杯、瓦器碗・皿・羽釜・盤、須恵質土器こね鉢・甕、焼締陶器甕、輸入品の青白磁分子、白磁碗（両者とも中国産）、その他土師質のカマド、紹聖元寶（宋銭）、鉄釘などが出土している。

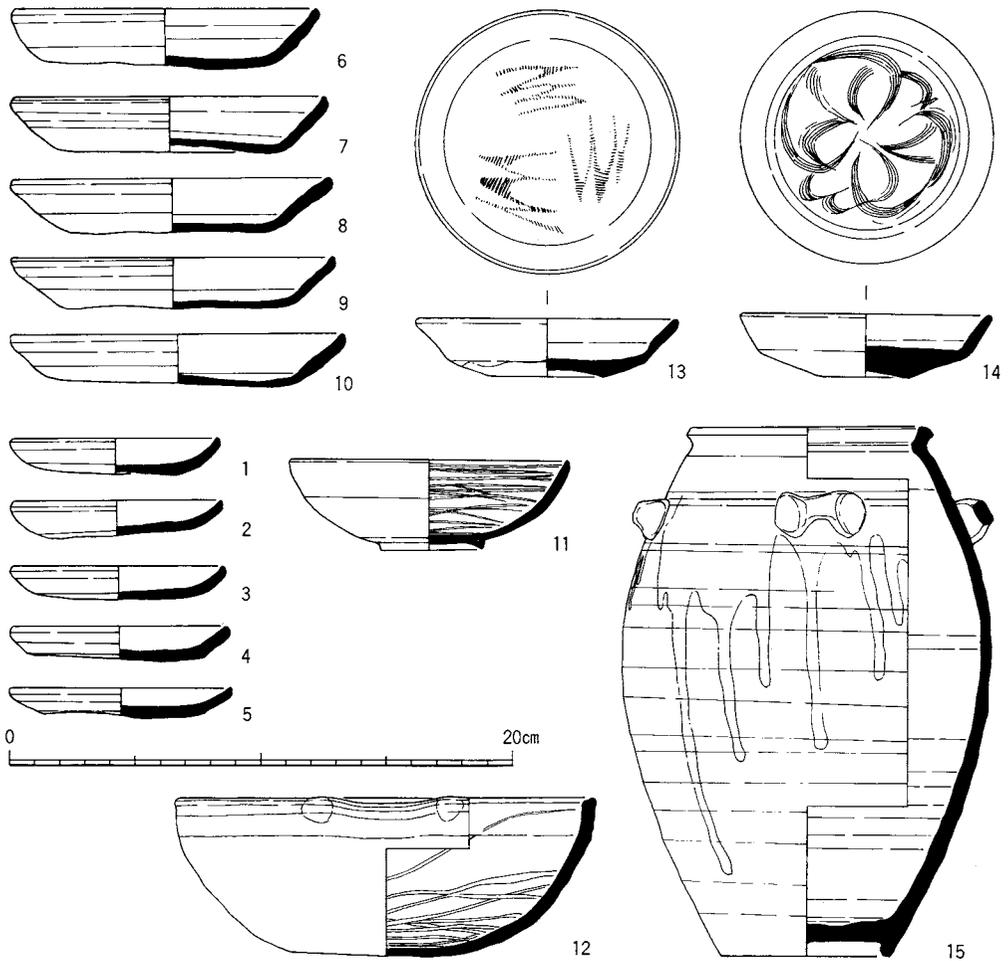


図3 井戸8出土土器実測図(1:3)

井戸8から同じく輸入品の青磁皿(中国同安窯産・竜泉窯産各1点), 土師器皿などを始め, 瓦器椀・皿・鍋・羽釜・盤, 須恵質土器こね鉢・甕・焼締陶器甕, 輸入品の青磁椀, 白磁椀, 褐釉陶器壺(接合すればほぼ完形となる)・盤, その他巴文軒丸瓦, 平瓦, 巴文様のある漆器椀など多数の遺物が出土している。

両井戸からの出土遺物は, 一括資料であり型式的まとまりもある。土器編年観よりみれば, 井戸6出土土器群の方がやや古い様相を持つと言えるが, 両者とも鎌倉時代前半代の時期幅には収まる資料と判断している。

落込20からは, 木製品下駄・盤・箸, 漆器椀などと共に土師器皿, ミニ羽釜, 瓦器椀・鍋・羽釜・火鉢, 須恵質土器こね鉢, 焼締陶器甕, 輸入品の青磁椀, 白磁皿, 鋳型など各種の遺物が多量に出土した。これらの遺物はその様相から鎌倉時代末期に比定できる。同

期の木製品の出土例は京都市域では少なく、注目される資料である。

鎌倉時代のピット 71 から銅製品ミニ椀、室町時代後期の暗褐色～黒褐色泥砂層からは金銅製飾金具などが、他の各層や遺構などからも中世の金属製品が出土している。これら金属製品は、今調査での遺構検出状況（落込 11 を始め铸造に関連するとみられる遺構も多い）や、周辺調査における類似した遺構の様相からみて、当地において使用されていたものではなく、生産されていた製品の一部である可能性が大きい。

室町時代後期の暗褐色～黒褐色泥砂層から五銖銭が 1 点出土している。この五銖銭は中国で前漢・武帝の B . C .118 年から、隋朝の A . D .585 年に至る約 700 年間にわたり多量に铸造された銭貨である。日本国内での出土例は少ないが、古墳からの出土例や、中世の宋銭などに混ざって出土した例が知られている。今回の出土銭については遺構に伴うものでもなく、多量の宋銭に混ざりこんで日本に搬入され、使用されていたものと考えられる。

室町時代中期から後期の遺構や層から瓦質有孔埴や、瓦器の火鉢類が多数出土している。瓦質有孔埴はこの地域の調査では常に出土する遺物の一つであるが使用方法は明らかではなかった。しかし今回の調査においてその使用方法の一例が明らかとなった。しかし遺存状況が悪かったこともあり、埴に孔が開けられた意図については解明できなかった。用途はこの使用例だけには留まらないこともあり、関連資料の増加が望まれる。また瓦器の火鉢類のまとまった出土量には、注意する必要がある。火鉢は暖をとるなど日常的な生活に関連する資料であるが、各種の手工業生産品の製作過程で小型火床として用いられた可能性も大きく、遺跡解明の手懸かりの一つと考えている。

小結 今回実施した発掘調査では、平安京成立以前の遺構面を始め、平安時代から室町時代末期までを、遺構面の層位関係を明確にして計 10 面にわたり検出した。これら各時代の遺構面上で、奈良時代以前には埋没していたとみられる自然流路、奈良時代の井戸、平安時代前期以降では井戸、土塋、溝、ピット、柱穴、礎石、落込などの遺構を多数検出した。また、各遺構や遺物包含層からは、多種多様な遺物が出土している。

今回の発掘調査によって平安京左京八条三坊七町の南東部域の平安京成立以前及び成立以後の遺跡の様相が明らかになったといえる。発掘調査終了直後の生の考古資料のみで当地の歴史の変遷を語ることは極めて困難なことである。調査成果の詳細と、当地及び、地域の歴史の変遷に対する理解は正報告書において記したい。

（平安京調査会 上村憲章・小森俊寛）

註 1 「平安京左京八条三坊」1982 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 6 集

10 平安京左京九条三坊 (図版14)

経過 京都市高速鉄道烏丸線の南進工事は、京都駅から近鉄竹田駅間で予定されているが、工事工区内の周知の遺跡には、平安京跡がある。発掘調査対象区は平安京域内に限られている。具体的には針小路通から九条通南30mまでの地区であり、平安京左京九条三坊十三町から十五町の西端辺及び烏丸小路と推定されている地域である。

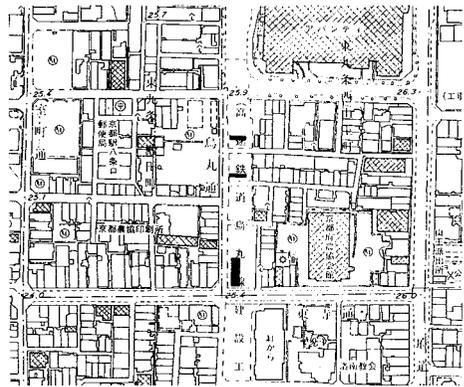


図1 調査位置図 (1:5000)

南進工事に伴う発掘調査は、既に昭和58年度から部分的に実施しており、昭和59年度には調査体制を整えて対象地全域で一連の発掘調査を行い、主要部の大半は調査を完了している。しかし民家や工場の立ち退き問題の解決が遅れたため、少数の調査対象区が昭和60年度に残った。

昭和58・59年度の既調査においては、烏丸小路、信濃小路、九条坊門小路などの街路関係遺構や邸宅内の整地面及び井戸、柱穴等の平安時代の遺構を検出している。また信濃小路通と九条通では、戦国時代から桃山時代の濠を含む中・近世の遺構・遺物も多数検出している。これらの成果には注目すべきものが多い。加えて小数ではあるが縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺構・遺物も出土しており、当地域の平安京成立以前の歴史についても種々の新知見を得ている。

今年度は、主に針小路と九条坊門小路（現東寺道）間に残っている未調査地域に、それぞれNo.91トレンチ、立30・31とした調査区を設定し調査を行った。今年度の調査は、隣地での既調査で得られた成果の追跡調査としての性格が強い。

遺構 No.91トレンチでは、溝7条、土壙10基、ピット23基、落込6基、攪乱壙4基など各種の遺構を検出した。

溝1・2・3-1・3-2・5の4条は、東西方向の小溝である。幅が40cm前後で深さ約20cm強程度の溝で、ほぼ2m間隔で並走している。隣接のNo.89トレンチでも同様の東西方向の小溝群を検出しており、検出状況から耕作に関連する畝溝と考えている。これらの溝は、室町時代には埋没している。

溝4は東西方向、溝6は南北方向の素掘り溝である。どちらも全形を検出できなかった

が、断面はほぼ皿状を呈しており、検出面から20～30cm程度の深さである。両溝とも平安時代後期には機能しており、溝4は鎌倉時代前半に、溝6は後期の内には埋没し、その機能を喪失している。既調査成果や復原モデルとの比較から、溝4は九条坊門小路北側溝、溝6は烏丸小路東側溝と理解している。なお溝6は、溝内最下層や東肩部に一部残る土層の出土遺物からみて、平安時代前期末から中期初め頃には既に形成されていた可能性が高い。

土壙、ピット、落込などは、それぞれ遺構の性格を把握するまでには至っていないが、出土遺物が日常生活用品を主とするものであり、人々の居住と関連する遺構と考えている。平安時代に位置付けられるものは少なく、そのほとんどは鎌倉時代に比定できるものである。なお土壙4だけであるが平安時代中期後半に比定でき、注意する必要がある。

調査区立30では、溝6条、土壙14基、ピット68基以上、落込3基、攪乱壙17基他の各種の遺構を検出した。

溝1～3は幅、深さとも10数cm程の南北方向の小溝であり、ほぼ並走している。共通した性格を持つ溝と思われるが、出土遺物は溝1・3が江戸時代後期、溝2は室町時代後半のものが主であり、成立年代には時期差が認められる。

溝4は、上部がほぼU字状の断面を呈する素掘りの溝である。幅は1～1.2m、深さは0.5～0.6mを測る。鎌倉時代内には埋没している。溝4は、四行八門の町割りラインには重ならないが、やはり区画と関連する溝とみられる。後述する溝5-1とは並存していたものと考えている。溝5-1・5-2は、調査区西壁沿いで検出した南北方向の溝であり、連続性や位置関係から烏丸小路東側溝と理解できる。5-1は、検出部分だけで幅2m以上あり、深さは検出面から0.5m程を測る。鎌倉時代には埋没し、その機能は失われたと考える。溝5-2は、5-1の下層部分で重複する1時期古い段階の側溝の遺存部分とみている。溝内からは、主に平安時代後期の遺物が出土しており、同期まで使用されていた側溝と考えている。

土壙、ピット、落込は、平安時代後期に比定できる遺構（土壙14、ピット18～20・32～35、落込3など）が中心であり、次いで鎌倉時代の遺構（土壙3・7、ピット3・4・26・28など）が多い。溝4や溝5と並存していた遺構群である。ピットには柱穴と理解できるものが多く、当調査は宅地の一画と考えている。なお、これらの遺構群よりやや先行する平安時代中期頃に比定できる土壙5・10などの遺構が少数あり、宅地としての利用開始は後期以前からと考えている。

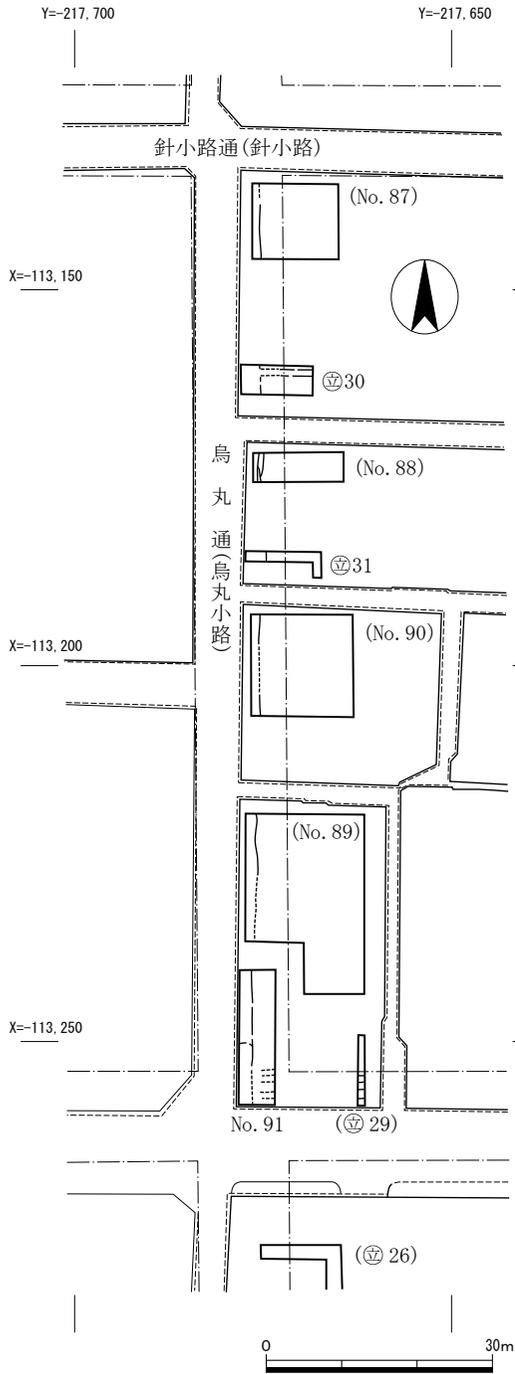


図2 調査区配置図(1:1000)

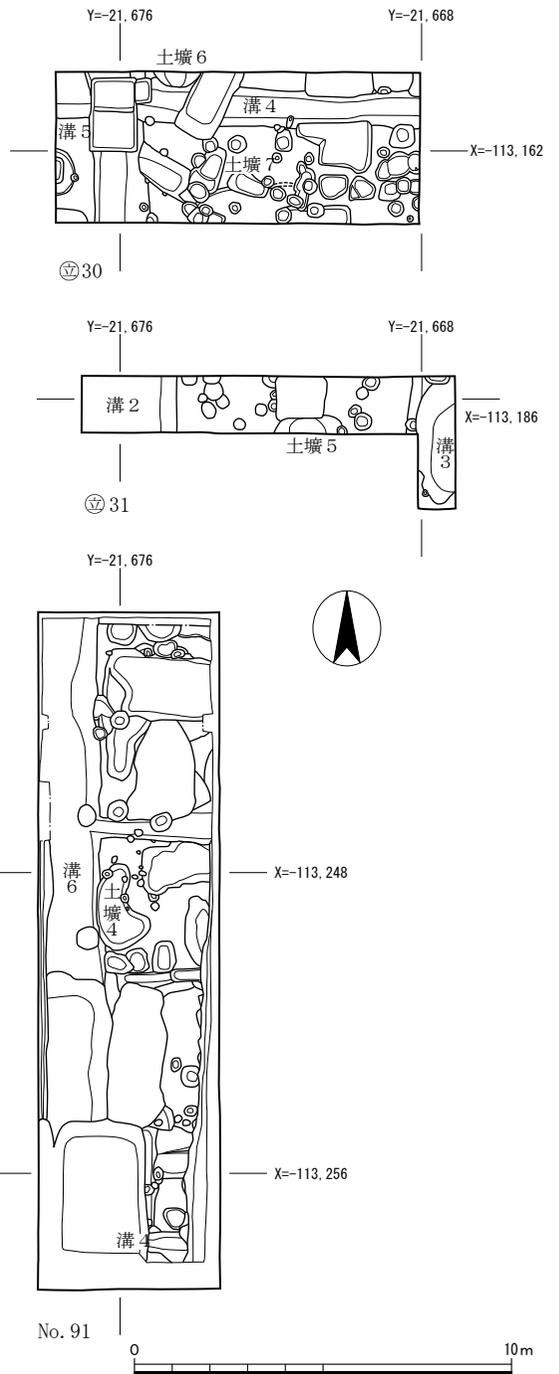


図3 調査区平面図(1:200)

調査区立 31 では、溝 3 条、溝状遺構 2 条、土壙 5 基、ピット 70 基以上、落込 5 基の他、攪乱壙などを含む多くの遺構を検出した。

遺構 1・2 は、その位置関係などから両溝とも烏丸小路東側溝と理解している。両溝の関連では、立 30 で検出した部分とほぼ同様であり、溝 1 は立 30 の溝 5-1 に、溝 2 は溝 5-2 に連続しているとみている。溝 2 は、平安時代後期に比定できるが、溝 1 は、室町時代前半に入ってから埋没している。

溝 3 は調査区東端で検出した遺構であるが、調査区を南へ拡張して更に追跡したが全形を検出できなかった。しかし検出状況から溝の一部とみている。深さは、検出面から約 0.5m を測る。成立期は出土遺物から平安時代中期以前の可能性もあるが、埋没年代は平安時代後期である。

土壙、ピットは、やはり平安時代後期（土壙 1・2、ピット 18・21・30・41 など）、鎌倉時代前期（土壙 4、ピット 8・23・31～33・45 など）に比定できるものが大半を占める。しかし平安時代前期から中期の遺構は、先述した 2 箇所調査区よりやや多く検出している。土壙 5 は前期末から中期中、ピット 61・64・65 は中期に比定できる遺構である。これらのうちピットは、各時代のものとも柱穴と判断できるものが主で、立 30 と同様に当調査区も、より密度高く宅地として利用されていたものと理解している。なお少数ではあるがピット 6・7・24 は、溝 1 に対応するように室町時代前半に埋没している。宅地利用の下限もやや下がる可能性がある。

これら 3 箇所の調査区とも、室町時代以降は検出遺構の様相が異なり、住居と関係するとみられる遺構はほとんどなくなり、変わって耕作に関連すると考えられるものが中心となる。この農耕地的様相は、近代まで続いている。

遺物 各調査区の出土遺物は、平安時代後期から鎌倉時代に比定できるものが大半であり、その様相は、ほぼ共通したものである。若干様相の異なる点としては、No.91 トレンチでの平安時代の瓦類出土量が他の 2 箇所に比べてやや多いことである。しかし、九条坊門小路以南の調査地点に比べると絶対量がきわだっている訳ではなく、信濃小路と九条大路間を分布の中心とする瓦出土範囲の北限付近の状況と考えている。

平安時代後期の遺物は、土師器皿・高杯、瓦器椀・皿、輸入陶磁器の白磁椀・皿・壺、青磁椀・皿、須恵器鉢・甕、山茶碗他瓦類が出土している。鎌倉時代の遺物は、土師器皿、瓦器椀・皿・鍋・釜・盤、輸入陶磁器の白磁椀・皿、青磁椀・皿・褐釉系の盤・壺、須恵器鉢・甕、山茶碗など各種のものが出土している。これらの出土遺物には、遺構からまと

まった状態で出土しているものも多く、良好な一括資料も含まれている。出土遺物の構成と様相は、基本的には他の平安京京域内からの出土遺物と大きく変わるものではない。しかし、輸入陶磁器や瓦器の出土量やその内容など、若干注意をはらった整理が必要と思われる点は、南進部の既調査資料と同様である。

平安時代前期から中期の遺物は、No.91 トレンチ、立 31 の遺構と土層から一定量出土しており、また新しい時期の遺構などへの混入遺物としても少数ではあるが出土している。立 30 では、他の 2 地点に比べると少ない。また平安時代初頭に比定できるものはほとんどない。この時期の遺物は、土師器杯・皿・甕、黒色土器碗、須恵器壺・甕、緑釉陶器碗・皿・壺、灰釉陶器碗などが出土している。これらもやはり他の京域内での出土遺物と共通した一般的な構成を示していると考えているが、今後定量的な点検が必要であろう。

室町時代以降の遺物は、遺構の様相変化と対応して出土量もごく少ない。再度の増加は近代に入って以降である。

小結 今年度の 3 箇所の調査地点においては、平安時代後期から鎌倉時代の烏丸小路東側溝、九条坊門小路北側溝を始め並存する時代の多数の遺構を中心に、少数ではあるが前後の各期の遺構、遺物も含めて各種のものを検出している。これらの調査結果は、この区間の既調査成果に基本的には共通する様相を示しており、遺跡の全体像に対する認識を大きく変える必要はないと考えている。しかし、検出した平安時代後期の烏丸小路成立年代や、平安時代前期の遺構分布状況などに新たな資料が加わって、更に検討を深める必要があり、個々の課題は多い。

なお、立 32 調査予定地は、機械掘削まで調査を進めたが、メッキ工場の跡地であるためか土中からシアン等有毒な重金属が浸み出す状態であったため、発掘調査を断念せざるを得なかった。

(平安京調査会 小森俊寛・長戸満男)

11 平安京右京二条三坊 1 (図版 15～20)

経過 この調査は、中京区西ノ京中御門町に所在する近畿郵政局中御門宿舎の新築工事に伴って実施した。調査地点は、右京二条三坊一町に該当する。調査対象地域内の西端では宇多小路が、東端では一町の南北方向の二等分線（東二・三行境界ライン）が、また東西方向には北三・四門及び北四・五門の境界ラインがそれぞれ想定できることから、これら宅地の地割りに関連する遺構・遺物の検出

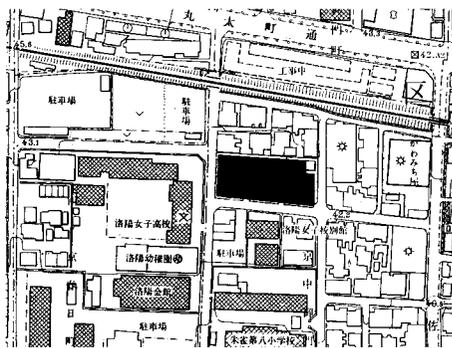


図1 調査位置図 (1:5000)

が予想できた。また、当該地周辺の既往の調査成果により、弥生時代から古墳時代の遺跡(西ノ京遺跡)にも該当することから、これらの関連遺構・遺物の検出も合わせて予想できた。以上のことを考慮し、調査は工事範囲の全域を対象とし、東西 63m、南北 30m の調査区を設定した。しかし、排土場所の確保から全面にわたり一度に調査を行うことが不可能なため、便宜的に中央部で東西に二分し、その西半部から調査を開始した。

遺構 基本層序は、周辺の既往の調査例とほとんど同じである。まず、既存建物の整地土層が厚さ約 30cm、旧耕土層が厚さ 20cm、灰褐色泥砂層が厚さ約 5 cm ある。この下は黄灰色泥砂あるいは泥土層の地山となる。このうち旧耕作土層は、北に向かって薄くなり、調査区の北端では、ほとんど認められなくなる。検出した遺構は、すべて地山の上面で検出した。地山面は平坦でなく、かなり凹凸が認められ、その窪みには黒色泥土層あるいは黒色泥砂層が堆積する。

検出した遺構は、平安時代前期から中期までに属するものと室町時代、そしてこれよりも古く、時期不明の流路状の堆積層などがある。平安時代のものは、平安京地割及び宅地に関連するもので、掘立柱建物、柵列・塀、溝、河川、橋脚、土壇、落込などがある。一方、室町時代のものは、ほとんどが農耕に関連するもので、南北及び東西小溝、土壇、柱穴、河川などがある。両者の遺構を合わせると総数約 800 を数える。以下平安時代の主要なものを概略する。

検出した建物・柵列群は、建物が 15 棟、柵列・塀は 4 条ある。いずれも掘立柱で、柱掘形内には特に施設は認められなかった。これら建物、柵、塀の検出状況については、S

B 1, S A 1を除くと、宇多小路東築地心から東へ約15m(5丈)以東、東二・三行境界から西へ約9m(3丈)以西、北三・四行境界から南へ約3m(1丈)以南の範囲内に密集しており、かつ重複した状態が認められた。またこれらの建物配置は、主屋・副屋が矩形を呈したいわゆる雁行型の配置を取り、それに細長い付属屋が取り付く形態を取っている。

検出建物一覧表

遺構	棟方向	規模	桁行 m(尺)	梁行 m(尺)	廂 m(尺)	時期
SB 1	N・S	1×4	8.7 (29)	2.1 (7)		V
SB 2	E・W	7×2	N 16.3 (53.9)	4.1 (13.7)	2.3 (7.7)	V
SB 3	E・W	7×2	N 17.4 (58.1)	5.0 (16.6)	2.5 (8.3)	II
SB 4	E・W	5×1	12.6 (42)	3.0 (10)		I
SB 5	E・W	4×2	9.6 (32)	4.8 (16)		III
SB 6	N・S	2以上×2	W 4.5 (15)	4.5 (15)	2.25 (7.5)	VI
SB 7	E・W	2×2	4.5 (15)	2.25 (7.5)		VI
SB 8	N・S	2×3	3面 4.2 (14)	6.3 (21)	2.4 (8)	I
SB 9	N・S	2×3	3面? 4.8 (16)	7.2 (24)	2.4 (8)	III
SB10	N・S	2×3	4面 4.8 (16)	7.2 (24)	2.4 (8)	IV
SB11	N・S	1×5	2.4 (8)	13.5 (45)		III・IV
SB12	N・S	1×5	2.24 (8)	13.5 (45)		II
SB13	N・S	3×2	N 7.2 (24)	4.4 (14.6)	2.4 (8)	II
SB14	N・S	1以上×2	2.4 (8)	5.4 (18)		V
SB15	N・S	2×3	4.4 (14.6)	6.8 (22.5)		VI

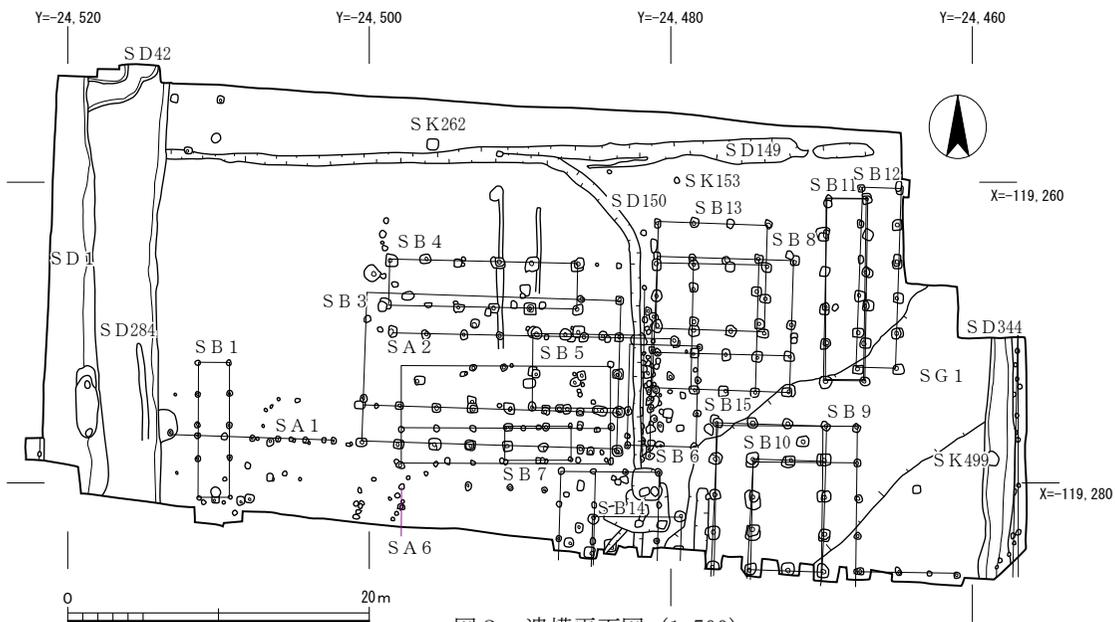


図2 遺構平面図 (1:500)

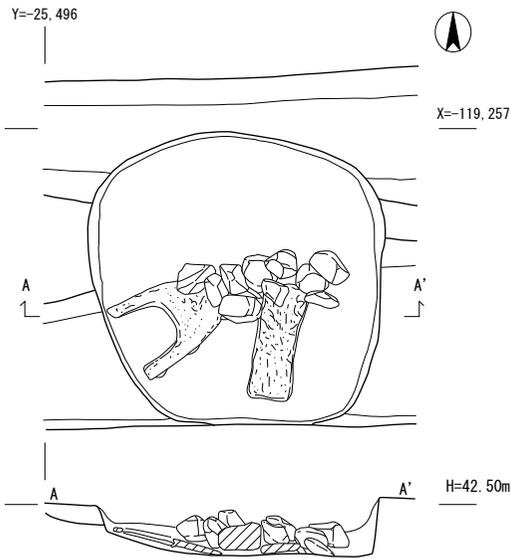


図3 SK262遺構実測図 (1:20)

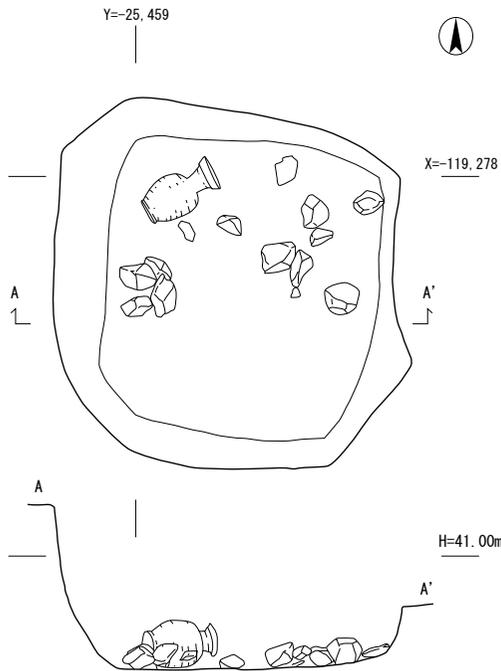


図4 SK499遺構実測図 (1:20)

次いで検出した溝のうち主要なものは、SD42・149・284・344がある。SD42・284は調査区西端で検出した南北溝で宇多小路東築地内側溝と考えられる。SD344は調査区東端で検出した南北溝で、溝東肩からSD284西まで約60mあることから東二・三行境界を画する溝と言える。またSD149は東西溝で、朱雀第八小学校調査で検出した春日小路北築地から北へ約75mのところに位置することから、北三・四門を画する溝と考えられる。河川は、調査区の西端で検出した南北方向のもので、長さ29mにわたり検出した。調査範囲内では西肩を検出できなかったが、幅5m以上に及ぶ。東肩には杭列と橋脚と考えられる柱穴を南北に2個確認した。このうち南側の柱穴は、SA1の延長上に位置している。

今調査で検出した土壌群の中で注目すべきものが2基ある。まず、調査区北部中央付近SD149の北で検出したSK262がある。一辺80cmの隅丸方形を呈する深さ15cmの土壌である。この中に身長30cm弱、身幅22cmの鉄製鋤先と身長30cm、身幅22cmの鉄製鍬が並列して置かれ、その上に拳大の碟が10個あった。鋤の表面には初穀の痕跡が多数認められた。また調査区東端で検出したSK499は、一辺90cmの隅丸方形を呈した土壌で、その中から須恵器壺が横たわった状態で出土し、これと共に小碟12個が出土した。この両者は平安時代中期のもので、祭祀に関連したものである。この他SB13北西約3mに位置する径30cmの小穴から、多量の土器が出土した。

遺物 遺物は遺物整理箱で127箱出土し、弥生時代から室町時代に至るものがあるが、平安時代前期から中期のものがその圧倒的多数を占める。その内訳は、大半が土器類で次いで瓦類、土製品（土馬）、鉄製品（鋤・鍬・釘）、銭貨（神功開寶・富寿神寶の皇朝十二銭、至道元寶などの宋銭）、石製品（巡方などの石帯、玉髓と言われる粗製のメノウ）などがある。これらの遺物は各遺構から出土したが、特にまとまったものとしては、溝SD42、河川SD1、落込SG1、土壇、柱穴のものが上げられる。

土器類には、土師器（杯A、杯B・同蓋、皿A、高杯、甕、製塩土器、竈）、須恵器（杯A、杯B・同蓋、壺、甕、鉢など）、黒色土器（杯A・杯B、甕、風字硯）、緑釉陶器（椀、皿、香炉身・同蓋、耳杯、陰刻花文）、灰釉陶器（椀・皿、水注、平瓶、多耳壺）、白釉緑彩陶器、輸入陶磁器などがある。これらの内、平安時代前期の遺物を多数に含む遺構の代表例として落込SG1があり、中期の代表例としてSD42がある。SD42出土のものは以下に示した。これには、土師器杯（2・3）・皿（1）・甕（4）、須恵器杯（5）・鉢・甕・緑釉陶器椀（9）・皿（6～8）、灰釉陶器椀・皿、越州窯系青磁椀片などがあり、10世紀後半の資料である。この他土器類の中で特に目立ったものに輸入陶磁器がある。既往調査において晩唐五代の白磁、青磁、長沙銅官窯水注などが出土し、注目され著名になった地域である。今回も各遺構群より、青磁164（北宋以降のもの15を含む）、白磁58（北宋以降のもの11を含む）、

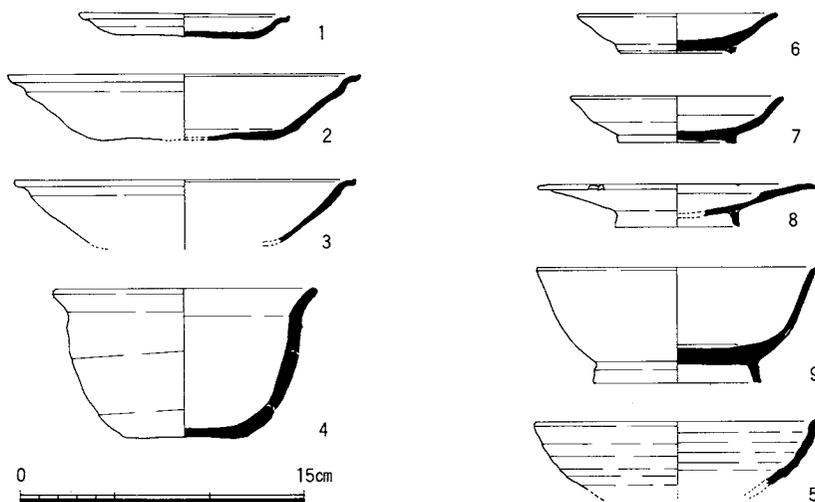


図5 SD42出土土器実測図（1:4）

長沙銅官窯系製品 10, 陶器 4, 合計 236 点出土した。特に河川 S D 1 より越州窯系青磁 13 (瓶 1 含む), 白磁 4 (北宋以降のもの 2 を含む), 落込 S G 1 より越州窯系青磁 72 (合子蓋 1 含む), 白磁 16 (腰折杯 1 含む) が出土し, 越州窯系青磁が多数を占め, 高台は蛇ノ目高台と輪状高台が認められる。

瓦類は, 軒瓦 12 点 (軒丸瓦 1, 軒平瓦 11, 有郭重弧文 1 含む) 出土した。

この他, 弥生時代の石鏃やサヌカイト片が出土している。

小結 調査の結果, 一町西半中央部の宅地変遷の実体を, 平安時代前期から中期に至る時期を 6 期に分けてたどることができる。これらの遺構は, 四行八門制に規制された一定の区画内にあり, いずれも 2~4 棟の建物群からなる雁行型の配置をとっていたことが判明した。各時期とも宅地の占有面積に変化がないことから, 同一階層の人達の住居地であったと考えられるが, 出土した遺物から官人等の名前や階層を直接知り得る手懸かりは認められなかった。しかしながら, 出土遺物中には京内でも数例しかまだ認められない長沙銅官窯系製品や白釉緑彩陶器などが含まれることから, それらを推定する手懸かりの一つとして注目できる。今後の問題としては, 河川のある宇多小路の機能と宅地の南限及び門などの開口施設の位置, 「池亭記」などの文献との関連などが上げられる。

(堀内明博・吉崎 伸)

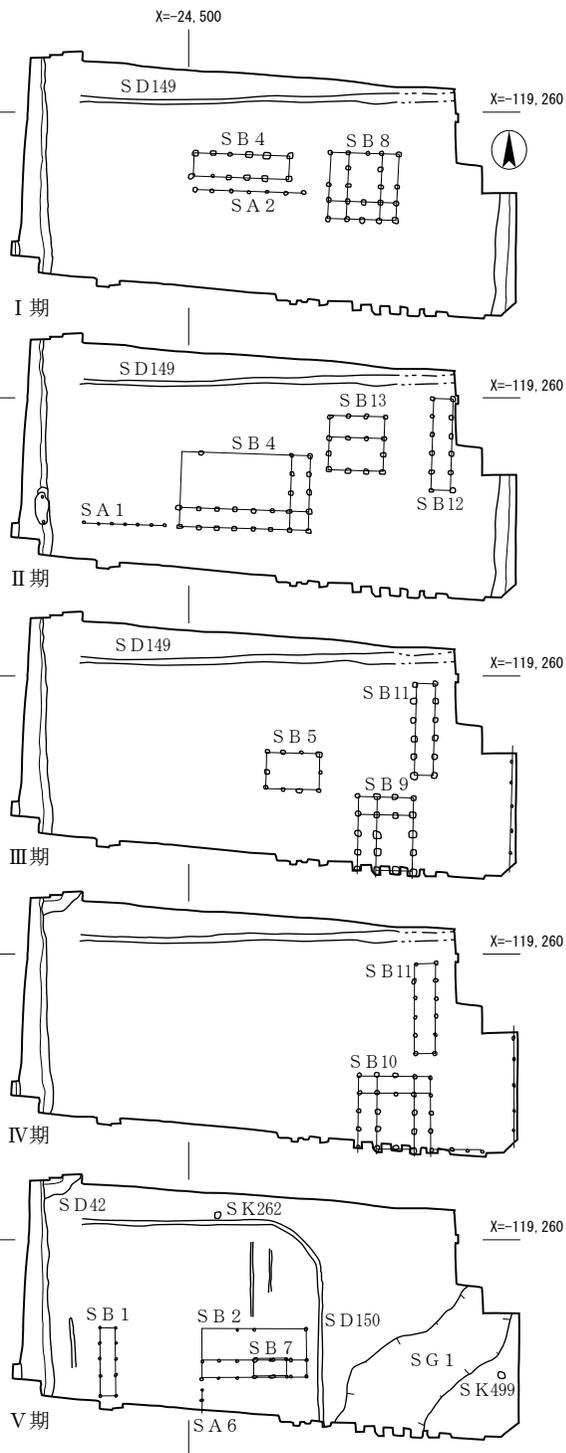


図 6 遺構変遷図 (1:1000)

12 平安京右京二条三坊 2

経過 この調査は、社団法人京都保険会の病院建設に伴うもので、調査地点は右京二条三坊七町の北東部に該当する。七町域ではこれまでに西隣のマンション建設に先立ち発掘調査が実施されており、また北側の八町、東側の二町でも発掘・試掘調査が実施され、平安時代前期から中期に属する遺構が多数検出されている。このため既存建物の基礎撤去時

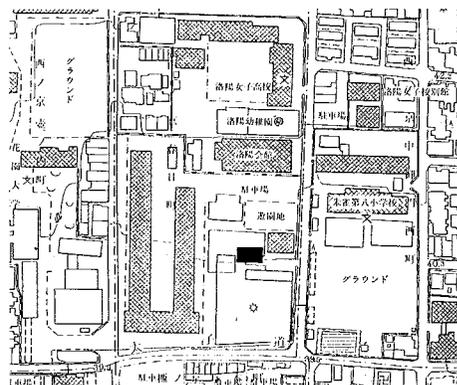


図1 調査位置図 (1:5000)

に立会調査を行った。その結果、病院建設予定地の大半が旧建物の基礎によって破壊されていることが判明した。しかし上述した周辺の遺構の残存状況からみて、既存建物からはずれた部分では遺構が遺存している可能性が強いと考え、駐車場として使用されていた箇所東西 12.5m、南北 10.5m の調査区を設定し、発掘調査を実施した。

遺構・遺物 調査の結果、調査区西壁沿いの一部で、現地表下約 40cm に平安時代の遺物包含層を検出したが、他のほぼ全面にわたって近世の土採りと思われる土壌によって遺構面が損われており、平安時代の遺構については検出できなかった。遺物包含層から出土した遺物には、土師器、須恵器、黒色土器などがあるが、すべて小片で量もわずかである。この他、近世の土壌から陶磁器類が少量出土した。



調査区全景 (東から)

小結 今回の調査では平安時代の遺構は検出できなかったが、遺物包含層を現地表下約 40cm と非常に浅い部分で確認することができた。この土層は、調査区の西側に広がるようであり、付近に平安時代の遺構の存在が推定できよう。

(平尾政幸・本 弥八郎)

13 平安京右京二条三坊3

経過 右京区花園春日町4番地にマンション建設の計画が立てられた。当地は平安京右京二条三坊十五町の北東部に該当し、またこれまで当地周辺で行われた多くの調査でも、平安時代前半期の遺構や古墳時代の遺構が良好に遺存していることが確認されている。

建設予定地内に3箇所の試掘トレンチを設け遺構の状況を観察した結果、平安時代の遺構・遺物包含層の存在が明らかになり、発掘

調査を実施することになった。調査区は当初南北約30m、東西約36m、幅14～11mの逆L字形に設定し、その後遺構の広がりや相互関係を追及するため、西部及び北東部を拡張した。また敷地東辺部に恵止利小路の西側溝が推定されたため、この溝を確認するトレンチを3箇所設けた他、建物や井戸などの全体を確認するため各所で小規模な拡張を行った。その結果、建物、柵、井戸、溝、土壌など多数の遺構を検出した。また各遺構や遺物包含層からは、多種多様な遺物が出土した。

遺構 遺構検出面に至る層序は単純で、一部では旧耕土層やその下に遺物包含層を認めたが、遺構はすべて同一面で検出しており、切り合うものも多くある。検出した遺構には掘立柱建物10棟、柵9列、溝8条、井戸1基の他、土壌や建物としてのまとまりを捉えられなかったピットが多数ある。また土器を埋納したと思われるピットを4基検出した。

遺物 各遺構、包含層から整理箱にして33箱の遺物が出土している。遺物の主体は土器類であるが、他に少量の瓦類、石製品、銭貨、木製品などがある。

土器類には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色無釉陶器、輸入陶磁器がある。輸入陶磁器の内容は、青磁・白磁・褐釉陶・黄釉褐彩陶（褐緑彩を含む）である。瓦類のほとんどは平瓦、丸瓦であるが、軒平瓦が2点ある。その他の遺物には、土馬、硯、墨書土器、線刻土器、石銚、櫛、銅銭などがある。硯には須恵器、黒色土器の風字硯や灰釉陶器円面硯がある。判読できる墨書土器には「×」や「尾張」などがある。線刻土器には「□泉」がある。石銚は鈍尾が1点ある。銅銭はSX24の壺中から検出したもので、延喜通寶が9枚ある。この他木製の櫛が4点出土した。

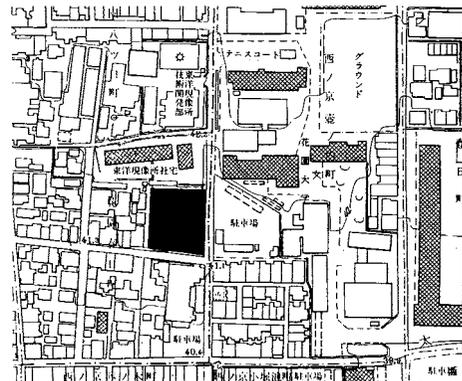


図1 調査位置図 (1:5000)

小結 調査区は、過去の発掘調査で得た条坊関係遺構の座標データを平均計算して得られた平安京条坊復原モデルによると、右京二条三坊十五町の東一行北三・四門に比定される。

今回検出したSD11は十五町の東を限る恵止利小路の西側溝の推定位置にあたり、他の遺構はすべて宅地内の施設と考えられる。遺構群は相互の位置関係、切り合い、出土遺物の検討などから大きく3期に区分できる。各期の遺構配置には、四行八門制による宅地内区画の強い影響がみられ、一定の計画性が窺える。以下に各遺構の時期区分の試案を示す。

I期にはSB4・8・9, SA18・19, SX30などが含まれる。II期にはSB1・2・3, SD12, SX31が含まれる。III-a期にはSB5-a・6・32, SA21, SD13・14・15・23, SE10, SX25などが含まれる。III-b期にはSB5-b・6・7・32, SA16・17・23, SE10などが含まれる。以上の時期区分が考えられるが、他の遺構については今後の検討を待ちたい。出土遺物の年代観から、I期-9世紀中頃, II期-9世紀後半, III期-9世紀末~10世紀中頃の年代を考えている。

(平尾政幸・本 弥八郎)

『平安京跡発掘調査概報』 昭和61年度 1987報告

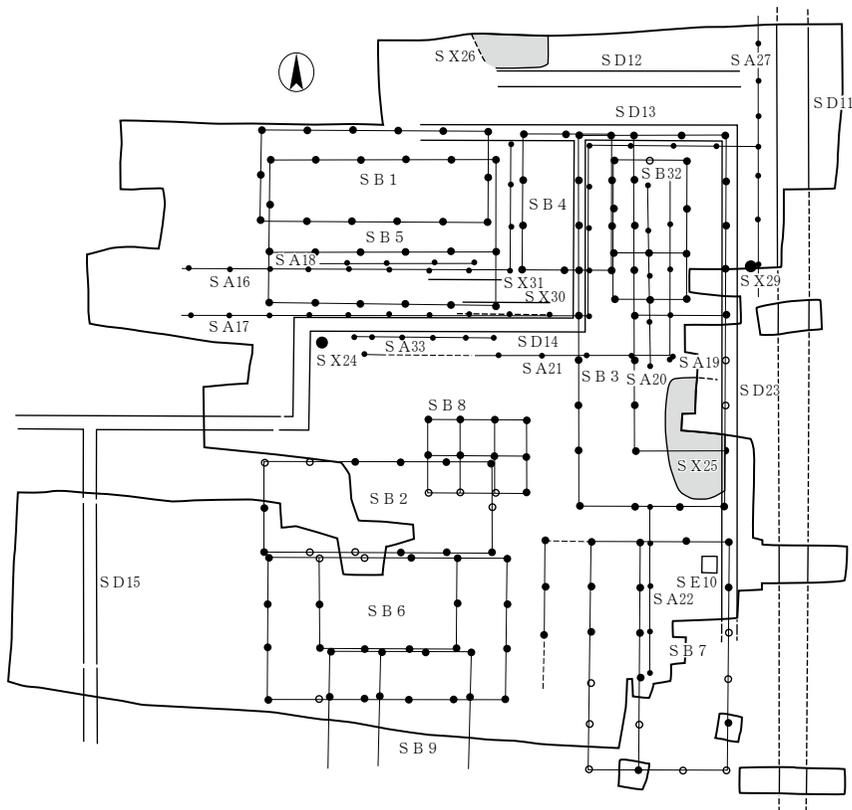


図2 主要遺構配置模式図 (1:400)

14 平安京右京三条一坊

経過 調査地点は平安京右京三条一坊九町及び二条大路に該当する。西ノ京中学校内の施設建て替えに伴い、事前に発掘調査を実施した。調査地点周辺では、これまでに試掘・立会調査が実施され、遺構の遺存状況は比較的良好であることが確認されている。

遺構・遺物 調査区南端部で東西溝を検出したが相当削平を受けているため、東・西拡張区を新たに設定した。その結果両拡張区とも

遺存状態は良好で東西溝を検出することができた。東拡張区で検出した溝の検出面での規模は、幅約1.8m、深さ0.25mある。構内からは瓦が多数出土した。当溝以外の遺構については、トレンチ全面にわたる近世の土取り穴、北半部の近世から近代にかけての耕作溝の検出に止まった。

出土遺物は整理箱で73箱出土した。大半が土取り穴から出土した。遺物は瓦が多数を占める。瓦は丸・平瓦が大半を占める。また軒瓦については、軒丸瓦が10点、軒平瓦が14点ある。更に「右坊」刻印の平瓦が2点ある。軒丸瓦は文様・製作技法から平安時代後期のものが主で、奈良時代のものも含まれる。土器類はほとんどが近世以降のものであるが、平安時代のものについては南側溝から土師器・須恵器・灰釉陶器が出土しており、また土取り穴から緑釉陶器の羽釜が1点出土している。

小結 二条大路は文献によれば路幅17丈（約51m）の規模を有し、平安京における2大大路の一つに数えられる。しかしこれまでに調査による検出例は少ない。

今回の調査で検出した東西溝は、平安京条坊復原上から二条大路南側溝の該当位置にあたり、途切れながらも東西約24mにわたり検出できたことは大きな成果であった。調査区の大部分が二条大路の道路敷きに該当する訳であるが、後世の耕作及び土採り等により全面的に削平を受けたことから、道路敷きについては検出することができなかった。なお、南側溝はその出土遺物から平安時代後期にはその機能を停止したことが判明したが、その前後の変遷過程については明らかにするには至っていない。（加納敬二・辻 裕司）

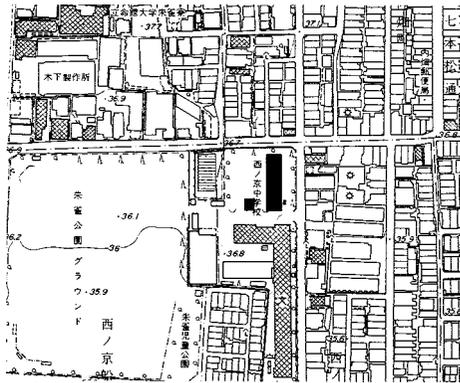


図1 調査位置図 (1:5000)

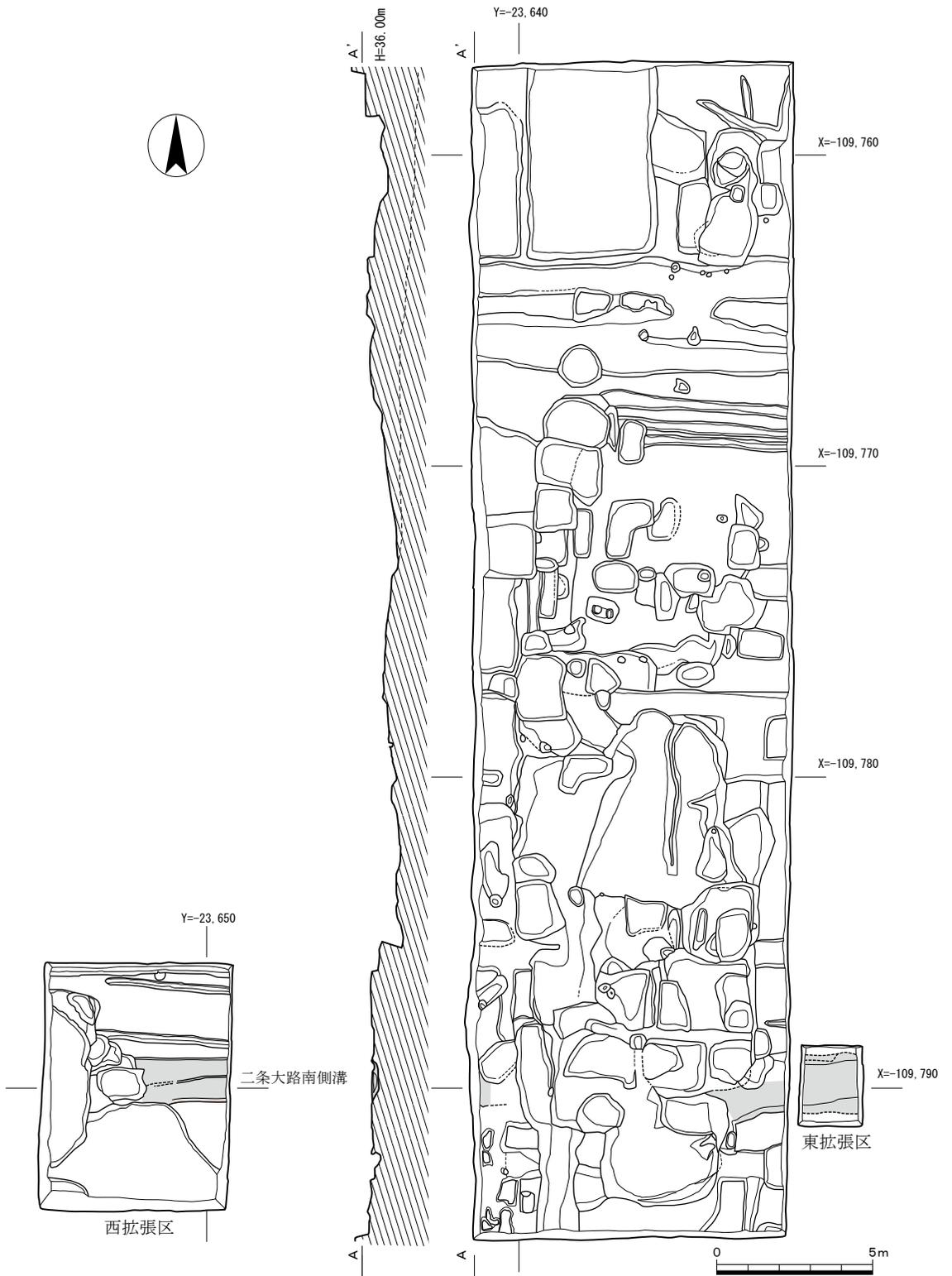


図2 遺構実測図 (1:200)

15 平安京右京三条二坊 (図版21・22)

経過 調査地点は右京三条二坊五町の北寄りの一角に該当する。調査対象地北辺部に姉小路南側溝、同西辺部に五町東西中心線が推定されたため、調査区はそれらを含むように設定した。周辺の道路状況が悪く、残土の搬出が不可能であったため、調査区を二分し反転して調査を進めた。近世以降の土取り穴により、破壊されていた部分もかなりあったが、平安時代前半期の遺構・遺物を多数検出した。

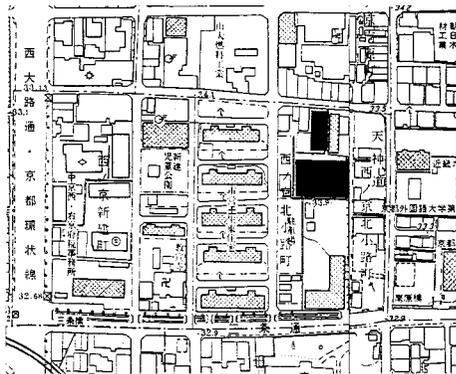


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 平安時代の遺構は、2区北端付近に姉小路の南側溝と推定できる東西溝の他、溝を5条 (SD06・11・12・13・14)、掘立柱建物7棟 (SB03A・03B・04・05・09・10・17)、柵4条 (SA02・07・08・15)、井戸1基 (SE18)、その他土壌、ピットなどを検出した。建物は2区に集中しており、1区では井戸の東側に小規模なものが1棟ある他、SD12の東側に建物の一部らしい柱跡数基が認められた。5条の溝のうちSD11が5町東西中心、SD12が西一・二行界、SD14が北二・三門界の推定地付近に位置する。井戸SE18は方形木枠組みで、底部に円形の曲物を据える。姉小路南側溝SD01は、近い位置に数条の溝が重複しており、何度か掘り替えられたようであるが、非常に複雑な堆積状況を示し、完全に分離し得なかった。出土遺物からみると、9世紀から10世紀中頃まで存続していたようである。遺物はSD01・11など溝から出土したものが多いが、各建物の柱掘形や、土壌からも出土した。土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器等の土器類の他、瓦類や銭貨、石鈔、あるいは斎申なども少量ある。いずれも一つの遺構からまとめて出土したものはない。

小結 今回の調査は右京三条二坊内では5件目の発掘調査である。他の4件の調査でも平安時代前半期の遺構を多く検出しており、この地域の遺構の遺存状態が極めて良いことを示している。これは右京、特に北半部に一般的に言えることであるが、この地域では例えば右京三条三坊付近などの調査結果と比較すると、やや新しい時期までの遺構も検出されるという少し異なった面が目される。しかしこうした京内の地域差に言及するにはまだ調査事例が充分とは言えず、今後の課題とすべきであろう。(平尾政幸・本 弥八郎)

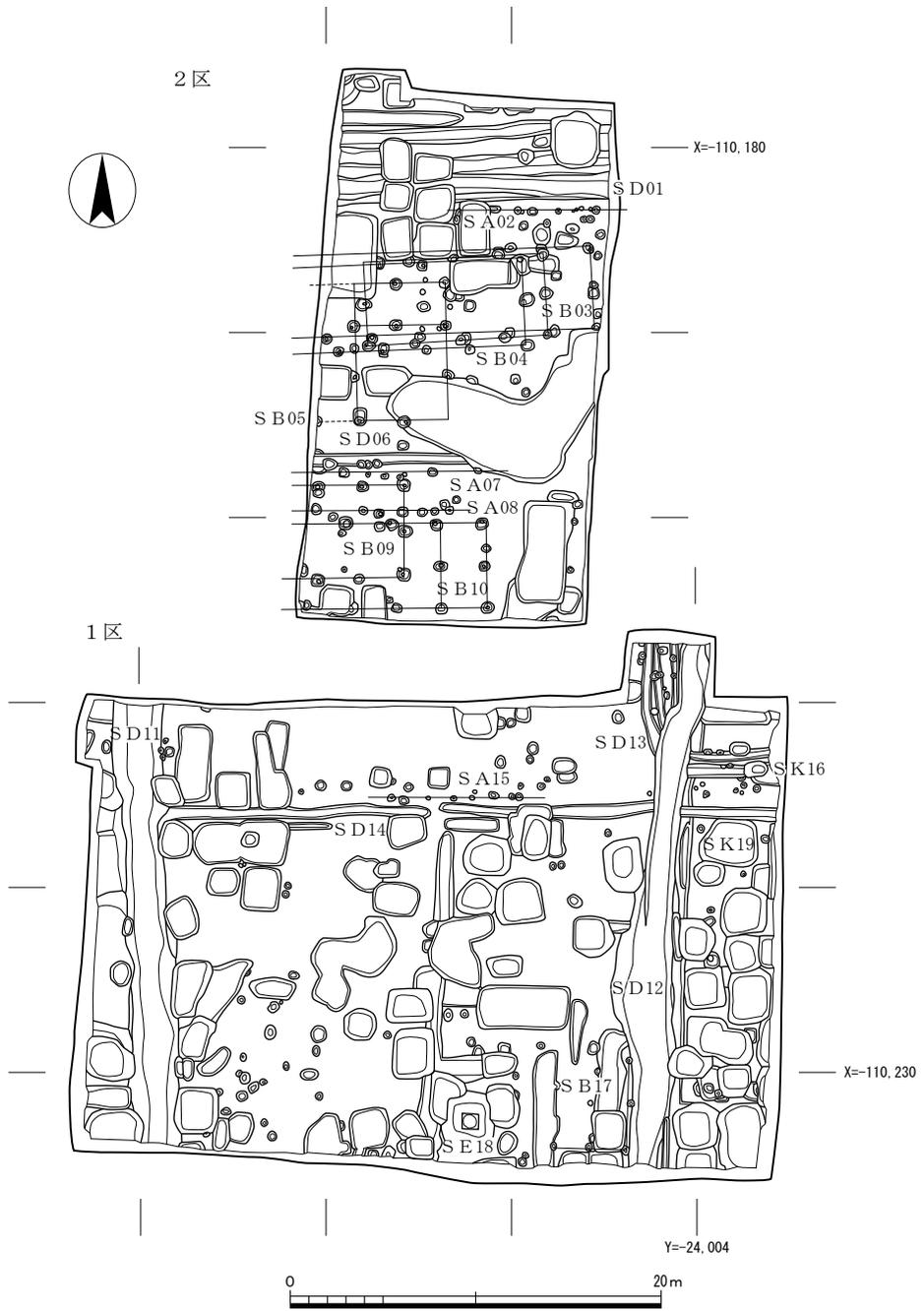


図2 遺構配置図 (1:400)

16 平安京右京三条三坊 (図版23)

経過 調査地点は島津製作所三条工場内南部に位置し、平安京右京三条三坊五町の北東部に該当する。当坊内ではこれまでに多くの調査が実施され、遺構・遺物の遺存状態が良好であることが確認されている。

ところで、現在では調査地点の北東約600m付近で東折する天神川は、明治20年発行の陸軍陸地測量部の地形図によると、三条三坊一町の北東部から同五町の東部にかけて

南流しており、また昭和10年前後に編集された島津製作所社史に掲載されている調査地点東部付近の写真にも、当時天井川であった天神川の土手が認められる。調査は敷地南部に東西方向のトレンチを設定し、この川跡を確認した後、遺構の遺存状態が良好と想定できる地域に調査区を拡大した。また調査区の設定に際しては姉小路推定位置を含むよう考慮した。

遺構・遺物 平安時代の遺構には掘立柱建物2棟、溝5条、柵1条、井戸1基などがある。建物はいずれも南廂の付く東西棟で、梁間2間、桁行5間 (SB20)、梁間2間、桁行1間分 (SB21) を確認した。溝はいずれも東西方向で、最も北寄りのもの (SD27) は姉小路南側溝の推定地に位置する。その南側のもの (SD19) は北肩部が築地推定地内側に位置するが、幅が約12mと非常に広い。更に建物を挟んで南側に位置する3条の溝 (SD22・SD23・SD25) のうちSD22は、五町北端から約30m (北二・三門界) に位置している。柵 (SA24) はSD23とSD25の間にあり、東西方向に4間分を検出した。井戸 (SE26) は北二・三門界と東一・二門界の交点に位置する。規模も小さく特に井戸側等の痕跡もない。この井戸はSD22と重複しているが、層的な前後関係は確認できなかった。遺物は主にSD19の南肩寄りから出土したが、特に建物の位置に対応する部分に集中していた。整理箱にして66箱あり、土器類の他に帯金具などの金属製品が少量ある。

小結 右京三条三坊内ではこれまで9世紀前半を中心とする平安京関係の遺構・遺物が多数検出されているが、今回の調査でも同様の成果を得た。現在この調査も含めてこれまで坊内で実施した調査の報告書を作成しているので、詳細はそれを参照されたい。

(平尾政幸・本 弥八郎)

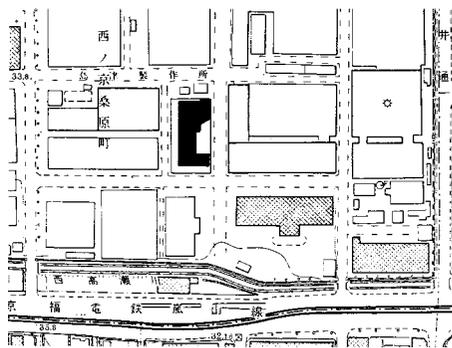


図1 調査位置図 (1:5000)

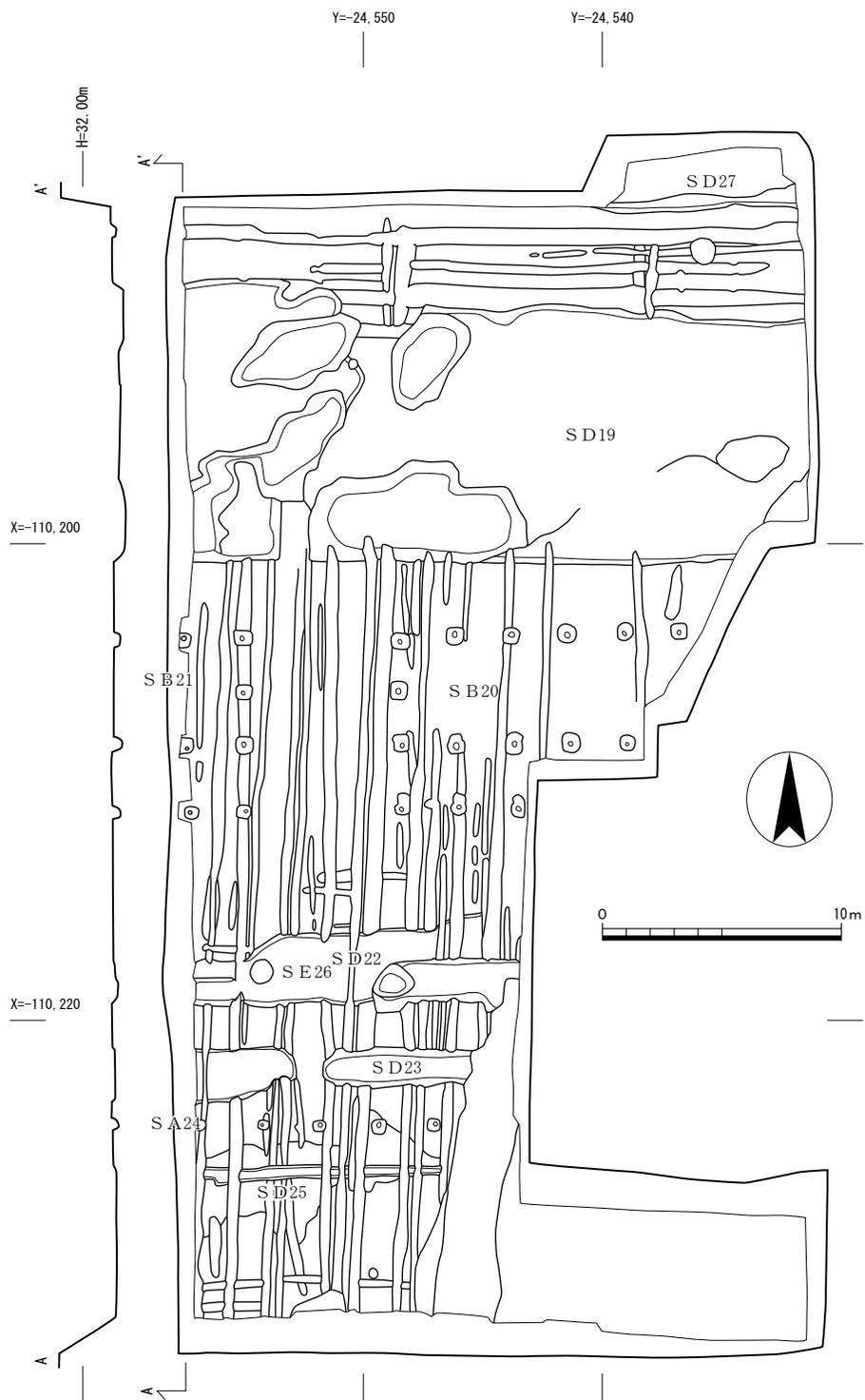


図2 遺構配置図(1:300)

17 平安京右京八条二坊 (カラー図版2・図版24～33)

経過 京都市立七条小学校の給食室が改築されることになり、事前に発掘調査を実施した。調査地点は、西市の南東部に隣接し、右京八条二坊二町及び西靱負小路に該当する。同校周辺の地形は、南西方向に向かって緩傾斜を呈し、調査対象地は校庭造成時に土盛りを行うものの、造成前の地形は低位に属する。周辺には現在でも芹田が点在している。

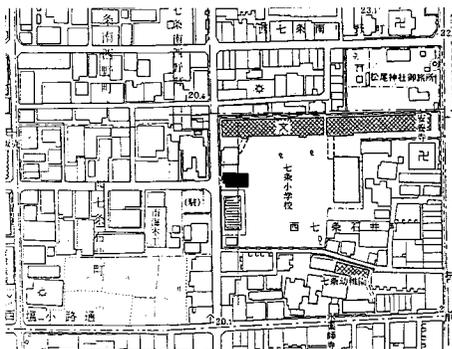


図1 調査位置図 (1:5000)

同校敷地内では、これまでに発掘・立会調査などが実施され、「十六年九月廿日」と墨書された木簡を始め多数の木簡が出土している。また西市の発掘調査でも木簡が出土しており、当該地周辺は平安京内では有数の、木簡・木製品を含む木質遺物の包蔵地として注目されている。調査の結果、条坊や宅地割りを示す遺構・木簡など多数の遺物が出土した。

遺構 調査区の層序は、盛土層及び近代の耕作土層が厚さ1.1～1.3mあり、耕作土層下は黒褐色泥砂、黒褐色泥土層が厚さ約30cm堆積し、鎌倉時代の遺物を包含する。黒褐色泥土層下は、黒褐色砂泥層が厚さ15～25cm堆積する。この上面で10世紀に属する西靱負小路西側溝を検出した。調査区中央以東では、黒褐色砂泥層下に腐植土層及びその下に黒褐色粘土層が厚さ20～30cm堆積する。この黒褐色粘土層上面で9世紀に属する西靱負小路や区画施設を検出した。黒褐色粘土層下では、褐灰色泥土、暗赤褐色泥土、褐色微砂や細砂などの堆積土層を深さ90cmまで確認した。これらの層中には遺物は包含していない。なお褐灰色泥土層は調査区中央から西方に傾斜し、黒褐色泥土層などが堆積する。

検出した遺構には、平安時代に属する西靱負小路・区画溝・流路、鎌倉時代の溝・不整形土塋等がある。鎌倉時代の遺構は、耕作に伴うものである。

西靱負小路は、9世紀前半から10世紀に属する各時期のものを検出した。検出面での規模は、東側溝が幅2.2～3.3m、深さ25～55cm、西側溝は西肩口を未検出であるが現存幅1.6～1.8m、深さ10～35cmある。道路敷きは2面検出した。幅約4mあり、上面は固く締まる。東側溝内には後述する区画溝と直交する位置に、杭・横板からなる護岸施設がある。また東肩口に沿って築地に該当する位置で柱穴7基を検出した。この部分は周囲よりやや高まり、この高まり部は区画溝の南肩口に沿い直角に折れ曲がる。なお東側溝

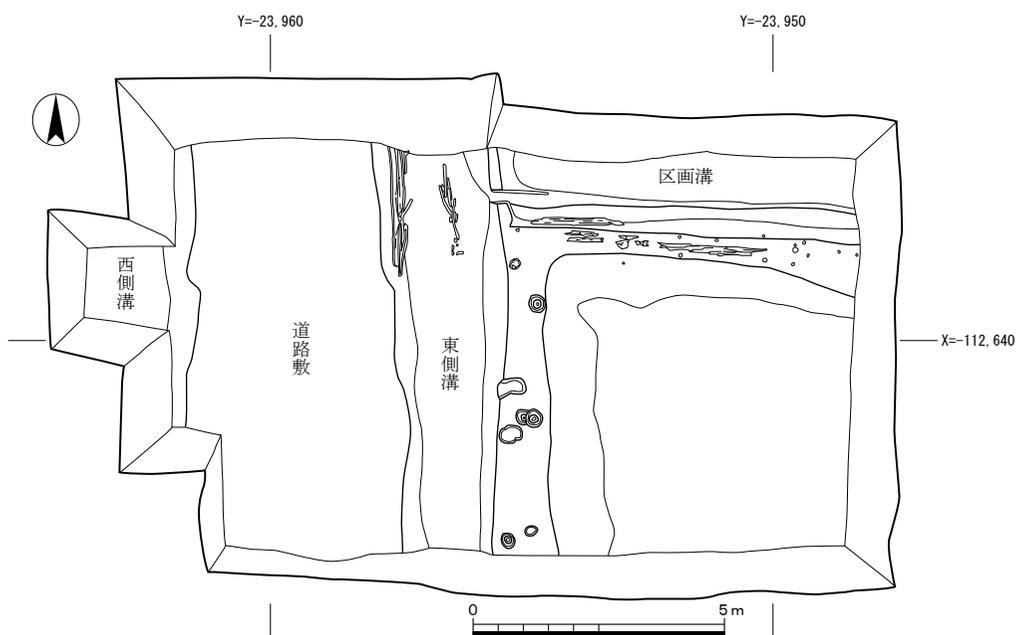


図2 遺構平面図 (1:150)

から、馬、牛、猪、鹿など多量の骨が出土した。また木製品の中には、立体人形、刀子形、斎串などの祭祀具や独楽がある。

区画溝は、四行八門制による、一町内の四行の二門と三門間を区画する地点に位置する。検出面での規模は、北肩口を未検出であるが、現存幅約1.7m、深さ約60cmある。堆積土層は上・下2層に大別でき、各々9世紀前・後半に属する。西端には排水口が1箇所ある。排水口の肩口には長さ約1.1mの板材がある。下層の腐植土層からは、木簡、木沓を筆頭に、農具、工具、武器、容器、祭祀具など多彩な木製品が出土した。祭祀具には舟形、鳥形、斎串、小型模造土器がある。

流路は、西靱負小路のほぼ道路敷き直下で検出した。東西の肩口とも側溝によって削平を受ける。堆積土層の現存幅約4.7m、深さ約40cmある。粗砂・泥土層などが堆積し、木簡や祭祀具を始めとする木製品、犬や人骨あるいは長沙白釉緑彩水注、その他多くの遺物が出土した。祭祀具には、人形、斎串、人面墨書土器、土馬などがある。

遺物 各遺構から遺物コンテナで94箱出土した。内容としては、木質遺物(54箱)、土器・瓦類(40箱)、銭貨、金属製品、骨、種実などがある。なお骨は出土しているが、上記のコンテナ数には含めていない。次に各遺物の概略を述べる。

木簡・削屑は総数98点出土した。区画溝下層では木簡15点、削屑63点ある。内容からは習書が多く、また「九九」を連記したもの、呪符などもある。流路では木簡13点、削屑5点ある。習書、紀年木簡、付札、物忌札などがある。西側溝では木簡が1点ある。

木製品は各遺構から出土し、質量とも豊富である。工具（縦斧）、農具（鋤）、漁猟具（浮子）・武具（弓）、紡織具（糸巻）、服飾具（檜扇・櫛・留針・木沓・下駄）、容器（挽物・剥物・曲物・籠編物）、食事具（匙形木器・杓子形木器・箸）、遊戯具（独楽）、祭祀具（斎串・正面人形・立体人形・鳥形・刀子形・舟形）、不明木器などがある。

土器類には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器がある。なかには、墨書土器、円面硯、転用硯、人面墨書土器、小型模造土器、土馬、土錘などがある。また輸入陶磁器では、越州青磁、長沙白釉緑彩水注などがある。

瓦には、丸・平瓦、軒丸・軒平瓦がある。出土量は少ない。

銭貨には、和同開珎、萬年通寶、神功開寶、隆平永寶、富壽神寶、長年大寶がある。

金属製品には、鉞、鉄釘、鍍金を施した金属板がある。

骨には、馬（8頭分）、牛（2頭分）、猪（2）、鹿（10）、犬（3頭）、人（頭蓋骨3体）、魚などがある。馬骨では切断痕のあるものもある。

種実には、穀・豆類、野菜、果物などがあるが、詳細は次ページの分析結果を参照されたい。

小結 西鞆負小路は、9世紀後半の時期にはほぼ復原位置に位置するが、文献による小路の規模に比べ、両側溝とも2～3倍の幅を有しており、当地点周辺の豊富な水量を裏付けている。なお9世紀前半の一時期には、当地点では西鞆負小路は存在せず、堆積層からも小河川化していたことが窺われる。このような卑湿な地域にも条坊が敷かれ、一町内を区画する溝の存在することは、土地利用の活発さを示すものであろう。このことは豊富な出土遺物からも言及することができる。特筆すべき遺物には、多数の木簡、削屑、木沓更には長沙白釉緑彩水注などが上げられる。また多種多彩な祭祀遺物は、平安時代の祭祀活動や平安京における祭場などを考察する上で重要な資料といえよう。

以上は、西市の隣接地という歴史的・地理的環境によるものと言え、西市の衰退と共に当地点もその活性を喪失したものと考えられる。木簡の積文並びに主要な遺物の概説については下記を参照されたい。

（辻 裕司・本 弥八郎・加納敬二）

『木簡研究』第八号 木簡学会 1986年

『平安京跡発掘資料選（二）』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1986年

七条小学校出土植物遺体分析結果

調査法 植物質を多量に含む土壌を各層から約4リットル採取し、1mmメッシュのフルイで水洗し、残滓から植物遺体、昆虫遺体などを採取した。以下では植物遺体の同定結果を述べる。

木本 七条小学校の調査地からは合わせて11科19種の木本種実を検出した。これら木本種実には出土部位からみると大部分が食品となったもので、食品として全く価値のないものはセンダン、エゴノキである。

草本 同定はできた草本種実には27科45種である。これらの内容は栽培植物と雑草からなり、栽培植物にはアサ、アブラナ科（種は不明）、ナス、ゴマ、ウリ、ヒョウタン、イネ、コムギ、キビがある。その他は雑草である。 (岡田文男)

表1 木本種実分析結果

番号	和名	科名	出土部位	6層	SD20	SD20下層	SD13B	旧西門
1	カヤ	イチイ	種子					破片
2	ヤマモモ	ヤマモモ	核					7
3	クリ	ブナ	果皮		破片		破片	30ml
4	クワ属	クワ	種子	24	1		1	
5	カジノキ	クワ	種子	10	1		1	1
6	ウメ	バラ	核	1				
7	アンズ	バラ	核	1				
8	スモモ	バラ	核	2				19
9	モモ	バラ	核	4	1		破片	3.5
10	ナシ属	バラ	種子	1				9
11	サクラ亜属	バラ	核	1				1
12	キイチゴ属	バラ	種子					5
13	サンショウ	ミカン	種子	2			1	15
14	イヌザンショウ	ミカン	種子				1	
15	センダン	センダン	核	16			7	
16	ナツメ	クロウメモドキ	核					1
17	ブドウ属	ブドウ	種子	3				7
18	カキノキ	カキノキ	種子				1	3
19	エゴノキ	エゴノキ	種子					1

表2 草本種実分析結果

番号	和名	科名	出土部位	6層	SD20	SD20下層	SD13B	旧西門
1	アサ	クワ	種子					1
2	ミゾソバ	タデ	果実					27
3	ダテ属	タデ	果実	99	21	18	60	80
4	ギンギシ属	タデ	果実		1		2	1
5	アカザ属	アカザ	種子	468	1		5	56
6	ヒユ属	ヒユ	種子					
7	ユベリヒユ	スベリヒユ	種子	26				
8	ハコベ属	ナデシコ	種子	65				3
9	ヤエムグラ属	アカネ	種子	2				
10	タガラシ	キンボウゲ	果実	33	2	2		9
11	キンボウゲ属	キンボウゲ	果実	14	2	17	12	9
12	アブラナ	アブラナ	種子	95				7
13	クラムネ	マメ	果実	破片				破片
14	カタバミ	カタバミ	種子	41			2	3
15	ノブドウ	ブドウ	種子	4				8
16	セリ	セリ	果実					1
17	チドメグサ属	セリ	果実	11				15
18	ヒシ	ヒシ	果皮		破片			破片
19	エゴマ	シソ	果実	2				4
20	シソ	シソ	果実	27				8
21	ナス	ナス	種子		98	130	137	30ml
22	ナス属	ナス	種子	21		1		
23	ゴマ	ゴマ	種子	3	1	1		3
24	オオバコ	オオバコ	種子					4
25	スズメウリ	ウリ	種子	3				1
26	ウリ	ウリ	種子	161	42	34	32	60ml
27	ヒョウタン	ウリ	種子	1				2
28	ウリ科	ウリ	種子			1		
29	オナモミ	キク	果実					1
30	タカサブロウ	キク	果実				1	3
31	オモダカ	オモダカ	果実			1		8
32	ヘラオモダカ	オモダカ	果実	2			1	4
33	ヒルムシロ属	ヒルムシロ	果実					10
34	イネ	イネ(炭化)	果実	4			1	4(生)
35	コムギ	イネ	果実	2			1	2
36	アワ	イネ	穎果					
37	キビ	イネ	穎果	3			1	
38	イヌビエ?	イネ	穎果	23	6		7	43
39	カヤツリグサ属	カヤツリグサ	果実	6				28
40	ホタルイ属	カヤツリグサ	果実	97	7	5	21	
41	ツユクサ	ツユクサ	種子					2
42	イボクサ	ツユクサ	種子					24
43	ミズアオイ	ミズアオイ	種子	2				3
44	コナギ	ミズアオイ	種子	1				
45	ミクリ	ミクリ	果実					3

18 平安右京九条二坊（図版 34・35）

経過 この調査は、南区唐橋大宮尻町に所在する京都市立洛陽工業高校格技場新設工事に先立って実施した。調査地点は、右京九条二坊四町に位置し、西大宮大路を隔てた東には平安京の官寺西寺がある。西寺の調査は、昭和 34 年から開始され、現在まで 20 次にわたって行われており、その成果から伽藍全体の復原が試みられている。またこれらの調査の結果、西寺下層に古墳時代の遺跡が発見され、その存在が明らかとなった。当学校敷地

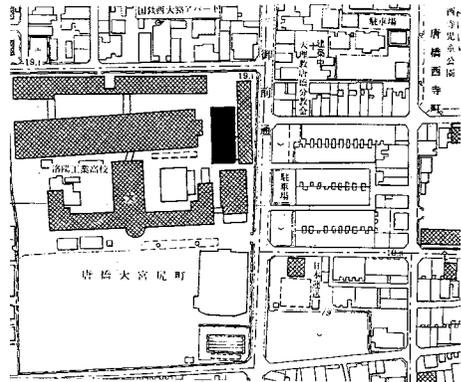


図 1 調査位置図 (1:5000)

内においては、昭和 54 年に第 1 次の調査が行われ、その結果平安時代の掘立柱建物・溝・土壌、古墳時代の竪穴住居址・溝などが検出された。このことから、当該地においてもこれらに関連する遺構・遺物の検出が予想できた。調査区は工事範囲を対象として、東西 16m、南北 37m の長方形に設定した。まず学校建設時の整地層と旧耕作土層を重機により排土し、その後調査を開始した。その結果、平安時代の各遺構、古墳時代の竪穴住居址、弥生時代から古墳時代の流路などを検出した。

遺構 調査区の基本層序は、現地表下から 65cm 前後までが学校建設時の整地層である。次いで厚さ 15cm の旧耕作土層があり、その下は厚さ 5cm の灰黄褐色混礫土（床土）層となる。その下は厚さ 5cm の灰黄褐色泥土（第 2 床土）層があり、この上面では室町時代を中心とした細溝群を検出した。次いで厚さ 5cm の灰色砂泥層があり、この上面で平安時代後期から鎌倉時代に至る細溝群を検出した。この下は厚さ 10cm ほどの黄褐色砂泥層があり、この上面で平安時代の掘立柱建物・土壌・溝などを検出した。更に灰褐色砂泥層が厚さ 5～15cm ほど認められ、その上面で平安時代前期の掘立柱建物・溝、古墳時代の竪穴住居址などを検出した。なおこの層は後述する弥生時代の流路の最上層にあたり、東南部では黄褐色砂泥層下は砂礫層となる。流路はこの砂礫層を肩口としている。次に古墳時代と平安時代の主要な遺構を概略する。

古墳時代の主な遺構として竪穴住居址 6 戸、土壌 1 基、流路などがある。竪穴住居址は、校舎の基礎による攪乱や平安時代以降の遺構群に削平され、著しく損なわれており、かつ

3戸はその大部分が調査区外にあるなど、全容を止めるものはほとんど認められなかった。平面形は、方形を呈すると考えられるが、やや歪なものもある。規模は南北・東西とも5.1m以上で、床面までの深さは3～15cmある。壁溝はわずかに確認できるにすぎない。支柱穴は4箇所と考えられる。カマドはいずれも未検出ではあるが、1号住居址の東南隅と3号住居址の北西隅に焼土が密集して認められた。なお1号住居址では焼土近くに貯蔵穴があり、土師器、須恵器などが出土した。土壌は3号住居址の南側で1基確認したにすぎない。流路は調査区北半で検出した。北東から南西方向を示す。堆積土層は砂泥・砂などの互層となり、最下層からは自然木などと共に、弥生時代前期の土器が少量出土した。

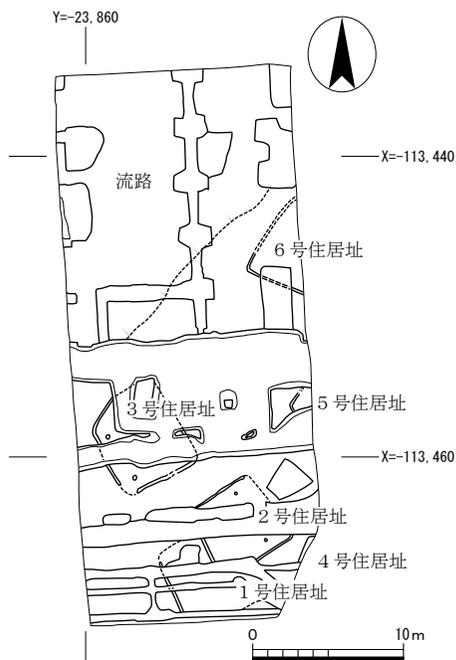


図2 古墳時代遺構平面図(1:500)

平安時代の主要な遺構は、平安時代前期のものと同期末から中期のものに大きく2期に分けることができる。前者のものとして、掘立柱建物2棟と溝群がある。これらは切り合い関係があり、溝群の方が新しい。建物は調査区の北半と南半で各々1棟ずつ検出した。東西3間以上(柱間寸法3.3m, 3.15m)、南北2間(柱間寸法2.4m, 2.1m)の規模である。一方溝群は南北・東西方向のものを多数検出したが、いずれも小規模である。ただし北端の東西溝2条と西端の南北溝は幅50～60cmとやや幅が広く、各々宅地割りの箇所位置する。

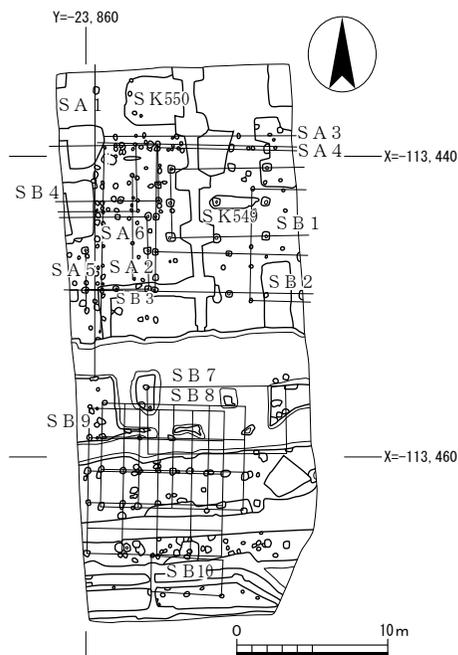


図2 平安時代遺構平面図(1:500)

後者のものとして掘立柱建物8棟、柵列、東西溝、土器溜、土壌などがある。建物、柵列は調査区の北半に集中しかつ重複が認められる。これらのうち北半の東西柵列は四町北二・三門の境界に、西端の南

北柵列及び南半の建物妻側柱列は東一・二行境界に位置し、四行八門制に沿ったところに遺構が配置されている。建物の中ではSB2が最も規模が大きく主屋に相当し、南半の2棟はいずれも4間×3間の総柱の建物と考えられ、構造が異なっている。土器溜は3箇所あり、このうち北端で検出したSK550は東西4.8m、南北3.1mの規模を有し、多量の焼土塊と共に土器・瓦類が出土した。なお土器を埋蔵したと考えられる小穴を、建物群の北西及び南東で3箇所検出した。

遺物 出土した遺物は整理箱に101箱で、土器類・瓦埴類・鉄製品・石製品・銭貨・獣骨などがある。土器類は圧倒的多数を占めるが、その中で瓦埴類が全体の2割位を占めていることは注目される。またこれらの時期は、弥生時代前期から室町時代まで及ぶが、平安時代前期末から中期までのものが多数を占め、古墳時代後期のものがこれに次いでいる。古墳時代の遺物は、1号竪穴住居址床面及び貯蔵穴から比較的良好な状態で出土しており、土師器甕・高杯、須恵器杯身・有蓋高杯・甕などがある。平安時代の遺物としては、SK549・550・630、柱穴などから出土したものが注目でき、量的にも豊富である。このうちSK549出土の土師器盤、SK550出土の黒色土器大鉢など特異な器形もある。これらの遺物の時期は、平安時代中期の初めと考えられる。これ以外の主要な遺物は以下に図示した。土師器皿(1)は、柱穴(建物SB9)柱抜取より出土したものである。口径10.9cm、器高1.2cm。緑釉陶器碗(2)は、溝より出土したもので、四輪花碗である。口径14.0cm、器高6.8cm。緑釉陶器陰刻香炉蓋(3)は、溝より出土し頂部四分の一をとどめる。つまみは欠損するが、花文を2重に配している。西寺跡出土のものとは比べると、花卉は外郭線及び芯の表現方法、外側花卉間の透しなどがやや異なっている。輸入陶磁器には、白磁・

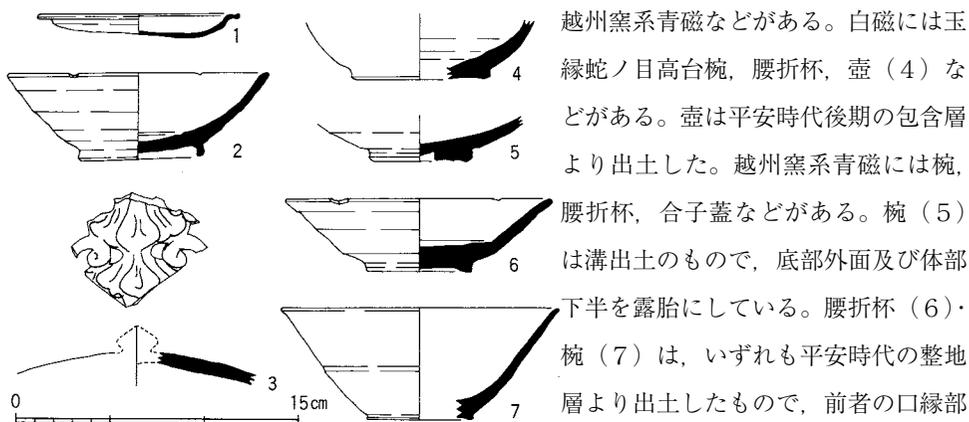


図4 出土土器実測図(1:4)

越州窯系青磁などがある。白磁には玉縁蛇ノ目高台碗、腰折杯、壺(4)などがある。壺は平安時代後期の包含層より出土した。越州窯系青磁には碗、腰折杯、合子蓋などがある。碗(5)は溝出土のもので、底部外面及び体部下半を露胎にしている。腰折杯(6)・碗(7)は、いずれも平安時代の整地層より出土したもので、前者の口縁部には、輪花が4箇所ある。

瓦埴類のうち軒瓦は8点出土し、軒丸瓦6点、軒平瓦は3点ある。軒丸瓦の内、3点は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、径の小さい中房が突出し、弁間と花卉が先端ですべて連なったもので、一般に西寺出土のものとして知られている。平安京古瓦図録(25)と同範。他の1点は単弁蓮華文軒丸瓦で、花卉と界線の間にもう一本圏線を配し、圏線と界線は弁間部で内側に突出しており、裏面に布目痕をとどめている。平安京古瓦図録(92)と同文。残る2点は小片で不明である。軒平瓦は、すべて均整唐草文軒平瓦で、平安京古瓦図録(299・300)と同文で西寺出土のもの共通する。

石製品には、石銚帯2点(巡方1, 丸柄1), 碁石, 玉(数珠?)がある。

小結 調査の結果、弥生時代から室町時代に至る遺構、遺物を検出し、成果が得られた。それを要約するとまず古墳時代の竪穴住居址は、1次調査と合わせると8戸で、ほぼ5世紀から6世紀の時期が考えられる。調査区の北半を北東から南西方向に流れる流路を検出したことから、検出した竪穴住居址は集落の北辺に位置すると思われる、更に東西及び南に遺跡が広がっていると考えられる。平安時代の掘立柱建物・柵などについては、前期から中期にかけて少なくとも6時期にわたり建て替えが行われ、変遷したことが明らかとなった。それらは調査区の北半と南半の2群に分かれている。これらの建物群は、時期的に連続するものではなく、前期後半に溝群が掘り直された後、中期初めに宅地に戻り、中期末に再び廃絶してしまう。このような変遷は、建物中に西寺と共通する軒瓦が出土すること等から、西寺と何らかの関連が想定できるがこれについてはより詳細な検討が必要と思われる。

(堀内明博・梅川光隆)

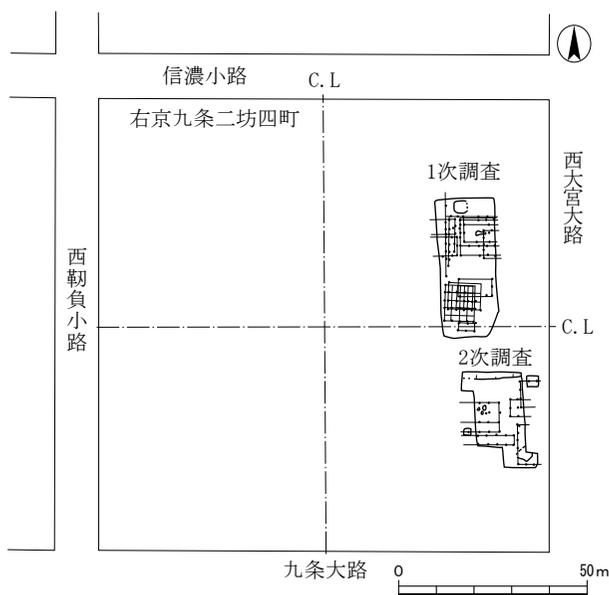


図5 遺構配置図 (1:2000)

Ⅲ 鳥羽離宮跡

19 鳥羽離宮跡第 110 次調査

経過 調査地点は、昭和 46・47 年度に発掘調査が行われた舟着場推定地にあたる。前回検出した遺構が金剛心院の建物地業に類似していることなどから遺構の再検討が望まれていた。このたび倉庫建設が予定され、これに伴って調査を実施した。調査期間・遺構の保存対策などから構築法に関する全面調査を



調査区全景（北から）

断念し、石積み遺構（前回に舟着場と推定）の構築年代を確認することを目的とした。

遺構・遺物 遺構には石積み遺構と舌状遺構がある。石積み遺構は再調査で、舌状遺構は今回新たに確認したものである。石積み遺構の地業単位にあたる南北石列 7 列と東西列を 8 列検出した。本来はもっと細かく複雑に組み合っていると思われる。南北の石列の各幅は最も広いもので約 8m、狭いもので約 3.3m ある。地業の深さは約 0.5～1.5m ある。地業の埋土は、砂あるいは砂礫を河原石と互層に積み上げる。石組みの裏込には部分的に黄褐色砂泥の土が詰められていた。舌状遺構は、調査区の北東から南西に延びる幅約 11m、長さ 20m 以上、厚さ約 0.8m からなる。この遺構を石積み遺構と区別したのは、石積みの地業単位と方向が異なることや、石積み遺構より古い遺物が出土したことによる。

遺物は、土師器・須恵器・瓦器・瓦などがある。特に舌状遺構より出土した土師器皿は、口縁部がわずかに外反し、外面に二段ナデを行う 12 世紀前半の様相を残す。また石積み遺構の下層の腐植土層より、内外面に丁寧なミガキのある 12 世紀前半の瓦器碗が出土した。

小結 調査成果は、石積み遺構の構築年代の手懸かりとなる土師器が出土し、大規模な土木工事を伴った石積み遺構が舟着場でなく、12 世紀中頃に造営された建物地業を想定できたことである。この規模に類似する建物は金剛心院九躰阿弥陀堂（東西約 20m、南北約 50m の掘込み地業）に求めることができる。しかし、この石積み遺構は東西約 55m、南北約 100m と規模が大きく、更に東へ延びる地業（第 86 次調査）も確認されている。恐らくこの遺構は建物部だけではなく、建物周囲の園池にまで及ぶ地業であろう。

（中村 敦・鈴木久男）

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 60 年度 1986 年報告

20 鳥羽離宮跡第 111 次調査

経過 調査地点は、城南宮の東方約 120m、第 13 次調査地の北隣に位置する。この付近は、これまでにほとんど調査されておらず、鳥羽離宮関係の遺構の有無について知られていない地域であった。試掘調査の結果、調査対象地の北西隅で池跡と汀に据え付けられた景石を検出した。このため京都市埋蔵文化財調査センターと当地に建築工事を行う受益者とが発掘調査実施について協議した。しかし、この間に試掘調査に参加した土木業者は、検出した庭石を重機で取り上げて破壊した。再度、原因者と埋蔵文化財調査センターとが協議を行い、短期間ではあるが発掘調査が可能となった。発掘調査は、建物建設予定地を業者が GL-200cm まで掘り下げた後に開始した。

発掘調査は、試掘調査で検出した景石周辺部を中心に実施した。その結果、新たに 2 個の景石を検出することができた。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、盛土下に現代の水田耕作土層・床土層・淡褐灰色細砂層・黄褐色砂泥層・黄灰色砂泥層・黄灰色泥土層が堆積していた。黄灰色泥土層以下は池内堆積層となるため、池部と陸部とで若干の違いが認められた。

検出した遺構は、池の汀に景石を東西に並べた庭園遺構の一部である。景石に利用されていた石は、いずれも花崗岩で角の丸いものである。池の肩口は断割りの結果、旧低湿地もしくは離宮造営時以前の池を埋め立て陸部としたことが明らかになった。しかしながら、調査範囲が狭いために地業の規模や工法などについては不明な点が多い。

遺物は、景石周辺や池内堆積土中より出土した。これらの遺物は土師器、瓦器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦などに分けられる。この他、磨滅した古墳時代の土師器、須恵器、平安時代中頃の灰釉陶器なども数点出土した。

小結 過去、この付近で実施した発掘調査や試掘調査などでは、鳥羽離宮関係の遺構は検出されていない。このため、今回の調査で検出した庭園遺構の広がりや金剛心院関係の園池との関係についても不明な点が多い。例えば、この庭園遺構は現在金剛心院の東限と考えている溝から外れてしまっており、どの一角に含まれるかについては今後の課題である。位置的には馬場殿の東部にあたるが、馬場殿の規模や様子がほとんど不明であるため即断しがたい。

(鈴木久男)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 60 年度 1986 年報告

21 鳥羽離宮跡第 112 次調査

経過 調査地点は鳥羽離宮東殿に推定されている地区にあたり、近衛天皇陵の西側、鳥羽天皇陵の南方に位置する。東殿ではこれまで数次の発掘調査が実施され、建物や園池などの遺構が見つかった。調査地点に隣接した第 11 次・44 次・58 次調査では一帯に展開する庭園跡が検出されており、今調査ではこれらの関連の遺構が予想できた。調査対象地はこれまで水田として利用されていたので、重機により耕作土層・床土層を除去した。なお調査区は、残土置場及び拡張などによって、結果的にはやや歪な形状となった。

遺構 検出した遺構には池・溝・突堤状遺構・集石遺構がある。池の汀線は調査区の北西から南東方向へ展開し、西へ緩やかに傾斜している。この汀線は周辺の調査によって明らかとなっている東殿の池の北東岸にあたる。池には調査区の中央付近で張り出しが認められ、出島が設けられていることが判明した。汀線は緩やかな曲線を描き、拳大の石を幅 1 m 程に敷き詰め洲浜を形成している。しかし出島を境にして東側にはみられない。池の水位は海拔 13.40m 前後と思われる。汀線から約 3 m 離れた陸部では、0.5 × 2 m の大きさの庭石が 1 個、汀線に沿うように据えられていた。石材はチャート系で風化が激しく白っぽくなっている。突堤状遺構は出島と同様に池内に北から南へ張り出して造られ、調査区の南東隅で東へ直角に折れ曲がる。幅は 6 m、高さ 0.2 ～ 0.4m ある。この遺構の工法は外側に杭を打ち、板や竹を絡ませて土止めし区画を設定、その中に小さい単位の区切りを設け、砂や粘土を盛り上げて、土塁を形成するものである。

遺物 出土した遺物には瓦類・土器類・木製品などがある。軒瓦には山城産・大和産・尾張産がみられ、各地より運び込まれてきたことを物語る。土器類には土師器・瓦器・輸入陶磁器などがあり、大部分が平安時代後期に属する。木製品は池内などから比較的良好な状態で出土した。漆器蓋・下駄・杓子・ミニチュア五輪塔などがある。

小結 今調査では東殿の園池の北東部を調査したことで、池の様相が一層明らかとなった。そして出島の存在が明白となった。調査区南東部で検出した突堤状遺構は、近衛天皇陵を囲うように廻り、御陵と密接な関連性が考えられる。近衛天皇陵は文献にみられる美福門院御塔に御骨を納め御陵としたものであり、恐らくこの時に池内に突堤状遺構を設け、御陵の区画としたのではなかろうか。また今調査で出土した木製五輪塔は元興寺に類例を求めることができ、重要な信仰資料である。 (前田義明・鈴木久男・吉崎 伸)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 60 年度 1986 年報告

22 鳥羽離宮跡第 113 次調査

経過 調査地点は鳥羽離宮田中殿金剛心院の南、馬場殿の東側にある伏見区竹田小屋ノ内町 3 番地の水田である。砂利採集工事に伴い、遺跡の有無を確認するための試掘調査を実施したところ、鳥羽離宮期に関連する東西方向の段状遺構と落込、溝などを確認したことから本調査を実施することになった。調査期間は昭和 60 年 10 月 30 日から同年 11 月 13 日までの約 1 箇月半で、調査面積は約 800㎡である。

遺構 今回の調査で検出した遺構は、鳥羽離宮期（平安時代後期から鎌倉時代）のものでは池状遺構、溝 2 条、土壇 2 基がある。

調査区内の基本層序は、北端部とその南側とでは様相が異なっており、鳥羽離宮期の遺構面を形成している砂礫層の標高が北端では 13.4m、南端で 12.7m とその落差が 70cm とかなりの傾斜面になっている。また、この砂礫層の上面を覆う整地層が北端部では締まった層であるのに対し、南部では遺構廃絶後に耕作土・床土層などの厚い層がみられ対象的である。調査区の大部分に共通する基本層序は、まず現耕作土層の下層に泥土、泥砂層の堆積が数層あり、この下層では混礫土及び混礫泥土層となる。これより以下は、流路の堆積層と考えられる明赤褐色砂礫と砂の互層となり、平安時代中期以前の遺物を含む。鳥羽離宮期の遺構はこの上面で検出した。

遺物 今回の調査で出土した遺物は、整理箱で 14 箱と調査面積に比べて出土量は少ない。その内鳥羽離宮期の遺物は、瓦類、土器類、石製品、鉄製品、木製品、自然遺物などが遺構群から出土している。量的には瓦類が全体の半数を占める。

一方、平安時代中期以前の遺物は流路より出土しているが、いずれも小破片で少ない。その中には、土師器杯、須恵器碗・杯・瓶、黒色土器、緑釉陶器、古墳時代の須恵器、弥生土器などが含まれる。

小結 調査の結果、鳥羽離宮の主要殿舎を表す顕著な遺構や庭園施設などは発見できなかったが、池状遺構、溝、土壇などから鳥羽離宮期の遺物が出土しており、この周辺にも庭園遺構が存在した可能性が強いといえよう。また、調査区西部で検出した南北溝はこれまでに得られた鳥羽離宮期の遺構群の方位とは大きく異なっており、今後の課題といえる。

(鈴木久男・堀内明博・北田栄造)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 60 年度 1986 年報告

23 鳥羽離宮跡第 114 次調査

経過 調査地点は、名神高速道路京都南インターチェンジ南出口の南に位置する。この調査は、区画整理道路の拡幅に伴って実施したものである。調査地点の西側は国道 1 号線が、南と東側には区画整理道路が通っている。

調査地点周辺部では過去に、第 38・45・78・82 次調査を実施している。これらの調査では鳥羽離宮期に造営された園池跡ではないかと考えられる土層や遺構を検出している。今回の調査区内には、盛土が厚く堆積していたため重機を導入してこれを除去した。

遺構・遺物 調査の結果、池内の堆積層を確認した。調査区の基本層位は以下のようである。盛土層下には、道路建設前の耕作土及び床土状の黄橙色シルト層が認められる。その下層には褐色砂泥層・灰色粘土層が堆積している。灰色粘土層下は、園池内の堆積土層と考えられる。褐色粘土層・灰色泥土層・暗灰黄色腐植土層・灰オリーブ色腐植土層が認められた。そして、最下層にはオリーブ黒色砂泥層が堆積していた。園池の地盤は灰色砂礫層で、北へ向かって徐々に高くなる。底部の海拔は 11m50cm 前後である。そして、各層は南に傾斜するように堆積している。

遺物は、灰オリーブ色腐植土層などから土師器・中国陶磁器・瓦などが数点出土しただけである。

小結 城南宮の北辺部は、金剛心院跡から北殿跡の園池へと続く池跡であることがほぼ明らかになった。すなわち、金剛心院の園池は、第 107 次調査で検出した園池につながり、第 100 次・101 次調査地点の南を通り第 38・78・114 次調査地点と続き、北殿跡の第 81・95・108・115・118 次調査地点へと広がってゆくものと考えられる。ただし幅や形状については不明な点が多く、今後の調査に期待される。

(鈴木久男)



調査区全景（南から）

24 鳥羽離宮跡第 115 次調査

経過 調査地点は、秋ノ山北方の水田地帯内に位置する。今回の調査は、この水田地の一角を埋め立てて倉庫にする建築計画が提示されたため実施した。1983・84年に調査地点北東で実施した第81・95次調査では、池の水際に景石を据え付けた庭園遺構の一部を検出している。また、第95次調査の西隣で実施した第105次調査でも池跡を確認している。

遺構・遺物 調査の結果検出した遺構は、景石を水際及び陸部に据え付けた庭園遺構の一部である。下層遺構については、一部掘り下げを行ったが自然堆積層が認められただけで遺構は検出できなかった。

庭園遺構には、東西方向に細長く延びる陸部とその両側の池がある。陸部は西に高く東へ緩やかに傾斜する。幅も西側では14m程ある。景石は、調査区北西の水際に4個、水際からやや上に上がった陸部に2個据え付けられていた。石質の水際の4個は花崗岩で、他のものはチャートである。池の推定水位は、第95次調査や今回検出した水際の景石の高さなどから12m40cm前後と考えられる。陸部は、旧地形を削り出して形成したものでなく、平安時代中頃や古墳時代の遺物を含む土を用いて池内に盛り上げたものである。

小結 秋ノ山の北側に造営されたと考えられる北殿跡の調査は、昭和35年度に行った第1次調査以降から昭和56年度までほとんど実施されていないが、北殿推定地域における庭園遺構の検出例は今回で3例になる。まず第82次調査では、北から南に下がる池の汀と景石を発見した。第95次調査では池の中へ北から南に突き出た陸を検出し、汀には人頭大の河原石を汀に一直列並べ、チャート質の景石を据え付けた痕跡を確認している。

今回の調査では池の一部を粗い版築状の土盛りを行った陸を明らかにした。この陸が池に浮かぶ島状形態を示すか、張り出す半島状のものなのかは今後の課題である。また、陸部の北側で検出した花崗岩の景石は南からはみることができず、西あるいは北から望むことを意識して据え付けたと考えられる。この庭園遺構もまだ点の段階であり、規模や形態については明らかでない。しかし、庭園の造営にはかなりしっかりとした工法が見受けられることや景石の数も多く、これらの庭園遺構の周辺部には、かなり大規模な建物が造営された可能性が極めて高い。

(鈴木久男・中村 敦)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和60年度 1986年報告

25 鳥羽離宮跡第 116 次調査

経過 調査地点は、名神高速道路南インターチェンジの西部、秋ノ山の西北、鴨川の河岸堤防を西に接した水田で、調査は区画整理事業に伴うものである。調査地点の東方では、第 81 次調査で池の北側汀線と景石、第 95 次調査で池に張り出した舌状の造り付けた陸部、第 115 次調査で東西方向に細長い汀線と景石など、いずれも大規模な庭園に関連した遺構を検出している。今調査でもこれらに関連する遺構・遺物の検出と鳥羽作り道に関連した遺構の検出も予想できた。調査区は、土置きなどを考慮して、東西 12m、南北 17m、幅 8.5m の矩形を呈するものを設定し、調査を実施した。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、現地表より耕作土層（厚さ 30cm）、褐色砂泥層（厚さ 15cm）、にぶい赤褐色砂泥層（厚さ 15cm）、褐色砂泥層（厚さ 25cm）、黄褐色砂泥層（厚さ 15cm）、にぶい黄褐色砂泥層（厚さ 15cm）がある。これらは江戸時代以降の遺物包含層である。次いでオリーブ褐色泥土層（厚さ 15cm）、褐色砂泥層（厚さ 20cm）、オリーブ褐色泥砂層（厚さ 10cm）、黄褐色微砂層（厚さ 20cm）となるが、いずれも小破片の土器しか含まれないため時期は不明である。次いでごく薄いオリーブ灰色砂層があり、この上面では、平安時代後期から鎌倉時代にかけての落込、溝状遺構、小さな窪みなどが認められた。これより以下は流路の堆積となる。遺物はごく少量で顕著なものはない。

小結 今調査においては、特記すべきものは少なかったが、その中で中央部に検出した南北方向の東に下がる落込みは、周辺の調査例との関連が注目される。池の汀線推定水位が第 95・第 115 次の調査から標高 12.4m 前後と考えられているが、落込の下端が標高 12.8m と高いことから、池の一部とは考え難い。この遺構については、なお今後検討を要する。
(堀内明博)

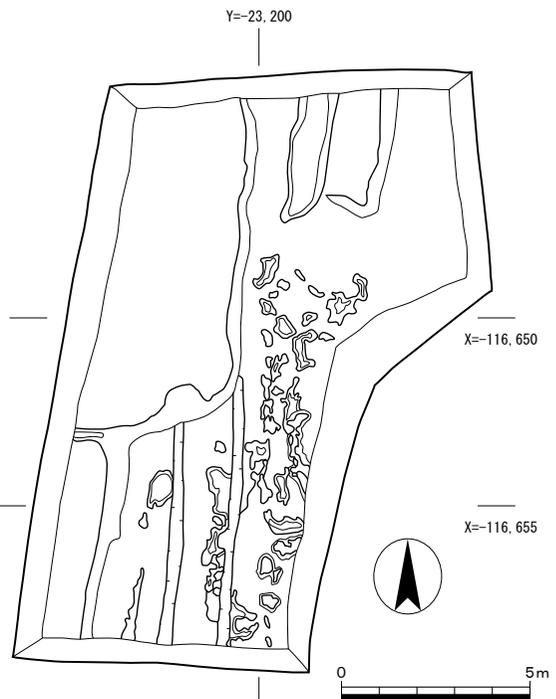


図 1 遺構平面図 (1:200)

26 鳥羽離宮跡第 117 次調査

経過 調査地点は、第 112 次調査の西側に隣接する水田である。第 112 次調査では、鳥羽離宮東殿の池の東岸や島の一部と考えられる陸部を検出している。今調査はこの陸部にあたる場所である。このため島の形状をより明確にする上で、調査区を広くする必要性から調査区を 2 分割し、前後 2 回に分けて調査を実施した。

遺構・遺物 今調査では池に張り出した出島の一部、洲浜や景石を検出した。現在までのところ、島に関する調査回数が少ないためその全貌を知るに至っていないが、今回検出したのは島の北半部である。島の北側から西へ延びる洲浜は、第 112 次調査で検出した園池北岸の洲浜とつながる。しかしながら島と北岸とを繋ぐ陸部は高さが低いため、池の水位の高低状況によっては出島であったり、池に浮かぶ島になったりする。汀の傾斜角は 10～20 度前後あり緩やかである。汀には拳大の玉石を敷き洲浜形成される。庭石は計 6 石検出したが、その内の 2 石は打ち砕かれていた。この他玉石を根固めとした庭石の据付穴を 1 箇所検出した。庭石は 1 石を除き汀から陸部へやや上がった島の西北部に据え付けられていた。石材はチャートである。洲浜の斜面で検出した庭石は、掘形を持たず玉石で庭石の底部を安定させただけである。石の上面はほぼ水平であった。

遺物は主に洲浜の上面や池内堆積土層から出土した。いずれも小片であるが土器・瓦・木製品などがある。土器は土師器や瓦器などの他に、山茶碗や白磁などが出土しているが量的には少ない。瓦は播磨や尾張の国で生産されたものがほとんどで、山城で生産されたものは少ない。軒瓦は 2 点出土しただけである。木製品には第 112 次調査で出土した木製五輪塔と同様のものがわずかにある。

小結 調査の結果、東殿に造営された園池には出島（中島）が築かれていたことが明らかとなった。この島は園池の北東から中央にかけて位置している。島の規模は、西半部が未調査のため明確でないが、一応南北 40m、東西 42m 以上を測るものである。島は園池の造営当初から計画されたらしく、基部の地山を掘り残し、その上に盛土を加えて構築したことが、断割りの結果明らかとなった。第 10 次調査以降、今回までの庭園の調査成果をみると、園池の汀に洲浜が認められる箇所とそうでないところがある。第 112 次調査同様、今調査の島の西側には洲浜が認められたが、島の東側には一切なかった。このような状況の変化は、塔が御陵へと変わった時点で景観を変えたのであろうか。

(前田義明・鈴木久男)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』 昭和 60 年度 1986 年報告

27 鳥羽離宮跡第 118 次調査 (図版 36)

経過 調査地点は、名神高速道路京都南インターチェンジの南西部に隣接し、南には秋ノ山をすぐ近くに望むことができる。この周辺部では、第 81・82・95・108・115・116 次調査などを継続的に実施してきた。その結果、北殿に造営されたと考えられる庭園遺構を点々と明らかにしてきた。例えば、第 81・95・115 次調査などでは池の汀に据え付けられた景石や島状の遺構を検出した。今回の調査でも、庭園遺構の一部を検出できることはほぼ確実であった。

調査地点は、数年前に道路建設用の盛土が行われており、周辺部の水田より一段高くなっている。このため盛土・旧耕作土・床土層などは重機を導入してこれを除去した。重機掘削後、調査区内の壁が軟弱で崩壊するおそれが生じたため、土止めを南壁と北壁に行い安全につとめた。その後、園池内の埋積土を徐々に掘り下げた。

遺構 調査の結果検出した遺構は、園池跡と基壇跡の一部である。

調査区の基本層序は以下のようである。調査地内全体は道路建設用の盛土が 100cm にわたってなされている。その下には、耕土・床土層が厚さ 30cm ほど認められた。更に、灰オリーブ色砂泥層が 30～40cm ほど堆積していた。これより下層については、陸部である調査区西側と園池であった東側とは全く異なった堆積を示していた。園池部分では、灰色砂泥層とオリーブ灰色泥土層とが 80cm 以上にわたって堆積していた。この堆積状態は、東に行くほど厚くなってゆく。一方陸部では、灰オリーブ色砂泥層の下は、黄褐色泥砂層の基壇となる。

庭園遺構 調査区の西半部で北東から南西方向に延びる園池西岸部の一角を検出した。汀は緩やかな傾斜面で、拳大の礫を敷き詰めて洲浜を造り出している。水際は、洲浜と池底との高低差が 40～50cm 前後であることからさほど深くない。景石は洲浜上に 1 個、池の中に 4 個検出した。池の中で検出したものは、いずれもチャートであった。比較的小型のもので一辺約 50～60cm、重量は 100～300kg である。据付は、池底に直接置き根石を加えて安定させたものである。基壇南東隅の洲浜上で検出した景石は、長軸を洲浜と同じ方向にして据え付けられていた。石材は砂岩で長さ 220cm、幅 110cm、重さ 2700kg を測る大きなものである。

基壇 調査区北西部で、南北 7m、東西 11m 分を確認した。検出したのは、園池の洲浜からやや西へ行った陸部で基壇の南東隅の一部である。基壇は、造営時の整地層を掘り

込んだ後に版築して盛り上げている。この基壇は掘り込み地業によって構築したものである。基壇は最も高いところで60cmほど残存していた。基壇化粧については明らかでないが、基壇の周囲には凝灰岩の小片が入った溝が廻っており凝灰岩の切り石によって化粧されていた可能性がある。基壇上面には建物を示すような痕跡は認められなかった。

遺物 遺物は主に基壇の版築土や園池の埋土から、古墳時代から鎌倉・室町時代までのものが出土している。しかしながら、出土量は少なく整理箱にして16箱ほどしかない。出土した遺物の中で、注目されるものとして鍍金を施した金具がある。これらはすべて園池の埋土から出土したものである。金具は、須弥壇の格狭間を飾ったとも考えられる孔雀形の飾金具や框の一部に打ちつけられていたと思われるもの、茄子型をした鈴などがある。いずれも巧緻な細工が施されており優品である。この他に、古墳時代後期の土師器の甕・高杯、須恵器の甕・杯身・杯蓋、平安時代前期の緑釉や灰釉陶器なども若干ある。また、播磨や山城産の軒瓦も数点出土している。

小結 今回の調査によって明らかになったことは、先述した通りであるが、今後の課題点を整理しまとめにしたい。

1. 今回の調査によって、一応園池西岸が明らかになったことと、基壇や金具などの出土状況から、今回の調査区北方に勝光明院が発見される可能性が出てきた。
2. 秋ノ山北方で点々と検出してきた園池は金剛心院や東殿のものより規模が大きい。
3. 第81次調査以降、この付近で検出した園池は、現在の城南宮（馬場殿）の北側を通り金剛心院の園池へと続くが、出入が複雑であるため今後きめ細かい調査が望まれる。

(鈴木久男・前田義明)

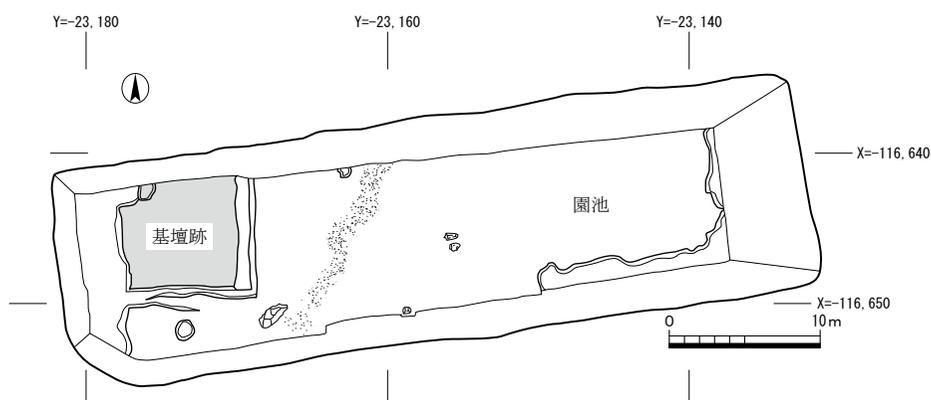


図1 遺構平面図 (1:500)

28 鳥羽離宮跡第119次調査

経過 今回の調査は倉庫建設に先だって実施した。調査地点は、鳥羽離宮田中殿に該当する。道路を隔てて東接する第104次調査では、建物基壇や田中殿の北限と考えられる東西方向の溝を検出している。この溝が当調査対象地の南部に延びることが予想できたため、本調査を実施した。調査は東西の溝に重点を置き、調査区は対象地の南寄りに設定した。更に北側の状態を確認するために、幅1.5mのトレンチを東寄りに北へ15m設定した。

遺物・遺構 遺構は縄文時代と平安時代後期から鎌倉時代（鳥羽離宮期）のものを検出した。縄文時代の遺構は調査区南側で、東西90cm、南北30cm、深さ60cmの袋状をした土壇を1基検出した。埋土からは縄文土器がわずかに出土している。

鳥羽離宮期の遺構は田中殿北限の溝と考えられる。深さ1.4mあり、東西溝である。幅は南岸が調査区外になるため不明であるが5m程度と考えられる。溝の北岸は、緩い段が造り出され、素掘りのままであるが、溝の底部南寄りに木材、杭等が出土していることから南岸が護岸を施していた可能性が高い。また底部には溝と直交する方向で水量調節用と考えられる高まりを残している。埋土は腐植土層が厚く堆積しており、ここから多量の土器類の他、瓦類、木製品、獣骨等も出土している。

小結 今夏の調査成果は鳥羽離宮田中殿の北限に想定できる溝を検出したことである。第104次調査で建物基壇の保存を優先し、溝は部分的な調査に止めたため、その性格、時期を知る上で十分な資料を得ることができなかった。しかし、今回は溝に重点をおいて調査を進めることができた。

溝は底部に人工的な高まりを設けていること、腐植土層が厚く堆積していることなどから、水をたたえた堀の機能を重視して構築されたと考えられる。溝の構築時期は不明であるが、平安時代の終わりには埋没を始め、第104次で検出した建物基壇が造営される鎌倉時代には整地されている。その後、この溝に変わる田中殿北限の施設は検出できず、新たな検討課題である。

(吉崎 伸・中村 敦)

『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和60年度
1986年報告

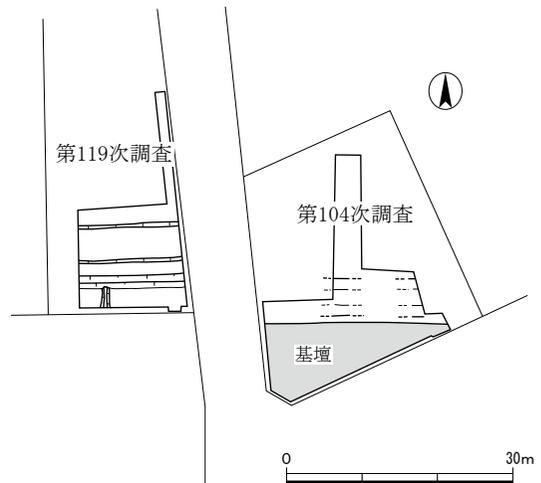


図1 遺構配置図 (1:1000)

IV 中臣遺跡

29 中臣遺跡第 61 次調査

経過 調査地点は、栗栖野集落が立地する低位段丘面上にある。これまでの調査成果からは比較的遺構密度の希薄な地域であった。調査対象地の西に隣接する駐車場（第 38 次調査）では、東西 11.5 m、南北 11.3 m の方形周溝墓 1 基が確認されている。

発掘調査は 4 月 6 日から 18 日まで実施、調査面積は 113m² である。

遺構・遺物 層序は極めて単純に積土・耕作土層が 30～50cm、暗灰色泥土層が 10～20cm の厚さで堆積し、以下無遺物層の黄褐色泥土層となる。遺構は方形周溝墓 1 基を検出した。南側の溝・北側の溝西半分は調査区外である。

周溝墓の基模は、溝の心々で東西 11.5m、溝の幅 1.8～3m、検出面からの深さは東・西溝は浅く 15～30cm あり、北側の溝は東北コーナー部から深く掘られ約 50cm ある。溝の内壁側は直線的で壁面も鋭く立ち上がるが、外側の壁は浅く斜めに掘られ、外側に膨らむ。主体部・封土は後世の削平のため確認できなかった。遺物は西側周溝中央部、北側周溝東部から、弥生時代後期の壺・甕が出土している。これらの土器は溝底より約 10cm 浮き、破碎された状態で出土している。

小結 弥生時代後期の方形周溝墓はこれまでに、第 15・27・38 次調査で確認されている。本年度調査区の方形周溝墓は第 27・38 次調査区と合わせて、中臣遺跡における弥生時代後期の墓域として位置付けられる。

(菅田 薫)

『中臣遺跡発掘調査概報』 昭和 60 年度
1986 年報告

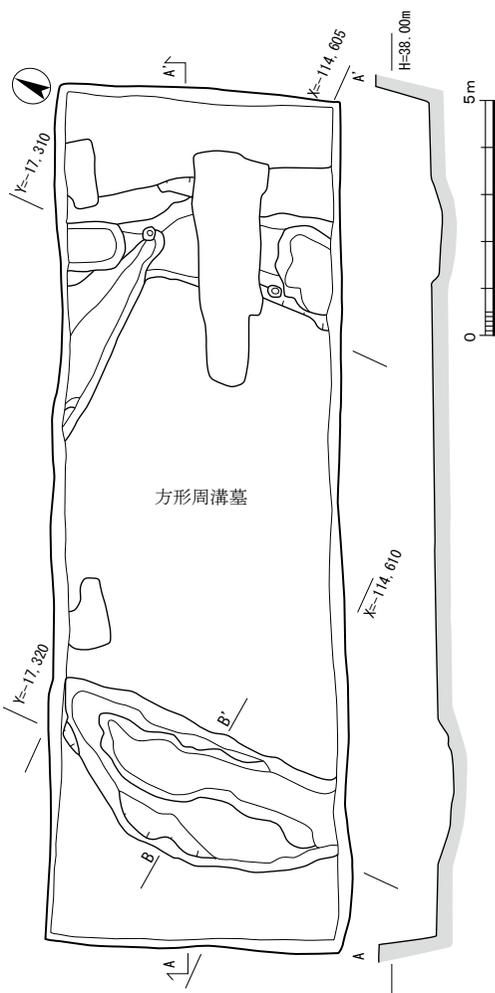


図1 遺構実測図 (1:160)

30 中臣遺跡第 63 次調査

経過 本調査は宅地造成に伴う事前調査である。周辺部では、南側の道路部分の調査（3次調査）で竪穴住居址や掘立柱建物が、また東側の道路部分の調査（5次調査）では掘立柱建物や溝等が検出されている。本調査区では、このうち5次調査で検出された建物の西妻部分が検出できる予定であった。

遺構・遺物 基本的な層序は、上から耕作土層と盛土層（約70cm）、旧耕作土層、床土層（約20cm）となっている。旧耕作土層下が遺構面となり、調査区北半分が黄褐色泥土層、南半分が灰色砂礫層であった。

調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居址2戸、掘立柱建物2棟と、他に溝、土壇、柱穴等を検出した。

1号住居址は調査区南端で検出した。1辺5.5mの方形とみられる。壁溝、柱穴、カマド等の施設を検出したが、いずれも造り替えの形跡があり、当初のものがそのまま北東方向に建て替えられた可能性が高い。2号住居址は西端で検出したが残りは極めて悪く、壁溝、柱穴、カマドの底部を検出するに止まった。

S B 1は5次調査で検出されたもので、その西妻部分を検出した。この結果、梁間2間で桁行5間以上の建物と判明した。柱穴は一辺60cm前後の方形を呈し、深さは50cm程ある。柱間は桁が1.81m、梁間の北側が2.39m、南側が1.81ある。S B 2は2号住居址上面で検出した。桁行2間、梁間1間で、柱間は桁が1.88m、梁間が1.65ある。

この他、1号住居址の北辺から5次調査区に延びる溝S D 4を検出している。

遺物は、上記遺構と土壇等から出土しているが、まとまったものはない。古墳時代後期のものは、土師器（杯・椀・鉢・甕・甑）、須恵器（杯・蓋・高杯・甕・器台・甗）があり、他に1号住居址の覆土中より馬具の鉸具が1点出土している。

小結 今調査では周辺調査区と同様、住居址や建物跡を検出し、特にS B 1の西妻部分を確認する等の成果を取めた。これらは古墳時代後期の中臣遺跡を知る上で重要な資料となるものである。（丸川義広・木下保明）

『中臣遺跡発掘調査概報』 昭和60年度 1986年報告

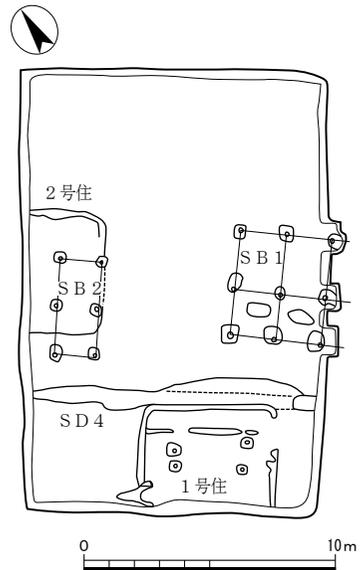


図1 遺構配置図 (1:300)

31 中臣遺跡第 64 次調査

経過 本調査は宅地造成に伴う事前調査として実施したものである。調査地点は栗栖野の集落が立地する低位段丘面上で、中臣十三塚古墳の一つとされる伝宮道烈子墓に東接する畑である。調査地点の東側で実施した 2 次調査では、方形周溝墓が 2 基検出されているので、本調査区でもこれらと関連する遺構の存在が予想できた。

遺構・遺物 基本層序は、上から約 20cm が現代の畑の耕作土層で、この直下は地山の褐色泥土層となっている。遺構はすべて褐色泥土層の上面で検出した。

調査で検出した主要遺構は、黒褐色泥土を埋土とする土壙 3 基であるが、この他には、最近までの耕作によって生じた溝・土壙・ピット等も検出している。

調査区中央西寄りで検出した土壙 S K 1 は、長さ 5.4 m、幅は中央部で 2 m あり、平面形は弧状を呈する。底は緩やかな U 字形で、深さ 0.9 m あり、長軸方向には階段状のテラスを持つ。埋土は黒褐色泥土層で、肩部から流れ込んだ形跡がみられた。

土壙 S K 2 は S K 1 の南側で壁にかかり検出した。長さ 1.55 m 以上、幅は中央部で 1 m、深さ 0.6 m の規模を持つ。北西側の肩部斜面には、S K 1 と同様のテラス状の段を持つ。埋土は黒褐色泥土層が主に堆積するが、肩部では茶褐色泥土の堆積する箇所も認められた。埋土中より土器の小片が 3 片出土した。

土壙 S K 3 は S K 1 の南に接して検出した。長さ 0.5 m、幅 0.35 m、深さ 0.15 m と小規模で、底は平坦となっていた。

出土遺物は整理袋に 4 袋分に止まった。いずれも弥生土器・土師器の破片である。

小結 周辺調査の成果から、ここでも同様の遺構の存在が予想できたが、結果は以上の通りであった。しかし、古墳の基底部を検出した 59 次調査の例もあるので、引き続き調査を行う必要がある。

(丸川義広・木下保明)

『中臣遺跡発掘調査概報』

昭和 60 年度 1986 年報告



調査区全景（北から）

32 中臣遺跡第 65 次調査

経過 本調査も宅地造成に伴う事前調査である。調査地は栗栖野集落の立地する低位段丘の南崖部に接した水田地で、北側で実施した7次調査では、弥生・古墳時代の竪穴住居址が多数検出されている。

遺構・遺物 基本層序は、調査区の北半分では現耕作土層（厚さ約 20cm）の直下で地山の礫を含む褐色土層がみられたが、南半分では耕作土層下に旧耕作土・床土層があり、地山の泥土層は現地表下約 50cm 付近に堆積していた。

検出した主要遺構は、竪穴状遺構 S K 1 と、柱穴・土塙・溝等である。

竪穴状遺構 S K 1 は、調査区の南端で壁にかかり検出した。平面形は径 7～8 m の不整円形を呈する。埋土は黒褐色泥土で、深さは 30～50cm あり、底は南側が低い。この S K 1 は、当初、平面の輪郭が明瞭なこと、壁が垂直で柱穴状の凹みも認められること、底部で柱穴状の窪みがみられたことなどから住居址と考えたが、明確な床面がなく、壁溝や炉の施設を伴わないことから、住居址と断定するには至らなかった。

柱穴は、主に調査区の東南側で検出した。S K 1 を切り込む 1 個とその東側の 2 個は、径約 50cm、深さ 20cm あり、中央には径約 15cm の柱痕跡が認められた。

遺物は整理箱で 1 箱に止まった。弥生時代後期の土器の他、7・8 世紀の土師器・須恵器も出土しているが量は少ない。S K 1 からは、弥生時代後期に属する壺・甕・高杯が出土している。

小結 今回の調査では、南半分のみで遺構が分布し、北半分ではまったく認められなかった。これは元の段丘崖を削り込んで今の水田区画が造成されたため、段丘上の遺構が既に削平されたためと考えられる。

（丸川義広・木下保明）

『中臣遺跡発掘調査概報』

昭和 60 年度 1986 年報告



1 調査区全景（北西から）

V 長岡京跡

33 長岡京左京一条三坊・二条三坊 (図版37・38)

経過 西羽東師川改修工事に伴う発掘調査は、今回で第6次調査になる。A区・B区の2箇所調査区を設定し、発掘調査を実施した。A区では幅8m・長さ210m、B区では幅3～9m・長さ100mの調査トレンチを設定した。長岡京復原図によると、A区は左京南一条東三坊十三・十四町及び左京二条東三坊十六町、B区は左京二条東三坊九・十町に該当しており、南一条第二小路・南一条大路・二条第一小路に関連する遺構の検出が予想される地点である。

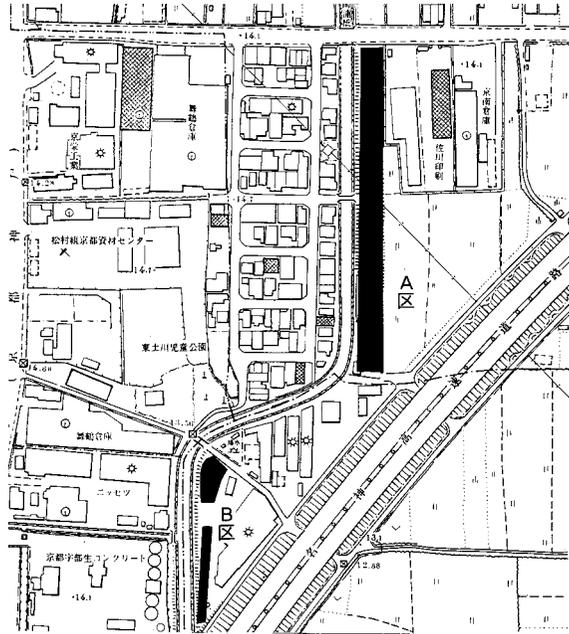


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 調査区の基本層序は、A区では盛土の下は耕作土層・床土層・褐灰色砂泥層・黄灰色砂泥層(無遺物層)となっており、遺構はすべて黄灰色砂泥層の上面で検出した。B区では現代盛土の下は耕作土層・床土層・褐灰色砂泥層・黄灰色砂泥層となっている。

弥生時代から古墳時代 A区で沼状遺構・溝を検出した。沼状遺構は北端では比較的大きな段差を認めるものの、南に向かうにつれて緩やかな傾斜となる。確認した幅は約25.5m、深さは約1mある。数本の樹木が倒れており、検出状況からみると当地で生育していたようである。溝SD 302は沼の南方で検出した。幅0.8m、深さ0.4mあり、埋土は褐灰色砂泥層である。溝は鉤形に周るようであるが、その性格については断定できない。

長岡京期 東西溝(6)、柵(1)、建物(1)がある。いずれもA区で検出しており、B区では長岡京関連の遺構は検出できなかった。

南一条第二小路関係の遺構はA区北端部で検出した。SD 49(幅1.0m・深さ0.2m)は北側溝、SD 14(幅0.95m・深さ0.15m)は南側溝である。SD 15(幅0.75m・深さ0.25m)

は左京南一条東三坊十三町の北側の町内溝であると考えられる。溝の形状はいずれも浅い皿状である。S D 49とS D 14の心々距離は9.3 mある。S F 19は道路部と考えられるが、路面自体の施設は検出できなかった。

南一条大路関係の遺構は、A区の中央部で検出した。S D 104（幅1.7 m・深さ0.6 m）は、北側溝、S D 207（幅1.5 m・深さ0.6 m）は南側溝であると考えられる。溝の形状はいずれも逆台形を呈している。両者の心々距離は24.8 mある。S F 211は南一条大路の道路部であるが、削平を受けたためか路面の痕跡は認められなかった。

また南一条大路両側溝の北側には、S D 105（幅1.5 m・深さ0.45 m）を検出しており、左京南一条東三坊十三町の南側の内溝であると考えられる。南側ではS A 212を検出した。柱穴の掘形は一辺0.3 mの隅丸方形で、計4基検出した。柱間の間隔は約3.2 mある。S A 212の中心とS D 104・105のセンター間の距離は29.45 m（≒10丈）ある。

S X 107は、S D 104とS D 105の間に位置し、若干東へ振れながらも溝とほぼ直交する暗渠である。掘形は幅0.4～0.5 m、深さ0.1 mあり、内部に木製の底板・側板が残存していた。この遺構は2つの溝の水量調節の役目を果たしていたものであろう。

S B 20は、左京南一条東三坊十三町の西北隅に位置する1間×1間の掘立柱建物である。柱間は東西2.2 m、南北1.8 mある。柱穴の掘形は隅丸方形で、一辺0.75～0.85ある。柱当たりは円形で各々には柱抜取穴がある。断面を観察すると、柱を抜き取る際には桧皮をあてがったのか、底部には桧皮が多量に残存していた。

中世では、A・B区全域から小溝を多数検出した。A区の場合は南北方向、B区の場合は東西方向を示している。いずれも水田関係の溝であろう。

なお、A区中程では、東西方向の畦畔跡を確認している。いわゆる乙訓条理に関係したものであるが、中世を遡るものではなく、周辺の現状地割りと一致している。B区でもこのような畦畔の存在が予想されたが、遺構は検出できなかった。

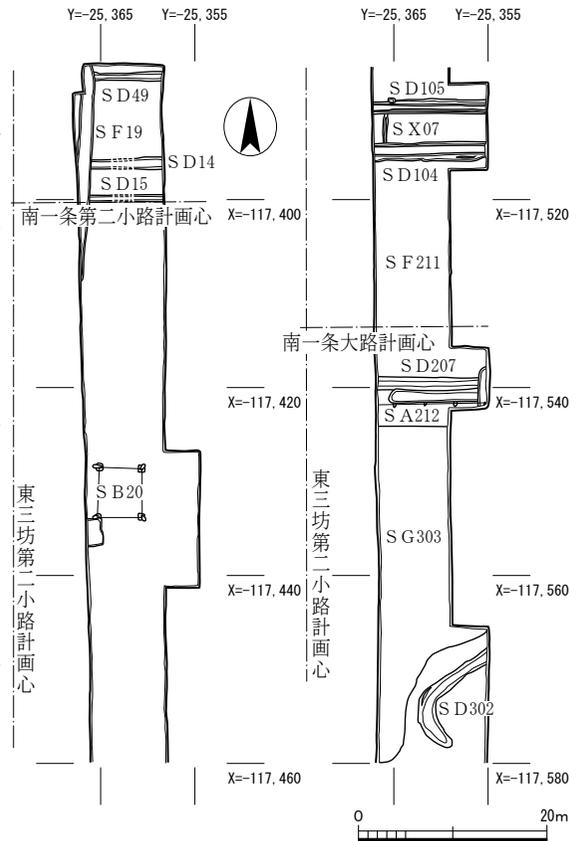


図2 遺構配置図 (1:800)

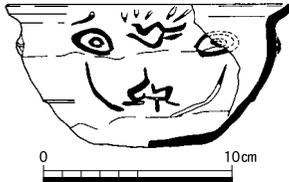


図3 墨書人面土器
実測図 (1:4)

遺物 今回の調査では、整理箱で6箱の遺物が出土した。弥生時代から中世までの各時代の多様な遺物が出土しているが、総量としては少ないといえる。

弥生時代から古墳時代の遺物は、沼状遺構・溝から出土した他、中世包含層からも出土している。B区ではこの層から銅鏃が出土した。S D 302からは弥生時代後期の遺物が少量出土した。

長岡京期の遺物は、条坊関係遺構・柱穴から土師器・須恵器等の土器類の他に木製品も出土している。

南一条第二小路関係の溝からは、土師器・須恵器片が少量出土した。南一条大路関係の溝では、S D 105から土師器・須恵器と共に木簡^註・木片が出土した。木簡の破損が激しいが、両面に墨書がある。

S D 104の溝底から墨書人面土器が2点出土した。いずれも土師質の壺Bタイプのもので、側面に人面が描かれている。墨書土器も1点出土しているが、その内容については不明である。他に曲物の一部・木片が出土している。S D 207からは土師器・須恵器・瓦・木片の他に斎串が1点出土した。S B 20の柱穴からはヘラ状木製品が出土したがその用途は不明である。

小結 今回の調査結果では、検出遺構・遺物の量は少ないといえる。しかしその内容においてはかなり注目すべきものがある。

まず条坊遺構の検出について、S D 105とS D 104の間でS X 107を検出したことから、両溝間には築地状の施設の存在が想定できる。このことから、S D 104とS D 207は道路(S F 211)の南北側溝であると言える。更にS F 211の中軸線を西へ延長させると、長岡京大極殿の中心とW 0'4' Sの振れでほぼ一致することが明らかになった。これらの点から、S F 211は長岡京復原の有力な定点といえよう。

次に注目すべき点としては、南一条大路北側溝から墨書人面土器、南側溝から斎串が出土していることである。平城京・長岡京からの出土例を検討すると、大半が条坊側溝からのものであり、今回の検出例もそうした事例を踏襲しているものと考えられる。

(久世康博・上村和直)

註 『木簡研究』第8号 1986年

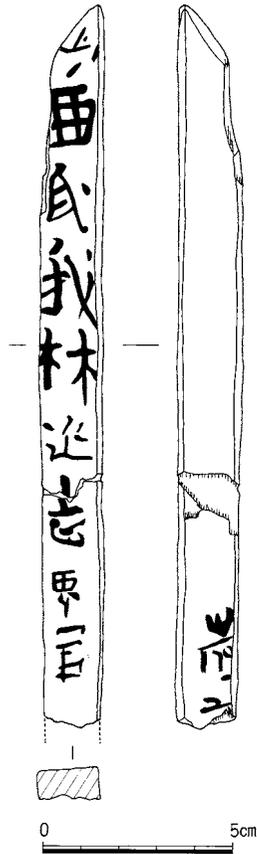


図4 木簡実測図 (1:2)

34 長岡京左京二条三・四坊 (図版39・40)

経過 伏見区久我西出町4-10他の水田地帯に工場建設の計画が立てられた。同地は長岡京左京二条三坊十三・十四町、二条四坊三・四町に推定される。敷地は約24000㎡と広く、調査の主眼を絞るため、まず昭和60年4月8日～30日の間に試掘調査を実施し、その結果、調査対象地南半部で東三坊大路東側溝及び弥生土器の包含層を、同東南部では

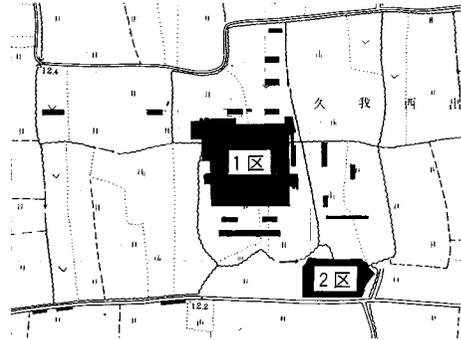


図1 調査位置図 (1:5000)

柱穴などを検出した。この成果を基に、東三坊大路と二条第二小路が交差する部分(1区)と柱穴を検出した部分(2区)の2箇所に調査区を設定した。

遺構 1・2区ともに鎌倉時代から室町時代の水田耕作などに伴う多数の溝を認めた。これらの溝は1区では主に南北方向に、2区では主に東西方向に走る。これら溝の調査ののち、標高11.2～11.5mの遺構面で長岡京期及び弥生時代の遺構を認めた。以下1・2区で検出した遺構の概略を述べる。

1区の長岡京期の主要遺構はSD 88・89, SB 1・2, SA 1の他、SA 2, SB 3がある。弥生時代の主要遺構はSX 38, SD 105の他、SX 230がある。

SD 88 東三坊大路西側溝。幅約1.2m、深さ約0.1mで、調査区北西部で長さ約10.4mを検出した。溝の中心座標はX=-117,915 Y=-25,253.5を測る。

SD 89 東三坊大路東側溝。幅約1.2m、深さ約0.2mで、調査区の南北両端で検出した溝で、中央部は削平を受ける。溝の中心座標はXがSD 88に同じ、Y=-25,229.2を測る。

SB 1 3×2間以上の南北棟で、西側に廂が付く。北半は調査区外に延びる。

SB 2 3×5間の南北棟で、西側と南側に廂が付く。SB 1・2はほぼ真南北の同一計画線上に建てられており、柱間もそれぞれ梁間2.4m、桁行2.6m、西廂部は2.7m、南廂部は2.4mを測る。SB 2は4基の柱穴に建築部材を転用した礎板が据えられていた。

SA 1 SB 2の最北列の延長線上に、柱間1.9mで2間分を検出、更に西へ延びる。

SX 38 沼状の遺構で最深部は約2mを測る。南東方向へ延びる溝を伴う。中世に再び湿地化している。中層以下の腐植土層から弥生土器が出土した。また腐食土層下の灰色粘土層から縄文土器が出土したが、ほとんど小破片である。

S D 105 S X 38 上層の除去後に検出した幅約 1 m の屈曲した溝。

2 区 の長岡京期の主要遺構は S B 4 ・ 5, S A 3, S E 134, S D 151 である。弥生時代の遺構は S D 224 ・ 225 がある。

S B 4 2 × 4 間 の南北棟。柱間は梁間 2.5 m, 桁行 2.2 m を測る。

S B 5 2 × 4 間 の南北棟で, 南側に廂を持つ可能性がある。柱間は梁間 2.5 m, 桁行 2.2 m, 南端部は 2.5 m を測る。2 基の柱穴に柱根が残る。

S A 3 S B 4 ・ 5 の間を通り, 北端で直角に折れ曲がる。S B 5 の東柱列延長線上まで 7 間分を検出した。柱間は一定でなく 2.2 ~ 2.5 m と不揃いである。

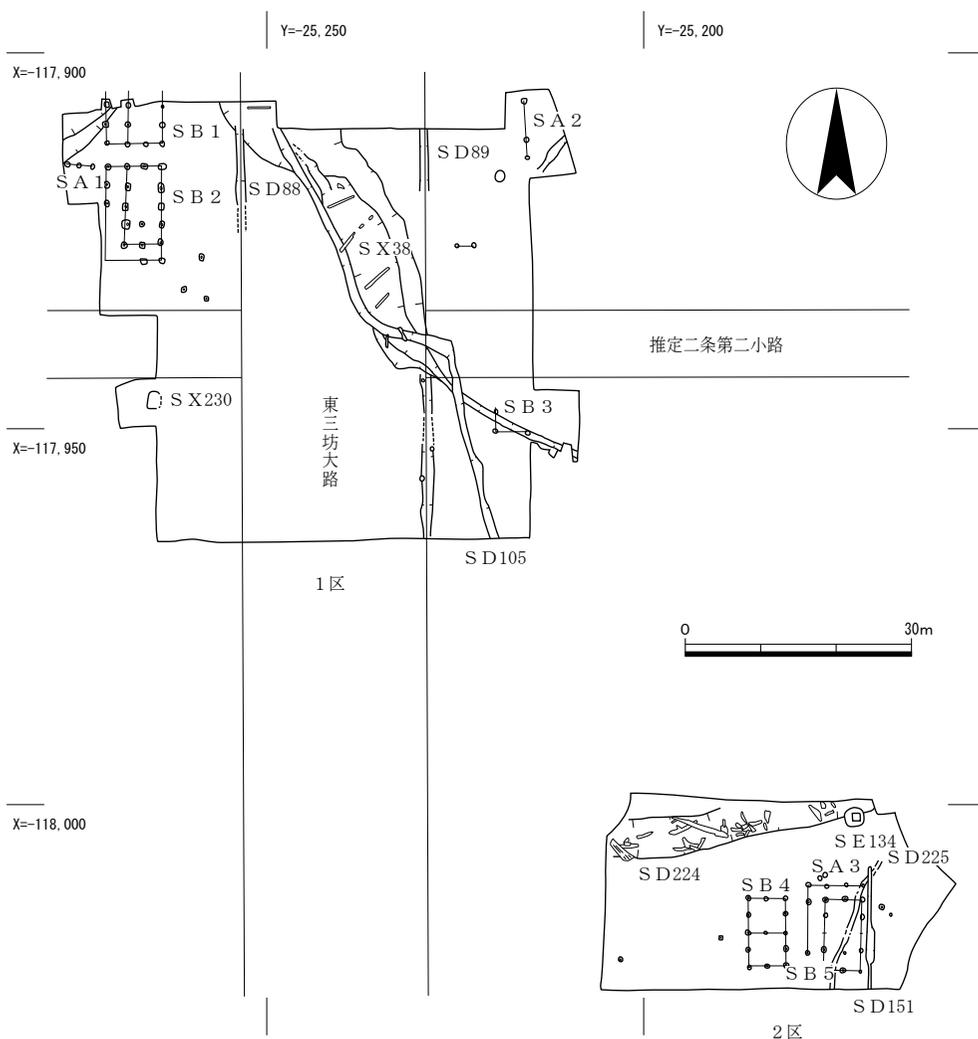


図2 遺構配置図 (1:1000)

S E 134 掘形は径2.4～2.6 mの楕円形を呈する。井戸枠は方形で1辺0.9～1 m, 横棧を有する縦板組みで深さ約2 mを測る。長岡京期の良好な遺物が多数出土した。

S D 151 最大幅約0.9 m, 深さ約0.1 mの南北溝。一町を二等分する位置にある。

S D 224 幅約6 m, 深さ約1.7 mの東西溝。上層は長岡京期の遺物を包含する。中層以下の腐植土層には多数の大木が倒れ込み、折り重なった状態で堆積していた。

遺物 縄文時代後期から晩期, 弥生時代中期, 長岡京期, 鎌倉時代及び室町時代の遺物が出土した。ここでは長岡京期のS E 134 (土師器1～5, 須恵器6～14), 弥生時代のS X 38 (弥生土器15～19) の出土土器を取り上げる。

S E 134 1～3は外面全体をヘラケズリするが, 口縁端部付近のナデを残す。2はごく粗いヘラミガキを施す。4は内面にヨコ方向のハケを施したのち, 口縁上半部と肩部以上をナデ消す。5は製塩土器で内面に離れ砂がみられ, 外面は粗いオサエのみで済ます。6～11の食器類で杯Bは杯Aに対し3:2と優位である。また杯Aの大部分は灰白色で焼成が甘い。12～14の貯蔵器類は出土総数659片のうち22%を占める。S E 134では食器類は約32%で土師器が2:1と須恵器に勝る。調理器は18%で大部分が土師器である。また製塩土器が10%, 瓦が15%と多い。この他陶硯3点, 須恵器の三足羽釜片がみられる。

S X 38 弥生土器は壺・甕・が中心で少量の鉢・高杯がみられる。壺は頸部に櫛描きの直線文, 波状文を施すもの, ヘラミガキされるものがある。概して密な胎土に少量の砂・小石などを含む。畿内第Ⅱ・Ⅲ様式に併行するものが多い。縄文土器は54片出土した。器形の判るものは鉢のみである。北白川上層式・滋賀里式に属するとみられる破片がある。

小結 二条第二小路を認めることはできなかったが, 東三坊大路を溝心々間24.3 mで検出し, その両側に計画性を持って配置された建物跡を検出した。1区の2棟の建物は西方・北方に拡がり一群を為す状況が考えられる。2区の2棟の建物は南方に主屋となる建物が想定でき, 町割りの溝により四分の一町を占有することも考えられる。

長岡京期のみならず, 弥生・縄文土器が多量に出土する溝・自然流路を検出したことは, 付近にそれらの土器を使用した集落の存在を想定できる。また一帯は鎌倉時代以降, 条里制のもとに水田化し, その影響は現水田にも色濃く現れている。

今回の調査は西羽東師川以北, 久我から名神高速道路に至る間で行われた最初の調査である。ここで得られた成果は, 付近が工場誘致による開発予定地域であるだけに, 今後の調査企画, 行政指導の指針となろう。

(鈴木広司・長宗繁一)

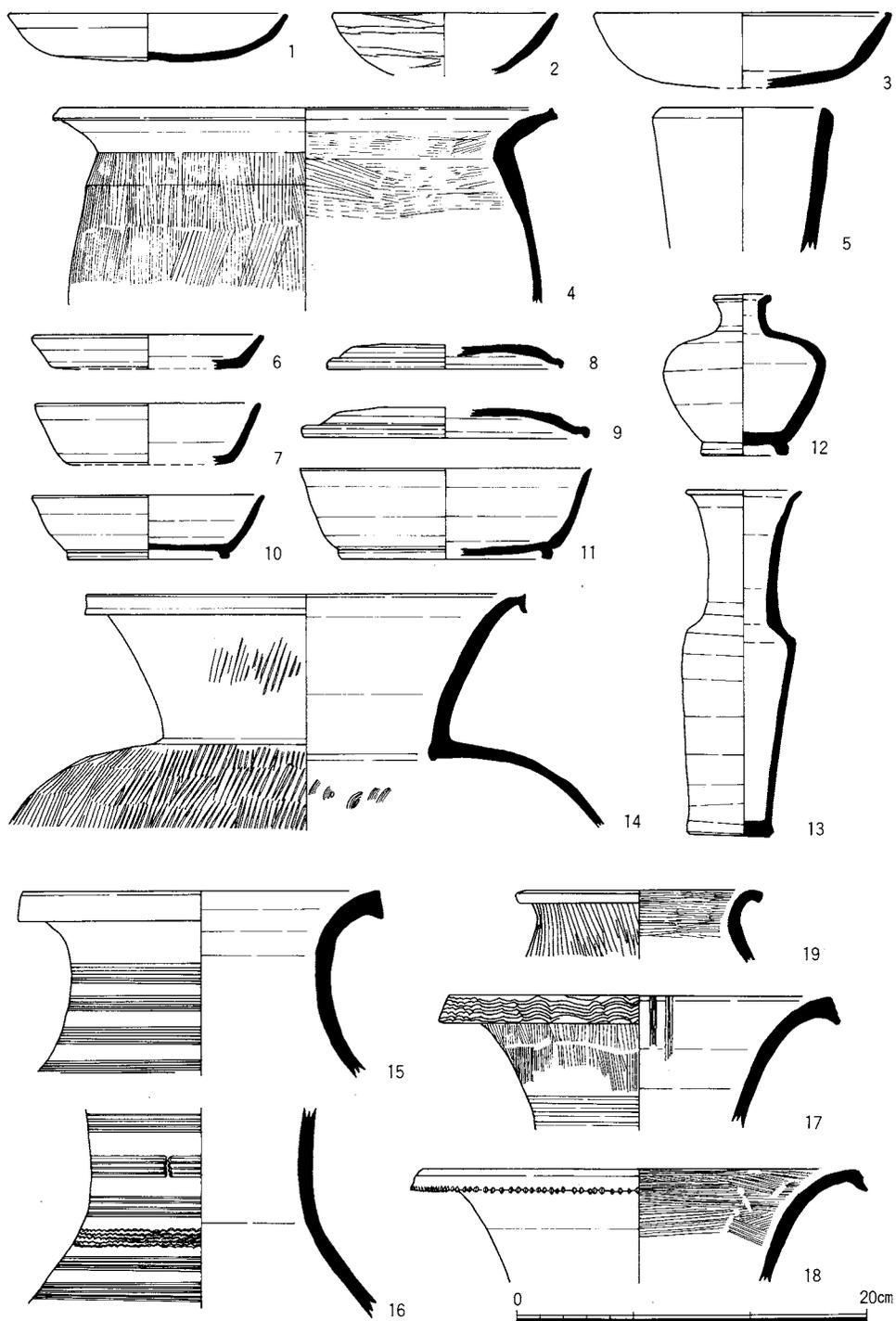


图3 SE134, SX38 出土土器实测图 (1:4)

35 長岡京左京四条二・三坊 (図版41～46)

経過 昭和55年度より継続調査中の外環状線建設に伴う発掘調査である。今年度はT・U区の2箇所を実施した。T区が左京四条三坊三町、U区が四条二坊十四町に該当する。T区については、民家出入口の関係から南半と北半に分けて調査を実施した。

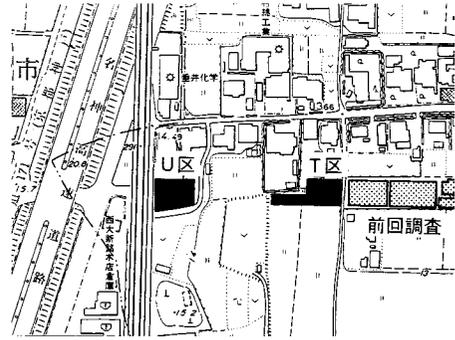


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 T区 既往調査区に較べて遺構面数が多く、最上層第1面平安時代から最下層第6面奈良時代まで6面調査した。標高は第1

面が126 m、第6面が114 mを測る。第1面(平安時代)は、11世紀中頃の遺構群で東方の調査区より続くものである。調査区南半で東西方向を示す杭列を検出した。更に南で水田跡、北半で宅地跡を検出した。この杭列は、下層の奈良時代水田跡で畦畔として検出したものを踏襲しており、乙訓郡条里制の中で七条小切里28坪と29坪の坪境に相当する。宅地跡では、建物2棟、井戸2基、土壌などを検出した。第2・3面は平安時代前期から長岡京期の遺構群である。出土遺物からの平安時代との区別は困難な状況にあり、全体的には長岡京期として捉えられるものである。上層の第2面の時期には、建物3棟、井戸1基、土壌を始めとして、SB4・5の内部及びその周辺に石敷遺構を検出した。SB4の一部とSB5の数箇所では焼土・焼灰の分布がみられ、特にSB5南辺には、円形の焼灰が

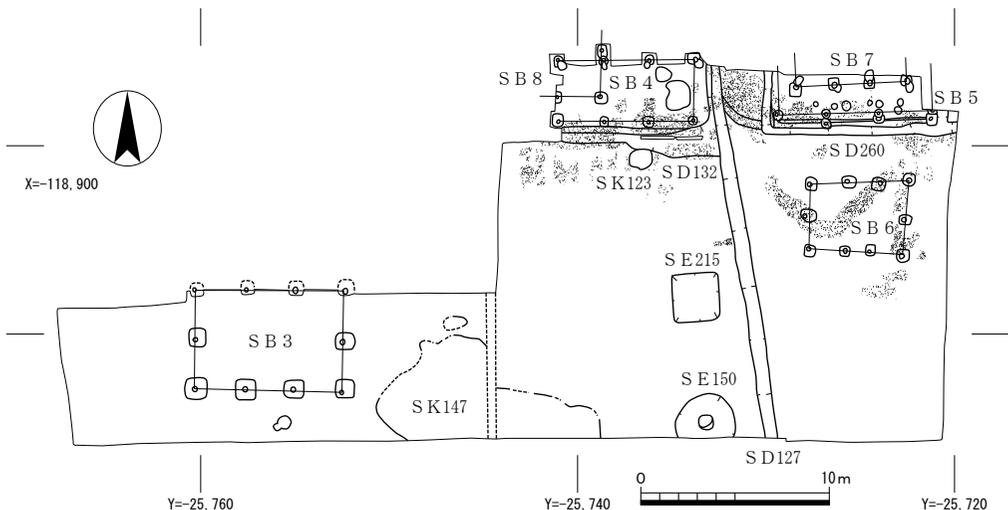


図2 T区長岡京期遺構配置図 (1:400)

分布する箇所を東西に並んで検出した。S E 150 は平面形が円形で素掘り、底部に曲物を据えている。この第2面の遺構面直下ないしは、石敷を除去した下面で第3面の遺構を検出した。建物3棟、井戸1基などがある。S B 8はS B 4、S B 5の下層で、S B 6は石敷遺構の下層で検出した。S E 215はS E 150の北で検出した。井戸枠などは撤去され上部は粘土で整地されていた。

第4面から第6面までは、前述した条理坪境及び坪内の畦畔を検出した水田跡である。出土遺物が小片で時期決定には至らないが、奈良時代頃から長岡京造営直前までの間に収まる。第4・5面の水田跡には自然流路を検出し、近辺が旧小畑川の氾濫原に位置し堆積が進んだことが判る。

U区 平安時代、長岡京期、奈良時代、古墳時代の遺構、遺物を検出した。他に縄文時代の遺物包含層を確認しており、わずかに縄文土器片が出土している。

平安時代の遺構は前～中期のもので、溝・柱穴がある。柱穴は径30～40cmの円形を呈し、南北方向に並ぶものもある。U区の西半部は砂礫の堆積する溝で、この溝は南北方向に流れ、当初の溝は20m以上に及び、西岸部は調査区外である。後に縮小されて幅6m、深さ1.2m程度になる。東岸部には護岸と考えられる杭列を一部検出した。この溝は最終的に、平安時代後期に埋没したと考えられる。

長岡京期の遺構は調査区東部で掘立柱建物・S B 1、井戸・S E 2、湿地状の窪み・S X 3を検出した。S B 1は2×3間の南北棟で、梁間・桁行ともに1間約1.7mを測る。S E 2はS B 1の北方で検出した深さ約1mの小型のもので、大小3つの曲物を井戸枠に使用する。S X 3は調査区の北東部で検出した。炭化物、腐植土が厚く堆積しており、ここから多量の土師器・須恵器・黒色土器の他、建築部材・木簡を始めとする木製品なども多量に出土した。

奈良時代の遺構は、条理の坪境と考えられる東西方向の杭列と水田跡を検出したが、東部を後世の流路によって壊されており、調査区西部にのみ残存している。杭列は畦状に土盛り

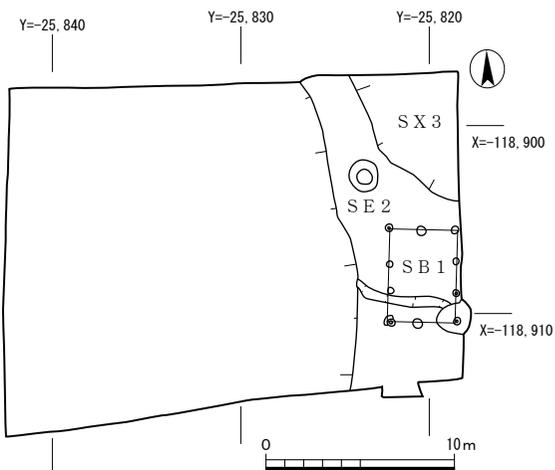


図3 U区遺構配置図 (1:400)

した上に、杭を一行に20cm間隔で打ち込んでいる。杭はいずれも木材を割って造った角杭で長さ約80cm、一辺7cmあり、約50cm打ち込まれている。水田は杭列の両側に拡がり、耕作土層から土師器・須恵器片が少量出土した。

古墳時代の遺構は、調査区のほぼ中央を南北に流れる流路と、南北方向に分流する流路を検出した。流路の底部は凹凸が激しく、埋土の大半が砂礫であることから、洪水時の自然流路であると考えられる。埋土から土師器・須恵器などが出土した。

遺物 T区 第2面で検出した長岡京期から平安時代前期のSB4・5を廻るSD132・260、建物の整地層及び石敷遺構などから出土した土師器を图示した。

土師器1～20・33～37、須恵器21～30・38・39、灰釉陶器31、二彩陶器32がある。土師器の杯・皿類の調整手法は、外面全体をヘラケズリするものが主流を占めるが、口縁部をナデ、底部をオサエで調整するものも増加している。口縁部をナデ、底部をヘラケズリするものも少量みられる。ヘラケズリするものは削りかたがやや雑で、また口縁端部にナデを残すものが多い。甕は内面をオサエとナデで仕上げるものが多く、口縁端部はわずかに肥厚する。須恵器の蓋は総量の3分の1近くが硯に転用されている。32は外面にのみ黄色と緑色の釉が施される軟質の土師器の胎土である。墨書は33点みられる。「王」が8点、「四つ丸」が5点ある。

SD132から2401片の土器・瓦類が出土した。器種構成は土師器の食器が約61%、調理器が約27%と高率を占める。須恵器の食器は3%強、貯蔵器が約2%とごく少なく、

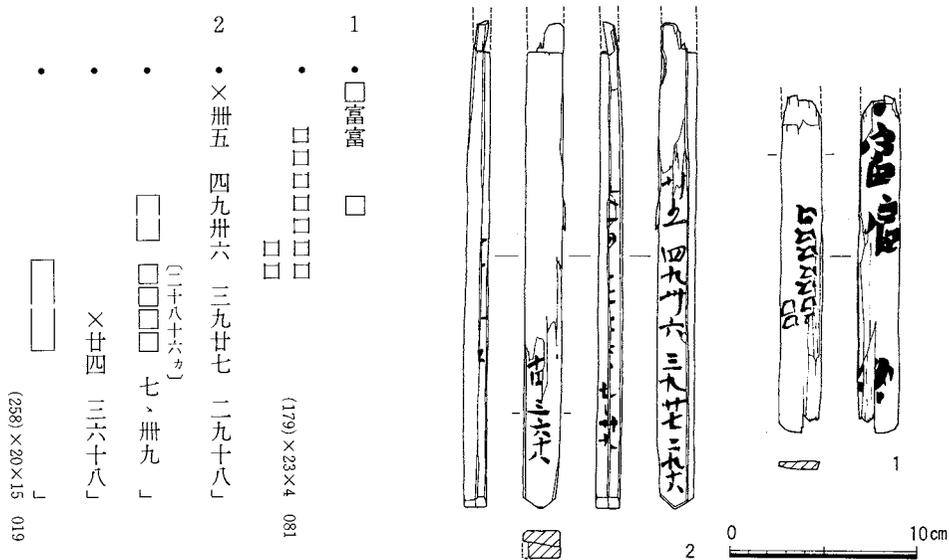


図4 木簡実測図及び积文 (1:4)

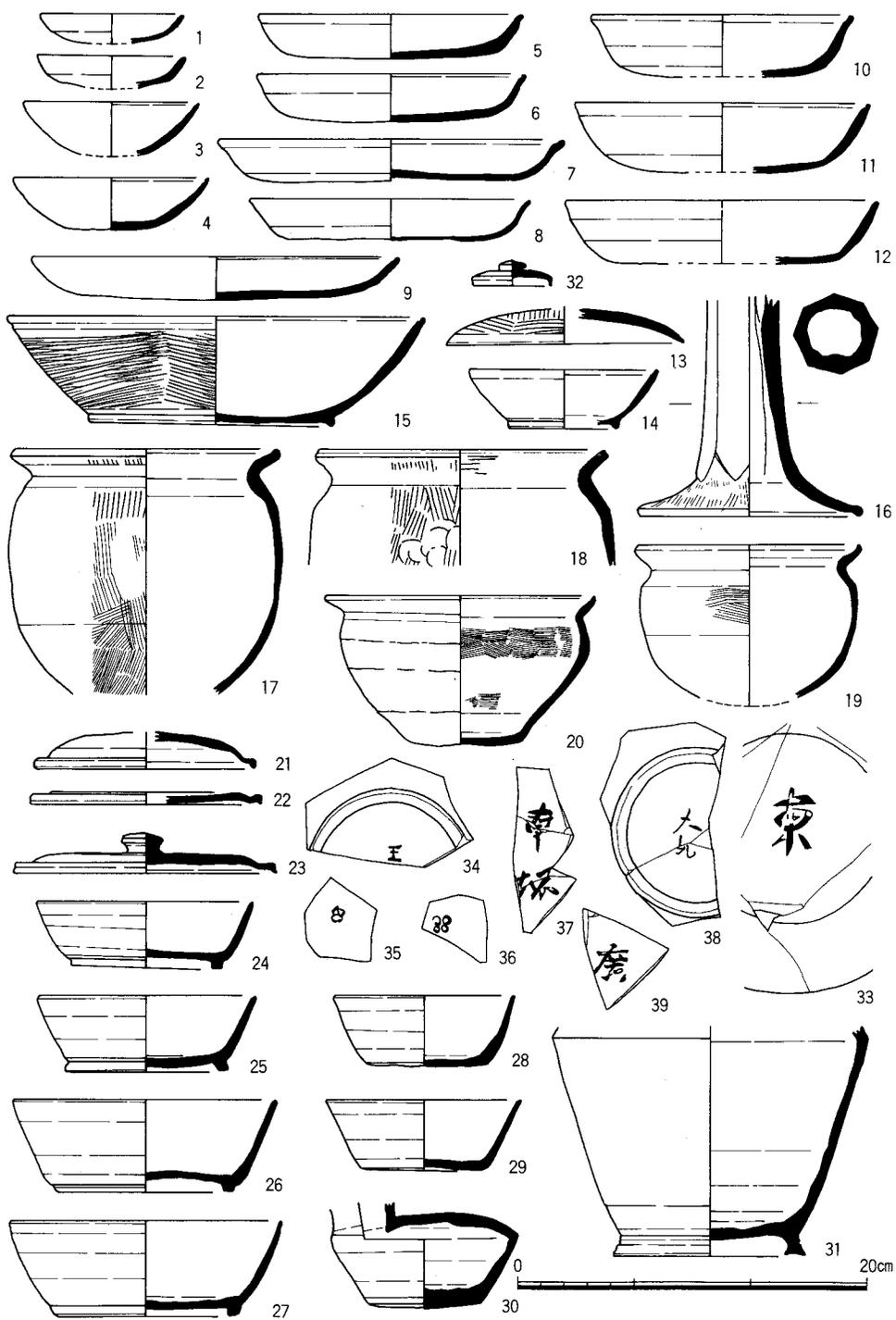


图5 T区出土土器实测图(1:4)

器形も限られている。この他製塩土器が約5%を占める。瓦は0.6%にすぎない。S D 260も同傾向で、1005片の内、土師器の食器が約68%、調理器が約16%で、須恵器の食器が約6%、貯蔵器が約6%を示す。これはS B 4・5付近の同時期の他の遺構S K 123・147などでも同様の値を得ており、やはり土師器の食器が圧倒的に多く、調理器がそれに次ぎ、両者で総量の85%程を占めている。須恵器はS K 123の約13%が最大で、この時期としてはいかに少ないかが判る。遺跡の特異性を示すものとして注目されよう。

この他、S E 150から多数の斎申・箸と共に紡織具などの木製品が出土した。またS K 123の焼灰・炭の堆積層から漆紙文書が出土した。細片に崩れており文意は掴みにくい。

U区 S X 3から多量の土器・木器などが出土した。ここでは2点の木簡を紹介する。図4の1は内容から呪符木簡と考えられる。2は上半が失われているが、棒状の木片の4面に『九九』が書かれている。

小結 T区で検出した長岡京期の遺構群は、先年調査したQ区で検出した礎石据付穴などを考え合わせ、当一町が「川原寺」跡と推定できよう。出土遺物からも、S K 123出土の経文の一部と思われる漆紙文書、S D 132など、更に先年調査したS区でも「王」と書かれた墨書土器が集中して出土しており、このことを裏付けている。軒瓦などの瓦の出土量が少数で、中心区域とは考えられないが、焼灰・焼土・土器散布の煩雑さからみて大衆院関係の遺構と推定したい。更に注目されることは、遺構群が2時期に大別でき、変遷を追えることである。川原寺の初見は大同元(806)年で、これ以前に寺が造営されていたことが知られ、弘仁7(816)年の記載の後、文献からは姿を消す。今後の付近一帯の調査が待たれる。

なお、下図に調査地点の位置関係を示した。V区は昭和61年度の調査であるが、東二坊大路側溝を検出しており、理解の補助のため付け加えた。

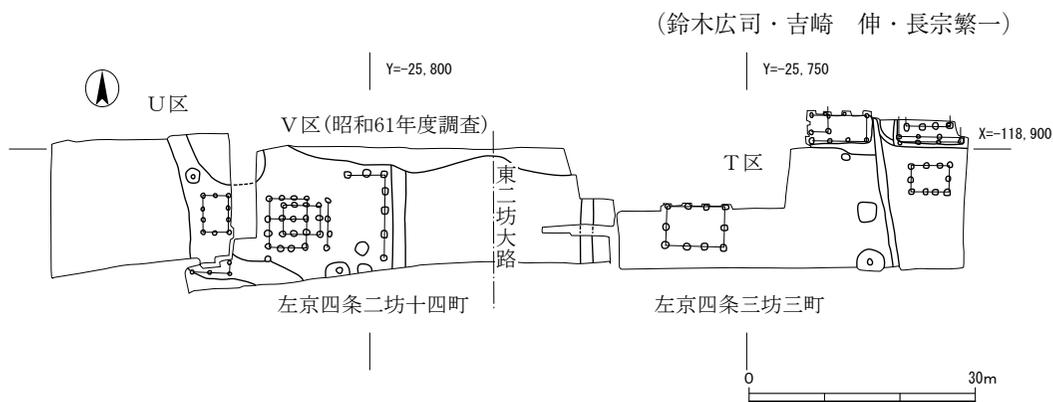


図6 T・U・V区长岡京期遺構配置図(1:1000)

VI その他の遺跡

36 栗栖野瓦窯跡 (カラー図版1)

経過 栗栖野瓦窯跡は、京都市左京区岩倉幡枝町にある飛鳥白鳳時代から平安時代後期にかけての窯跡群で、その総数は40基以上を数える。現在、群中の一画は国の史跡に指定されており、今回の調査はその隣接地約700㎡を対象に実施した。調査期間は昭和60年4月1日から6月30日までの3箇月間である。

遺構 今回の調査で検出した窯跡の総数は10基である。

窯跡の内訳は、飛鳥白鳳時代の管窯2基(5・6号窯)、平安時代前期の管窯1基(3号窯)、時期不明管窯1基(4号窯)、それに平安時代後期の分焰床式平窯6基(7～12号窯)である。なお平窯6基の内1基(12号窯)は別の平窯(9号窯)を断ち割った際、その掘形底面において検出したものである。

窯跡のあり方は、南北に長い敷地北半において、3～6号窯の管窯が等高線に直行して形成されており、7～12号窯の平窯は、その南側にみられる平坦面に営まれたものである。

調査区北半で検出した3号窯及び4号窯の遺存状態は極めて悪く、3号窯では壁面の最も残りの良いところで高さ40cmあったが、その間に操業面が4面あり、最上面以外は出土遺物も少なかった。5・6号窯は急斜面をくり抜いて構築されたものであるが、斜面上には既に住宅が建てられており、本調査では安全面の関係から、窯跡全体を調査することができなかった。ただし6号窯については、工事直前に再調査を行い完掘した。この6号窯の規模は焚口から奥壁までの全長約7.5m、最大幅1.2mある。天井は奥から約3m手前まで残存しており、最大高1.2mある。

敷地南半にみられる7～12号窯の平窯群を構築するにあたっては、まず斜面を大きく円形に削り取り、平窯数基を構築するための平坦面を造り出している。最も削り取りが大きくなる平坦面の奥部では、斜面の角度が直角になり、落差は約3mあった。この平坦面

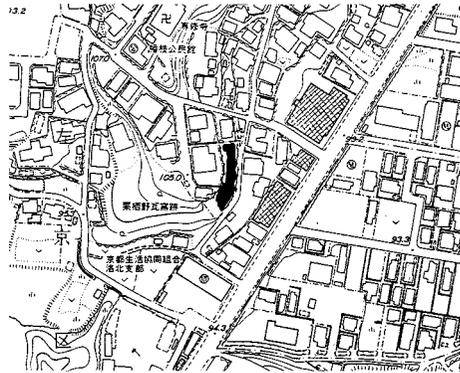


図1 調査位置図 (1:5000)

上にある平窯群は、敷地東側にある道路に沿い南北一列に並んだ状態で営まれていた。その西方にはかなりの余地があり、土壌を検出した。土壌の埋土には窯壁混じりの焼土が多く含まれていることからみて、何等かの作業場として使用された可能性が強い。

遺物 窯体内から出土した遺物は、飛鳥白鳳時代の5号窯から須恵器、同じく6号窯からは平瓦・丸瓦が主として出土している。平窯は総数6基を調査したが、いずれも焼成室内出土の遺物は少なく、少量の瓦が出土したのみである。この平窯の壁面には、平安時代後期の平瓦を始め、軒丸瓦、軒平瓦など多くの瓦類が使用されていた。

なお6号窯では、平瓦・丸瓦が窯詰め状態で遺存していた。この6号窯出土遺物の内訳は、平瓦460枚・丸瓦81枚、須恵器蓋2点・甕片数点、用途不明品1点で、他に床面に焼き台として使用された平瓦片多数がある。この内窯詰め状態にあったものは、平瓦と丸瓦である。床面は無段式のものであるが、平瓦片を並べることにより、合計16列の焼き台を形成し、丸瓦・平瓦を上下二段組にして詰められていた。この窯詰めされた瓦の製作年代は、出土した須恵器などからみて、飛鳥Ⅳ期～Ⅴ期に比定できるものである。

小結 栗栖野瓦窯跡の所在する岩倉幡枝の地は、粘土と薪が豊富で窯業生産を行うには恵まれた環境であったといえる。過去に平安時代の平窯が調査されているが、今回の調査では飛鳥白鳳時代の窯窯も検出でき、遺跡の時代幅を知る手懸かりとなった。内容的にも5号窯で須恵器、6号窯で平瓦・丸瓦が主として出土し、平安時代前期の3号窯では緑釉陶器の素地が出土するなど、幅広く生産されていることが明らかになった。

(京都市埋蔵文化財調査センター 北田栄造)

『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』 昭和60年度 1986年報告

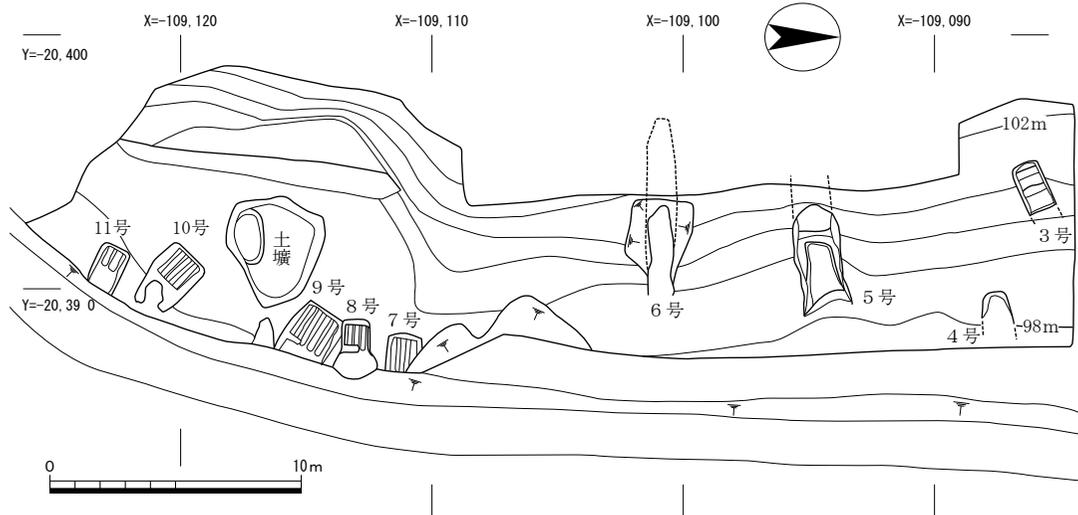


図2 遺構配置図 (1:300)

37 北野鳥居前町遺跡 (図版 47・48)

経過 この調査は、京都市立翔鸞小学校屋内体操場建設に伴うものである。同校周辺ではこれまでに調査例がなく、遺跡の実態は不明であった。そこで旧建物の基礎撤去に際し、立会調査を行ったところ、室町時代後半の遺構・遺物を検出した。このためこれらの遺構の詳細、及び他の時代の遺構の有無を確認する目的で発掘調査を行った。新体育館建設予定地のうち、旧建物の基礎で破壊されていた部分を除き、南北約 10.5 m、東西 22.5 m の調査区を設定した。

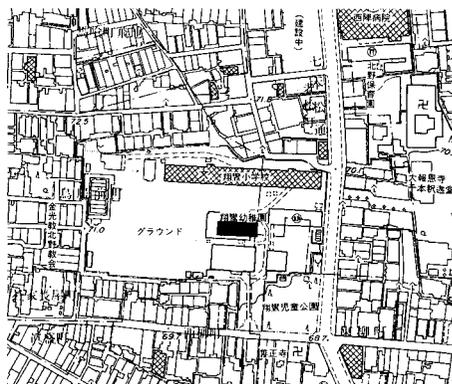


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 遺構面は現表土から約 0.5～0.8 m と比較的浅く、この面で鎌倉時代から江戸時代までの遺構を検出した。鎌倉時代の遺構は土壌が 1 基 (SK 01) だけで、大半が室町時代のものである。江戸時代の遺構は、小規模な溝や土壌の他調査区中央付近に



図2 遺構配置図 (1:200)

一部遺物包含層があった。室町時代の遺構には土壇、井戸（S E 71）、溝（S D 30）の他、建物の一部とみられる柱穴を多数検出したが、調査区東部に検出した南北列を除いて相互の関係を捉えられるものはなく、建物の平面形を復原するまでには至らなかった。井戸（S E 71）は石組みのもので、石組みの内径約 1 m、深さ

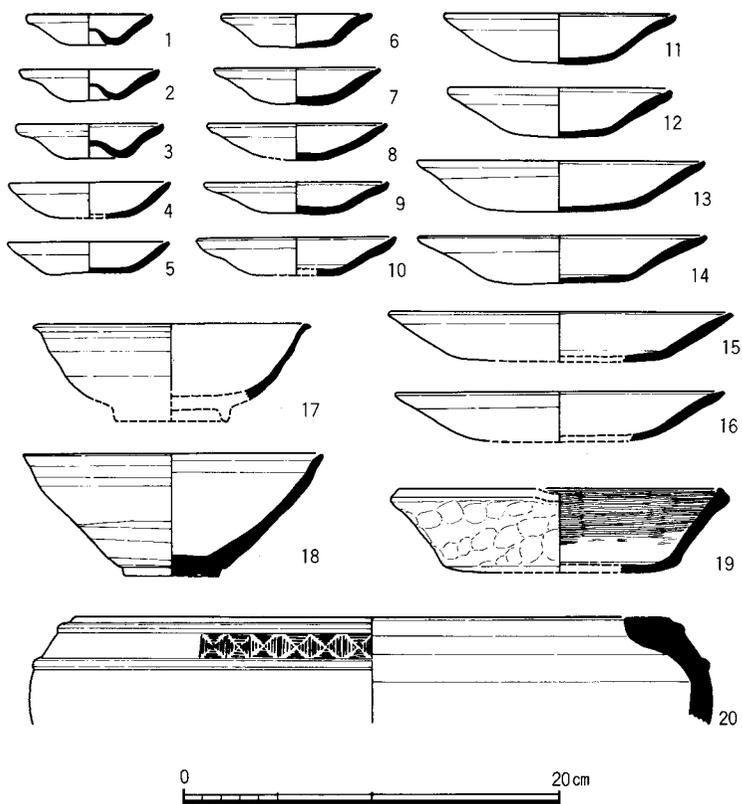


図3 井戸 SE71 出土土器実測図 (1:4)

約 2 m 残存していた。最下部には幅約 0.25 m の板で、方形に組まれた水溜めの痕跡が認められた。遺物は主にこの井戸内から出土した。土器類が多数を占めるが、鉄釘等の金属製品もわずかにある。土器類の大部分は土師器（1～16）で、他に瓦器（19）、瓦質土器（20）、瀬戸系陶器（18）、青磁（17）などがある。

小結 今回の調査によって、同校敷地内には室町時代の遺構が良好に残存していることが判明した。遺構の密度はさほど高くないが、室町時代後半に集中していることが確認できた。多数検出した柱穴群は、この時期の民家の一部と思われるが、調査区外へ展開しているため、その全体像は把握できなかった。調査区東部の南北柱穴列と溝（S D 30）の振れが（N 4°～5°W）とほぼそろっていることや、出土土器の型式などからみても、これらの遺構群がほぼ同一時期に属する可能性が高いが、溝（S D 30）は柱穴の集中している部分と井戸（S E 71）を隔てる位置にあり、これらが同一の民家に属するものかについては検討を要する。

（平尾政幸・本 弥八郎）

38 双ヶ岡中学校内遺跡

経過 調査地の京都市立双ヶ岡中学校は双ヶ岡の東裾部に所在する。この付近の旧地形は、東に下がる緩斜面であったと思われるが、同校建設時の削平のため、丘陵縁部付近で落差3mの崖が形成されている。調査対象となった遺構は崖の上部に位置し、昭和56年3月、同校生徒により偶然発見されたものである。その時点で連絡を受けた文化財保護課と当研究所が現地調査した結果、石で蓋をした大甕が埋設されていることを確認した。甕は口縁の一部が破損していたが、ほぼ完全に遺存していた。中には少量の土砂の他何も検出できなかった。その時点では、一部移動していた蓋石を戻し現状保存することにしたが、今回施設整備により破壊されるおそれが生じたため同校の依頼を受け発掘調査を実施した。

遺構・遺物 まず周辺の地形測量の後、甕の周辺をわずかに掘り下げ、掘形を検出した。蓋石の上部が掘形の検出面よりわずかに高い位置にあることから、マウンドを持っていた可能性がある。

小結 遺構は墓址か経塚とも考えられるが、共伴する遺物は全くなく、性格を推定する情報は得られなかった。甕は口縁部の特徴から備前焼で、室町時代のものと思われる。(平尾政幸)

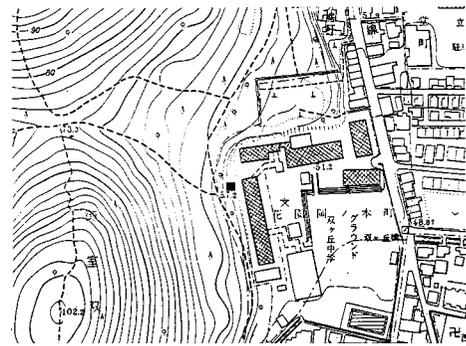


図1 調査位置図 (1:5000)

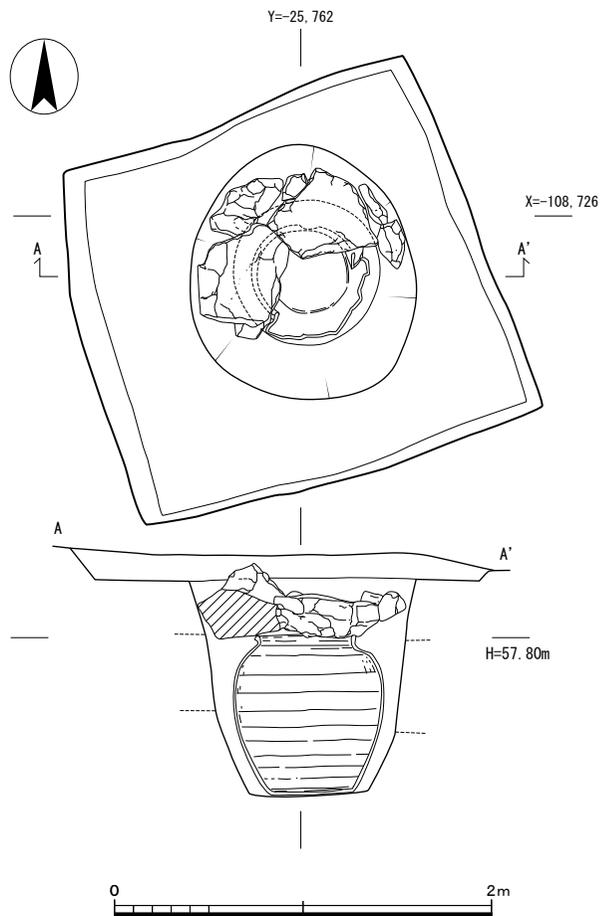


図2 遺構実測図 (1:40)

39 伏見城跡 1 (図版 49・52)

経過 調査地点は、伏見区東組町 698 に所在し、毛利橋通を挟み伏見区役所の南隣に位置する元造り酒屋の敷地である。

当地に民間経営のマンションが建設されることとなり、その建設工事に先立ち、当研究所が 1985 年 9 月 19 日に遺跡の状況を確認するための試掘調査を実施した。その結果桃山時代から江戸時代初頭の伏見城城下町関係の

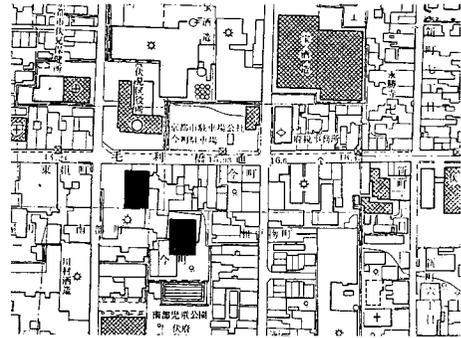


図 1 調査位置図 (1:5000)

遺構が確実に残存していることが判明した。このため発掘調査を実施する運びとなった。

調査対象地は、江戸時代に作成された豊公伏見城絵図などによれば、桃山時代には武家屋敷街の一画に位置し、高橋七兵衛の屋敷地と推定されているが真偽は不明である。

今回実施した発掘調査の主要目的は、文献資料的には不明確な点が多い桃山時代から江戸時代初頭の伏見城城下町の様相の一端を明らかにし、正確な記録を作成することである。

本調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構群の主要部とみられる 2 地区に、約 400㎡のグリット調査区を各 1 箇所ずつ（東部グリットと西部グリット）設定し、実施することとした。

遺構 基本的な層位は、東部グリットで自然堆積層を含めて計 7 層、西部グリットでは同じく計 6 層を確認した。

東部グリット第 6 層（明褐色砂泥層）・第 7 層（明褐色砂泥礫混層）と、西部グリット第 5 層（灰黄褐色泥砂層）・第 6 層（淡黄色粘質土、明黄褐色粘質土混在層）は、平安時代及び桃山時代から江戸時代初頭の遺構面のベースを為す無遺物の自然堆積層（地山）である。東部グリット第 6 層と西部グリット第 5 層はそれぞれ地山最上層であり、地山下層とは色調、土質が若干変化している。これらの地山上面は基本的に西方へ下る緩やかな斜面を呈する。この西方への斜面に対して、平坦面を一定範囲（屋敷地幅やその分割単位ごと、あるいは建物範囲など）で造り出す地業が桃山時代に行われている。東部グリット第 5 層（にぶい黄褐色泥砂層）、西部グリット第 4 層（褐色泥砂層）及びその上層に堆積する各土層は、すべて江戸時代もしくはそれ以降の遺物包含層であり、それぞれ各時代の町屋あるいは商家の整地土層である。

調査により東部グリットで 45 基、西部グリットで 241 基、総計 286 基の遺構を検出した。

東部グリットでは北東部を南東から北西方向に走る溝3を検出している。この溝は平安時代後期に埋没したと考えている。西部グリット北東部でも同方向に走る溝8を検出しており、遺物は出土しなかったが堆積土、形状、方向性などから同じ時期の遺構と考えている。この他の遺構は未整理ではあるが、すべて桃山時代以降のものと考えている。

東部グリットで検出した掘込1・2としたものは、桃山時代に作られ江戸時代前期には埋没した遺構で、掘込1がほぼ円形を呈し、径約8m、深さ約4mを測り、掘込2がほぼ方形の大規模なもので、一辺約10m、深さ約4.5mを測る。いずれも底部より時計廻りに登るスロープが造り出されている。灰黒色・緑灰色のシルトや、地山の流れ込みと思われる土などが堆積し、木製品を含む多量の遺物が出土している。遺構の性格は今のところ不明だが、伏見城下の他の発掘調査において、いずれも未完掘ではあるが、同様の遺構が数基確認できる。西部グリットの掘込4としたものも、検出面より2m程度掘り下げているが底部は確認できておらず、この種の遺構である可能性は高い。

井戸は計11基検出している。井戸3・4は近代のもので漆喰の井筒を有し、他は桃山時代から江戸時代の幅に収まるものである。井戸6・10は石組みが残存しており底部に桶側を設置していた。溝1・2・5～7は桃山時代から江戸時代前期のものと考えられ、溝1・5は東部グリットで南北方向、溝6・7は西部グリットで東西方向に走り、溝2は東部グリットの中央部で東西に走り、西壁付近でL型に南へ曲がる。溝1は掘込1・2に切られており桃山時代に限定できる。土壌は茶褐色系統の土が堆積しているもので49基検出している。いずれも桃山時代から江戸時代の幅に収まるものである。ピットは126基検出している。主に西部グリットに集中しており、並びが確認できるもの、礎石を有するもの、柱痕の残るものもあり、その多くは建物や塀などの柱穴である。落込としたものは26基検出した。形状及び遺構性格とも不明確で、出土遺物も少ない。攪乱墳としたものは62基検出しているが、江戸時代後期以降のものであり、近・現代のものがほとんどである。

遺物 今回の調査における出土遺物は、桃山時代以降のものが中心であり室町時代以前のもものはごく少ない。種類別では土器類（陶磁器類も含む）がやはり多いが、他に瓦類や木製品類も多数出土している。また少数ではあるが金属製品、石製品などの出土もみられる。

東部グリット溝3からは、平安時代の土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器などの土器類が一定量まとまって出土している。しかし個々の土器片の遺存状態は良好とは言い難い。これらの出土土器群を平安時代の中で時期別にみると、前期から後期まで各時期に比定で

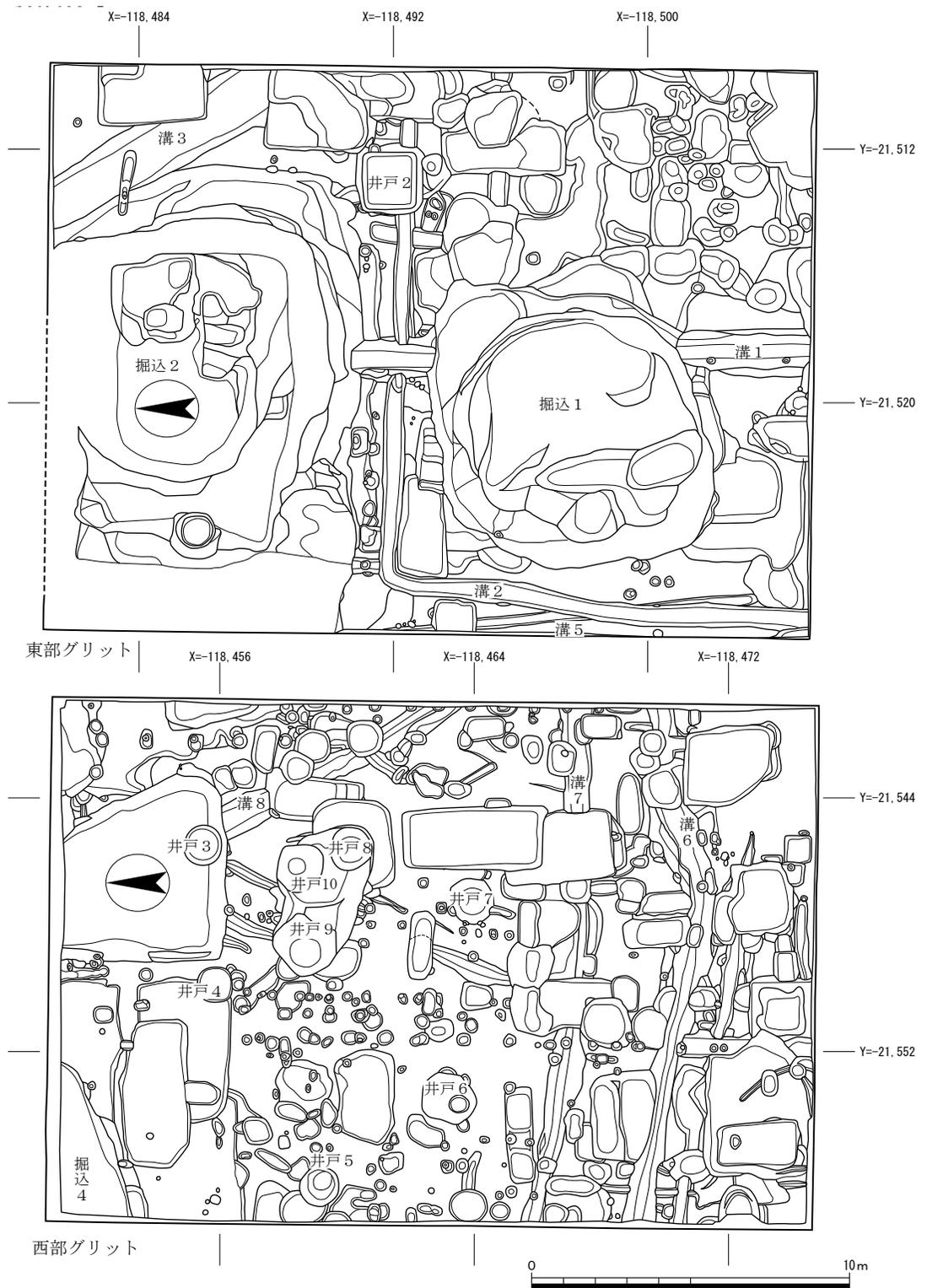


図2 調査区平面図 (1:200)

きるものが混在している。このような出土状況から、溝の埋没年代は平安時代後期と言えるが、溝の上流部にあたる調査地点東方の近接地域に存在が推定される遺跡は、平安時代前期には成立し、後期まで存続していたと考えられる。

鎌倉時代から室町時代に比定できる遺物は、現段階では確認することができなかった。桃山時代に入り、伏見城及び城下町が建設されて以降の各時期の遺物は種類、出土量とも豊富である。これら近世遺物の出土状況は、当町が伏見城城下町として建設されて以降、近世を通じて町として発展し現在に至っている歴史を端的に示している。

今回出土した近世遺物で最も注目できるものは木簡類である。木簡類は大規模遺構である掘込など、桃山時代から江戸時代初頭の遺構から出土した。伏見城跡関連の調査で木簡類がまとめて出土したのは初例である。木簡類は計14点出土しており、この内10点が付け札タイプの木簡で、他の4点は曲物・折敷などの底板とみられる板片に文字が記されたタイプの木簡である。中には表側が「するがにて御音信分 右兵衛河三右」裏側が「九十枚之内 廿九枚むらさ□可王六十一枚志やぶ可王」と判読できるものがある。他にも当時の生活（商いなども含めて）を直截につたえる内容が記されているものもある。これらの木簡は漆器碗、下駄・箸・へら・櫛などの木製品や土器類、瓦類など他の多量の遺物と共伴出土しており、それらの資料と関連して、当時の伏見の社会生活をリアルに復原する上で軸となる重要な資料である。

なお、桃山時代から江戸時代初頭の遺構の埋土中、もしくは後代の攪乱層から金箔瓦が若干数出土しているが、当地の遺構と関連するものではないだろう。

小結 この調査において、平安時代の遺構、遺物を検出した意義は大きい。当地に最も近接する当該期の周知の遺跡は、東方約0.5km付近に位置する御香宮廃寺であり、当地付近は同時代の遺跡の空白地であった。遺構、遺物の出土状況からみて、この遺跡の中心は東方近接地と考えているが、新発見遺跡として認知が必要である。

桃山時代から江戸時代の遺構、遺物を多数検出した。これらの遺構群は、伏見城の城下町であった時代の武家屋敷や、江戸時代の町屋（商家か）に関連したものであり、伏見の都市的発展の歴史を明らかにする上で貴重な資料である。なお、近世遺構の内で掘込1・2とした遺構については、その形状や規模などから、時代は大きく異なるが中国の隋・唐代の洛陽にあった「含嘉倉」のような大きな窖（地下式の穴倉倉庫）を想起するが、国内の確認例はほとんど知らない。しかしぜひ性格の解明が必要な遺構である。また同遺構から出土した木製品には木簡類が含まれており注目できる。近世遺跡の解明にとっても木簡資料の果たす役割は大きく、伏見城関連の資料に木簡が加えられた意義は大きい。

（平安京調査会 上村憲章・小森俊寛）

40 伏見城跡 2 (図版50～52)

経過 調査対象地は、伏見区桃山町金森出雲で、御香宮神社西側に位置する約4600㎡の敷地である。縄文時代の金森出雲遺跡、奈良時代から平安時代後期とされる御香宮廃寺跡、桃山時代から江戸時代初頭の伏見城跡等の遺跡が重複する地域となっている。当地が近い将来宅地造成されることとなり、その造成工事に先立ち、当研究所が遺跡の遺存状況

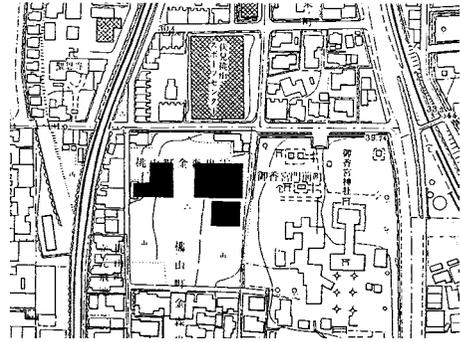


図1 調査位置図 (1:5000)

を確認すべく、昭和60年11月25日～同年12月12日までの約2週間にわたり試掘調査を実施した。その結果、桃山時代に焼け落ちたとみられる門址及び同期の厚い整地土層の広がりを確認することができた。また整地土層中や近世遺構内の堆積土層から出土した遺物の中には、奈良時代から平安時代の瓦なども多数認められ、東部の地山直上面では、中世の掘立柱建物の柱穴とみられるピットを検出したこと等によって、桃山時代の整地層下にも同時期の遺構が残存している可能性が大きいことが明らかとなった。

このような試掘調査の成果に基づき、京都市埋蔵文化財調査センターと宅地開発事業者との間で、発掘調査を実施することが決定され、それを受けて当研究所が、昭和61年1月6日～同年2月18日まで当地の発掘調査を実施した。

遺構・遺物 調査地は桃山丘陵の中心から西へ（やや南へ振れる）延びる、枝丘陵上の尾根線の北側に位置している。枝丘陵の原地形は現在の地表にも起伏を残しているが、微地形については極めて不鮮明になりつつある。調査地内で確認した原地形をみると、地山は東南部が最も高く、西方及び北方へ向かって徐々に低くなる。その比高差は4m強を測る。原地形の起伏は、現在の地表に段差として残る高低差よりも更に大きい。地山は主に黄褐色系の色調を呈する砂礫層によって構成されているが、その表層には同じ黄褐色系の色調を持つシルト層が堆積している部分もみられる。

遺物を包含する各時代の堆積土層は、調査区内では原地形の低い部分を埋めるように、北方及び西方に向かって厚く堆積しており、東南部ではごく薄くなるかもしくは堆積していない。この堆積土層の内、主要なものは各時代の建物などの基盤となる整地土層である。

平安時代もしくはそれ以前の遺構は、東部グリットで言えば、溝4（西部グリット溝

10に連続)、溝5(西部グリット溝7に連続)、溝7(西部グリット溝9に連続)、溝12、井戸2、他に掘込・ピットなど、西部グリットでは、溝5・6・8の他、ピットなどである。各遺構からは、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器や瓦類など、奈良時代から平安時代の遺物が多数出土している。出土遺物からみて東部グリット溝4は平安時代半ばまでに、溝5・12は平安時代中期末までには埋没し、その機能が失われている。東部グリット井戸2は、井戸枠などの施設は残っていなかった。下部は平安時代末期には埋没しており、上部の埋没は鎌倉時代に入る。

鎌倉時代から室町時代の遺構は、東部グリットの溝3(西部グリット溝3に連続)、溝6(西部グリット溝11に連続)、柵列1、他に掘込、ピットなど、南東部グリットは建物1、柵列2、溝4やピットなど、西部グリットでは溝4、ピットなどである。各遺構からは土師器、瓦器、須恵質土器、焼締陶器、輸入陶磁器や瓦類などの遺物が出土している。

柵列は建物と関連し、一定の範囲を区画する目的を持つとみられる。また溝群の内には、その溝を挟んで両側で段差があるものや直交しつつ並存していたものもあり、柵列と同様に一定範囲を区画する(もしくは区画に沿って走る)側面を持つとみられるものも多い。

これらの遺構の内、建物、柵列、東部グリット溝6(西部グリット溝11に連続)などは鎌倉時代から室町時代初頭にはその機能を失っている。これらの遺構から出土する瓦は、ほとんど奈良時代から平安時代後期のものであり、成立期は平安時代までに遡る可能性もある。東部グリット溝3(西部グリット溝3に連続)、南東部グリット溝4などは室町時代後半代に埋没しており、中世を通じてこの付近に遺跡が存在していたことは明らかである。

伏見城が存在した桃山時代から江戸時代初頭の遺構は、西部グリットで検出している門址を始め、東部グリットの石組井戸(井戸1)、掘込1・7・8、溝10・11・13・14・15、南東部グリットの溝1～3、西部グリットの井戸1などがある。

門址は上部施設がほとんど残存していなかったが、門柱の礎石など基礎的な部分はほとんど遺存しており、発掘資料としては極めて良好な状態といえる。遺存する礎石の配置からみて、内側に大きく「八」の字状に開く形式の門址であり、城などにその類例が知られている。この門址には焼け瓦を含む焼土層が直接被っており、焼け落ちたものとみられる。焼け瓦の中には金箔が瓦当面に残っている軒瓦が1点だけではあるが含まれている。

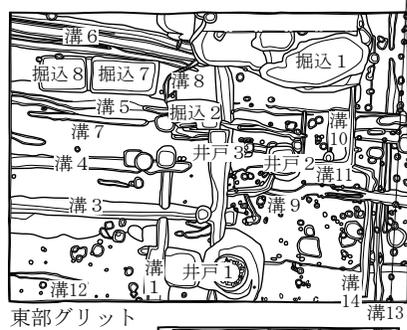
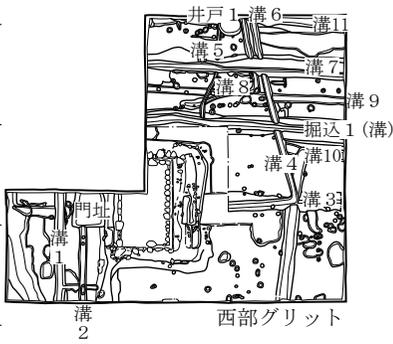
これらの遺構は、厚い整地土層上面に展開しており、大名屋敷の諸施設であると考えている。建物等については今回の調査では検出できなかったが、残存施設や遺構面上に残る

Y=-21,120 Y=-21,112 Y=-21,104 Y=-21,096 Y=-21,088 Y=-21,080 Y=-21,072 Y=-21,064 Y=-21,056 Y=-21,048



試掘第6トレンチ

X=-118,456

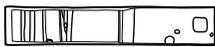


柵列 1 X=-118,464

X=-118,472

X=-118,480

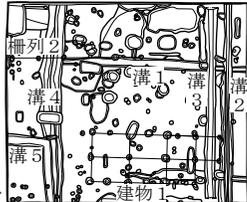
X=-118,488



試掘第2トレンチ



南東部グリット



X=-118,496

X=-118,504

図2 調査区平面図 (1:600)

礎石の状況からみて、調査区内にも建物が建てられていたものと考えている。遺存していない理由については、伏見城廃城時の屋敷地移転などに伴い、地上の諸施設は礎石まで持ち去ったものと考えている。

桃山時代から江戸時代初頭のこれらの遺構からは、瀬戸・美濃・信楽・備前などの茶陶を含む国産陶磁器類、軒平瓦、軒丸瓦（金箔瓦を含む）などの瓦類、木簡（墨書のある付け札など）、漆器椀、下駄・箸などの木製品、刀・小柄などの金属製品等多数の遺物が出土している。これらの遺物の内では、掘込1から出土した木簡類は注目される資料であり、「中将御覧」と判読できるものも含まれている。遺物類に大名屋敷を窺わせる貴重な資料が多い。

大名屋敷が廃絶した江戸時代以降の遺構は、顕著なものは確認できなかった。堆積土層やその上面の様相からみて当地は、江戸時代以降には畑地化してしまったようである。

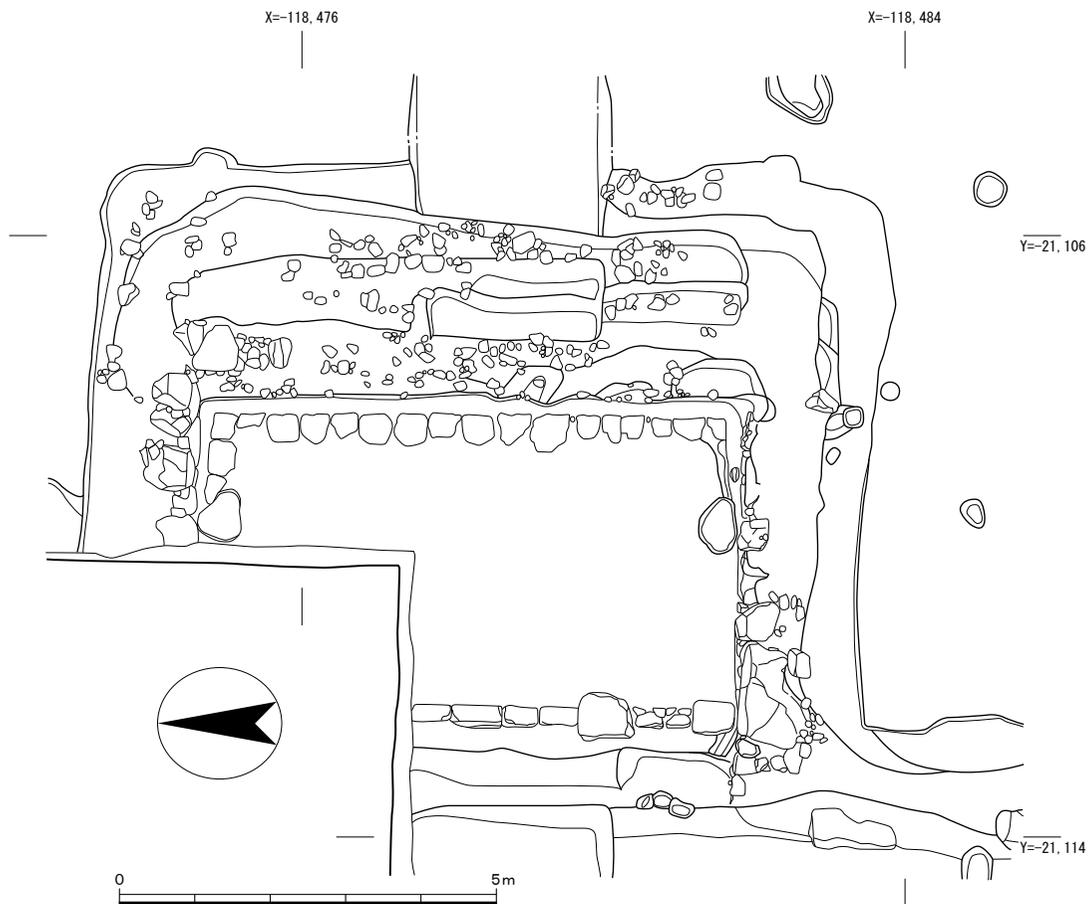


図3 門址平面図 (1:100)

小結 今回実施した発掘調査によって、不明であった御香宮廃寺遺跡の一端が明らかとなり、桃山時代から江戸時代初頭の大名屋敷に関しても、得られた成果には極めて大きなものがある。しかし縄文時代の遺跡とされる金森出雲遺跡については、関連する遺構、遺物とも検出できなかった。

御香宮廃寺跡は、出土遺物や検出遺構の様相からみて、その中心地は東南方にあると推定している。現御香宮下が有力な候補地とみられる。またその成立年代と廃絶期については、若干前後に幅をみた修正が必要であろう。

桃山時代から江戸時代初頭の大名屋敷については、試掘調査終了段階では、江戸時代に作成されたとされる伏見城絵図及び城下町絵図などから、金森氏の大名屋敷と考えていたが、絵図類はそのほとんどが信憑性は低く、加えて本調査によって得られた新資料から、その見方を修正すべきであると考えている。

その資料とは、東部グリット掘込1から出土した「中将御覽」と記された木簡である。この木簡に記された「中将」がこの屋敷の主であるとすれば、この屋敷は金森氏のものである有り得ない。金森氏は各代ともに中将位を受けたことがないからである。また門址から出土した金箔瓦は確認数が少ないが、出土状況から門址と直接関連するものとみられる。この資料も当屋敷の金森氏説を覆す傍証となる可能性が大きい。

(平安京調査会 原山充志・小森俊寛)

41 深草坊町遺跡 (図版53～56)

経過 昨年度の試掘調査で、敷地北寄りには小柱跡が分布し、中央から南寄りには中世以前の遺物を含む整地土層が広がっていることが判明している。発掘調査は遺構の期待できる敷地北半について行った。調査区のかなりの部分に帯状の整地土層が認められたため、一部でそれを掘り下げた結果、江戸時代後期の粘土採掘壙を埋めたものと判明した。そこで、整地土層以外の部分について更に調

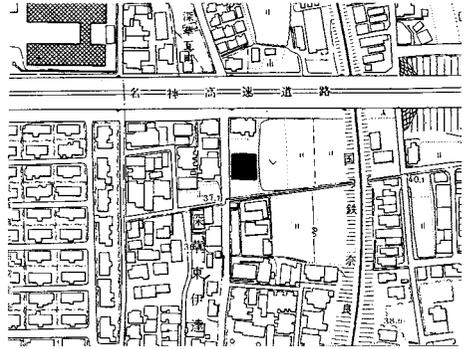


図1 調査位置図 (1:5000)

査を進め、南西部では飛鳥時代の川跡を検出した。更にこの川の北肩に縄文時代の低地堆積土を確認した。

遺構・遺物 調査区北半で中世の柱穴を2群検出したが、建物を復原するには至らなかった。調査区西部で、平安時代初期の土器埋納壙を検出した。平面40cm×20cmの小穴で、この中に土師器の甕腹を敷き、その上に3群の土師器碗を据えていた。うち一群は碗4個を重ね、上に同形の碗で蓋をし、他の2群は碗、蓋各々1個を組み合わせている。その脇に須恵器小壺があった。碗の中には板状の炭化木片が認められた。

河川(溝58)は幅2m、深さ1mあり、西で北に相当振れて西流する。2時期の水流痕跡を示す土層があり、この上下2層間に挟まれた状態で、よどみを示す堆積土層を検出した。その堆積土層中には、木器や微小植物遺体が含まれる。祭祀関係の遺物(斎串・カラカマドなど)や焼けた建築部材(板材など)も出土した。植物遺体の観察では、人里植物が多くみられ、すぐ近くに居住地があったと判る。土器の量は多くないが大破片が多く、7世紀初頭の群として好資料である。(図2)

小結 当初期待していた貞観寺関係の遺構は全くなく、中世の建物も不明確な在り方であった。ところが7世紀初頭の河川を検出したことによって、付近、恐らく調査対象地の北側に、当時の居住地のあったことが判明した。一方祭祀遺物の斎串は、この時期では一般集落からは出土しないという見地に立ち、更に調査地点の位置する歴史地理的環境を考え合わせると、当時上宮王家の経済基盤の一つとされる「深草屯倉」との関わりも考慮したい。(梅川光隆)

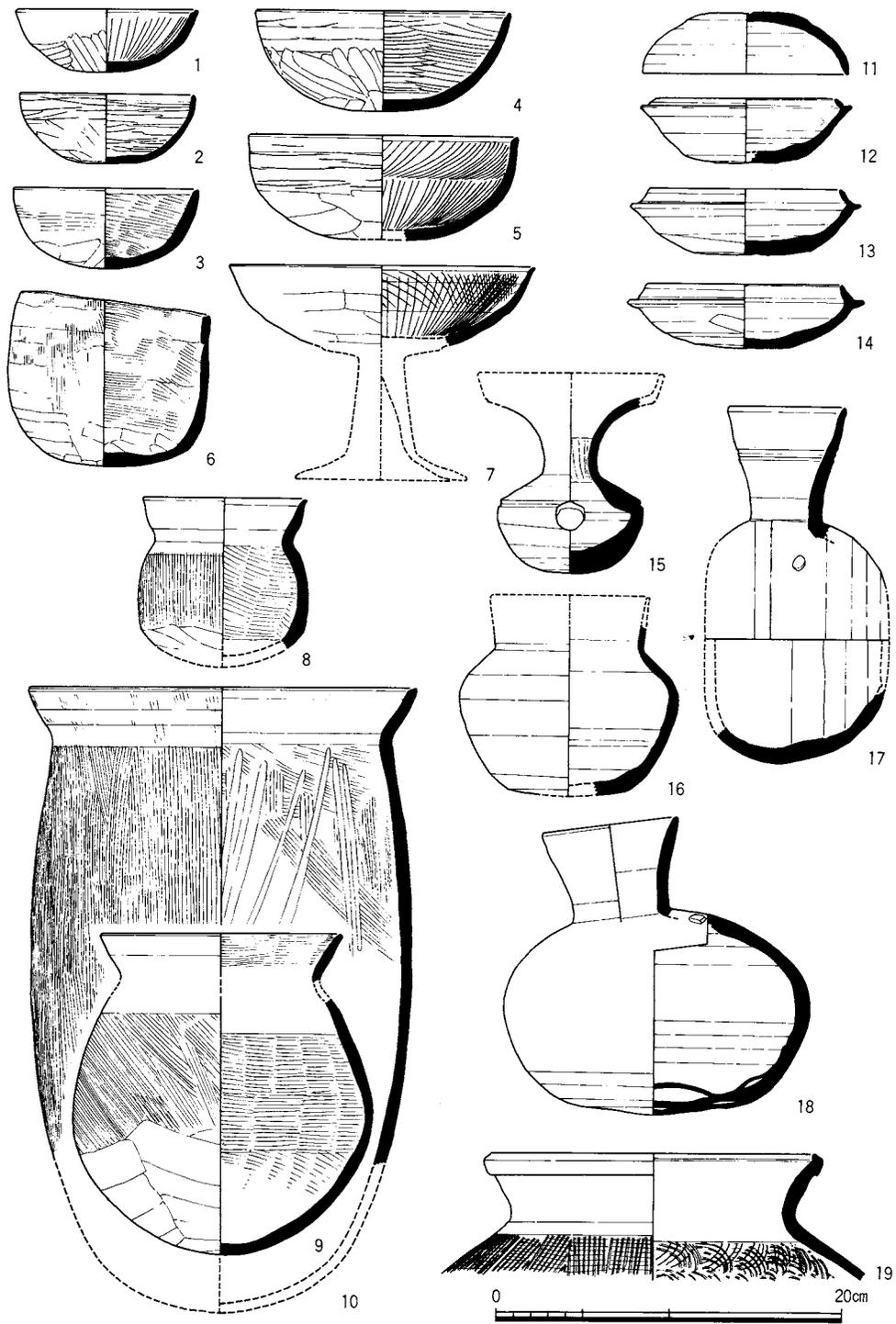


图2 溝58出土土器実測図(1:4)

42 大宅廃寺 (図版57～63)

経過 調査地点は、山科区大宅山田・鳥居脇・奥山田町に所在し、高塚山西端から西南にかけて広がる台地状を呈する扇状地の末端及び谷部に位置する。当地区に京都市立勤修中学校分校(現・大宅中学校)が新設されることになったが、この予定地には、名神高速道路建設に伴う昭和33年度の発掘調査(第1次調査)で、大宅廃寺関連遺構等が遺存していることが判明していた^{註1}。第1次調査

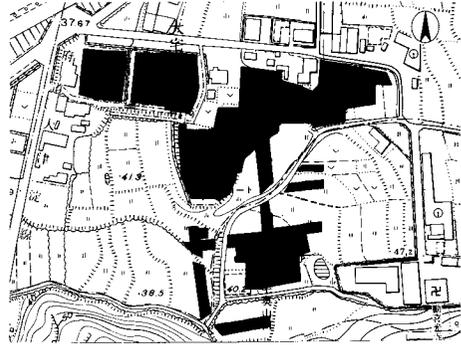


図1 調査位置図(1:5000)

の成果によると、この予定地内の北側部分には、大宅廃寺の南門を含めた南限部分が位置していると推定できた。調査はまず遺構の遺存状態及び広がりなどを確認するための試掘調査を行い、台地上では大宅廃寺に関係するとみられる柱穴・溝などの遺構、瓦が多量に分布する状態を確認した。台地と比高差約8mの谷部では、礫敷遺構と考えられる広がりを確認した。このような結果を得たことで発掘調査を実施することになった。発掘調査は排土処理等の都合上、谷部から開始し台地部へと移行した。谷部は農道及び用・排水路を避ける必要から主にトレンチ調査方法を採用し、先の試掘調査で礫敷を認めた箇所付近の水田については広範囲に調査した。台地部は畑地とテニスコートとして利用されていたが、テニスコートの撤去時期が発掘調査開始後となり、畑地部(E区)次いでテニスコート部(TA・TB・TC区)の順で全面を調査した。

遺物・遺構 谷部の調査 試掘調査で礫敷と認めたものは、調査の結果旧流路の河床であり、礫間から中世の遺物が出土した。この旧河床下に2筋に大別できる自然流路を検出した。流路は台地の縁辺に沿う方向を示す。この流路中より7世紀後半から平安時代にかけての遺物が出土した。遺物は旧耕作土層及び旧流路から出土し、土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、瓦、木製品、銭貨(富寿神寶・宋銭)、鉄滓などがある。なお、鉄滓は南西のトレンチ、旧流路中からまとまって出土した。

台地部の調査 台地部は全面に遺構が広がり、出土した遺物により、縄文時代から室町時代にかけての複合遺跡であることが判明した。以下、時代ごとにその概要を記す。

縄文時代 E区及びTA・TB区全面に土壌が点在し、土壌より出土した遺物からみて

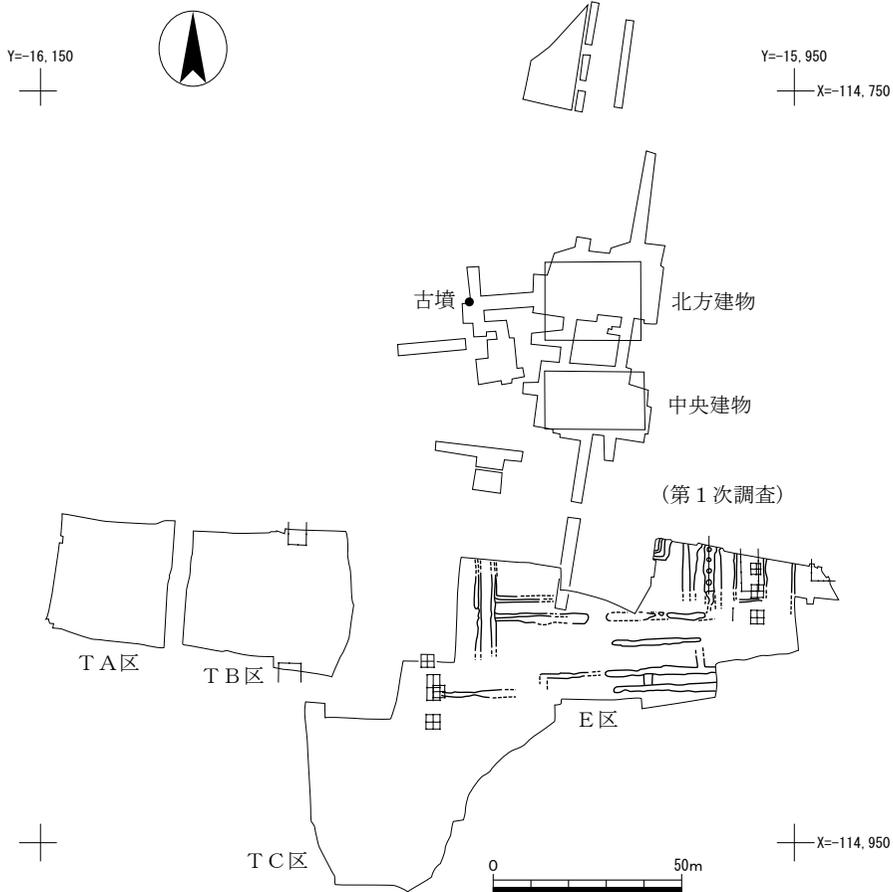


图2 大宅廃寺関連遺構位置図 (1:2000)

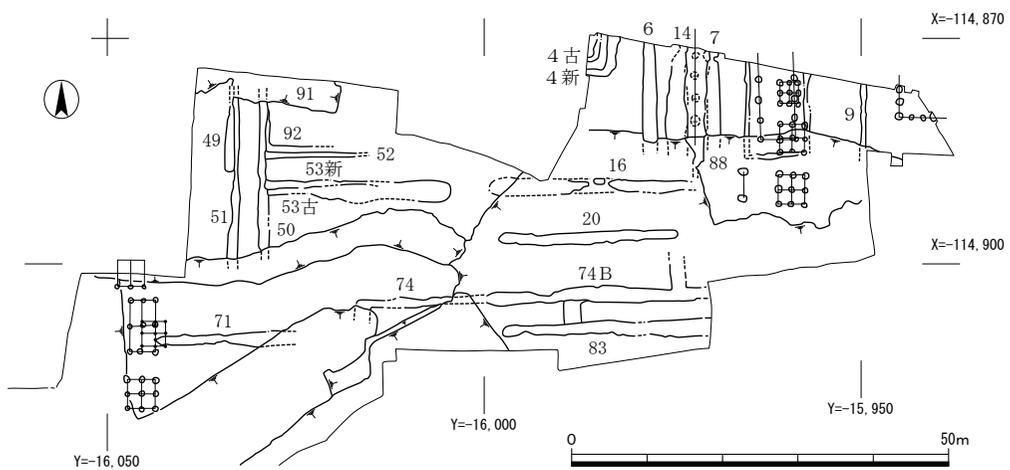


图3 E区大宅廃寺関連遺構平面図 (1:1000)

中期末（平式併行期）3基，後期14基，晩期3基，不明4基がある。これらの土壙は、径50～60cmの円形又は楕円形を呈する。このうち主な土壙には土壙90・138などがある。土壙138は長軸145cm，短軸120cm，平面楕円形を呈し，深さ25cmある。後期の北白川上層式から宮滝式の浅鉢・深鉢などがまとまって出土した。土壙90は長軸65cm，短軸50cm，平面楕円形を呈し，深さ10cmある。晩期の滋賀里V式の深鉢が一固体出土した。出土状態，底部が打ち欠かれていることなどからみて，甕棺に転用されたものとみられる。

弥生時代 E区西半からT A・T B区にかけて土壙が散在し，土壙より出土した遺物からみて前期（中～新段階）8基，不明1基がある。このうち土壙17は長軸119cm，短軸70cm，平面方形を呈し，深さ46cmある。土壙壁面全体が加熱を受け赤変している。

古墳時代 E区西北で竪穴住居址2戸，土壙1基を検出した。出土した遺物からみて4～6世紀である。竪穴住居址は一辺4.2～5m以上あり，平面方形を呈し4主柱である。

飛鳥時代 主要な遺構としては，E区で掘立柱建物1棟，T A・T B区で竪穴住居址8戸がある。建物は梁間2間，桁行3間で，溝50により西側桁行の柱穴が削平されている。竪穴住居址は，調査区内で完結するものは2戸のみで，他は調査区外に大部分が延長する。平面形はすべて方形を呈するとみられ，一辺4.3～6mあり，4主柱である。カマド付設箇所は北壁が3戸，東壁が3戸，不明2戸である。出土した遺物及び建て替えの痕跡などから，2小期以上が考えられる。

白鳳期から平安時代前期 大宅廃寺に関連する遺構群をE区，T B区で検出している。遺構から出土した遺物，遺構の重複状態などからみて，3時期に分けることが可能である。A期：7世紀後半～8世紀前半，B期：～8世紀中頃～，C期：8世紀後半～9世紀前半である。

A期の遺構には，築地の雨落溝と考えられる溝6・16・51・52・53古・88・91，建物に伴うと考えられる雨落溝4古，総柱建物群（5棟）及び溝9がある。B期の遺構には踏襲ないし同位置での建て替えの跡がみられる。西側の総柱建物（2棟）のみが，やや南に位置をずらして建て替えを行っている。C期の遺構には，築地の雨落溝と考えられる溝7・14・49・50・53新・92・71・74 B・83，建物に伴うと考えられる雨落溝4新・74及び溝7と14の間に築地状遺構がある。この他に溝7の東方に雨落溝で囲まれた掘立柱建物（1棟）及び溝20がある。築地状遺構は，A・B期の雨落溝88を埋め立て更に土盛りして築地の基底部としている。この基底部上面で礎石抜取穴の痕跡を4箇所検出した。抜取穴心々間の距離は約3mある。なおA・B両期の溝，建物は真南北ないし真東西の方向を示すが，

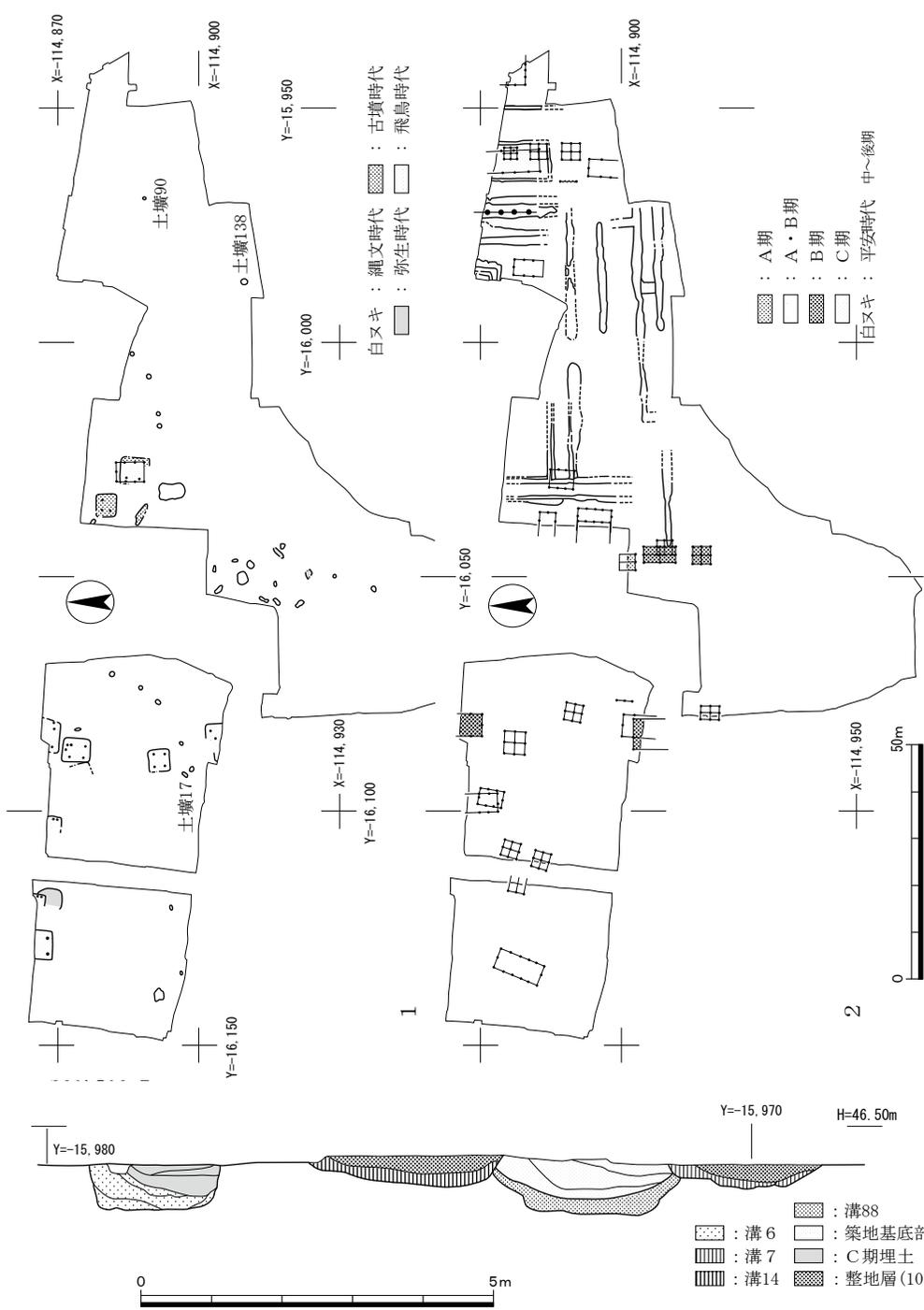


図5 溝6・7・14・88・築地状遺構断面図 (1:100)

図4 1 飛鳥時代以前主要遺構平面図
2 白鳳期以後主要遺構平面図 (1:1500)

C期の溝 20・71・74 B・83 及び溝 7 の東方建物は N 2°24′ W の振れを示す。

平安時代中期から後期 台地部全体に掘立柱建物が展開する。TA～TC区では、掘立柱建物（3棟）と総柱建物（6棟）が、E区では掘立柱建物（6棟）がある。これらの建物の主軸線は、真南北に対し東に傾く振れを有する。なお、これら振れの傾向、出土遺物からみて、数時期・数単位のグループに分けられる可能性がある。

鎌倉時代以降 溝、土壙などをE区北側で検出した。土壙には、第1次調査で検出したものと同様、土壙内に礫が多量に充満したものなどがある。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、瓦、石器（石鏃・石棒・太型蛤刃石斧）、土製品（土馬）、鉄器（釘など）、銭貨（富寿神寶・宋銭）、鉄滓などが出土した。

縄文土器には中期末の平式、後期の中津式・北白川上層式・宮滝式、晩期の滋賀里Ⅲ・V式などがあるが、出土量はあまり多くない。弥生土器は畿内第Ⅰ・Ⅱ様式の壺・甕・蓋などがあるが、第Ⅱ様式のもののみは微量出土したのみである。第Ⅰ様式の壺の文様には、削り出し突帯、貼り付け突帯を有するものがある。古墳時代の土師器には、布留式併行のものに良好な一括遺物がある。須恵器では築地雨落溝 14・83 から、TK 73～216 併行の^{註2}甕が出土している。飛鳥時代の土器は、堅穴住居址から良好な一括遺物が比較的まとまった量で出土している。白鳳期から平安時代前期の土器類は、溝などから大部分出土しているが、あまり出土量は多くない。瓦についてみると、軒丸瓦には内区に複弁 8 弁蓮華文、

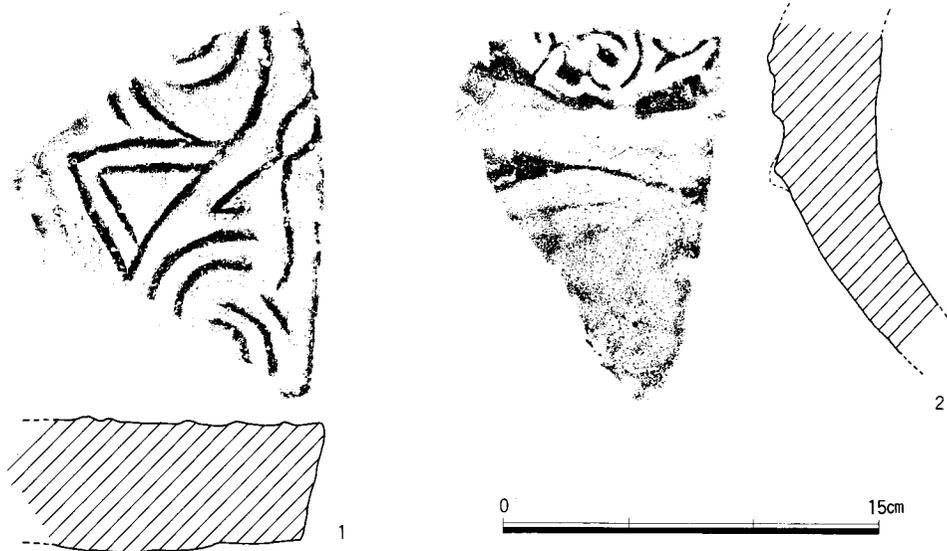


図6 鬼板（1）・（2）実測図（1:3）

外区に雷文を配するいわゆる雷文縁の軒丸瓦がある。中房の蓮子数が3 + 4と1 + 4 + 8の2種類がある。軒平瓦には4重弧文と偏行唐草文があり、このうち偏行唐草文は唐草文の茎と支葉の差異、文様構成などから3種類が出土した。鴟尾、鬼板が出土しており図示した。

鴟尾 鴟尾は胴部上方の一部と考えられる破片で、粘土紐を貼り付けて縦帯を画している。縦帯には粘土を円形に貼り付けて、軒丸瓦状の唐草文を箔押しして表している。

鬼板 軒平瓦と同様の偏行唐草文を飾ったもので、部位は鬼板の右下である。これと類似したものが、第1次調査で出土している。周縁の曲がりぐあいから推定すると、高さ30cm前後と考えられる。

小結 第1次調査では、古墳時代以後の遺構が検出されているが、それ以前の遺構等は不明であった。今回の調査では、縄文時代中期末葉頃の土壌を始めとし、それ以降大宅廃寺直前の竅穴住居址・掘立柱建物を検出した。これらの遺構群は、台地上に散在して分布している。ここでは、白鳳期から平安時代のおおよその様相を記し小結とする。

1 白鳳期から平安時代前期にかけては大宅廃寺に関連する諸遺構を検出した。溝16・53以北で検出した雨落溝は、中心伽藍を取り囲む築地に関連すると考えられる。溝4は、位置関係からみて中心伽藍を構成する建物の雨落溝かとも推定できるが、大部分は調査区外にあり、その詳細は知り得なかった。溝16・53は推定伽藍中軸線(Y = -16,002)付近で途切れ、この途切れる箇所に中門を想定できるが、後世の溝(鎌倉時代)、耕作時の削平あるいは肥溜等により完全に削平、消滅しておりその痕跡すら見出せなかった。C期の遺構のうち、中心伽藍を取り囲む築地雨落溝などは、元の位置ないしはその付近で踏襲されており振れを持たないが、新たに改変されたとみられる遺溝(溝71・83など)は、N24°Wの振れを持つ。C期に大規模な改修が行われたと考えられる。

2 平安時代中期以降になると、倉庫と考えられる総柱建物と掘立柱建物が調査区(台地)全体に分布し、大宅廃寺の大規模な改変若しくは縮小(第1次調査の所見では、平安時代後期にまで存続したとされている)が考えられ、これらの建物群の性格を追究することにより、大宅廃寺成立の背景を究明する糸口になると考えられ、今後の周辺の調査が待望される。(平方幸雄・菅田 薫)

註1「大宅廃寺の発掘調査概報」有光教一・坪井清足

『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』昭和34年

註2「陶邑古窯址群I」田辺昭三 平安学園 昭和41年

43 大藪遺跡 (図版64)

経過 久世中学校校舎改築工事に伴い調査を実施した。当学校内では5回目の調査にあたる。調査対象地は、昭和58年度調査地点に東隣する。調査は流路及びその周辺部での遺構検出を主目的として進めた。

遺構 基本層序は上から、現代盛土層(1.6 m)、耕土層(0.2 m)、床土層(0.3 m)、褐色砂泥層(中世包含層・0.2 m)、暗灰色粘土層(地山)である。暗灰色粘土層上面でSX 1、SX 1の底でSD 2を検出した。調査区北東部のSX 1北肩部平坦面では、遺構は検出できなかった。

SX 1は調査区北東部を除き全域に広がる深さ20cmの落込で、底は平坦である。埋土は灰色砂泥層で黄色砂層が多く入る。

SD 2は調査区南西部で検出した北西から南東方向の流路である。地山層を掘り込み、深さ80cm前後ある。流路内では約5mにわたり杭列を検出した。この杭列は、昭和58年度調査で検出した数列の杭列のうちの「後列」にあたる。杭列部では、砂礫・粘土・腐植土層が互層となって堆積する。杭列と北岸との間は約1.4mあり、暗灰色砂泥層及び黄色砂層が溝状の堆積を示す。杭列の構造は、長さ0.8～1.4mの丸太の先端を尖らせた杭を垂直に数列打ち込み、更に斜方向からも同様な杭を打ち込んで、その間に長さ2m以上の丸太を横にわたし、組み合わせている。

遺物 SX 1・SD 2からは土器類・瓦類・木製品が出土した。土器類には、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器などがあるが、いずれも小片で量も少ない。時期は弥生時代から平安時代である。須恵器杯に「浄」と墨書されたものも1点出土している。瓦類は平瓦のみで小片である。木製品には、人形・斎串・曲物底板などがあり、他に加工木片が数点ある。木製品は主に杭列付近から出土している。褐色砂泥層からは、土師器・陶器・瓦器などが出土した。いずれも鎌倉時代から室町時代のもので、量は少ない。

小結 今回検出したSD 2は、同校内で過去2回にわたり検出した流路の続きと推定できる。この流路は、周辺で実施した立会調査などによって、北西から南東へ流れる幅50

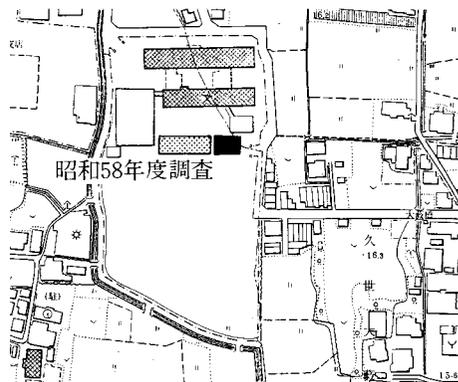


図1 調査位置図 (1:5000)

mに及ぶ大規模なものであることが明らかとなっている。今回の調査地点はこの流路の北岸部に位置している。杭列は北岸に沿って作られているが、調査での検出長が短いことなどもあって、性格等については不明な点が多い。ただ、杭列構造については、土層との関係から明確にすることができ、一定の成果を得ることができた。（上村和直 久世康博）

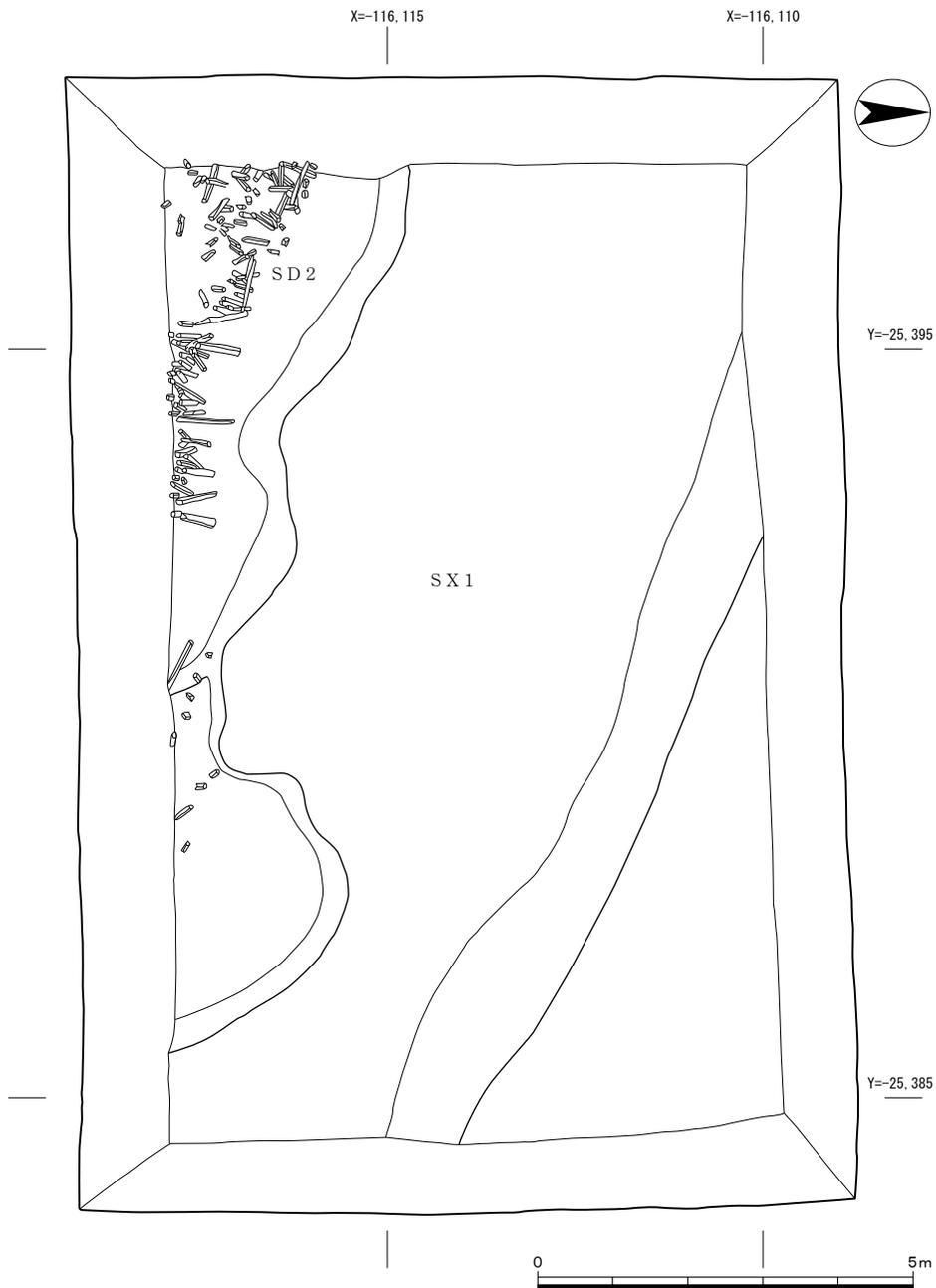


図2 調査区平面図 (1:100)

44 円山古墳

経過 調査地点は西山から南東に延びる段丘の南腹部に位置する。周辺には八幡宮古墳群や丸尾古墳などが点在する。また当古墳に南接して1基確認されていたが、現在は宅地となり全壊している。当古墳も石室の一部と考えられる石列が残存するのみで全壊に近い状態である。調査では石室の遺存状況を確認するため石列に直交するトレンチを設定した。

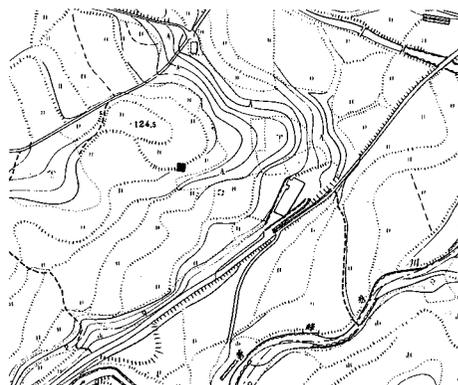


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 調査の結果、明褐色砂泥層（地山）面で石列の掘形を検出した。規模は、幅2 m、深さ1.1 m。掘形の埋土は、表土・耕作土層（第1層）と明褐色砂泥層（第2層）の現代層を除けば、明黄褐色砂泥層（第3層）、黄褐色粘土層（第4層）、浅黄色粘土層（第5層）の3層である。

出土遺物は、掘形からは検出できなかったが、第1層から近・現代の陶磁器片と共に、須恵器高杯の脚部の破片が1点出土した。

小結 当古墳は地形及び石室の一部である石列の残存状況から、東北方向に開口する古墳であったと考えられる。また、今回の調査で検出した石列の掘形が地山を掘り込んで構築されていることから、残存する石列は当古墳の石室北側壁にあたる。石室の規模については、残存する石列から長さ4.5 m以上と考えられる。墳丘の規模、周溝の有無については不明である。

(加納敬二)

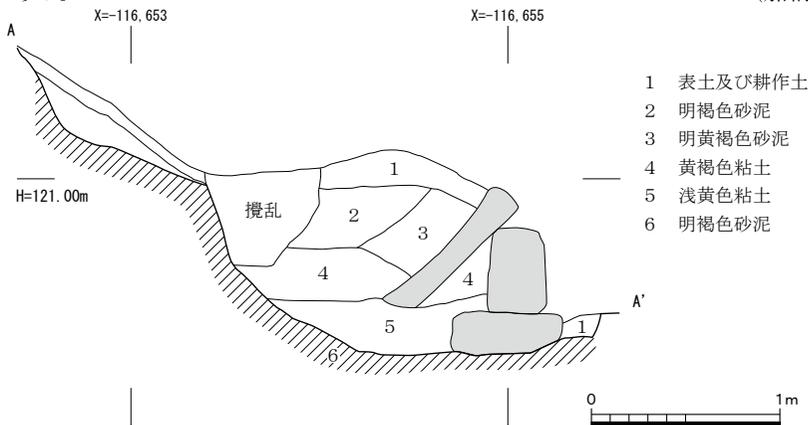


図2 石列掘形断面図 (1:40)

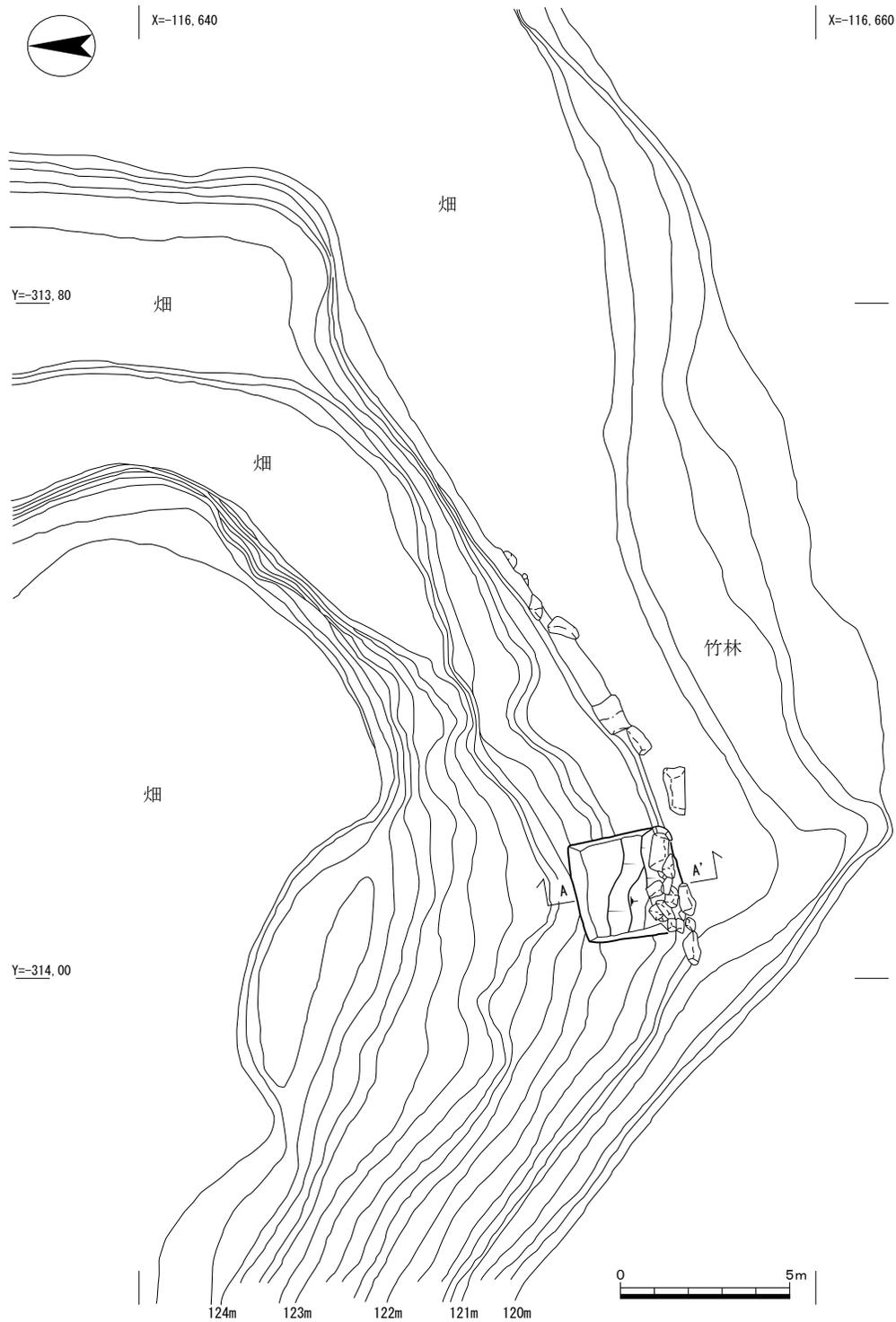


図3 調査区及び周辺地形測量図 (1:200)

第2章 試掘・立会調査

I 昭和60年度の試掘・立会調査概要

昭和60年度における試掘・立会調査は、文化庁国庫補助事業による調査（1024件）と原因者負担による調査（51件）がある。遺跡別には平安宮107件、平安京左京380件、平安京右京224件、鳥羽離宮跡49件、白河街区跡17件、その他の遺跡278件であった。

1 文化庁国庫補助事業による調査 本年度実施した調査は、試掘調査129件、立会調査が895件で計1024件である。その内、特に遺跡の残存状態が良好な16件は発掘調査に切り換えた。以下、調査で知り得た成果について、平安宮、京域、京域外に分けて概略を述べる。

平安宮 朝堂院北回廊基壇南縁部と、大極殿東軒廊基壇北縁部の発見がある。北回廊については、北隣接地（1984年2月発掘調査済み）の成果と合わせて幅12mの基壇を持つものと判明した。又、大極殿東軒廊基壇の検出は、大極殿の位置を決定づける画期的な発見となった。

平安京 条坊遺構としては、左京三条一坊で猪隈小路、左京三条二坊で二条大路、右京五条一坊で五条大路、左京七条二坊で左女牛小路、左京八条二坊で七条大路、左京八条三坊で八条坊門小路の路面をそれぞれ検出し、発掘調査に切り換えた。また右京八条二坊の立会調査（第2章5）で平安時代後期の井戸を検出し、井戸の木枠に使用されていた部材が、長櫃、折櫃を転用したものと判明した。

京域外 栗栖野瓦窯跡の立会調査で、造成地法面に窯体の一部が露出しているのを発見、またその灰原とみられる灰層より平安時代初期の須恵器、緑釉陶器、窯道具などが出土した。一乗寺向畑遺跡の試掘で古墳時代から平安時代中期の遺物を検出し、発掘調査に切り換え、横穴式石室1基を検出した。室町殿跡の立会調査で庭石とみられる石3個検出し、その後の調査によって花の御所の庭園遺構の一部が明らかとなった。鳥羽離宮跡の試掘では、庭園遺構を数箇所において検出し、それぞれ発掘調査に切り換えた。下鳥羽遺跡では古墳時代後期の竪穴住居を初めて検出した。大原野南春日町遺跡の調査では、奈良時代の竪穴住居、平安時代から室町時代の土壇、柱穴、溝、井戸などを検出し、各時代にわたる遺跡分布がより明確となった。そのほか遺跡外では、右京区西京極東衣手町において飛鳥時代の合わせ口甕棺墓が1基発見された。また、西京極桜谷の丘陵部で前方後円墳を2基発見し、山田桜谷古墳群と命名した。

(家崎孝治)

2 原因者負担による調査 平安宮・京城 左京八条二坊の調査（2, 3）では、平安京関連の遺構は猪隈小路、塩小路、大宮大路に関係する側溝、路面状整地土が検出された。中世には蔵骨器を据える土壌が散見され、猪隈小路と堀川小路の間には中世墓地群が想定できることが明らかとなった。

左京九条三・四坊の調査（4）では、弥生時代から近世に至るまでの遺構・遺物を検出した。特に四坊では室町時代の遺構の検出頻度が高く、大きな堀状の遺構も確認されることから、中世村落の存在が予想される。

右京九条一坊（6）では、小規模な調査区が点在しており、まとまった遺構・遺物の検出はなかったものの、弥生時代から古墳時代前期の土壌、遺物包含層を確認している。これらが唐橋遺跡と同様の性格を持つ遺跡ならば更に北へ広がる様相を示している。

京域外 鳥羽離宮跡の調査（7）では、下水道工事に伴う立会調査だけではなく、一部発掘調査をも実施した。鳥羽離宮関係の遺構では、溝・池・地業跡・波止場・井戸・土壌等の検出をみるなど、多くの重要な成果が得られた。特に地業跡にみられる遺構は竹を割って横に使用した土止めの痕跡が確認でき、埋土からは完形の木簡が出土している。

白河街区での調査（11）では、縄文時代後期の土壌を検出した。土壌内からは土器の他に石器が出土しており、北白河上層式Ⅱ期に該当する。調査地周辺でも縄文時代の遺跡が確認されており、当調査区との関連について注目される。

六勝寺関係の調査（13）では、推定法勝寺で狭小な調査面積の中で1基だけではあるが柱穴を検出した。下層遺構では弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構や遺物包含層を確認している。

森ヶ東瓦窯跡・広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡での調査（15, 16）のうち、森ヶ東瓦窯跡では瓦窯の検出はなかったものの、多量の瓦を含む落込が認められ、周辺に瓦窯の存在を窺わせることを確認した。この他新たな知見として、和泉式部町を中心とする地域で弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡を発見している。この遺跡は嵯峨野・太秦では初の発見で、京都盆地縁辺部での遺跡の空白地を補うだけではなく、秦氏の活動直前の様子を知るためには極めて重要な意味を持つ遺跡となるであろう。

極楽寺での調査（18）では、平安時代の寺跡に直接関連する明確な遺構を検出することはできなかったが、遺物の散布状況から寺域の概要は把握できた。調査中に発見された新たな遺跡としては、範囲は明らかではないが古墳時代前期の遺物包含層を確認している。

以上が今年度における試掘・立会調査で得られた成果の概要である。言うまでもなく立

会調査の有効性については、遺跡の分布状況及び全体像の概要を把握できることにある。本年度は太秦地区の調査成果を始めとして周辺地域でも新発見の遺跡を含む重要な調査成果が得られ、改めて立会調査の有効性が確認できた。この有効性を更に拡大させる方向で、今後とも都城遺跡に限らず周辺地域の遺跡を含めた立会調査が重視されるべきであろう。

(久世康博)

2 平安京左京八条二坊 1

経過 調査区は京都市下京区七条通～塩小路通間の大宮通～油小路通間で、行政区では京都市下京区八百屋町・西八百屋町・南八百屋町・川端町・樽屋町・徹宝町・上之町・上中之町・金換町・二軒替地町・清水町などにあたる。平安京条坊では、左京八条二坊一・二・七～十町に推定される。

工事区はA区からJ区までの10区を予定していたが、J区は夜間工事、G区はガス工事との共同工事で施工が遅れたため別の機会に報告する。

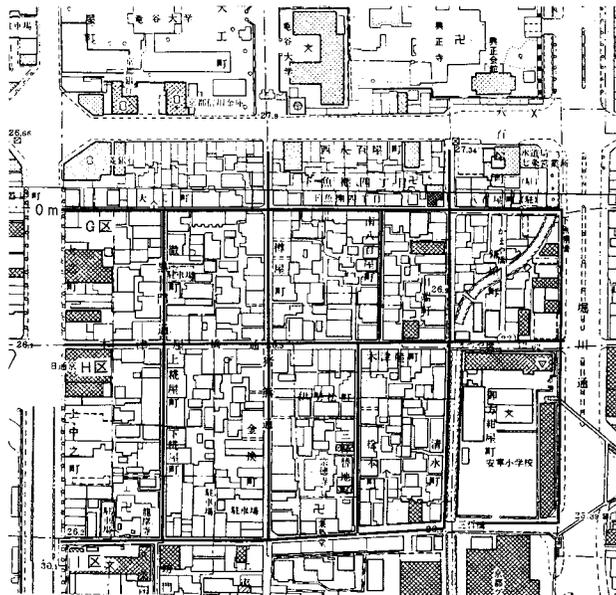


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 A区の北部は攪乱が多く、土層断面を十分に観察できなかつた。135 m地点の土層は上から現代盛土層、暗茶灰色砂礫層（塩小路路面）、灰色砂礫層で第Ⅱ層を掘り込んだ幅0.5 m、深さ0.7 mの近世溝がある。溝は位置関係から、木津屋橋通の北側溝と推定される。近世溝は南0.6 mのところ、幅1 m、深さ0.6 mの溝を検出した。溝の両肩は杭で護岸してあり、埋土は上層が暗黒灰色砂泥層、中層は黒灰色泥土混じり礫層、下層は黒灰色砂泥層で、中層から鎌倉時代の遺物が出土した。位置関係から塩小路の北側溝と推定できる。

B区は攪乱が多く、遺構は検出できなかつた。C区は北部で遺構を検出したが、南部は攪乱が多い。33 m地点での土層は上から現代層、灰色泥土層、暗灰色砂泥層（近世路面）、暗灰色泥砂層、灰色砂層と続く。遺構は第Ⅴ層から掘り込んだ土壌を検出した。45 m地点では、地山の灰色砂礫層上面の暗灰色泥砂層から平安時代中期の土器を採集した。

I区西部は灰色砂礫層が卓越し、遺構は検出できなかつた。D区30 m地点の土層は上から現代層、暗灰色砂泥層（近世路面）、暗灰色泥砂層、暗灰色泥砂層（平安時代前期末の遺物包含層）、灰色砂質土層と続く。55 m地点では、第Ⅱ層の近世路面下層に幅1.5 m、

深さ 0.4 m の近世土壌がある。55 m 地点から 177 m 地点までは大規模な近世土壌が多数あり、それ以前の遺構は残存していない。119.5 m 地点の土層は、現代層、灰色泥砂層、灰褐色粘質土層で、第Ⅲ層を掘り込んで成立している幅 1.1 m の溝状遺構がある。埋土は暗灰色泥土層で、近世の土器が出土した。120 m 地点では地表下 1 m で、幅 1.1 m の溝状遺構を検出し、11 世紀の土器が出土した。122.5 m 地点の土層は、現代層、灰色泥砂層、暗灰色砂層（路面）、暗灰色砂礫層（地山）で、第Ⅲ層を掘り込んだ溝状遺構、第Ⅳ層を掘り込んだ溝状遺構を検出した。120～122 m 地点で検出した溝状遺構は検出の位置関係から、いずれも塩小路に関連する南北溝と推定され、狭い範囲で位置を変えている。

E 区は平安京条坊の猪隈小路と重なっている道路で、調査成果が期待された。10 m 地点の土層は、上から現代層、灰色泥砂層、灰色砂層、灰色泥土層で明確な路面遺構は検出できなかった。90 m 地点では、上から現代層、暗灰色砂泥層、灰色礫層、灰色・黄色混じり泥砂層で、第Ⅲ、第Ⅳ層は路面状整地層である。230 m 地点から南部では路面状整地層は明確でなかった。

F 区 80 m 地点の土層は、現代層、暗茶灰色砂層（路面）、灰色砂泥層、淡茶灰色砂泥層、褐色礫層と続く。検出した遺構は第Ⅳ層を掘り込んだ溝、埋土は灰色泥砂層、淡茶灰色泥砂層であるが、遺物は出土しなかった。検出位置から塩小路北側溝と推定される。125 m 地点の土層は、現代層、暗灰色砂泥層、暗茶灰色砂泥層、灰色混礫泥砂層、暗茶灰色泥砂層、暗灰色混礫泥砂層と続く。検出遺構には第Ⅳ層を掘り込んだ土壌があり、第Ⅴ層は鎌倉時代の遺物包含層、第Ⅵ層上面には所々に灰色粘土層があり、9 世紀後半の遺物を含む。H 区は現在木津屋橋通りと名付けられているが、平安京条坊の塩小路に該当する。0～80 m 地点では、工事掘削幅が電話線埋設の掘形内にあたり、全面が攪乱土層であった。86 m 地点の土層は、現代層、暗灰色砂泥層、灰色砂礫層（路面）、暗茶灰色土層（中世遺物包含層）、茶灰色砂泥層（中世遺物包含層）、灰褐色砂礫層であった。第Ⅰ層から第Ⅲ層までが路面状整地層で、この下層は中世の遺物包含層で、134 m 地点まで続く。134.5 m 地点の土層は、現代層、灰色砂泥層（路面）、灰色砂礫層（路面）、茶灰色土層、淡褐色土層（整地層）、灰色砂層、暗茶灰色泥砂層、灰色砂質土層と続き、基本的には 86 m 地点の土層と同じである。134.5 m から東部は上層が攪乱を受けていたが、最下層第Ⅷ層の灰色砂質土層を掘り込んで幅 1.5 m の溝を検出した。この溝は幅 0.4 m の暗青灰色泥砂層を埋土とする溝と、規模の大きい暗灰青色砂泥層を埋土とする溝に分かれ、切り合いからみて前者が新しい。溝の東肩部は暗灰青色砂礫層の路面を掘り込んで成立していることが確認

できた。この溝は位置関係から猪隈小路西側溝と推定できる。235 m地点の土層は、現代層、灰色砂礫層1（路面）、灰色砂礫層2（近1世路面）、暗灰色砂礫層1（路面）、暗灰色砂礫層2（路面）、黄灰色砂礫層（路面）、黄灰色砂層、灰色砂泥層（9世紀前半の遺物包含層）、灰褐色砂層、褐色砂礫層と続く。300 m地点の土層は、現代層、灰色砂礫層（路面）、茶灰色砂礫層1（路面）、茶灰色砂礫層2、暗灰色砂礫層（遺物包含層）、灰色砂礫層である。第Ⅱ層から第Ⅴ層は路面状の整地土層である。

H区は平安京の塩小路に該当するが、調査の結果2つに分けて考える必要がある。猪隈小路の西部は近世路面の下層が鎌倉時代後期から室町時代の遺物包含層で、当該期の路面はない。これに反して、猪隈小路東部には現代から平安時代中期まで連続した路面状整地土層を確認でき、しかも最下層には9世紀前半の良好な遺物包含層があり、この時代には路面が存在しなかったと推定できる。

遺物 平安時代前期から近世までの各時期の遺物が出土した。中でもまとまりのあるのは、H区224 m検出の9世紀前半の土師器・須恵器である。この地点は塩小路に推定でき、条坊遺構の存在や路面状整地土層の検出が期待されたが、確認できたのは遺物包含層であった。出土遺物の破片は大きく、塩小路の側溝関係の遺物と考えられるが、層が薄く条坊溝の推定位置から北にずれることから包含層の遺物として扱う。H区の110 m付近の近世路面下層からは室町時代の遺物が出土し、古代・中世の路面状整地土層がないことを確認した。

小結 猪隈小路側溝・路面、中世の土壌など多数の遺構・遺物を検出している。堀川小路に関しては、G、H区で断面観察を行ったが、明確な路面遺構・流路痕跡などは検出できなかった。ただ、G区で地表下2.0 m付近でも砂泥層が堆積すること、H区300 m地点で最下層の路面埋土中に木器が含まれていたことなどは堀川小路の近辺でもあり注目される。花屋町以南の堀川小路は東本願寺の建立に伴って川が埋め立てられたが、それに伴う整地層は検出できなかった。油小路・猪隈小路では良好な路面遺構を確認し、路面が平安時代前期から現代まで存続していることを確認した。ただ、E区での猪隈小路を境にして、西と東で路面の成立時期が異なる問題については今後資料を蓄積し検討したい。

（百瀬正恒・吉村正親）

3 平安京左京八条二坊 2

経過 調査地点は京都市下京区下魚棚通大宮東入の大工町及び七条通油小路西入の油小路町で、平安京左京八条二坊一・八・九・十六町にあたり、大宮大路、猪隈小路、堀川小路、油小路の検出が期待された。大宮大路は大路中央に排水路が想定され、東接する堀川小路や西洞院大路と共に左京域の主要な排水機能を持っていたとされる。調査区間は、下魚棚通の大宮通から油小路通間の約 700 m である。なお、この調査は平安京八条二坊 1 の G 区にあたる。

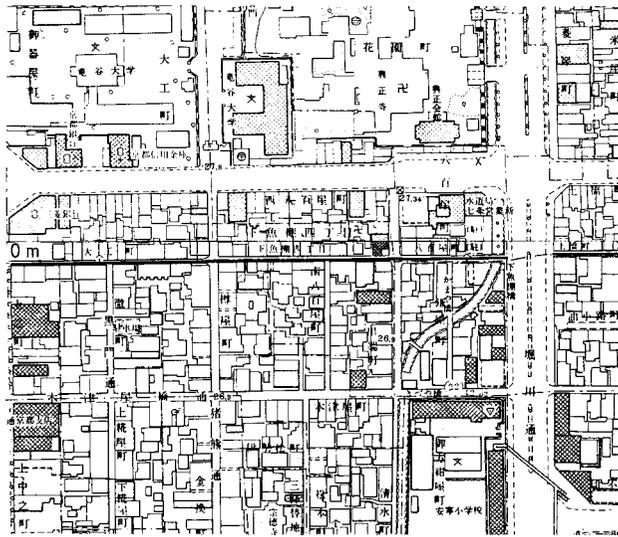


図 1 調査位置図 (1:5000)

遺構・遺物 6.5 m 地点の土層は、上層から現代路面、暗灰色砂礫層（路面）、暗灰黄色砂礫層（路面）、灰黄色砂礫層（路面）、灰色砂礫層（路面）、茶灰色砂礫層（路面）、灰黄色砂礫層（路面）、灰黄色砂泥層（路面）、暗灰色泥砂層（9 世紀後半の土師器出土）灰色泥土層、灰色粗砂層、暗褐色砂礫層となる。土層の多くは路面に関係したもので、下層には平安時代中期の遺物を含むことから中期以降の大宮大路の路面と推定できる。

8.2 m から 9.5 m 地点にかけて溝を検出した。溝東肩部の土層は上層から現代路面、暗灰色砂礫層（近世）、灰黄色砂礫層、灰褐色砂礫層、灰色砂質土層、灰色シルト層と続き、灰黄色砂礫層上面で溝を確認した。溝の埋土は上層から茶灰色砂泥層、灰色礫混じり砂泥層、灰色砂礫層と続くが、底部は掘削深の 1.5 m では確認していない。9.5 ~ 9.7 m 間は攪乱で確認していないが、9.7 m から西部にかけても溝の埋土層があり、10.3 m 地点を例に取れば上層から灰黄色砂層、暗灰色泥砂層、灰色礫混じり砂泥層、灰褐色泥砂層、暗灰色泥砂層（近世陶器出土）、灰褐色砂層（龍泉青磁・口禿白磁出土）、灰褐色礫層となる。この土層は工事区の西端の 15.9 m まで確認でき、幅 6.2 m 以上の流路である。この溝と 8.2 m 地点溝とは埋土に差があり、9.7 m から確認した溝が先の溝より新しい可能性が高い。

40 mから100 m地点間の土層は、路面下0.5 m～0.7 mまで近世の路面埋土層が続き、72 m地点では路面の下層には暗灰色泥砂層があり、室町・鎌倉時代の遺物が出土する。

84 m地点では路面の下層には暗灰色泥砂層と灰黄色粘質土層があり、最下層は平安時代の遺物含有層である。

106.4 m地点では幅1.5 mの井戸を検出した。土層は上層から現代路面、暗灰色泥砂層(現代攪乱)、灰黄茶色泥砂層、暗灰色泥砂層、暗灰色泥砂層、黄灰色粘土層と続き、井戸掘形は第3層の下層にある。灰色泥砂層が埋土で径10～15cmの礫を含む。この地点から東には黄灰色粘土層面で成立している遺構が多く、各遺構から平安時代前期の遺物が出土した。

119.9 m地点の土層は。上層から現代路面、焼土層、暗灰色泥砂層、灰茶色砂泥層(路面)、暗灰色砂泥層(路面)、灰茶色泥砂層(室町時代遺物包含層)、暗灰茶色泥砂層(室町時代遺物包含層)となり、近世路面下で室町時代の包含層を検出できる。

123 mから126.2 m地点にかけて室町時代の遺物包含層を掘り込んだ近世土壌を検出した。土壌埋土中には多量の貝を含む。土壌東肩の土層は上層から、現代路面、暗灰色砂礫層(路面)、灰色砂礫層(路面)、暗灰色砂泥層(路面)、暗灰色砂泥層(路面)、灰褐色砂礫層(路面)、暗灰色砂礫層(路面)、灰色砂礫層(路面)、灰色粘土層、灰黄色砂礫層と続く。上から4層まで近世の路面状の整地土層で、第Ⅴ層～Ⅷ層はそれ以前の路面である。特にⅣ～Ⅷ層は固く締まり、第Ⅷ層から平安時代の銅銭(鏡益神寶)が出土した。この路面埋土は位置関係から猪隈小路の路面と推定できる。

165 mから240 m地点にかけては中世の土壌を多数検出した。193 m地点の土層は現代路面、暗灰色砂泥層(路面)、暗灰色泥砂層、暗灰色泥砂層(室町時代遺物包含層)、灰色粘質土層と続く。第Ⅳ層には点々と骨片を含み、墓地に係する土層である。

193 m地点では第Ⅳ層上面で検出した蔵骨器を検出した。掘形は不明瞭であるが、径20cmの瓦質羽釜を据え、中に火葬骨をいれ、土師器皿2枚を裏返して重ねる。蔵骨器と同一形体・規模の羽釜で蓋をする。この西部には暗灰色砂泥層を埋土とする土壌が多数あり、幾つかは墓と推定できる。

203.6 mから204.6 m地点にかけて土壌を検出した。東肩を検出しただけで規模は不明。土壌の埋土は2層有り、上層は暗茶灰色泥砂層で、下層は灰色砂質土と暗茶灰色泥砂とのブロック層で下層埋土上面に径20～30cmの石を据え付けていた。土壌の成立面は近世路面の下層に茶灰色砂泥層があり、この下面から成立している。

堀川小路に推定されている 250 m地点周辺は攪乱が多く、土層の安定を欠いている。

259 mの土層は上面から現代路面、暗灰色砂泥層、暗灰色砂泥層(路面)、灰褐色砂礫層(路面)、暗灰色砂泥層(路面)、淡灰色土層(流路埋土)、暗灰色砂泥層、灰色砂泥層、暗茶灰色泥砂層(流路埋土)と続く。路面は近世の路面敷きで、この下層は旧堀川の埋土と考えられる。

堀川通の東部 358 mから 410 m地点の調査区西部は攪乱が多く良好な土層断面や、遺構・遺物を検出できなかった。393 m地点の土層が上面から現代路面、焼土層、暗灰色砂泥層(路面)、灰褐色砂泥層(路面)、暗灰色砂泥層(路面)、灰色砂泥層(路面)、暗灰色泥砂層となり、この下層は径 5～10cm の礫を多量に含む中世の土壌である。

403.3 m地点の土層は上層に近世の路面状の整地土層があり、この下層に暗茶灰色泥砂層がある。この下層には 3期の溝が重なっている。幅は 0.4～0.6 mで、深さは 0.3 m～0.6 m、埋土は暗茶灰色砂泥層である。溝東部には灰色砂礫層を中心とする路面の埋土がある。各層とも固く締まっている。溝と下層の路面状の整地土層は検出位置から平安時代の油小路路面と推定できる。

小結 調査の結果、平安時代前期から近世までの遺構・遺物を多数検出した。主要な遺構は大宮大路路面・溝、猪隈小路路面、油小路西側溝・路面、蔵骨器、土壙、井戸、遺物包含層などである。

大宮大路関係では路面・溝を検出した。路面は 8層確認でき、厚さは 1.1 mに達する。路面下層の XI・X層からは平安時代中期の遺物包含層が確認でき、この地点の路面成立期を決めることができる。路面西部では 2時期と推定できる溝を検出した。幅は 7.7 m以上あり、深さも 2 m以上である。溝の成立時期は、平安時代中期の遺物包含層を切っていることからこれ以降であり、溝の埋土中に鎌倉時代末の遺物を含むことからこの間が考えられるが、溝出土遺物は少なく、かつ底部を確認していないことから、厳密に成立時期を決められない。

猪隈小路関係では、厚い路面状の整地土層を確認したが、側溝は攪乱のため検出できなかった。下層の路面からは皇朝十二銭が出土した。堀川小路関係では攪乱が多かったことや、掘削が浅く明確な遺構は検出できなかったが、流路埋土を検出した。

下魚棚通りは路面埋土の出土遺物や路面下層から検出した遺構から、室町時代後期以降、近世の路面と推定できる。

猪隈小路と堀川小路の間には墓地関係の遺構が検出でき、現位置をとどめる蔵骨器を検出した。

(百瀬正恒)

4 左京九条三・四坊

経過 調査地は京都市南区東九条下殿田町・東九条南烏丸町・東九条中御霊町・東九条東御霊町で、平安京左京九条三・四坊にあたり、九条大路の検出が期待された。

調査は夜間工事（0～120 m, 700～830 m）分を除外し、その他の部分を実施した。

遺構・遺物 120～140 mにかけて九条通の側溝を検出した。幅は工事掘削が溝と平行したため不明であるが、深さは残存状況の良いところで0.8 m前後あり、2層の埋土が確認できた。140 m地点では埋土の上層が暗灰色泥土層、下層が茶灰色泥砂層となっていた。130 m地点では溝の護岸の横木を検出した。遺物は木片が多く、土器が少量出土した。

309 m地点で曲物を井筒とする井戸を検出した。掘形は径2.1 m、深さ1.2 mである。底部に径0.3 mの曲物を据えて井筒としている。井戸の埋土から中世の土器が少量出土した。

351 m地点で幅1.7 mの溝状遺構を検出した。埋土は上層が暗灰色泥砂層、下層が灰色砂層で、1.1 mの深さがある。出土遺物はなかった。

617 m地点で幅2.6 m、深さ1.0 mの溝を検出した。埋土は上層が粗砂と礫混じりの灰色泥砂層、下層は暗褐色灰色泥砂層で、室町時代の土師器が出土した。

620 m地点で幅3.4 m、深さ1.0 mの溝を検出した。埋土は茶灰色泥土層で、室町時代の瓦、土師器を含む。

630～641 mにかけて幅5 m前後の溝2条を検出した。630～635 mまで続く溝は灰褐色砂泥層を埋土とし、瓦が少量出土した。635～641 mまでの溝

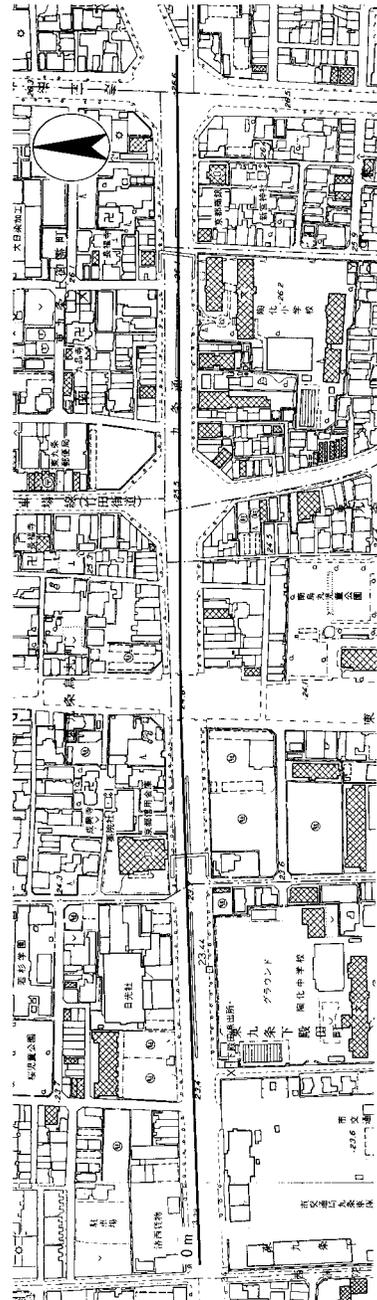


図1 調査位置図 (1:5000)

は暗灰色泥土層を埋土とする。深さは共に 1.0 m 前後で、底部は地表下 2.1 m にある。

692 m 地点で幅 3.1 m、深さ 0.4 m の土壙を検出した。灰色泥砂層が埋土で、弥生土器の小片と中世土器が出土している。

738 m 地点で幅 1.3 m、深さ 1.0 m の土壙を検出した。埋土は灰茶色泥土で、弥生土器片が出土した。

小結 遺構の分布とそのベースを形成している堆積層は西と東で二分される。西部の 600 m 地点までは地山の堆積層が砂礫層を主体として、間に砂層・泥砂層を含むもので、砂礫層は灰色系の色調を基調にし、その密度も低く沖積世の中でも新しい河川堆積による土層と考えられる。これらの層上に形成されている遺構や遺物包含層は 220 m 地点で検出した弥生土器包含層、室町時代の井戸や土壙、近世の九条大路側溝などがあるが、その数は少なくまた検出密度も粗く、多くは水田・畑などの耕作地として利用されたと推測される。

東部は弥生時代から近世までの各種の遺構を検出でき、生活空間としての多様な利用形態を遺構から判断できる。特に 630 m 地点では南北方向の 3 m 前後の規模を持つ堀状遺構をいくつか検出でき、室町時代の出土遺物と遺構規模から中世集落の堀を判断できる。



(百瀬正恒)

室町時代の井戸

5 平安京右京八条二坊

経過 調査地点は、平安京右京八条二坊十二町に位置する。昭和61年2月5日に建物基礎工事に伴う立会調査を実施したところ、縦板組みの井戸を1基検出した。井戸の遺存状態が良好なため、現状保存し、日を改めて調査を行うこととした。調査は昭和61年2月21日の1日間行った。

遺構・遺物 井戸は方形の縦板組で、掘形は東西5m、南北3m以上の隅丸方形に近い形状を呈し、深さは1.8mある。木杵は、幅約0.2mの縦板4枚を一辺とし、横棧で支持し、隅板をもって固定する。側板の背部にはさらに裏込め板を充てる。井戸底は最下部に曲物を据え、曲物の上部周縁に平瓦を敷いて形成する。

井戸の掘形より12世紀後半の、井戸内埋土より13世紀前後の土器類が出土している。軒瓦には、四天王寺出土瓦と同范例のある三巴文軒丸瓦や、大府吉田窯の灰釉軒平瓦などがある。その他の出土遺物には、井戸内より竹製の柄杓、箱、井戸側板の裏込め板として再利用されていた長方形曲物などの木製品がある。箱は、底板一枚と側板4枚の組合せ箱である。側板は、両端にホゾになるものと、切欠になるものを交互に組み合わせる。箱の内寸法は16.1cm四方、残存内高11.0cm、厚さ0.9cmで、材質はヒノキである。

長方形曲物はいずれもヒノキの柾目板で、全形を知り得るものには、長径132.0cm、短径53.5cm、厚さ0.9cmのもの、長径75.5cm、短径45.3cm～48.0、厚さ0.8cmの2種類がある。

小結 長方形曲物には、蓋板、側板、底板があり、それぞれ『絵巻物』や『延喜式』に見える長櫃、折り櫃に比定でき、その中には全形を知り得るものもあり、きわめて貴重なものである。また箱は、上部を欠き全形を知り得ないが構造的には柁の形態的特徴を持ち、現存する最古の柁の部類に属する。

(家崎孝治)

『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 昭和61年度 1987年報告

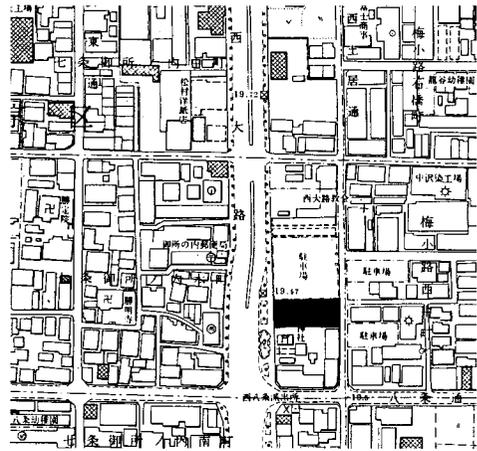


図1 調査位置図 (1:5000)

6 平安京右京九条一坊

経過 調査地は、京都市南区唐橋門脇町・井園町で、平安京の右京九条一坊・西寺跡にあたる。調査面積は小規模であったが、弥生・古墳・平安時代の遺構が検出できた。

遺構・遺物 A区75～110m地点で池状の遺構を検出した。土層は

上から現代攪乱、灰茶色泥砂層、灰色泥砂層、灰色砂礫層で第Ⅱ・Ⅲ層が池埋土である。

B区では70m地点で溝状遺構を検出した。南北幅で2mを確認したが南肩は工事範囲内では検出できなかった。北肩部の土層は上から、現代路面、灰色砂礫層（路面）、灰褐色砂礫層で溝は砂礫層を切って成立している。溝の埋土は、暗灰色泥砂層、灰褐色砂泥層（瓦出土）となっている。

C区では10～30m地点にかけて平安時代中期の遺物包含層を検出した。27m地点の土層は上から現代路面、灰茶色砂泥層、茶灰色泥砂層（平安時代中期の遺物包含層）、灰色泥砂層、灰色砂質土層と続き、第Ⅲ層に平安時代中期の遺物が含まれていた。F区では古墳時代前期の遺物包含層を検出した。土層は上から、現代路面、暗灰色砂泥層、暗灰色泥土混じり砂泥層（遺物包含層）、茶灰色粘土層、淡灰茶色粘土層と続く。遺物の量は多い。

G区では弥生時代中期の土壌を検出した。北肩部だけの検出で幅2.3m確認したが、南肩部は不明。土壌埋土は灰色土層、礫混じりの暗茶灰色土層と茶灰色土層である。北肩部の土層は現代路面、灰色砂泥層（路面）、茶灰色粘土層、灰黄茶色粘土層で、第Ⅲ層を切って土壌が成立している。

弥生・古墳時代の遺物は小破片のものが多く、高杯・甕・壺などがある。

小結 調査地は平安京の右京九条一坊にあたり、針小路などの条坊遺構検出が予想された。小路推定地では、路面埋土や側溝の遺構は検出できなかった。B区では東西方向の溝状遺構を検出したが性格は不明である。他に、C区で平安時代の遺物包含層・土壌を検出したが、範囲は狭い。F・G区では弥生時代中期と古墳時代前期の遺物包含層・土壌を検出した。弥生時代の遺構は南接する八条小学校でも検出されており、さらに南の唐橋小学校とその周辺地域では古墳時代前期から後期の遺構も検出されており、規模の大きな遺跡である。

（百瀬正恒）

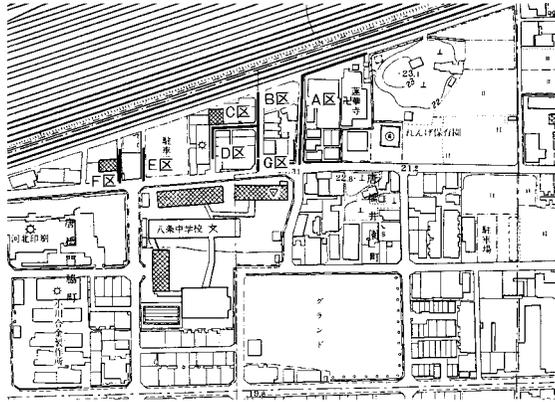


図1 調査位置図 (1:5000)

Ⅲ 平安京域外の遺跡

7 鳥羽離宮跡 1 (図版 65・66)

経過 調査地は鳥羽離宮東殿に位置する京都市伏見区竹田浄菩薩院町・裾川町・田中宮町・桶ノ井町・内畑町を中心とした道路上である。今回の調査は公共下水道工事に伴う立会調査であるが、過去の鳥羽離宮跡の発掘・立会調査の成果を踏まえ下水道局との協議の結果、一部につき発掘調査を実施することとした。なお工事区は2工区(SW-33/A区, SW-57/B区)に分かれているが、調査対象地が同一遺跡(東殿)に当たるため今回は一括で報告する。A区で発掘調査を行ったのはマンホールNo.19～21である。B区で実施した地区はマンホールNo.20～25, No.38・39, No.12～13の3箇所である。調査の結果、弥生時代から江戸時代までの溝・濠・園池・汀線・地業など多くの遺構を検出した。

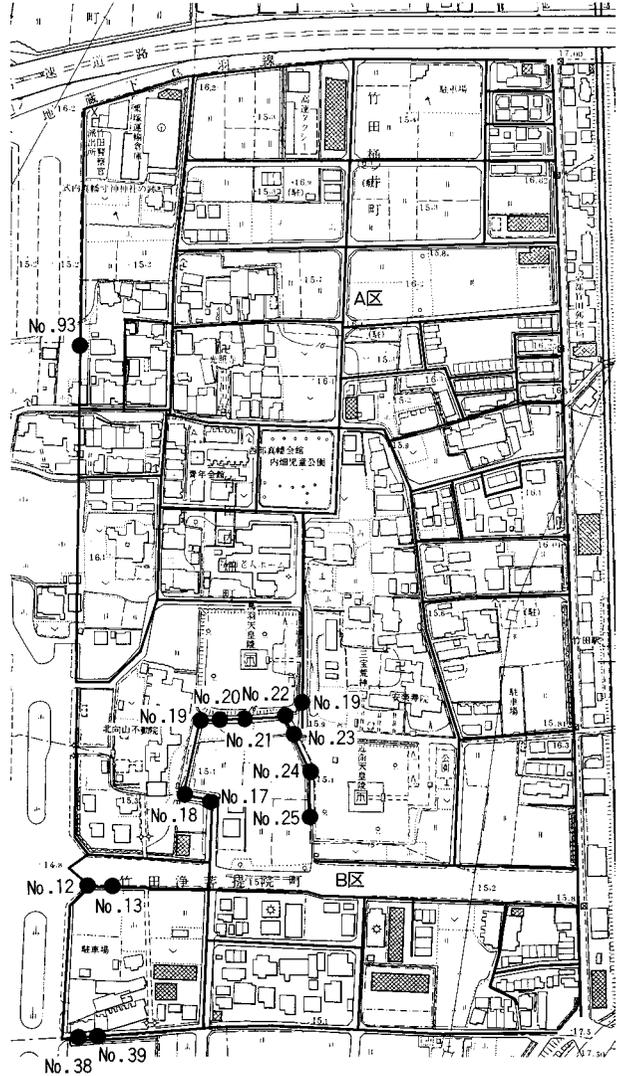


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 今回の立会・発掘調査では数多くの遺構を検出したが、ここでは発掘調査で検出した主な遺構と立会調査で検出した溝・井戸などについて述べる。A区のマンホールNo.19～21では堀か溝に伴う護岸施設の一部を検出した。これは慶長年間に整備された安楽

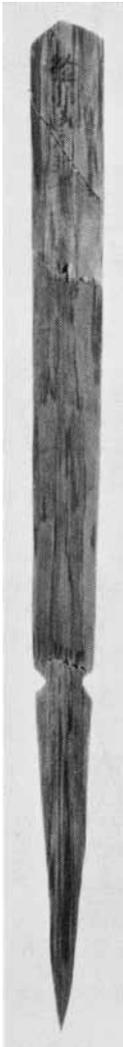
寿院十二坊を区画するもの、あるいは現在の鳥羽天皇陵が整備される以前のものと考えられるが、調査区の幅が1mと狭く規模・性格など不明な点が多い。工法は樹皮のままの丸杭を打ち込み、横に丸太をあて更に小石で補強している。調査区の基本層序は上から現代盛土層（約60cm）、暗オリーブ泥土層（約20cm）、オリーブ黒色土層（約15cm）、オリーブ黒色粘質土層（約30cm）、以下灰色砂礫層となる。暗オリーブ泥土層・オリーブ黒色泥土層は江戸時代の整地層・遺構埋土である。立会調査では、マンホールNo.93より北3m地点の地表下140cmで弥生時代の東西溝を検出した。溝は約80cm、深さ約60cmのU

字形を呈し、埋土は暗茶褐色泥土（炭混）層である。

B区のNo.20～25の調査区では溝と土止遺構を検出した。溝は両肩口に拳大の礫が敷き詰められていた。溝内堆積土は褐色の腐植土である。この溝は第58次調査で検出したSX2と同一の遺構と考えられる。No.25近衛天皇陵西側で検出した土止遺構は南北方向であった。工法は杭を打ち込み竹を絡ませ、シガラミ状にしたものである。打ち込まれた杭は面取りが施されているものや樹皮のままのものがある。竹は半截され、横方向に用いている。検出したシガラミの中で、最も遺存状態の良好な箇所は、竹を7段に組み高さは30cmを測る。この土止遺構は第44次、第112次調査で検出した突堤状遺構の土止遺構の一部と考えられる。この突堤状遺構の認められる範囲は、東殿に造営された園池の東半部の一部である。土止遺構の外側埋土からは、平安時代後期の土器類と共に木簡が出土した。

No.12～13で石積遺構を再調査した。この遺構は昭和47年度の発掘調査で発見したものである。当初この遺構は船入と推定されていたが、金剛心院の釈迦堂や九体阿弥陀堂で検出した掘込地業と同様なものであることが確認されたため、これを地業と改めた。

立会調査のNo.17～18では、東殿に造営された園池の汀を発見した。汀は西から東へ緩やかに傾斜し、一部拳大の礫を敷き詰めて州浜を作り出している。この州浜は園池を一周している。池内の堆積土は砂混じりの腐植土層で、樹木、木葉、種子などが含まれている。園池の北東部で西岸を検出したのは、今回が初例である。この園池の汀からわずかに西へ行った陸部では同時代の井戸を検出した。基本土層は、現代盛土層及び旧耕作土層（105cm）以下は暗青灰色粘土層（25cm）、暗灰色粘土層（50cm）以下砂礫層である。井戸



出土木簡

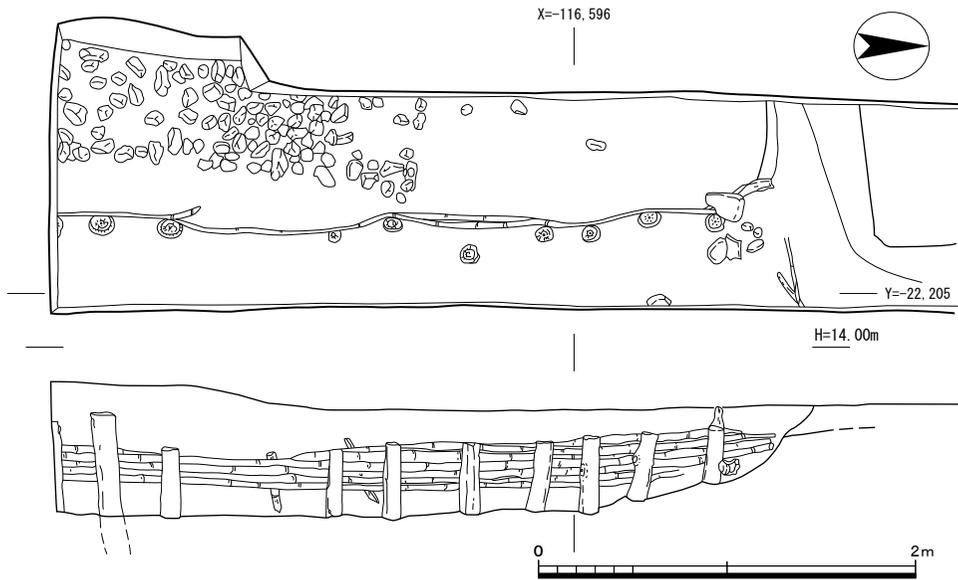


図2 遺構実測図(1:40)

の構造は、下部に曲物（約40cmのほぼ円形）を置く。その外周に平瓦を立てて並べ、瓦と瓦の隙間を補うようにもう一重平瓦を配している。上部の構造は不明である。埋土（暗灰色泥土）からは、ほぼ完形の土師器皿・平瓦・箸などが出土した。

遺物 出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・木簡（1点）・箸など整理箱40箱分出土した。これらの大半は発掘調査を実施したA区のNo.19～21、B区のNo.12～13とNo.18で検出した井戸（平安時代後期）から出土したものである。

木簡は長さ61cm、最大幅4.5cm、厚さ0.4cmを測る。「検非違所別當式尺口」の墨書が認められる。形態は長方形の板材の上部を山形に削り、下端部は左右から削り尖らせる。文字は上端から3分の1まで書かれており、同じく3分の2の所に左右からの切り込みがある。

軒瓦は、鳥羽天皇陵の南辺部と東辺部の周辺から主に出土した。軒丸瓦1～4は、いずれも尾張産の三巴文軒丸瓦である。1～3は瓦当面に灰釉を施している。2・3は瓦当裏面を丁寧ヘラでケズっている。4は瓦当面に釉を施さない。瓦当裏面はナデで仕上げる。5は慶長年間以降の安楽寿院に使用された軒丸瓦である。軒平瓦6～8は尾張産であるが、成形手法・胎土ともにそれぞれ異なっている。6は折り曲げ手法で瓦当部を形成している。また瓦当面の一部に釉を施している。7・8は連巴文であるが、巻き込みの方向や巴



图3 出土軒瓦拓影・実測図 (1:4)

文間の表現などが異なっている。8は頸の下端面から平瓦部凸面には、市松文様の布目痕が認められる。10は南都系のものである。この形式のもものは、今回初めて出土した。鎌倉時代前半から中頃のものと考えられる。

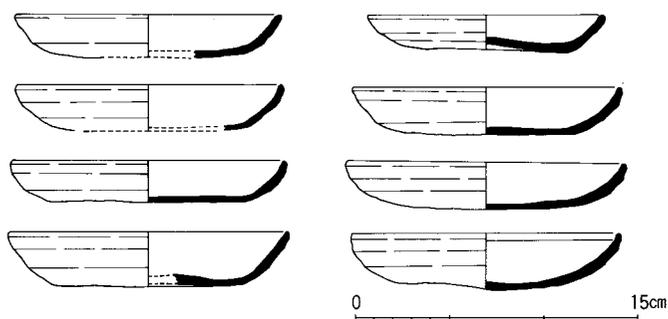


図4 No. 18 井戸出土土師器実測図 (1:4)

土器は、調査区全体からみても出土量は極めて少なかった。ただマンホールNo.18地点で検出した井戸内からは比較的良好な土器が出土した。出土した土器は、すべて土師器の皿で遺存状態は良好であった。

小結 調査地周辺では、現在までに数十次にわたる発掘調査を実施している。その結果、東殿の南半部に造営された園池や建物の地業などを一部明らかにした。しかしながら、この付近には御陵や寺院の境内が多く東殿内の遺構の配置や規模についてはまだ不十分な点が多い。このような状況下で実施した今回の調査では、従来全く知られていなかった遺構や、新しい知見を得ることができた。以下それらについて若干述べてまとめとしたい。

1 近衛天皇陵の西辺（マンホールNo.24～25）では、園池内に突き出た突堤状の遺構を検出した。このような遺構は、第44次調査で一部検出しているだけでその実態はほとんど不明であった。これによって東殿に造営された園池の北半部は、ある時期に現在の御陵を囲むような堤を付け加えた可能性が考えられるようになった。近年、白河天皇陵を取り囲むように設けられた濠を検出しているが、本例のような性格のものかも知れない。

2 北向山不動院の東側（マンホールNo.17～18）で発見した汀は、園池の北西部付近と考えられる。これによって園池の規模を推定できるようになった。

3 今回鳥羽天皇陵の南辺と東辺を限る道路内を発掘調査したが、建物などを発見することができなかった。現在の鳥羽天皇陵の規模は、白河天皇陵造営当初の大きさに近い。鳥羽天皇陵は造営当初からあまり変化していないとみられる。

(磯部 勝・鈴木久男)

8 鳥羽離宮跡 2

経過 調査地は、京都市伏見区中島御所ノ内町、中島前山町内の、国道1号線から一筋西側の通りで、鳥羽離宮南殿公園に南接する道路から府道伏見向日線までの道路上である。工事区の全長は約250mであるが、工事方法が鋼管推進工法のため立杭部分の6箇所について調査を実施した。

調査地は、鳥羽離宮南殿跡に該当し、これまで実施された周辺の発掘・立会調査では、建物・庭園・土壌などが確認されており、今回の調査でも南殿に関連する遺構・遺物を検出することが予想できた。

調査の結果、平安時代の遺物を包含する池あるいは低湿地状の堆積を示す土層を確認することはできたが、他の遺構は検出できなかった。

遺構・遺物 調査を実施した6箇所の立杭部分の基本的な層序は、まず地表下120cmまでが現代盛土層である。現代盛土層下は、暗茶灰色泥土層・暗灰色泥土層(40～50cm)、暗灰色粘土層(50～90cm)、褐色砂礫層などが堆積する。これらの土層のうち暗茶灰色泥土層・暗灰色泥土層は調査区域内のほぼ全域で検出しており、この土層からは小片ではあるが平安時代後期に属する土師器・平瓦が出土した。またこの土層には植物遺体が多く含まれており、池あるいは低湿地状遺構の堆積土と考えられる。

小結 今回の調査で検出した暗茶灰色泥土層・暗灰色泥土層が、人工的な池状遺構の埋土か、自然の低地に堆積した土層かは確認することはできなかった。しかしこれまでに実施された周辺地域における発掘・立会調査の成果と今回の出土遺物などを考え合わせると、南殿の池の一部か、あるいは自然の低地を利用した池の可能性を示している。

(磯部 勝)

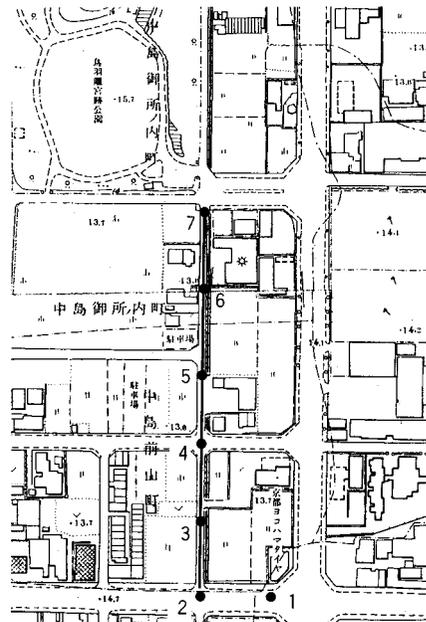


図1 調査位置図 (1:5000)

9 鳥羽離宮跡3

経過 調査地は、京都市伏見区中島堀端町、竹田踞川町の、新堀川通から二筋西側の通りで、堀端児童公園に南接する通りから府道伏見向日線までの間の道路上で、工事区全長は約410mにわたる。工事方法は鋼管推進工法のため、調査は立坑部分の8箇所で行った。

この地域は鳥羽離宮跡中島に推定されている。調査の結果、鳥羽離宮に関する建物などの遺構は検出できなかったものの、立坑No.3及び立坑No.5の2地点では弥生時代から平安時代にかけての遺物包含層や自然流路と考えられる土層堆積層などを確認することができた。

遺構・遺物 立坑No.3の基本層序は、上から現代盛土層（約80cm）、暗灰色泥土層（約70cm）、暗灰色粘土層（約40cm）が堆積する。暗灰色粘土層以下は褐色砂礫層となる。このうち暗灰色粘土層には弥生時代の遺物を包含する。一方立坑No.5では、上から現代盛土層（約60cm）、暗茶灰色泥土層（約20cm）、黄褐色泥土層（約70cm）、暗褐色泥土層（約70cm）が堆積し、暗褐色泥土層下は褐色砂礫層となる。これらの土層のうち、暗茶褐色泥土層、黄褐色泥土層からは平安時代後期に属する土師器・平瓦が出土したが、いずれも小片で磨滅しているものが多く、二次堆積土層の可能性もある。下層の暗褐色泥土層は、植物遺体を多く含む腐植土層で流路状の堆積土層と考えられ、弥生時代の遺物を包含する。

小結 前述したように、調査地は鳥羽離宮跡中島に推定されている地域であるが、これまでに発掘調査例は少なく、空白部分の多い地区である。今回の立会調査では出土遺物も少なく、立坑部分の8箇所（約50mに1箇所）のみと少ないため、土層の拡がりや上下関係を知る上で必要な観察ができず、鳥羽離宮跡に関連する遺構は検出できなかった。しかし弥生時代の遺物包含層、流路を検出したことは、鳥羽遺跡・下鳥羽遺跡を考える上で重要な成果であった。

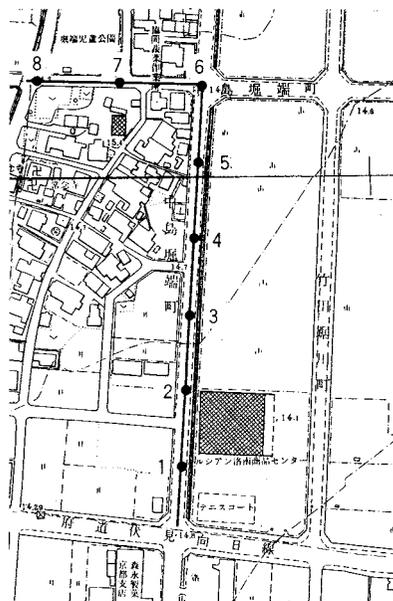


図1 調査位置図 (1:5000)

(磯部 勝)

10 鳥羽離宮跡 4

経過 調査地は、鳥羽離宮跡の南限部分に相当し、また下鳥羽遺跡にも近接する位置に当たる。調査を実施した区域は京都市伏見区踞川町、堀端町、中島外山町、中道町内で、国道1号線から新堀川通までの、府道伏見向日線の道路上である。工事区の全長は約450mであるが、調査箇所はこのうちの人孔部分の8箇所である。調査の結果、人孔No.1で平安時代から鎌倉時代にかけての遺物包含層を、人孔No.3・7では流路跡、湿地状の土層堆積を確認することができた。なお工事関係者との連絡の不備などから、詳細な観察のできなかった箇所が多い。

遺構・遺物 人孔No.1の基本層序は、上から地表下約120cmまでが現代盛土層で、現代盛土層下は、茶灰色砂泥層（約50cm）、暗灰色泥土層（約30cm）、暗青灰色粘土層（約30cm）が堆積する。このうち茶灰色砂泥層から平安時代後期から鎌倉時代にかけての土器片、平瓦片などが出土した。人孔No.3・7では、上から現代盛土層（140～180cm）、灰色泥土層（20～40cm）が堆積し、灰色泥土層下は褐色砂礫層となる。この内灰色泥土層からは土器類は出土しなかったが、木片や植物遺体が含まれており、流路あるいは湿地状の堆積土層と考えられる。

遺物は、土師器皿、平瓦など遺物袋に1袋程度出土しているがいずれも小片である。これらの遺物はすべて人孔No.1から出土したもので、他の人孔からは出土していない。

小結 今回の調査では、工事掘削前に調査予定の人孔の4面に土止めが実施されたことにより、詳細な断面観察が困難で明確な遺構を検出することができなかった。しかし人孔No.1で平安時代後期の遺物包含層を確認したことは、周辺地域において鳥羽離宮に関連する遺構の存在の可能性を示すものであり、重要な成果であった。

(磯部 勝)

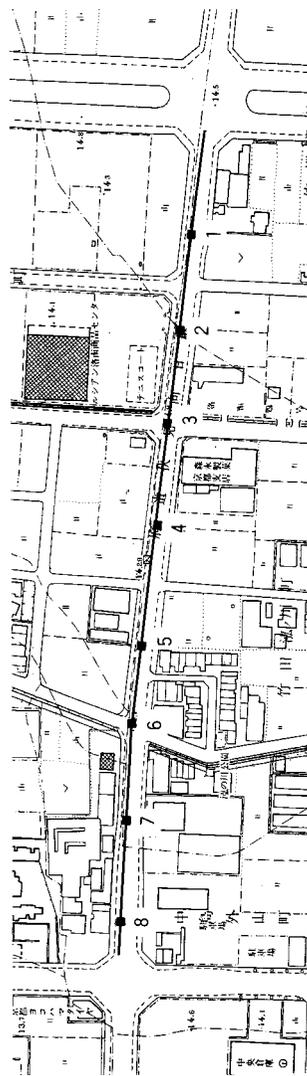


図1 調査位置図 (1:5000)

11 白川街区1 (図版67)

経過 調査は当初通常の立会調査の方法で行ったが、縄文時代の土壌が検出されたため、一部を再調査した。土壌内の埋土のほぼ全量を持ち帰り、水洗作業を行い、多量の石器・土器・植物種子・木炭を検出した。

遺構 A区49m地点で中世の土壌を検出した。土層は上から、現代路面、暗灰色泥砂層、黄灰色砂層、茶灰色泥砂層と

続く。第IV層に室町時代の遺物が含まれていた。土壌は南北両肩とも攪乱で破壊され、規模は不明であるが、1mほど残っている。

A区80～90m地点にかけて土壌を検出した。調査した距離は約6mで、幅は0.5mである。83.5m地点の土層断面は上から、現代路面、暗灰褐色土層、暗灰褐色土層、淡灰茶色粗砂層、淡黒色砂泥層、黒色砂泥層、淡灰褐色泥土層と続き、灰色礫層が地山となる。第V層の淡黒色砂泥層以下が縄文時代の遺物を含む土層である。土壌の掘形成立面は地表下0.8mで底部は2.0mのところにある。南肩の土層を見ると、淡黒色砂泥層と明灰色粘土層を切って成立している。土壌の掘形は傾斜が緩い。北肩は下水道管などの掘形で破壊されている。

A区102m地点では土壌と柱穴を検出した。南肩の土層は上から、現代路面、淡茶灰色砂泥層、暗茶灰色砂泥層、灰色砂層、灰黄色粘土層、灰白色粘土層となる。土壌は第II層の下面から成立している。埋土は淡茶灰色砂泥層、暗茶灰色砂泥層、灰茶色砂層、暗茶灰色砂泥層と砂層のブロック層で規模は0.8m、深さは0.7mある。北肩は室町時代の暗灰色砂泥層を埋土とする柱穴状の遺構に切られている。埋土から室町時代の土器が出土した。

A区159m地点では土壌を検出した。暗茶灰色砂泥層が埋土で、灰色砂層を切って成立している。埋土から小片の土師器が出土した。

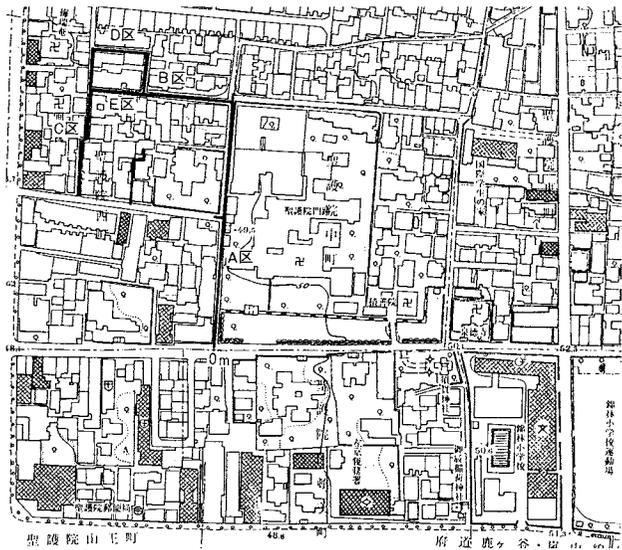


図1 調査位置図 (1:5000)

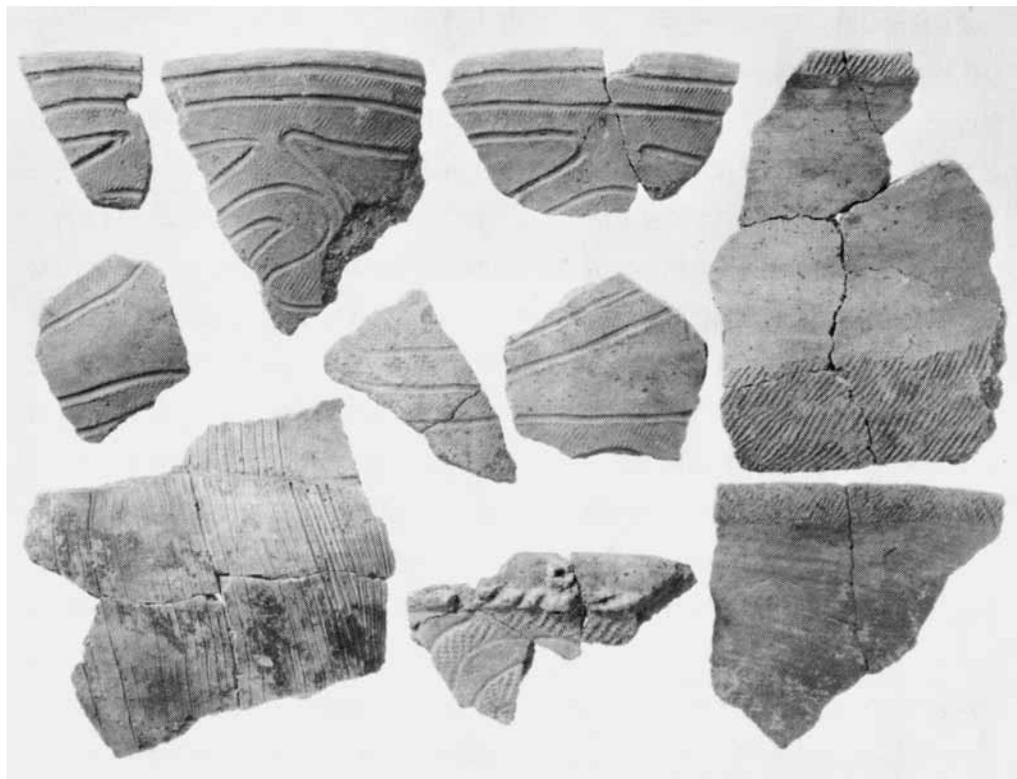
B区～E区では攪乱が多く、良好な遺構・遺物の検出はなかった。

遺物 遺物には縄文時代後期の土器・石器がある。石鏃・石棒・石槍・投げ石・剥片・チップ・土器などがある。後期の土器は京都大学構内A F 19区の高野川系の旧流路から出土している^註。これらの遺物は北白川上層式Ⅱ期に該当する。

小結 今回の調査では、縄文時代後期の土壙を検出し大きな成果があった。土壙の規模は北辺が攪乱で不明であるが、検出規模は6 m、深さは1.2 mと規模が大きい、埋土は3層あり、中層と下層から多量の遺物が出土した。土壙の土を30箱前後水洗したが、中から多量の石器が出土し成果があった。その多くはチップであるが、微細な石器も含まれており、豆などの種子も炭化状態で検出できた。出土土器は後期の縄文土器で、遺跡周辺では左京区小倉町で同様なものが出土している。

(百瀬正恒)

註 浜崎一志・宮本一夫「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和59年度 京都大学埋蔵文化センター 1987年



出土縄文土器

12 白河街区 2

経過 調査地点は左京区岡崎の平安神宮を中心とする地域である。調査地をA区からQ区の17区設定し、調査を開始した。しかし、A区は工事を実施していないため調査していない。

遺構・遺物 遺構・遺物を検出したのはK, M, P, I区である。以下、順に報告する。K区、延長32mの工事区でM区と直行する地点から10～23m地点までは工事掘削深度の0.9mまで下水道の掘形による攪乱を受けていたが、平安時代後期の軒瓦、丸瓦、平瓦が多量に出土した。25m地点から南部では良好な堆積土層が確認できた。第Ⅰ層は暗灰色砂泥層（攪乱層）で、第Ⅱ層は淡灰色砂泥層で、26.4m地点では第Ⅱ層を切って灰暗色泥砂層（遺物包含層）がある。工事区の南端の40～42m地点の土層は、第Ⅰ層暗灰色砂泥層、第Ⅱ層茶灰色泥砂層、第Ⅲ層茶灰色砂泥層、第Ⅳ層明灰色砂層、第Ⅴ層淡灰青色泥砂層、第Ⅵ層灰色粗砂層であった。第Ⅱ層は遺物包含層で、第Ⅳ層以下は流路埋土層と推定できるが、第Ⅴ層はやや固いため、生活面の可能性もある。

M区は20～35mの第Ⅰ層の暗灰色砂泥層から多量の瓦が出土した。第Ⅱ層は灰茶色泥砂層であるが、部分的な検出のため、遺物包含層かどうかは不明である。

P区の土層は、第Ⅰ層暗灰色砂泥層（攪乱層）、第Ⅱ層淡茶灰色砂泥層（鎌倉時代遺物包含層）、第Ⅲ層灰黄色砂泥層であった。この地区では周辺のN, O区などと異なり砂礫層を確認していない。現状の地形でもやや高く、微高地状を為している。

他のB～E区, F, G, H, L区では攪乱層が深く、遺構・遺物は検出できなかった。

小結 平安時代後期の瓦が出土したK, M区は、六勝寺の尊勝寺域に比定されており、関連するものと推定できる。P区の微高地は規模が小さいが、良好な包含層があり、注目される。

(百瀬正恒)

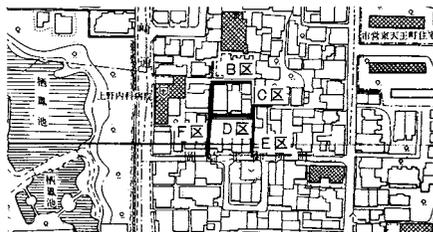


図1 B～F区調査位置図 (1:5000)



図2 G～Q区調査位置図 (1:5000)

13 白河街区3 (図版68)

経過 調査地点は、左京区岡崎法勝寺町にある動物園正門を入ってすぐ南側で、平安時代後期に六勝寺の筆頭寺院である法勝寺の推定敷地の南西部域に位置する。周辺の発掘調査において、金堂や回廊及び池庭の一部が検出されているが、全体像を復原できるほどには発掘調査は進んでいない。今回の調査では法勝寺関係の遺構検出が主目的である。

また六勝寺下層には、弥生時代から古墳時代の遺跡が存在していることが各所の調査で明らかとなっており、岡崎遺跡とされている。当調査地のすぐ北側（現動物園事務所）でも古墳時代の土器・木製品が多数出土する流路跡とみられる遺構が確認されており、岡崎遺跡についても重要な調査課題の一つである。

遺構・遺物 地山はいわゆる白川砂とやや粒子の粗い砂礫層であり、表土から極めて浅いところにある。その上に第1～第4層の堆積土を確認した。いずれもトレンチ北西部付近で検出したもので、傾斜地に堆積した部分的な土層とみられる。第4層からは布留式土器や須恵器片が出土しており、古墳時代の遺物包含層である。また、平安時代後期の整地土層の一部と考えられる第1層の上面では柱穴1を検出した。

柱穴1は、対応するものを確認していないが、下部を粘土で固めた石の据え方からみて、石は礎石として用いられたものと考えられる。平安時代後期の瓦片、土器片が

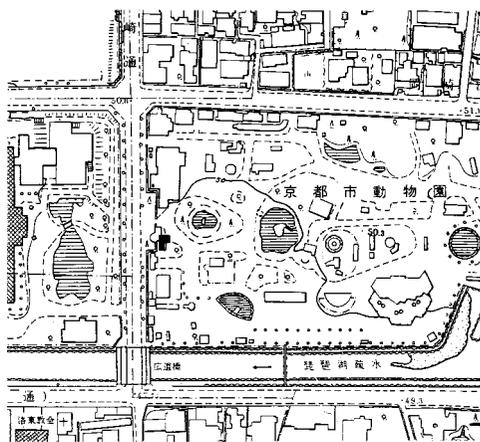


図1 調査位置図 (1:5000)

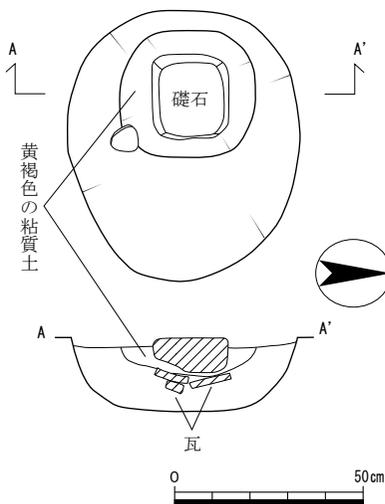


図2 柱穴1 模式図 (1:20)

出土した。溝状遺構1の最下層からは平安時代後期から鎌倉時代とみられる土器と瓦、下層及び上層からは室町時代後期の土器片が出土した。この遺構は検出状況からみて、池の一部もしくは溝とみられるが、堆積状況の観察によれば、東西方向に延びる溝である可能性が高い。

これら柱穴1・溝状遺構1は出土遺物なども考慮して、法勝寺に直接関連した遺構と考えられる。なお土壙4からも平安時代後期の瓦が多数出土している。

土壙3から出土した弥生土器片には、甕・壺・高杯・鉢などの器形がみられ、比較的大きな破片も含まれている。畿内第V様式の後半を中心とするまとまった資料である。

小結 小規模な発掘調査である上、前の建物の基礎などを含む近代遺構の攪乱層が多い調査地であったが、法勝寺関連遺構や弥生時代後期の土壙を検出した調査成果は大きいといえる。なお、今回の発掘調査対象地では、表土から地山上面までが極めて浅いことが判明した。一部では表土から10cm前後で地山を確認している。このため将来、付近で発掘調査を実施する際は、表土層から手掘りで調査することが望ましいと考える。

(平安京調査会 小森俊寛)

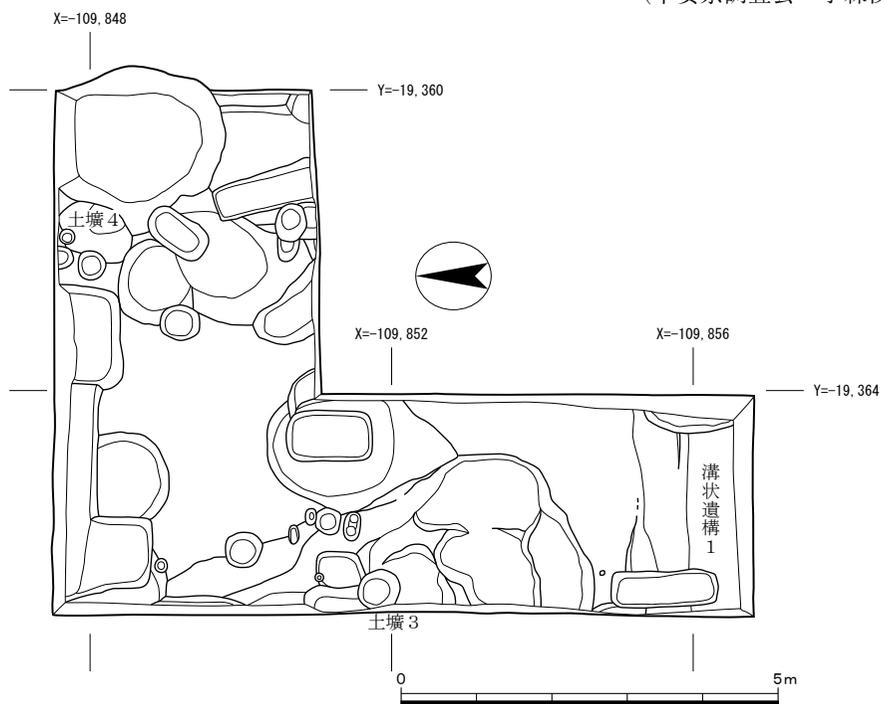


図3 遺構平面図 (1:100)

14 久我東町遺跡

経過 本調査は外環状線建設に伴う遺跡確認調査である。調査地点は昭和61年度に実施した久我東町遺跡の南方に位置している。同遺跡及びこれに関連する遺跡の有無を確認するために今年度は建設予定地内の内、桂川以西300mの間を試掘調査した。調査は、東端部に第1トレンチを設け順次西へ実施し、都合10箇所の特レンチを設けた。

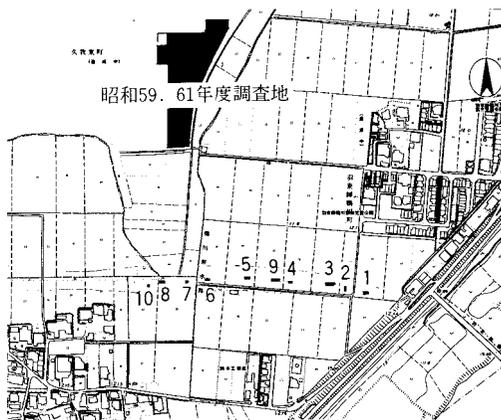


図1 調査位置図 (1:10000)

遺構 第1トレンチから第5トレンチの間では、耕作土層下約1.5mまで褐色系の土層、これ以下灰色粘土ないしは砂泥層が約3m下まで堆積して砂礫層となる。この間には明確な遺構は検出しなかった。第6トレンチでは、耕作土層下約2.5mで、これまでにはなかった固い緑灰色粘土層が堆積しており、この粘土層が第8、第10トレンチに向かって高くなっていることが判明した。遺構としては、第8トレンチで2条、第10トレンチで1条の南北方向の室町時代の小溝を検出した。

遺物 総数15片と出土量は極めて少量である。土師器・瓦器・陶器などの破片が出土したのみである。時期的には、室町時代以降近世までの土器片である。第1、第2トレンチでは近世陶器のみ、第3～第7トレンチでは中世・近世の遺物が出土した。第8トレンチでは現地表下1.3mの暗オリーブ灰色粘土層で室町時代の土師器小片が出土し、同層上で検出した溝からも同時期の遺物が出土した。

小結 第8トレンチで検出した溝からは室町時代の土器片が出土している。検出面のレベルは、標高10.8mを測る。この下層にも焼灰・土師器小片を含むことから、近辺にも中世の遺跡が想定できる。堆積土層の状況からみて同トレンチ以西にも遺跡が存在する可能性が高く、次年度実施予定の第10トレンチ以西の試掘調査の内容をみて発掘調査の計画を立てる必要がある。

既往の調査では北方の久我東町遺跡の遺構面の検出レベルが標高10～10.5mの範囲にあること、更に南方に位置する志水の集落は室町時代から続いていることが文献からも知られ、建設予定地内にも中世の遺跡は十分に想定できることが明らかになった。

(鈴木広司・長宗繁一)

15 森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡 (図版 69～72)

経過 西部第二排水区西部(第二)系統太秦(その7)公共下水道工事に伴う立会調査を昭和60年5月7日から11月30日まで実施した。調査地点は右京区太秦和泉式部町8番地から森ヶ東町38番地である。調査の結果、森ヶ東瓦窯跡に関係する遺構から多量の瓦類が出土したほか、蚕ノ社北方域で弥生時代後期から古墳時代前期の集落(和泉式部町遺跡)を新たに発見する成果を得た。

遺構・遺物 検出した遺構の内訳は竪穴住居1戸、土壇4基、溝10条、流路1条、井戸1基、池1基、落込3基、遺物包含層などである。

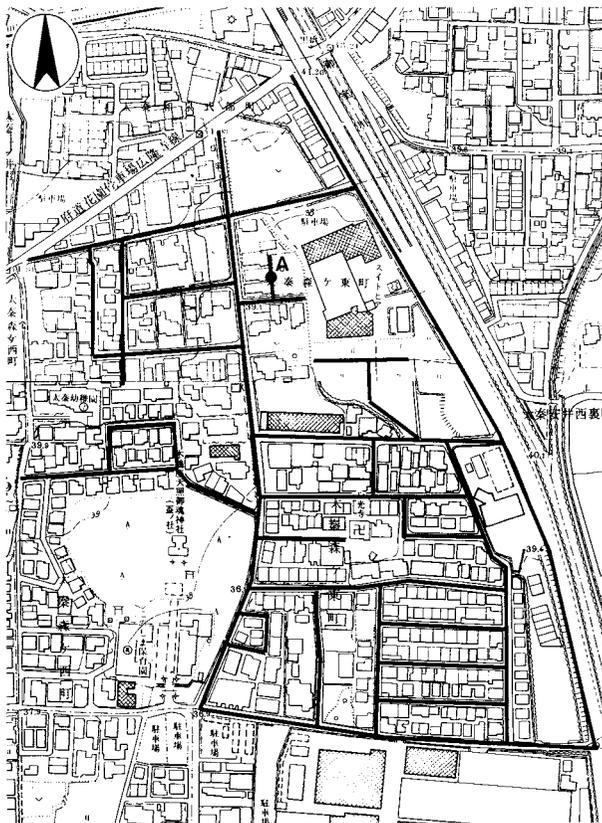


図1 調査位置図(1:5000)

遺構の時期は、弥生時代後期から古墳時代前期、平安時代前期、室町時代、江戸時代、その他がある。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、今回発見した和泉式部町遺跡に属するもので竪穴住居1戸、溝3条、土壇1基、遺物包含層などがある。各遺構からは畿内第V様式新相から庄内式併行期の土器(壺・甕・高杯・器台・その他)が出土した^註。平安時代中期の遺構は、森ヶ東瓦窯跡から検出したもので、土壇・落込などがある。特に落込(図1-A)からは軒瓦多数を含む多量の瓦類が出土した。出土した軒瓦は、軒丸瓦が5種類28点、軒平瓦が6種類25点に及ぶ。瓦当部の文様は、範型の打ち込みが浅いため不鮮明なものが多い。いずれも瓦当面に離れ砂使用の痕跡が認められ、歪みや亀裂、溶着したのものがあ、焼成時の失敗品であることが窺える。瓦当部の成形手法には、軒丸瓦に1方法、軒平瓦に3方法がある。軒丸瓦は、瓦当部と丸瓦端部を瓦当裏面の上部に粘土

を補足して接着，文様を打ち出したのちケズリにより調整を行う。軒平瓦は，平瓦凸面と瓦当部を上面及び裏面に粘土を補足して接着し文様を打ち出したのちケズリによる調整を行うもの（Aタイプ）。平瓦凸面端部に予め粘土を補足して瓦当面を作り文様を打ち出したのちケズリによる調整を行うもの（Bタイプ）。平瓦端部をやや折り曲げ，裏面に粘土を補足して文様を打ち出したあとケズリによって調整するもの（Cタイプ）がある。

小結 今回の森ヶ東瓦窯跡の調査では，合わせて50点以上の軒瓦が出土した。このうち数種の瓦当文様は従来では生産地が不明であったが，今回の出土により森ヶ東瓦窯産であることが確認されるなどの貴重な成果が得られた。また和泉式部町遺跡の西南方一帯では広く泥湿地状の堆積を確認しており，生産域の存在した可能性も指摘できよう。

（平田 泰）

註 出土土器実測図は本報告第2章の16 広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡を参照されたい。

表1 森ヶ東瓦窯跡出土軒瓦一覧表

番号	瓦当の種類と文様	胎土	色調	焼成	瓦当 成形法	瓦当部の調整手法	同文 出土数	備考
1	単弁八葉蓮華文軒瓦	細砂粒多い	淡黄色	軟		瓦当裏面及び上面を縦方向に粗くナデ、外縁は横方向の丁寧なケズリ	13点	瓦当形状は楕円
2	単弁八葉蓮華文軒瓦	細砂粒多い	淡黄色	軟		瓦当裏面及び上面を縦方向に粗くナデ、外縁は横方向の丁寧なケズリ	1点	1の逆範文様
3	単弁八葉蓮華文軒瓦	黒色粒を含む	青灰色	硬		瓦当裏面は縦方向の丁寧なナデ、上面は縦方向のヘラナデ、外縁は横方向の入念なケズリ	1点	瓦当形状はやや楕円
4	単弁八葉蓮華文軒瓦	細砂粒多い	灰白色	軟		瓦当裏面及び上面を縦方向に粗くナデ、外縁は横方向の入念なケズリ	1点	中房に「下」銘
5	単弁八葉蓮華文軒瓦	赤色粒子含む	黄橙色	やや軟		瓦当裏面及び上面を縦方向に粗くナデ、外縁は横方向の入念なケズリ	8点	中房「下」銘は不明
6	不明（無文）軒瓦	細砂粒多い	淡灰色	やや軟		瓦当裏面及び上面を縦方向に粗くナデ、外縁は横方向の入念なケズリ	1点	両側面が手前に湾曲
7	複弁六葉蓮華文軒瓦	赤色粒子含む	淡黄褐色	やや軟		瓦当裏面を縦方向に粗くナデ、上面は丁寧な横方向のケズリ、外縁は不明	3点	
8	唐草文軒平瓦	黒色粒子含む	灰白色	やや軟	A	瓦当裏面は縦方向の粗いナデ、上面・下面は横方向のケズリ、側面不明	11点	
9	均整唐草文軒平瓦	細砂粒多い	濃青灰色	硬	B	瓦当裏面は縦方向の粗いナデ、上面・下面は横方向のケズリ、側面不明	1点	中心飾り「上」銘が倒立した「下」銘あり
10	均整唐草文軒平瓦	赤色粒子含む	淡黄色	軟	A	瓦当裏面は縦方向のナデ、上面・下面は横方向のケズリ、側面は縦方向のケズリ	4点	
11	唐草文軒平瓦	黒色粒子含む	青灰色	硬	C	瓦当裏面は縦方向のナデ、上面・下面は横方向のケズリ、側面は縦方向のケズリ	2点	平瓦端部をやや折り曲げ瓦当面を作る
12	偏行唐草文軒平瓦	微砂粒多い	暗灰色	軟	A	不明	3点	
13	均整唐草文軒平瓦	黒色粒子含む	淡青灰色	硬	B	瓦当裏面は縦方向のナデ、上面・下面は横方向のケズリ、側面は縦方向のケズリ	3点	平瓦凸面に「の」ヘラ記号

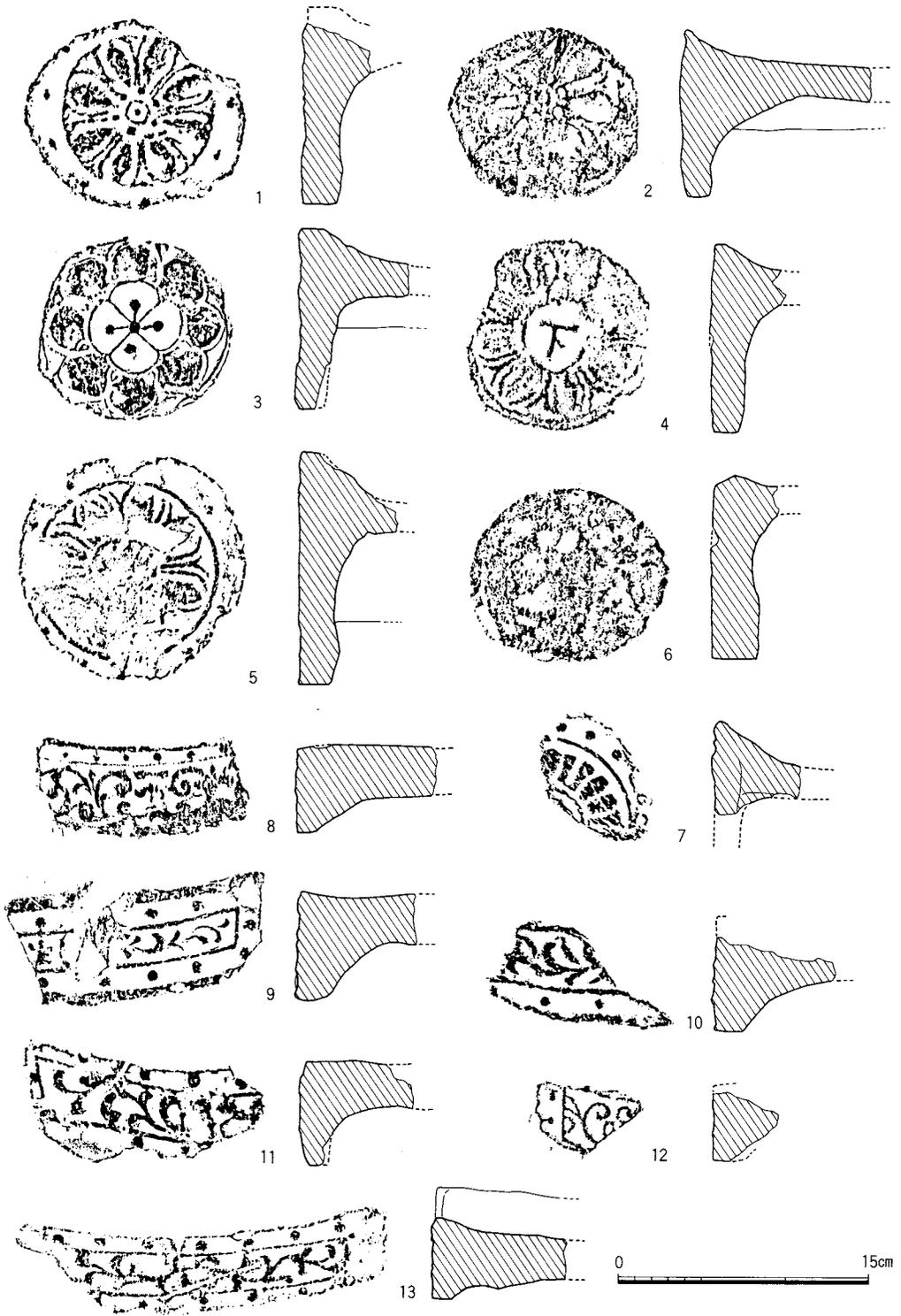


図2 森ヶ東瓦窯跡出土軒瓦拓影・実測図 (1:4)

16 広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡 (図版70)

経過 右京区太秦蜂ヶ岡町, 垣内町, 森ヶ西町で西部第二排水区西部(第二)系統太秦(その8)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地点は広隆寺旧境内, 一ノ井遺跡, 和泉式部町遺跡に比定される。

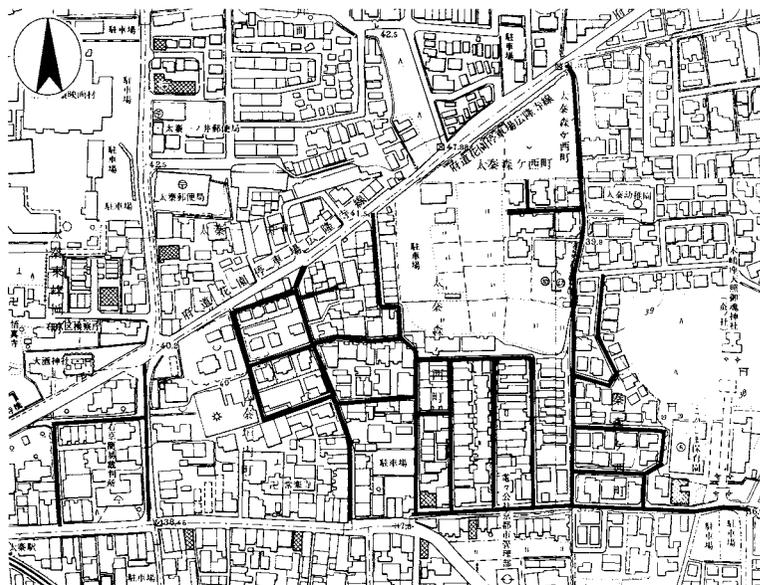


図1 調査位置図 (1:5000)

調査の結果, 蚕ノ社北西一帯で和泉式部町遺跡に属する遺構群を検出した。また, 一ノ井遺跡では平安時代前期から後期の遺構・遺物を検出した。和泉式部町遺跡は西部第二排水区西部(第二)系統太秦(その7)公共下水道工事に伴う立会調査(本報告第2章15)で発見したが, 今回検出した遺構群はこの西側にあっている。

遺構 検出した遺構の内訳は竪穴住居8戸, 落込7基, 土塋6基, 溝11条, 柱穴2基である。各遺構の時期は弥生時代後期から古墳時代前期, 平安時代中期から後期, 室町時代, その他がある。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は和泉式部町, 太秦森ヶ東町, 太秦森ヶ西町にまたがる和泉式部町遺跡で検出したもので, 竪穴住居8戸, 土塋2基, 溝5条, 柱穴1基がある。また太秦垣内町では平安時代前期から後期の落込2基, 土塋1基, 室町時代の落込2基, 土塋2基, 溝4条, 柱穴1基を検出した。これらの遺構は一ノ井遺跡に関する遺構群と考えられる。

図3は和泉式部町遺跡を中心にして広がる土層の分布と検出遺構の位置を示したもので, 遺跡内には土器を多量に包含する黒褐色砂泥層と土器を包含しない褐色砂泥層の二種類の土層が堆積する。各遺構はほぼ黒褐色砂泥層分布域に重複して検出している。褐色砂泥層は主として遺跡の南辺に堆積し, 遺跡中心地区である丘陵上からの流出土であること

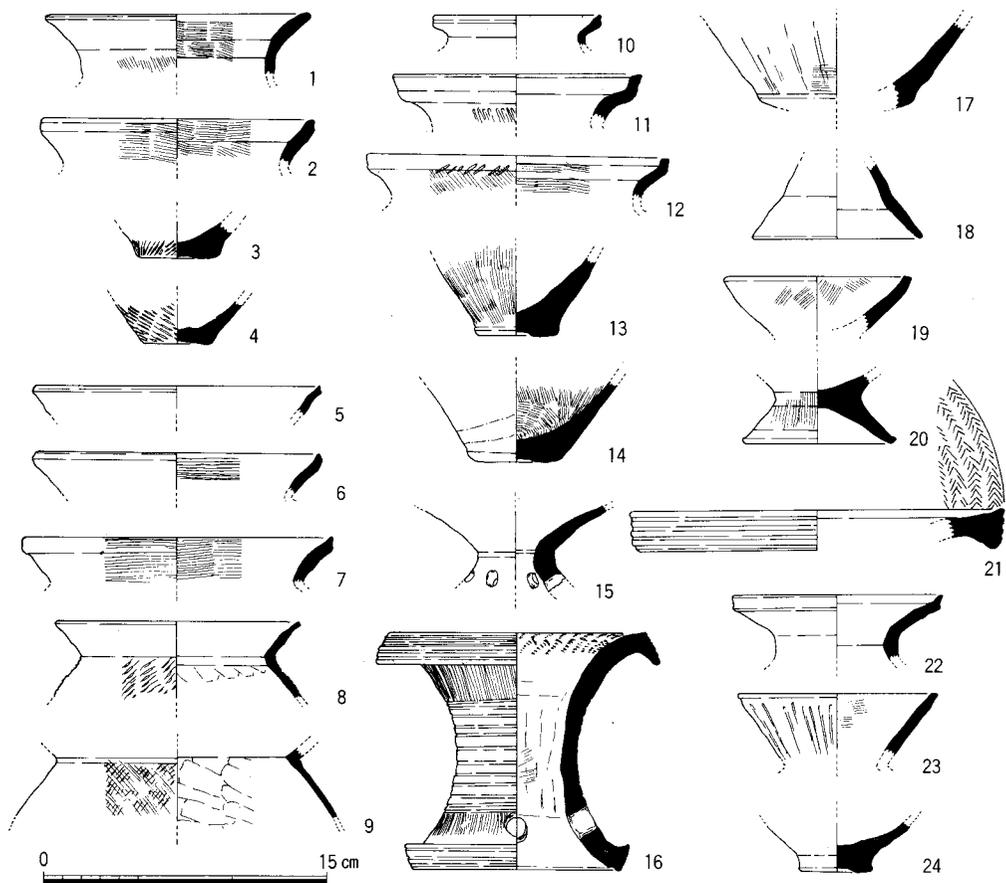


図2 和泉式部町遺跡黒褐色砂泥層出土土器実測図(1:4)

を示している。この図に等高線を重ねることによって、遺跡の範囲と周辺地形の把握が可能である。遺跡は標高40～41.5mの比較的緩やかな丘陵の東南端に立地し、東西200m、南北200mの規模で展開する。遺跡の東側は御室川に続く泥湿地が広がり、北西及び西側は湿地あるいは小川が南流する。遺跡に接して東辺及び南辺では幅3mの溝を検出しているが、方向が等高線と平行し人為的であることから、集落に伴う環濠の可能性を指摘できる。

遺物 出土した遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、国産磁器、瓦類がある。弥生土器・土師器は和泉式部町遺跡から、その他の遺物は主として一ノ井遺跡から出土した。

和泉式部町遺跡の土器は大部分が黒褐色砂泥層から出土しており、各遺構からの出土は

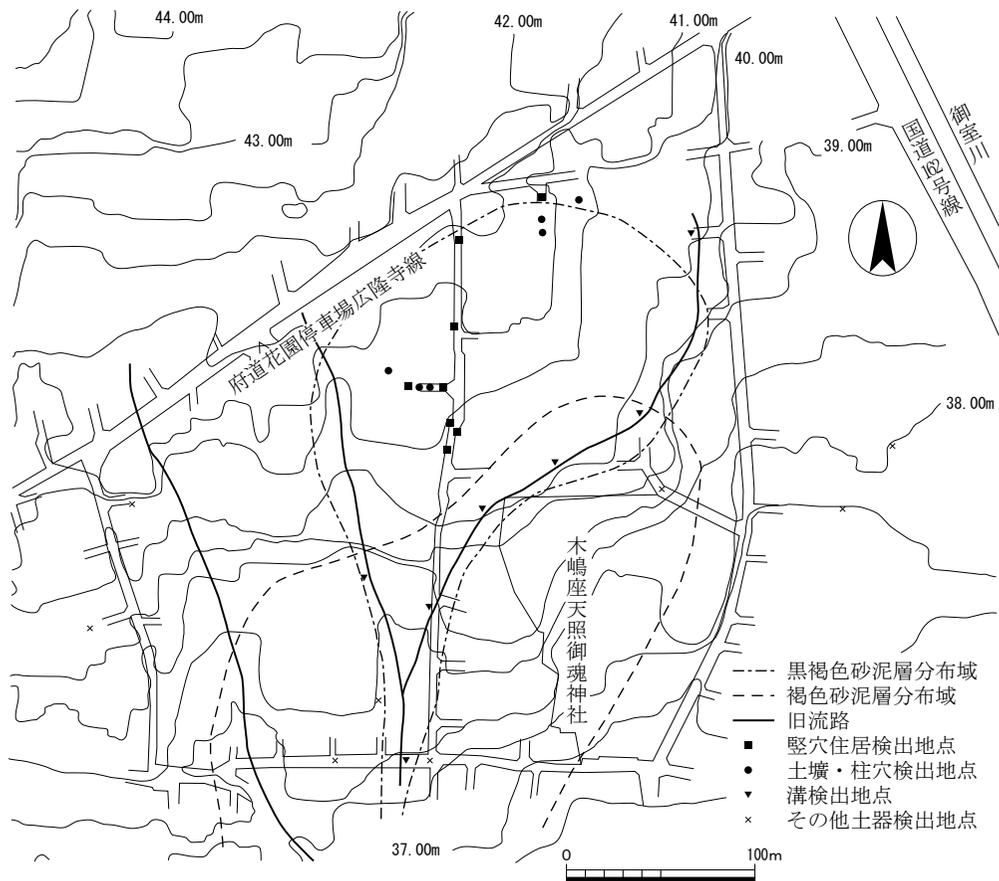


図3 和泉式部町遺跡遺構・土層分布図 (1:4000)

少量にとどまる。出土土器の器形には壺、甕、高杯、器台、台付鉢、その他がある。甕は角閃石を含み茶褐色の色調を呈する生駒西麓産のもの（8, 9）と口縁部が受口状を呈し施文がみられる近江系（10～14）と在地系と考えられるもの（1～7）が出土した。器台は中空で受部と脚部が大きく外反するもの（15）と、受部及び脚部が外反し端部で面を為す大型のもの（16）がある。高杯は、杯部下半に段を有し、杯部上半は斜め上方に延び、脚部下半は屈曲して外方に開く（17, 18）。壺は口縁部が大きく外反し端部が面を為すもの（21, 22）と、口縁部が外上方に直線的に立ち上がるもの（23）がある。

小結 和泉式部町遺跡の調査では、竪穴住居8戸を含む多数の遺構を検出でき、調査地点が集落の中心地に近接することが窺えた。各遺構から出土した土器は畿内第V様式新相から庄内式併行の時期に比定でき、集落の存在した主要な時期が当該期にあったものと考えられる。またこの時期の集落は嵯峨野・太秦地域では初の発見であり、5世紀以降に嵯峨野・太秦地域で渡来系の雄族である秦氏が開発を開始する直前の様相を明らかにしたものとして注目に値する。

(平田 泰)

17 山田桜谷古墳群 (図版 73)

経過 山田桜谷1・2号墳は、1986年2月に付近を踏査中に発見した古墳である。山田桜谷1号墳は、2月6日に当研究所の永田・上村・丸川の3名が、山田口から唐櫃越を経て法華山寺跡に向かう途中に、また2号墳は、後日これを確認に向かった京都市埋蔵文化財調査センター梶川が、唐櫃越に接する墓地で、埴輪の破片を採集したことからその存在が明らかになった古墳である。

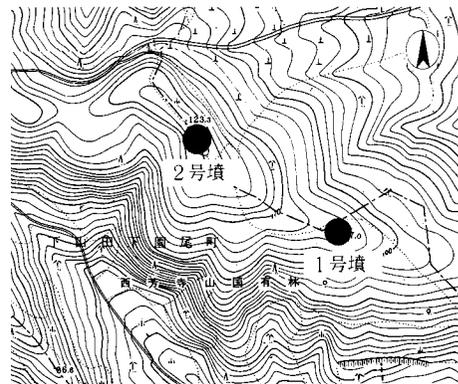


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 山田桜谷1号墳 山田桜谷町と下山田下園尾町境界の標高107m付近の丘陵稜線部に立地する。東南面する前方後円墳とみられ、規模は全長約50m、前方部幅約25m、後円部径約20mで、前方部の発達した形態を有する。墳丘は松尾国有林内にあるため完存するが、東側は竹藪のため崖が迫っている。前方部先端の平坦面や後円部を取りまく周濠の形跡はよく残っているが、前方部と後円部の間の鞍部は明瞭ではない。東裾の崖部で、図示した須恵器と埴輪を採集した。

山田桜谷2号墳 唐櫃越に接して東側が墓地に利用されている標高123mの丘陵頂部に立地する。1号墳同様、全長50m程度の前方後円墳とみられるが、円墳状のものが2・3基並んでいる可能性も考えられる。東斜面は墓地のため改変が著しく、現状では正確な墳丘の規模・形状は把握し得ない。埴輪は墓地一帯で採集したものである。

遺物 1号墳からは、須恵器(1)と埴輪(2~5)を採集している。須恵器杯(1)は、小片で復原口径12.1cmを測る。端部はシャープな作り。焼成堅緻。灰色を呈する。埴輪(2~4)は円筒部の小片で、外面には1次調整のタテハケが施されている。内面は(4)のみヨコハケがみられる。(2)は低台形のタガ部分、(5)は基底部の破片である。

2号墳採集の埴輪には、普通円筒埴輪の他に朝顔型埴輪の口頸部(6・7)・形象埴輪では馬形等の脚部(20)・蓋形埴輪とみられるもの(21)等がある。円筒部は(15)でタガの直径が26cmを測る。外面は総じて1次調整のタテハケを施した上に2次調整のヨコハケがみられる。外面ナデ調整のものも認められる。内面は(11・12・14・15)でわずかにタテハケがみられる。朝顔形埴輪(6・7)は、内外面とも細やかなナナメハケを施す。

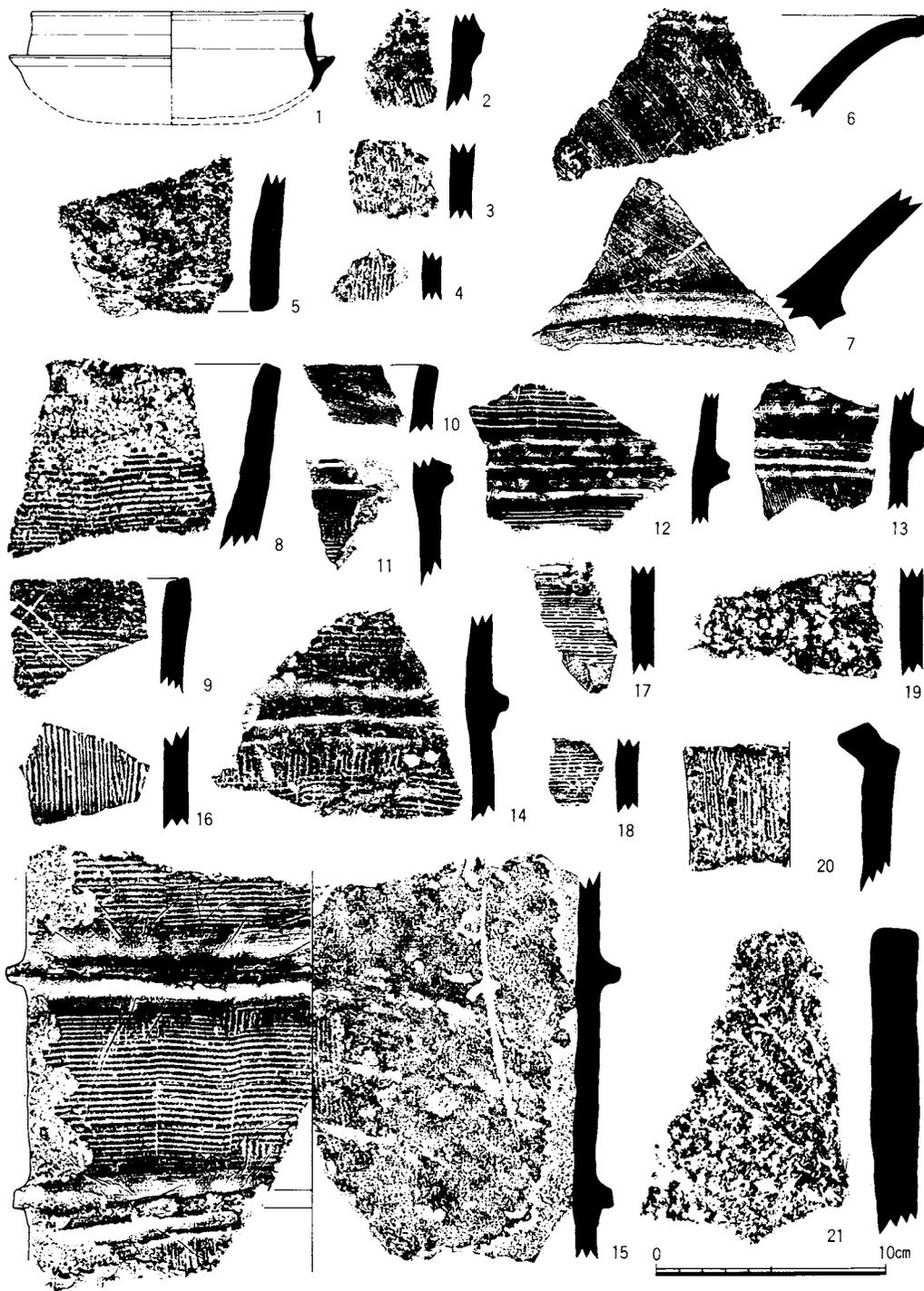


図2 山田桜谷1号墳(1~5),同2号墳(6~21)採集の須恵器,埴輪拓影・実測図(1:3)

タガは、中央が凹んだ台形のもの（7・12・13）と、幅が狭く先端が丸いもの（14・15）がある。焼成はいずれも堅緻で無黒斑。総じて明るい赤褐色を呈するが、（6・7・13・16）は暗い赤褐色で、いわゆる須恵質の状態を呈している。

小結 山田桜谷1・2号墳の発見は、市街地に近接する丘陵部に未確認古墳が存在する可能性を示すと共に、前方後円墳を含む点で洛西地域の首長墓の動向を推察する重要な資料となるものである。

従来、この地域の首長墓は「檜原グループ」^{註1}と呼ばれ、前期から後期に至る1つの首長墓系譜の存在が想定されてきた。今回見つかった2基は、2号墳が川西編年^{註2}第Ⅳ期の埴輪から5世紀中葉。1号墳が須恵器杯の特徴や川西第Ⅴ期の埴輪から、5世紀後葉の年代を与えられる。「檜原グループ」の中では、天皇の杜古墳（5世紀初頭）と穀塚古墳（5世紀末葉）の間に位置づけることができよう。2基の発見によって「檜原グループ」は空白であった5世紀中葉段階が埋まり、より連続性の高い状況が想定できるようになったが、2基がいずれも穀塚古墳等の所在する山田地区でみつかった点は、このグループの墓域が前半と後半では地点を異にすることを明白にしたものといえる。

次に、山田桜谷2号墳の発見は、従来空白であった5世紀中葉段階を埋める資料として重要であるばかりではなく、採集した埴輪が明らかに竈窯焼成されたものである点で、この地域の窯業生産に関わる重要な問題を含んでいる。この時期の埴輪は須恵器生産の影響を受けて竈窯焼成にかかわるとされるので、2号墳の埴輪も竈窯で焼かれたとみるのがもつとも妥当な解釈といえる。穀塚古墳出土須恵器の中に、在地窯とみられる一群が含まれるという最近の指摘^{註3}などは、2号墳の築造時に既に山城地方には須恵器窯が存在したことを裏付ける見解といえるだろう。

なお、2基の見つかった山田地区は、穀塚古墳・清水塚古墳・天鼓ノ森古墳の他、かつてはさらに多くの古墳が存在したようである。昭和13年に刊行された浅井暦造氏の『松尾乃郷』には「下山田の田中には天鼓の森をはじめ、しみづ塚、七衛門塚、鶯塚、車塚、枕塚など多くの古墳が存在し、その外丘陵に箱塚、猫塚、巡礼塚等とたくさんあったがいまはしみづ塚だけが半分その面影を残している。……」と述べられており、今後注視する必要があるだろう。

（丸川義広・上村和直）

註1 田辺昭三 「首長墓の成立」『京都の歴史』1 学芸書林 1970年

註2 川西宏幸 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻 第2号 1978年

註3 中村 浩 「山城穀塚古墳出土須恵器について」『ミュージアム』No.431 1987年

18 極楽寺跡

経過 本調査は公共下水道工事に伴う立会調査である。調査は昭和60年4月1日から昭和61年9月3日まで実施した。調査範囲は、伏見区深草野手町・大門

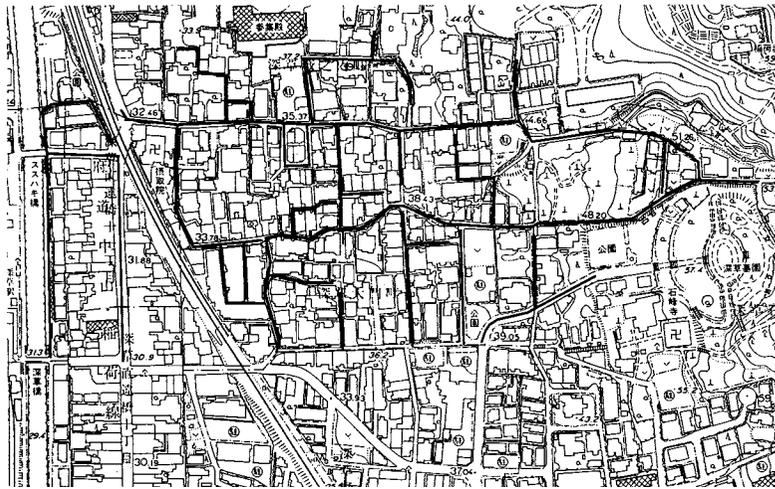


図1 調査位置図 (1:5000)

町・藪内町で、調査区の北側は伏見稲荷大社、東側は石峰寺・宝塔寺に接している。調査区は推定極楽寺の北半部に該当しており、周辺の地形は西に緩やかに傾斜して疏水に至る。江戸時代の地誌『山城名勝志』によると、極楽寺の位置は深草極楽寺町付近であるとされ、調査区の南側にある。しかし寺域を確認する有力な考証は示されていないので、極楽寺に関連する遺構の検出を主目的に調査が実施されることとなった。

遺構 主な検出地点は図2に示した。以下、番号順にその概要を説明する。

1 土壌 幅1.8m、深さ0.95～1.3mの規模を測る。主に褐色泥砂層から土師器・黒色土器・灰釉陶器・軒瓦等が多量に出土した。遺物から10世紀中頃の遺構と推定できる。

2 土壌 幅1.5m、深さ0.3mの規模を測る。埋土は褐色泥砂層で、少量の土師器皿片と甕片が出土した。遺物は10世紀中頃の様相を示している。

3 池状遺構 稲荷大社の南側に位置し、南北50m 東西70mにわたって池状の広がりを確認した。灰色泥土と褐色泥土層が堆積する。埋土より土師器皿と須恵質陶器皿の完形品を採集している。出土遺物から13世紀頃と推定できる。

4 池状遺構 この一帯は現在でも周辺に比べて一段低く、湧水が地表近くまである。付近の人たちの話を聞くと「城門池」の跡であるとの事。その時期を確定できる遺物の採集に努めたが、厚さ1.2mの泥土層中には、近代の遺物以外認めなかった。又この池はまず南半から埋められ、その後北半が埋められたことが、土層観察から明らかとなった。

5 遺物包含層 現地地表下0.5mで、中世の土師器を含む褐色砂泥層が分布しており、13世紀を中心とする瓦器が出土した。調査区南半部より北に広がる分布を示している。

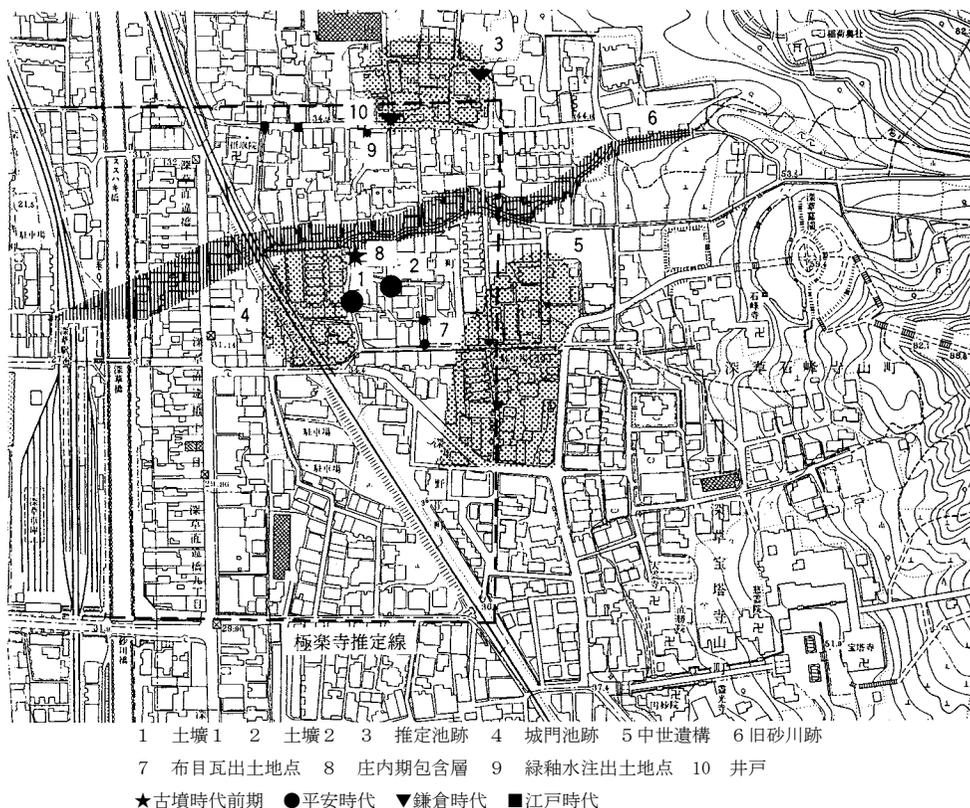


図2 遺構分布図 (1:5000)

6 旧流路 旧砂川の流域と考えられるもので、白色砂層が堆積している。現在の河川は暗渠化し、地表では全く確認できない。砂層は部分的に3m以上あり、西流して本町通り・疏水を越えて龍谷大学の方に広がることは過去の調査でも確認されている。

7 遺物包含層 現地表下0.8～1.0mの深さで検出した布目瓦を包含する土層であり、地点1・2と関連した一連の遺構があると考えられる。

8 遺物包含層 現地表下1.3m～1.5mに堆積する青灰色砂泥層中に古墳時代前期の遺物を包含する。確認した範囲はきわめて狭く10m程度であるが、全体の広がり・遺跡の性格等については今後の調査の集積を待つ必要があるだろう。

遺物 最も古いものは地点8からの遺物であり、庄内式に併行する甕と壺片がある。極楽寺の時代と併行するのは地点1・2・7の遺物で、10世紀中頃の土師器皿・黒色土器A類椀・緑釉硯・灰釉杯・瓦類がある。瓦は平安時代前期に属するものである。鎌倉時代に属する遺物は地点3のものがあり、土師器皿・須恵質陶器皿の完形品の出土をみる。江

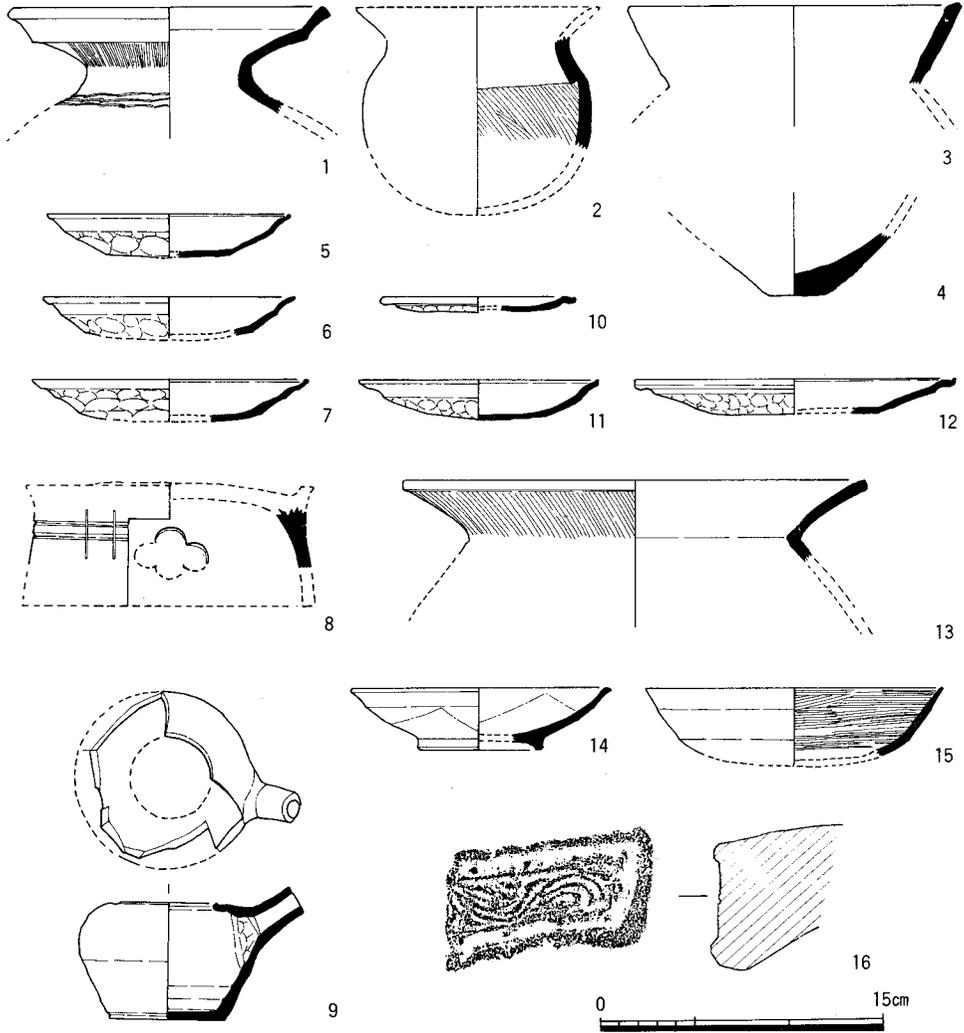
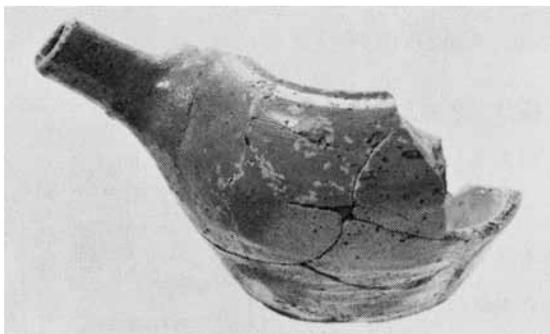


图3 遺物実測図 (1~4 地点8出土, 5~8・14~16 地点1出土,
9 地点9出土, 10~13 地点2出土) (1:4)

戸時代に属するものには、一石五輪塔・五輪塔片がある。藪ノ内町を中心に広く分布し、5点検出したが原位置をとどめていない。これらは花崗岩製である。他に、類例を見ない楽焼風の緑釉水注がある。



地点9出土緑釉水注

小結 文献資料によると、極楽寺の建設は藤原基経によって着手され、その子時平によって昌泰二年（899）に完成した。その後貞元元年（976）6月18日の地震で壊れたことがわかる。

今回の調査の結果、寺関係の明確な遺構は検出できなかったものの、大門町を中心とする地区で10世紀中頃の遺物を集中的に確認しており、寺域の北半部ではないかと推定できる。極楽寺跡以外の新たな知見としては、古墳時代前期の遺物包含層を確認したことがある。出土地点が砂川旧流路や池状遺構に近接しており、これらと関連するものであるか否かは、今後の調査による新たな資料の増加に期待したい。

この他に、本町通では旧路面を検出しているが、その下層に桃山時代以前の道路面を認めることができなかったことから、この頃に伏見城と洛中をつなぐ幹線として整備されたものと言える。また稲荷大社南側（^{あずまろ}東丸神社）・野手町内で13世紀の遺構や遺物包含層が検出されており、中世集落の存在を想定してよい。

（吉村正親）

19 西飯食町遺跡

経過 名神高速道路南側道の南歩道部で立会調査を実施した。調査地点の東部で、平安時代後期から室町時代前期の遺構を多数検出した。遺跡は室町時代の洪水で廃棄されたと推定できる。西部と東端部は厚く砂層が堆積し、遺構は検出できなかった。

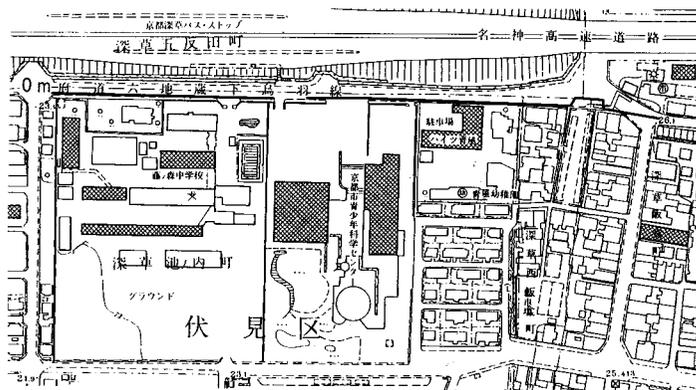


図1 調査位置図 (1:5000)

遺構 90 m地点の土層は、上から、現代路面、灰黄白色礫混じり粗砂層と続き、砂層が卓越する。この土層は150 m地点まで続く。これから東部は、土層が安定し、多数の遺構を検出した。

185 m地点の土層は上から、現代路面、暗灰色礫層、灰黄色粗砂層（洪水層）、暗青灰色泥砂層、淡灰褐色粗砂層と続き、最下層の土層を切って暗灰色泥砂層が埋土になる土層を検出した。土層内からは平安時代後期の土器が少量出土した。

243 m地点では、上層から、現代路面、茶灰色砂質土層、淡灰茶色砂質土層、灰褐色砂質粘土層、茶灰色粘土層、淡灰色粘土層と続く。検出した遺構は土層で、第Ⅱ層を掘り込んでおり、幅0.6 m、深さ0.5 mで埋土は3層あり、中世の遺物が出土した。遺構面を覆う洪水層はこの地点の現代路面が厚く未検出であった。

270 m地点の土層は上から、現代路面、褐色砂層、暗灰茶色泥砂層、暗灰茶色泥砂層（遺物包含層）、灰青色砂層、暗茶灰色粘土層、灰褐色粘土層と続く。第Ⅱ層は洪水層で、遺構は第Ⅳ層と第Ⅴ層を掘り込むものに分かれる。第Ⅴ層を掘り込んだ井戸状遺構は、東西幅2.5 mで掘形埋土に多量の土器を含んでいた。

301 m地点の土層は上から、現代路面、暗灰色泥砂層（土層埋土）、淡灰黄色粘質土層、暗茶灰色粘土層、淡灰褐色粘土層と続く。301.4 mから303.3 mにかけて石組井戸を検出した。井戸は、303.3 m地点に東肩があり、規模は幅1.9 mで、深さは掘形上面から1.0 mの深さまで確認した。井戸の石は短辺0.2 m、長辺0.3 mほどの川原石を積む。掘形の埋

土は、灰茶色粘質土層、井戸の埋土は2層に分かれ、上層は灰茶色砂質土層、下層は灰色泥砂層である。上層の埋土は井戸全体にあることから石組を抜き取った時の土層であると考えられる。各層から中世の遺物が少量出土した。井戸掘形東の土層は上層から、現代路面、茶褐色砂泥層（床土か）、灰色砂層（洪水層）、暗灰色泥砂層（井戸を切る土壇埋土）、淡灰色砂質土層、暗灰色泥土層、淡灰色砂質土層と続く。このすぐ東には暗灰色泥砂層を切って、灰褐色細砂層が堆積している。この層と下層の褐色砂礫層は流路埋土であり、土壇を切り、井戸東部を抉ることから、洪水による堆積層と推定できる。しかも、井戸上面には厚さ数 cm しか堆積していないことなどから、この地点までが流れの攻撃面で、削り取られた断面であることが判る。洪水層の流れは、南東方向から北西方向を示す。この地点から東部は砂層や砂礫層が厚く堆積する洪水堆積層である。

遺物 遺物は井戸の堀形出土のもの以外は小破片である。時代的には11世紀から15世紀までのもので遺跡の成立期から廃絶期までのものである。

小結 東西方向に幅約400mの立会調査を行った結果、西飯食町遺跡の北部域の状況がかなり明確になった。堆積土層からみると、150m地点までと305mから東の410mまでは砂層・砂礫層が厚く堆積する流路埋土層である。150m～305m間の155m近くが遺構の存在する地点である。遺構は出土遺物からみると11世紀に成立し15世紀（室町時代）まで続く。室町時代の遺構面上面には東部の流路埋土層と同様の白色砂層が多い。この上層には床土がある。従って、遺構上面を流路埋土層が覆った時点で、遺跡が廃棄されたことが窺える。東部では流れが東の中世土壇を削り取っている。同様の流路堆積層は調査地点の南部に広く分布しており、近くに流れる七瀬川によるものと考えられる。遺跡の南辺・北辺は明確でないが、ほぼ200m×150m前後の規模が推定でき、青少年科学センター・ハイツ清風を中心とする地域である。

（百瀬正恒）

第3章 資料整理

この章で扱う遺跡測量、コンピュータ、写真撮影、保存科学等については、それぞれ調査研究体制を深め活発な活動を行っており、当研究所では埋蔵文化財の調査とともに遺跡の記録・報告・活用を各分野が一体となって進めている。本年度は写真撮影の分野についても資料の記録・活用等に対し、新たにパーソナルコンピュータを導入、運用を開始した。

なお遺物復原は、昭和60年度『文化庁国庫補助事業に伴う調査概報』並びに昭和58年度『京都市埋蔵文化財調査概要』の報告書作成に伴い、各調査で出土した遺物について行った。また本年度は、付表3に示した熊本市出土銅鏡の復原も行っている。

1 遺跡測量

本年度に実施した基準点測量は82件になる。また、地形測量用の図根点測量を2件行った。その内訳は、平安京地区22件、鳥羽地区14件、長岡京地区9件、洛東地区9件、南・桂地区7件、洛北地区5件、伏見・醍醐地区4件、北白川地区1件、太秦地区1件、試掘・立会12件となっている。本年度を含め当所で行った測量業務のデータは、資料としてデータベースの一つとしてパソコンに入力した。

このほか測量作業以外に実測図面を保存・活用するため、パソコンの磁気媒体に記憶させるシステムを開発した。このためデジタイザー（座標読み取り装置）およびプロッター（図化機）を導入し作業に当たった。パソコンに入力する方法としては2通りとした。1は、デジタイザーで図形の座標値を点の集合として入力する方法である。2は、昨年度に実験的に行った写真測量を一步進め、図化機を従来のものから自動的に点の3次元データが磁気媒体に入力される解析図化機を用いた方法である。

この解析図化機を用いた方法では実測図ができあがると同時に作図データも入力できるというメリットがある。データはX、Y、Zおよび線種、点の属性、線号（線の太さ）という項目から成り立っている。実測図のデータはデータベースの中に入力され、1つのファイルとして保存されることになる。図の出力は、市販されているCAD（Computer Aided Design）のソフトウェアに少し手を加えたものを使用している。これによりパソコン上の編集や自由な縮尺での作図が可能である。（辻 純一）

2 コンピュータ

コンピュータを利用した考古学のデータ処理業務は本年度で3年目をむかえ、新たに16ビットパソコン（PC-9801E）、プロッター、デジタイザーを導入し、調査支援体制

の強化を図った。作業は、昨年度に引続きオフコンによる調査カードを中心とした入力作業を進め、調査カード約 6000 件の入力を終えた。このほか、試掘・立会・広域立会調査における断面データの整備を開始し断面カード記入後、入力作業に入っている。入力作業は業者依頼と手入力の両面から進めている。これとは別に、16 ビットパソコンにより専門化している写真・測量業務の資料整理を開始した。これは昨年後半から、かなりよい 16 ビット用のソフトウェアが出てきたことにより、安価で小回りのきく作業が期待できることが予想されたためであり、調査に付随して発生するデータをいかにさばっていくかの指標となるもので、今後の成果に期待できよう。また、測量のところであつた遺構実測図の入力も同時に進めている。

(辻 純一)

3 写真撮影

最近の当研究所における 1 年間の 4 × 5 I N 判平均撮影量は、6000 ～ 7000 カットにのぼる。昭和 60 年度末で 4 × 5 I N 判のカラーも含めると約 80000 枚以上の資料が蓄積され、プロニー判以下の白黒ロールフィルムの数量は 18000 本余を越える。これまで当研究所での写真データはカード形式による整理、登録方法を探ってきた。しかしこの方法では年々増加の一途をたどる膨大な写真資料整理には対応できず、検索にも手間がかかっていた。よって、整理がより効率的でしかも素早い検索が可能で、さらにその台帳の機能を拡充する目的からパソコンを利用した写真データのデータベース構築を計画した。

作業は昭和 60 年 5 月から開始した。その入力作業はコンピュータ担当者からアプリケーションソフトなどの作成で協力を得て、通常の撮影、暗室作業の合間に写真担当者が行い、同年 12 月にはすべてのシートフィルムの入力を完了した。

そのシステム設計の選択にあたっては、ハードウェアとして本体を N E C - P C 9801 E (メモリー 384 K B), ディスプレイ (K D - 551), プリンター (P C - P R 201 C L), 8 インチフロッピーディスク (P C - 9881 K), 10 メガハードディスク (P C - 98 H 33 K) とした。ソフトウェアはアスキー社の I N F O R M I X を採用した。これは当研究所の他のデータベースに採用されていること、加えて操作が簡単で、入力、検索が容易であること、データ量が比較的多量であること、しかも一般的に広く利用されているため、他の資料のデータベース化にも応用できることがその理由であった。

作業メニューは次のとおりにした。

- 1 写真台帳登録 (4 × 5 登録, R O O L 登録・登録ノート)
- 2 写真台帳検索 (ディスプレイ表示)

- 3 レポート作成（プリントアウト）
- 4 バックアップ
- 5 分布図出力
- 6 略記号地点入力

シートフィルムのデータ入力項目は次のように設定した。

- #……………レコードNo
- a 種別……………遺跡・遺物の区分（S，R）
- b 4×5 I N ネガNo…原版No（◇◇-◇◇◇◇◇◇-◇◇◇◇◇◇）
- c 略記号……………地区，調査現場，調査次数略記号（◇◇-◇◇-◇◇）
- d 名前……………調査現場通称名（◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇）
- e 時代……………遺構・遺物の時代（コード）
- f 種類-1……………遺構…… 遺跡の種類（コード）
遺物…… 器種（コード）
- g 種類-2……………遺構…… 遺構の種類（コード）
遺物…… 器形（コード）
- h 内容……………遺構名，地区名，撮影方向，遺構Noなど
遺物名，出土地点，墨書内容，遺物No，実測Noなど
- i Color ……………4×5 I N判カラーリバーサルの枚数（◇）
- j Date ……………登録日付（◇◇/◇◇/◇◇）
- k S C……………その写真が添付してあるスクラップブックNo（◇◇）

それらの項目の字数は，合計すると96バイトである。#は自動的に入力されるレコードNoである。レコードNoを項目の中に入れていないのは，ファイルをソート，もしくはインデックスしたときに，それぞれの番号の順序も変更され，中でそれが入り乱れる結果となり，何の意味ももたなくなるからである。他にも調査年度，調査者，撮影日などの項目も考えられたが，当研究所では遺跡カード，遺物カード，調査カードとして他の部門のファイルに入力されているので写真登録での必要性は薄く，加えてそれらの入力によってデータ容量が大きくなり，迅速に検索できにくいと判断し，削除した。

検索ではこれら入力した全項目を出力する必要もないので，1件数につきディスプレイ上，またはプリント時に1行に納まるようにプログラムを設定した。見易く，しかも出力時間の短縮にもなる。

コードの設定は、項目の設計、件数、検索や、ソートによる簡略、短縮、さらに容量の節約も兼ねており便利でもある。幸いにも当研究所ではオフコン導入時においてコード化を検討、すでに実用化されており、写真整理でもできる限りそのまま使用することにした。しかし他のカード類では使用しても、写真の登録には使用頻度の少ない項目（撮影者名、撮影方向、撮影日、撮影データ等）や、1枚の写真に色々な情報が写し込まれている複雑さもありコード表をある程度整理し、削除したり、加えたりする必要もあった。

入力作業は整理済みの資料から始めた。データを注記し終えていたものはスムーズに進み問題は少なかったが、未整理の資料は遅れた。ここでは記入方法、注記事項の問題として時代、時期の記入を行う必要など今後の検討課題も残った。

検索には前述したように、検索用のアプリケーションソフトを作成し、利用範囲の広い次の検索条件を設定した。これ以外の検索事項や単独での検索には INFORMIX・ソフト自体がもつ機能を使用した。

- A 時代 種類-1 種類-2
- B 時代 種類-1
- C 時代 種類-2
- D 種類-1 種類-2

プリントが必要なときには、はじめにレポート作成作業メニューの選択をすれば検索時と同じ項目が表示される。ただしこれらには検索条件として使用する機会が非常に少ない#No, 登録日, Color, コードによる検索項目は表示、プリントアウトさせていない。これによって1行で1件数を済ますこともでき、見易いという利点があるからである。次に、シートフィルムとロールフィルムでは撮影目的、検索目的、使用目的等々が大きく異なっているために、フィルム名、項目は別にした。またロールフィルムは1本の中に数多くのコマが写されていることや、タイトルがはっきりしないこともある。

白黒ロールフィルムの項目設定は次のとおりで、91バイト確保している。

- #……………レコードNo
- a ネガNo ……(◇◇-◇◇◇◇◇)
- b 略記号 ……地区, 調査記号, 次数 (◇◇-◇◇-◇◇◇◇)
- c 名前 ……調査現場略称 (◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇)
- d 内容-1 ……代表的内容 (◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇)
- e 内容-2 ……代表的内容 (◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇)

f SC ……………スクラップNo. (◇◇◇)

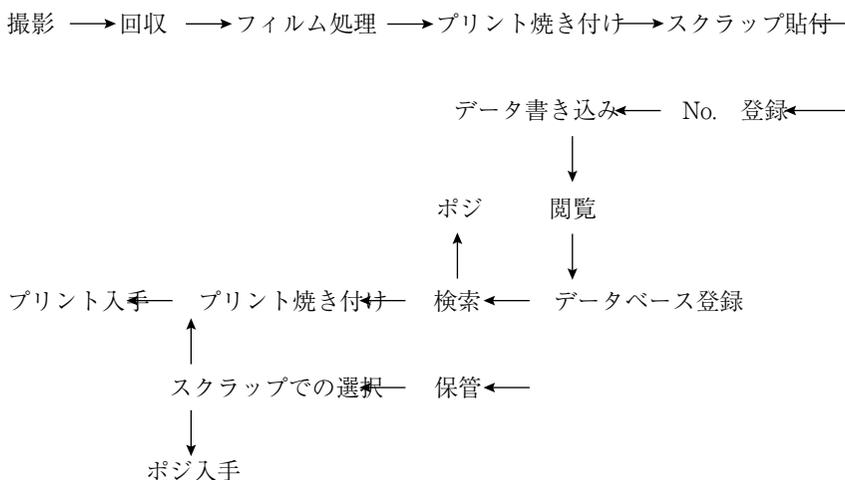
g サイズ ……………原版サイズ (◇◇)

h 登録日 ……………(◇◇/◇◇/◇◇)

白黒ロールフィルムの台帳作成，および入力シートフィルムの入力作業が終了した後
に続けて行い，昭和 61 年 3 月末に一応その作業も完了した。

さて，これらのデータ入力がすべて終了した後，調査カードに記入されている調査地点
の基準杭の平面直角座標系Ⅳの数値もすべて入力すれば，写真のデータ検索と同時にそれ
らの地点を地図上にドットさせることが可能になり，視覚的な確認ができて有効であると
考え，実行したのが分布図出力メニューである。これも台帳検索の項目と同じ条件で表示
することができ，また単独でも可能である。建造物や参考資料，表採の遺物写真などとい
った座標値が不明の場合にはマウスを用いることによって画面をクローズアップし，おま
かな値ではあるが入力できるように設計した。この場合 4 × 5 IN 判の撮影されている写
真データに関してのみ有効であり，市域全体，出土遺構全容を把握することはできない。
重要な遺構・遺物の出土地点，データの目安としてはおおいに役立つが，あくまでも写真
管理のデータである。

以上の経過，作業，システム設計によって写真の管理，活用は今まで以上に効率良くで
きる。これで当研究所での写真資料は，撮影，フィルム処理，プリント焼き付け，スク
ラップブックへの貼付，データ書き込み，登録（データベース），管理，閲覧，保存，検索，
活用という一連の過程が完成したことになる。



なお本年度は，他に付表 3 に示した外部組織からの委託撮影も行った。（牛島 茂）

入力例

	写真台帳	京都市埋文研
件数	[14540]	
種別	[S]	
4 × 5 No.	[TB-4417-4420]	
略記号	[TB-TB-97]	
名前	[鳥羽離宮 金剛心院]	
時代	[08]	
種類-1	[03]	
種類-2	[050]	
内容	[SD5 SD6 全景]	
カラー	[0]	
登録日	[84/06/11]	
スクラップ	[35]	

検索出力例 (検索条件-緑釉陶器碗)

NEGA NO.	略記号	調査通称名	時代	内容	4 × 5 Color	SC
HK-26397-26398	HK-CF-5	鳥津製作所	08	SD6 NO397	0	10
HK-26399-26400	HK-CF-5	鳥津製作所	08	SX3 NO210	0	10
HK-12125-12128	HK-CM-2	中務省	08	1/1+++SK1	0	2
HK-3276-3277	HK-CS	西大三条東市住	08	SE7	0	1
HK-3278-3279	HK-CS	西大三条東市住	08	SE7	0	1
HK-5355-5356	HK-CZ	朱雀院	08	白磁3個体他 4点集合	0	1
HK-15603-15604	HK-FE	大林ビル	08	SE1 (小型)	0	1
HK-13436. 14378	HK-HL-1	山陰線高架	08	図版11 8個体 SX2 SX3	0	1
HK-13437. 14376	HK-HL-1	山陰線高架	08	図版11 5個体 SX6	0	1
HK-10396-12397	HK-IA-1	富永製作所	08	SX1「天曆七年」	0	2
HK-19601-19694	HK-IJ	太子道マンション	08	池 SX 出土 大型	0	1
HK-23520-23521	HK-IM	旧井上牛乳 (東レ)	08	SD14 NO170 小型	0	2
HK-23562-23563	HK-IM	旧井上牛乳 (東レ)	08	SD14 NO164 輪花	0	2
HK-23576-23577	HK-IM	旧井上牛乳 (東レ)	08	SD31 陰刻	0	2

4 保存科学

はじめに 保存科学では、木製品や金属製品を中心とする保存処理の他、市内から出土する植物遺体や動物遺体の授取、保存、整理を行っている。85年度の発掘調査では、左京区聖護院地区の縄文後期と、伏見区深草地区の縄文晩期の遺構から、それぞれ当時の食料となった可能性の高いナッツ類、マメ類などの植物性炭化物を検出した。これまでこうした植物性の炭化物で縄文時代に属するものは、京都市域での検出例や報告例が少ないので、その分析結果を報告する。

採取法 炭化物の含まれる土壌や包含層中の土壌を、聖護院地区で80リットル、深草地区で各層から4リットル取り上げ、1mmメッシュのフルイで水洗した。残滓の中から土器片や石器の剥片、種実や炭化物を採取した。炭化物については実体顕微鏡下で種実、果皮、木炭に分類し形態の観察を行った。

1 聖護院地区

聖護院地区の大阪ガス立会調査で出土した縄文時代後期の土壌中から、土壌を採取し水洗した結果、表1の内容物を確認した。

木炭片はいずれも2cm以下の小片で、観察した限りでは広葉樹が多い。果皮片はナッツ類のもので、いずれも5mm以下の細片のものが多い。中には表面がなめらかなトチの果皮様のものもある。ドングリ類の果皮の基部も見られる。炭化マメは形態がリョクトウに類似する。完形のもはマメ本来の形状を保持している。炭化ナッツ類には表面にクリ様のヒダのあるものや、シイ、イチイガシ、その他のドングリ類の大きさを持つものがある。わずかにアサダ様のものもある。

以上は、炭化してもそれぞれの種実の特徴を保持しているもので、その他に本来の形状が全く推定できないほどに変形した炭化物がある。一般に穀類やマメ類では、たんなる焼け焦げでは種実が膨潤して果皮がはちきれた状態になるのが普通で、形状が分からなくなるほどに変形することは少なく、長時間にわたって煮炊きし、焼け焦げを作った場合にのみ変形がはげしくなる。当調査地で出土した本来の形状を著しく失った炭化物を、ここでは煮焦げ炭化物と考える。出土した可食部と考えられる炭化物の総量は8.8gとわずかではあるが、その中に煮焦げ炭化物は2.8gと約3分の1を占める。炭化物以外のものとしてごくわずかであるが石炭と考えられるもの、漆片、骨片がある。石炭と考えられるものは光沢がある。漆片は容器に入った赤漆液がそのまま固化したものがヒビ割れて剥落したのか、厚みのある破片である。その他に赤漆を塗った小さな土器の微細片が1点ある。

2 深草地区

深草地区の発掘調査で出土した古墳時代の流路と、その下層にある縄文時代晩期の包含層の各層から、土壌を4リットル採取し水洗した結果、縄文時代晩期の包含層からは炭化物を、古墳時代の包含層からは栽培植物の種実を得た。結果は下表の通りである。

古墳時代 溝58の灰色粘土層、有機質シルト層は古墳時代に属するもので、両層からあわせて木本3科3種、草本9科10種を検出した。木本の構成内容はキイチゴ属、ブドウ属、タラノキなど、丈の低い陽樹からなる。草本の構成内容も基本的に草丈の低い乾燥

地に植生するものからなる。これらの結果から、当調査地付近の古墳時代の土地利用状況を考えると、木本種類が少ない空闲地であったことが推定できる。表から明らかなように、溝の灰色粘土層と有機質シルト層との間に植生の違いは見られない。

栽培植物としてわずかにヒョウタンがある。こうした栽培植物があることは、上述の土地利用状況の推定と矛盾しない。

縄文時代 採取できた資料はすべて炭化物である。炭化物の内容には、ナッツ類とその果皮および木炭片があり、これらの炭化物は焼き栗のように、直接火熱に当たって焼け焦げた状態を示している。中に煮焦げと考えられるものはなく、この点で上述の聖護院出土の炭化物と利用状況に違いがある。 (岡田文男)

**表1 聖護院地区出土
炭化物ほか**

内 容	重量 (g)
炭化木片	11.4
炭化果皮片	2.6
炭化マメ	0.8
炭化ナッツ類	5.2
煮焦げ炭化物	2.8
不明炭化物	1.8
石炭?	
骨片	4.7
漆片	0.1

表2 深草地区出土植物遺体と炭化物

地区	層 位	木 本	草 本	
溝 58	灰色粘土層	ブドウ属 タラノキ	タデ イヌビユ ヘビイチゴ ノブドウ カタバミ	ナス属 ヒョウタン タカサプロウ ホタルイ カヤツリグサ
溝 58	有機質シルト層	キイチゴ属 ブドウ属 タラノキ	タデ イヌビユ ヘビイチゴ ノブドウ カタバミ	ナス属 ヒョウタン タカサプロウ ホタルイ カヤツリグサ
	縄文晩期包含層	炭化物 ナッツ類 果皮 木炭片	重量 4.5g 1.6g 10.8g	

保存科学写真図版

番号	品名	倍率	写真ネガ番号	番号	品名	倍率	写真ネガ番号
1	マメ	約5倍	00-1091-4	11	マメ	約5倍	00-1091-21
2	マメ	約5倍	00-1091-5	12	マメ	約5倍	00-1091-23
3	マメ	約5倍	00-1091-7	13	マメ	約5倍	00-1091-25
4	マメ	約5倍	00-1091-9	14	マメ	約5倍	00-1091-27
5	マメ	約5倍	00-1091-11	15	マメ	約5倍	00-1091-29
6	マメ	約5倍	00-1091-E	16	マメ	約4倍	00-1091-32
7	マメ	約5倍	00-1091-2	17	マメ	約4倍	00-1091-14
8	マメ	約5倍	00-1091-16	18	マメ	約4倍	00-1091-35
9	マメ	約5倍	00-1091-17	19	マメ	約5倍	00-1090-3
10	マメ	約5倍	00-1091-20	20	マメ	約5倍	00-1090-7

5 報告書の刊行

昭和 60 年度は次の報告書を刊行した。

1	『平安京跡発掘調査概報』昭和 60 年度	1986 年 3 月
2	『鳥羽離宮跡発掘調査概報』昭和 60 年度	1986 年 3 月
3	『中臣遺跡発掘調査概報』昭和 60 年度	1986 年 3 月
4	『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和 60 年度	1986 年 3 月
5	『御堂ヶ池古墳群音戸 山古墳群発掘調査概報』昭和 60 年度	1986 年 3 月
6	『醍醐古墳群発掘調査概報』昭和 60 年度	1986 年 3 月
7	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和 60 年度	1986 年 3 月
8	『京都市埋蔵文化財調査概報』昭和 58 年度	1986 年 3 月

6 遺物の貸し出し

昭和 60 年度は次に示す各期間に当研究所の管理する遺物などを貸し出した。

番号	貸し出し機関名	遺跡	貸し出し遺物	目的	期間
1	富永製作所	右京二条二坊・工場建設地出土遺物	平安～鎌倉時代の土師器・瓦 (13点)	社内展示	S60. 4. 1～S61. 3. 31 (昭和 59 年度より継続)
2	西部都市開発株式会社	大枝山古墳群	須恵器・金環・銀環・銀象嵌刀 (25点)	(株)西武百貨店池袋店展示	S60. 5. 4～5. 20
3	三条隣保館岡崎福祉センター	尊勝寺塔跡出土遺物	弥生土器片・須恵器・瓦 (11点)	館内展示	S60. 6. 7～6. 11
4	学校法人京都橘女子大学	伏見城跡出土	金箔瓦 (14点)	学校移転式典展示	S60. 5. 15～5. 20
5	東京国立博物館	平安京址出土	平安京跡出土陶磁器一括 (38点)	「日本の陶芸」展示	S60. 9. 17～12.15
6	向日市文化資料館	中久世遺跡・岡崎遺跡・中臣遺跡他	弥生土器 (18点)	「米作りの伝来と乙訓 - 弥生時代のムラとムラの交流」	S60. 8. 12～12. 7
7	向日市文化資料館	中久世遺跡	弥生土器片 (12点)	同上	S60. 8. 29～12. 7
8	京都府立総合資料館	京都市内一円	先土器～江戸時代の遺物 (225点・他一括)	「京都文化の伝流 - 古都千年のしらべ展」	S60. 9. 24～11. 14
9	(財)馬事文化財団		兵馬俑馬 (複製) (1体)	「馬のシルクロード展」	S60. 9. 26～11. 14
10	神戸市教育委員会	鳥羽離宮跡	軒瓦 (8点)	「地下に眠る神戸の歴史展」	S60. 10. 21～12. 4
11	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター	平安京跡	井戸枿材・曲物 (7点)	年輪測定	S60. 10. 1～10. 30
12	(財)馬事文化財団		兵馬俑馬 (複製) (1体)	馬の博物館々内展示	S60. 11.15～11. 14
13	(株)日本興業銀行	左京四条三坊	室町～近世陶磁器 (15点)	店内展示	S60. 3. 9～S61. 3. 8 (昭和 59 年度より継続)

第4章 事務報告

1. 人事異動

(1) 監事の変更（昭和60年6月25日付）

就任 井上嘉久

辞任 竹村 實

(2) 事務局員の異動

採用 総務部総務課 東藤 昭（昭和60年4月15日付）

考古資料館 館長 小川 武（昭和60年6月1日付）

退職 考古資料館 館長 黒川武男（昭和60年5月31日付）

資料部 資料課長 江谷 寛（昭和60年3月31日付）

考古資料館 主事 牧 康司（昭和60年3月31日付）

2. 普及啓発及び技術者養成事業

(1) 埋蔵文化財講演会

日時 昭和60年11月17日 会場 京都会館会議場

「埋蔵文化財としての平安宮」 研究所長 杉山信三

「平安宮と貴族政治」 京都女子大学教授 村井康彦

（参加者 約300名）

(2) 写真展「'85発掘調査成果集」

期間 昭和60年11月14日～24日（10日間） 会場 京都市考古資料館

（入場者766名）

今年度の埋蔵文化財講演会は、ここ数年来の発掘調査の結果、多くの成果をあげている「平安宮」をテーマとして開催し、約300名の参加者を集めた。

講演は、まず杉山所長が「埋蔵文化財としての平安宮」と題し、発掘調査を通じての「平安宮」について述べ、次に京都女子大学教授の村井康彦氏から「平安宮と貴族政治」と題して、文献資料から見た「平安宮」の成立並びに貴族政治の展開について述べられた。

杉山所長は近年の調査により明らかとなった宮内の遺跡——たとえば、内裏承明門跡の発見及びそれに伴う地鎮法の跡（儀式に用いられた輪宝と楯の出土）の発見、朝堂院北回廊の建物基壇（延石・地覆石等の残存）の出土など——を紹介し、それらの成果をもとに

して宮内諸官衛の位置を決定でき、又、そのデータをコンピューター処理することにより内裏の中心線を確定することも可能になったことなどを述べた。

次に、村井教授からは、『方丈記』などの中に見られる政治、社会情勢の記述を引用し、当時の貴族社会が「平安宮(京)」の成り立ちにどのような影響を及ぼしたか、又、どのような宮廷政治が展開されたかを論じた。さらに、平安京の平面構成について、『山槐記』の記述をもとに藤原京などの宮



埋蔵文化財講演会

都と比較検討を加えた結果表された、「平安京北辺大路説」についても論述を加えた。また内裏内の「後宮の殿舎」で繰り広げられた貴族政治、貴族生活についても『枕草子』などの記述を用い解説を加えた。

なお、今回の講演会の参考資料として最近の平安宮跡発掘調査の成果をまとめたパンフレット「埋蔵文化財としての平安宮」を作成配布し、参加者からの好評を得た。

写真展「85 発掘調査成果集」は平安宮跡、鳥羽離宮跡等を中心にパネル 35 枚で調査成果を紹介した。

(3) 現地説明会の開催

- | | | | |
|---|-----------------------|------------------|--------------|
| ア | 昭和 60 年 5 月 19 日 | 「醍醐古墳群」 | (参加者約 300 名) |
| イ | 昭和 60 年 6 月 23 日・30 日 | 「平安京右京二条二坊」 | (参加者約 200 名) |
| ウ | 昭和 60 年 7 月 14 日 | 「鳥羽離宮跡第 109 次調査」 | (参加者約 80 名) |
| エ | 昭和 60 年 2 月 16 日 | 「鳥羽離宮跡第 117 次調査」 | (参加者約 50 名) |
| オ | 同上 | 「伏見城跡」 | (参加者約 100 名) |

(4) 研究会等への派遣

- | | | | |
|---|--------------------------------|--|--------------------|
| ア | 昭和 60 年 5 月～昭和 61 年 3 月 (毎月開催) | 場所 京都府埋蔵文化財調査研究センター
「長岡京連絡協議会」 | 調査部 研究職員 長宗繁一・上村和直 |
| イ | 昭和 60 年 5 月 8 日 | 場所 奈良国立文化財研究所
「第 7 回近畿地方出土木簡の集成研究会」 | 調査部 研究職員 百瀬正恒 |

- ウ 昭和60年6月12日・13日 場所 ひょうご共済会館
「昭和60年度地理情報システム研究集会」 調査部 研究職員 辻 純一
- エ 昭和60年7月13日 場所 天理参考館
「第10回西日本縄文研究会」 調査部 研究職員 菅田 薫
- オ 昭和60年8月17日・18日 場所 島根大学
「第18回埋蔵文化財研究会」 調査部 研究職員 百瀬正恒
- カ 昭和60年8月20日 場所 兵庫県埋蔵文化財調査事務所
「第8回近畿地方出土土簡の集成研究会」 調査部 研究職員 百瀬正恒
- キ 昭和60年9月27日 場所 奈良県立橿原考古学研究所
「第9回近畿地方出土土簡の集成研究会」 調査部 研究職員 中村 敦
- ク 昭和60年10月18日～20日 場所 青山学院大学
「第6回日本貿易陶磁研究会」 調査部 主任 永田信一
研究職員 堀内明博・百瀬正恒
- ケ 昭和60年10月19日 場所 大阪市中央公会堂
「第3回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会」 調査部 研究職員 梅川光隆
- コ 昭和60年10月26日・27日 場所 奈良市史跡文化センター
「日本考古学協会昭和60年度大会」 調査部 研究職員 岡田文男
- サ 昭和60年10月31日～11月2日 場所 福岡市埋蔵文化財センター
「シンポジウム“考古学とコンピューター”」 調査部 研究職員 辻 純一
- シ 昭和60年11月9日・10日 場所 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
「第5回中世遺跡研究集会・中世の漆器」 調査部 研究職員 上村和直
- ス 昭和60年11月9日・10日 場所 横浜市西区公会堂
「称名寺式土器に関する討論会」 調査部 研究職員 菅田 薫
- セ 昭和60年12月8日 場所 奈良国立文化財研究所
「第7回木簡学会研究集会」 調査部 研究職員 辻 裕司
- ソ 昭和61年3月19日・20日 場所 平城宮跡資料館
「第2回条里制研究会大会」 調査部 研究職員 久世康博
- タ 昭和61年3月24日・25日 場所 奈良国立文化財研究所
「埋蔵文化財の材質・構造・保存環境
に関する研究集会」 調査部 研究職員 岡田文男

(5) 埋蔵文化財発掘技術者専門研修への派遣

昭和 60 年 11 月 1 日～ 19 日 (15 日間) 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
「予備調査過程」 調査部 研究職員 磯部 勝

3. 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会の開催 (主管法人・京都市)

日時 昭和 60 年 10 月 17 日・18 日 場所 京都市 (京都堀川会館)

第 1 日目 記念講演 「市街地における遺跡の調査方法について」

(財) 京都市埋蔵文化財研究所 調査部長 田辺昭三

分科会 管理運営部会「公益法人会計基準の改正について」

(出席者 45 名)

調査研究部会「市街地遺跡の調査・記録法について」

(出席者 56 名)

第 2 日目 視察 高台寺・妙心寺

全国埋蔵文化財法人連絡協議会昭和 60 年度研修会を 10 月 17 日・18 日の両日京都市において開催し、加盟 31 法人から 113 名が出席した。

第 1 日目は午前中に開会行事と記念講演を、午後からは分科会を行った。2 日目は視察行事として、高台寺及び妙心寺を拝観し日程を終了した。

記念講演は京都市埋蔵文化財研究所田辺昭三調査部長が「市街地における遺跡の調査方法について」と題し、京都市が直面している市街地遺跡の発掘調査に関し、その特殊性、歴史的経過、調査方法等についての講演があった。それによると、京都市内におけるこのような狭小で複雑な遺跡調査については、測量基準点の利用や立会調査等の活用を通じて調査成果を「点」から「線」、「線」から「面」へとつないで行くことにより、多大な成果をあげており、また、こうした調査方法を都市遺跡以外の遺跡にも応用することが可能でないかという提議がなされた。



全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会

分科会は、管理運営部会と調査研究部会の二部会に分かれて開催した。

管理運営部会は「公益法人会計基準の改正について」と題し、45名の出席を得て開催した。会議は昭和62年度から改正される「公益法人会計基準」について、公認会計士を講師に迎えそのポイントにつき、ケーススタディ等を交えての講義があった。また、事例報告として「会計処理のコンピューター化」と題し、群馬県埋蔵文化財調査事業団から実例をもとにした報告があった。

調査研究会においては56名が出席し、「市街地遺跡の調査・記録法について」をテーマに議論が行われた。まず、京都市の事例報告として市街地調査における埋蔵文化財行政の取り組み方、発掘・試掘立会調査法、測量・コンピューターでの記録法について具体的な実例をあげての報告があった。また、他法人の事例報告として東京都埋蔵文化財センター、大阪市文化財協会及び北九州市教育文化事業団からも市街地遺跡の調査に対する取り組み方が報告され、質疑応答を通じ活発な意見交換が行われた。

4. シリア沖古代遺跡発掘調査への派遣 シリア沖古代遺跡発掘調査運営委員会
昭和60年8月30日～10月16日 調査部長 田辺昭三
昭和60年9月2日～10月31日 調査部 研究職員 吉崎 伸

5. 京都市考古資料館の状況

(1) 展示替えの実施

「平安宮跡コーナー」の新設、「立体年表コーナー」のカラーコルトン、「時代別コーナー・弥生」の稲の写真及び「同・長岡京」の遺構写真取り替え。



小学生親子教室（土器づくり）

(2) 文化財教室・文化財講座の開催

「第6回小・中学生夏期教室」

期間 昭和60年8月7日～10日

(小・中学生とも各2日間)

ア 「小学生親子教室」

第1日目 学習及び土器づくり

第2日目 資料館見学、映画「登呂の村」鑑賞、感想文作成

参加者 小学生親子43組

イ 「中学生サマースクール」

第1日目 移築復元された「御堂ヶ池1号墳」の見学後、考古資料館見学及び学習

第2日目 大宅廃寺現場での発掘調査及び遺物の水洗の実習

参加者 中学生 49名

(3) 土器づくり作品展の開催

期間 昭和60年8月21日～31日

(夏期教室でつくった土器の展示。

同時に夏期教室における写真展も実施)

今年度の「京都市考古資料館小・中学生夏期教室」では、「中学生サマースクール」において新しく市内の史跡見学を加えた。第1回目の今回は



中学生サマースクール

新しく右京区鳴滝音戸山町（通称さざれ石山）に移築復元された「御堂池1号墳」の見学を行った。見学は担当職員の説明により、墳丘部だけでなく石室内までも行い、参加者からの好評を得た。

(4) 入館者の状況

昭和60年度月別観覧者一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12歳未満		
4	25日	1,314人	312人	189人	124人	1,939人	77.6人
5	27	1,500	382	208	1,019	3,109	115.1
6	26	1,299	297	0	162	1,758	67.6
7	26	1,270	407	80	83	1,840	70.8
8	26	1,505	551	50	32	2,138	82.2
9	25	1,224	313	61	0	1,598	63.9
10	27	1,340	274	93	20	1,727	64.0
11	26	1,373	309	244	0	1,926	74.1
12	23	1,145	199	76	69	1,489	64.7
1	24	1,062	214	117	154	1,547	64.4
2	24	1,208	225	39	108	1,580	65.8
3	26	1,679	344	0	0	2,023	77.8
合計	305	15,919	3,827	1,157	1,771	22,674	74.3

参考 昭和59年度観覧者合計 23,190人(一日平均 75.5人)

付表1 昭和60年度発掘調査一覧表

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類	
平安宮	1	60-001-01-01 長殿 (85HK-LM)	上京区中立売通千本東入2丁目、田丸町375-2、376-4・5、688-2・6	85.07.11 ～87.08.08	100	ND64-1B55VB	名筋力	梅川	国庫補助	
	2	60-001-01-02 大極殿 (85HK-LO)	上京区千本通丸太町上る小山町880	85.07.12 ～85.07.24	70	ND64-1J23MU	上田武子	辻(純)	国庫補助	
	3	60-001-01-03 大極殿 (85HK-LP)	上京区千本通下立売上る小山町908-53	85.10.28 ～85.11.09	43	ND64-1J24VB	鈴木進	梅川	国庫補助	
平安京	4	60-028 左京三条二坊九町 (85HK-MO)	中京区油小路通二条下る二条油小路町238-1	85.07.13 ～85.09.07	300	ND64-3D32TL	藤田観光株式会社 ホテル建築工事	木下丸川		
	5	60-016 左京三条二坊十町 (85HK-MN)	中京区油小路通押小路下る押油小路町238-1	85.05.10 ～85.09.23	616	ND64-3D52WX	京都市城巖中学校 校舎改築	平安京調査会		
	6	60-053 左京四条四坊五町 (85HK-FG)	下京区四条柳馬場西入立売中之町90-2	86.04.07 ～86.06.06	415	ND64-4J42HT	野村土地建物株式会社 建物建設	平安京調査会		
	7	60-011 左京七条二坊十一・十二町、八条二坊九町 (85HK-WE)	下京区丸屋町～油小路町(堀川通)	85.07.23 ～85.09.26	710 (446)	ND74-1L43WF	建設省、一般国道1号 線、共同溝建設	平安京調査会		
	8	60-025 左京八条二坊九町 (85HK-BE)	下京区油小路通下魚の棚下る油小路町288、305	85.07.01 ～85.09.14	251	ND74-3D13JL	株式会社井筒 ビル新築工事	上村久世		
	9	60-015 左京八条三坊七町 (85HK-BD)	下京区三哲通西洞院東入東塩小路町843-2、842-16	85.06.03 ～85.10.09	500	ND74-4A31FW	日本生命保険相互会社 ビル新築工事	平安京調査会		
	10	60-007 左京九条三坊十三～十五町 (85HK-KA007)	南区東九条西山王町 他	85.02.27 ～85.05.04 85.07.11 ～85.08.03 85.10.31 ～85.11.01	269 (立会 189)	ND74-4E34PF	京都市交通局 高速鉄道烏丸線建設	平安京調査会		
	11	60-010 右京二条三坊一町 (85HK-IK)	中京区西ノ京中御門西町13	85.05.06 ～85.08.26	1766	ND63-2L31NB	近畿郵政局宿舎 新築工事	堀内吉崎		
	12	60-048 右京二条三坊 (85HK-IL)	中京区西ノ京春日町16	86.01.17 ～86.02.15	131	ND63-2K55AG	社団法人京都保健会 松本伸也	平尾本		
	13	60-055 右京二条三坊十五町 (85HK-IM)	右京区花園春日町4	86.02.17 ～86.04.30	1150	ND63-2K52BW	東レ建設株式会社 マンション建設	平尾本		
	14	60-023 右京三条一坊 (85HK-UE)	中京区西ノ京永本町7-1(西ノ京中学校)	85.06.20 ～85.08.28	433	ND64-3A34MR	京都市西ノ京中学校屋 内、体育館、増築工事	加納辻(裕)		
	15	60-006 右京三条二坊五町 (85HK-RE)	中京区西ノ京北小路町4 他	85.04.15 ～85.08.14	1435	ND64-3E31FA	京都市長 今川正彦	平尾本		
	16	60-036 右京三条三坊五町 (85HK-CF005)	中京区西ノ京桑原町1	85.10.21 ～86.02.17	1115	ND63-4G25WK	株式会社島津製作所 横地筋男	平尾本		
	17	60-032 右京八条二坊二町 (85HK-YC002)	下京区西七条石井町61(七条小学校)	85.08.30 ～85.10.20	150	ND74-3A21IJ	京都市七条小学校 給食室改築	辻(裕) 本 加納		
	18	60-049 右京九条二坊四町 (85HK-RK II)	南区唐橋大宮尻町22(洛陽工業高校)	86.01.13 ～86.04.19	590	ND74-3E52IK	京都市洛陽工業高校 校舎新築	梅川堀内		
	鳥羽離宮跡	19	60-001-03-02 第110次調査 (85TB-TB110)	伏見区竹田浄善薩院町73-3	85.05.27～ 85.08.04	560	ND84-3L22QJ	倉庫建設 西井建之	中村鈴木(久)	国庫補助
		20	60-001-03-02 第111次調査 (85TB-TB111)	伏見区竹田小屋ノ内町1-1 伏見区竹田浄善薩院町72-2	85.07.09～ 85.07.15	237	ND84-3K35IC	建築工事 松本正子	鈴木(久)	国庫補助

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
鳥羽離宮跡	21	60-001-03-03 第112次調査 (85TB-TB112-A)	伏見区竹田浄善齋院町56、58-1	85.10.30 ～ 86.01.20	1170	ND84-3L23IY ND84-3L23DS	京都市区画整理 山口薫、山田亀次	鈴木(久) 前田	国庫補助
	22	60-001-03-04 第113次調査 (85TB-TB113)	伏見区竹田小屋ノ内町3-1	85.10.30 ～ 85.11.13	782	ND84-3K34IY	砂利採集工事 大同産業小野成昭	北田 堀内 鈴木(久)	国庫補助
	23	60-019 第114次調査 (85TB-TB114)	伏見区中島宮ノ後町	85.12.01 ～ 86.03.25	325	ND84-3K21HI	京都市区画整理	鈴木(久)	
	24	60-001-05-06 第115次調査 (85TB-TB115)	伏見区中島秋ノ山町53	85.11.18 ～ 85.12.04	422	ND84-3J34AM	倉庫建設	鈴木(久) 中村	国庫補助
	25	60-019 第116次調査 (85TB-TB116)	伏見区中島秋ノ山町	85.11.25 ～ 85.12.06	180	ND84-3J23LX	京都市区画整理	堀内	
	26	60-001-03-05 第117次調査 (85TB-TB117)	伏見区竹田浄善齋院町32	86.01.29 ～ 86.02.28	510	ND84-3L23EQ	山本シズ	鈴木(久) 前田	国庫補助
	27	60-019 第118次調査 (85TB-TB118)	伏見区中島秋ノ山町	86.03.05 ～ 86.05.09	765	ND84-3J24KG	京都市区画整理	鈴木(久)	
	28	60-001-03-06 第119次調査 (85TB-TB119)	伏見区竹田中殿町56-3	86.03.17 ～ 86.04.04	210	ND84-3G35VC	吉村房枝	中村 吉崎	国庫補助
中臣遺跡	29	60-001-02-01 第61次調査 (85RT-NK061)	山科区勤修寺西栗栖野町26-6.28-3	85.04.06 ～ 85.04.18	113	ND85-2F12YY	喜多吉一	菅田	国庫補助
	30	60-001-02-02 第63次調査 (85RT-NK063)	山科区勤修寺西金ヶ崎93	85.09.24 ～ 85.10.18	204	ND85-2E25MX	森田武士	丸川 木下	国庫補助
	31	60-001-02-03 第64次調査 (85RT-NK064)	山科区勤修寺西栗栖野町45-33・34、山科区勤修寺西金ヶ崎86-3・4	85.11.01 ～ 85.11.15	180	ND85-2F11UJ	森田清、照子	丸川 木下	国庫補助
	32	60-001-02-04 第65次調査 (85RT-NK065)	山科区西野山中臣町66	86.02.15 ～ 86.03.05	192	ND85-2E25FI	森田武士	丸川 木下	国庫補助
長岡京跡	33	60-009 左京一条三坊十三町 (85NG-SD006)	南区久世東土川町 伏見区久我西出町	85.09.17 ～ 85.03.27	A区1886 B区380	ND93-2B42VH	京都市(西羽東師川) 河川改修工事	上村 久世	
	34	60-021 左京二条三坊十五・十六町 (85NG-KS002)	伏見区久我西出町4-10他	85.06.17 ～ 85.10.08	4330	ND93-2F31CH	京阪セロファン株式会社 工場建設	長宗 鈴木(広)	
	35	60-022 左京四条二坊十四町 (85NG-PV005)	伏見区羽東師菱川町	85.11.05 ～ 86.03.15	T区675 U区438	ND93-4A52BO ND93-4A53EU	京都市 外環状線道路改良工事	長宗 鈴木(広) 吉崎	
その他の遺跡	36	60-001-04-02 栗栖野瓦窯跡 (85RH-QL002)	左京区岩倉幡枝町665-28	85.04.01 ～ 85.07.13	700	ND44-4H22EC	川端絹子	京都市 埋文センター	国庫補助
	37	60-029 北野鳥居前遺跡 (85RH-SR)	上京区御前通今出川上る鳥居前町671(翔鷲小学校)	85.07.29 ～ 85.08.09	240	ND54-3I34JR	京都市翔鷲小学校 屋内体育館増改築工事	平尾 本	
	38	60-001-05-04 双ヶ丘中学校内遺跡	右京区花園岡ノ本町	85.09.30 ～ 85.10.05	4	ND63-4E41DS	京都市双ヶ岡中学校	平尾	国庫補助
	39	60-039 伏見城跡 (85FD-AB)	伏見区東組町698 他	85.10.31 ～ 85.12.14	800	ND94-2I55UQ	大同建設株式会社 マンション建設	平安京 調査会	

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	調査地点表示	調査原因者	担当者	分類
その他の遺跡	40	60-047 金森出雲遺跡、 御香宮廃寺 (89FD-AC002)	伏見区桃山町金森出雲3-3、3 -4	86.01.06 ～ 86.02.18	1507	ND94-2J55XH	株式会社西陣住建 宅地造成工事	平安京 調査会	
	41	60-012 貞観寺跡 (85FD-UA)	伏見区深草瓦町61 (深草坊町遺跡)	85.05.01 ～ 85.06.08	300	ND84-4H24KL	京都市、東部農業指導 所事務所建設	梅川	
	42	60-013 大宅廃寺 (85RT-OT)	山科区大宅山田烏井脇町奥山田	85.05.09 ～ 86.04.28	10775	ND85-2H55QM ND86-1E310J	京都市 勤修中学校分校建設	平方 菅田	
	43	60-017 大藪遺跡 (85MK-OD005)	南区久世殿城町481-3 (久世中学校)	85.05.07 ～ 85.06.14	158	ND83-4F22DE	京都市 久世中学校校舎増築	上村 久世	
	44	60-001-05-05 円山古墳群	西京区大原野石作町	85.11.6 ～ 85.11.14	9	ND82-3J22KA		加納	国庫 補助

付表2 昭和60年度試掘・立会調査一覧表

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	種類	調査契機	概要	担当	本文番号
平安宮	1	60-5-1 主殿察・大宿直・梨本院・職御曹司・西雅院・主水司 (85HQ-G-9894)	上京区智恵光院通一条下る南新在家地先～智恵光院通丸太町上る西院町地先	85.07.26 ～10.19	51	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	路面埋土、平安時代中期の遺物包含層・時期不明の流路	百瀬	1
	2	60-2-4 左京三条一坊一・二・三・七町 (85HK-W-4)	中京区西ノ京北聖町～西ノ京南聖町地内	85.07.01 ～08.06	723	立会	京都市水道局 配水管敷設	江戸時代末の石垣・道路跡	家崎	
	3	60-37-10 左京三条二坊三・四・五・六町 左京四条二坊一・二・三・四・五・六・七・八町 (85HK-W-10)	中京区、下京区御池通～四条通間の大宮通～堀川通地内	85.12.02 ～86.01.18	1992	立会	京都市水道局 配水管敷設	攪乱激しく、路面状遺構を一部検出するのみ	家崎	
平	4	60-5-2 左京四条一坊二・三・四・五・七・十一・十三町 (85HK-G-9337)	中京区壬生朱雀町24-13地先～坊城町地先	85.04.25 ～05.24	521	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	遺構・遺物無し	百瀬	
	5	60-5-4 左京六条一坊三・十四町、左京七条一坊七・十五町 (85HK-G-9582)	下京区貫町通五条下る敷ノ内町地先～下京区突抜二丁目地先	86.02.06 ～02.18	305	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	時期不明の土師器を含む遺物包含層を確認	百瀬	
安	6	60-2-6 左京六条一坊十三・十四町、左京七条一坊七・十五町 (85HK-W-6)	下京区五条通北側歩道大宮通～堀川通	85.05.15 ～06.07	392	立会	京都市水道局 配水管敷設	室町時代の遺物包含層	家崎	
京	7	60-2-9 左京六条三坊三・四・七・八町 (85HK-W-9)	下京区若宮通の五条通～花屋町通	85.09.11 ～09.14	196	立会	京都市水道局 配水管敷設	室町～江戸時代の遺物包含層	家崎	
	8	60-2-8 左京六条四坊一・二・七・八町 (85HK-W-8)	下京区松原通～五条通、東洞院通～柳馬場通	85.07.08 ～08.12	942	立会	京都市水道局 配水管敷設	遺構なし	家崎	
左	9	60-5-3 左京六条四坊四・五町、左京七条四坊一町 (85HK-G-9300)	下京区富小路通五条下る本塩釜町地先～東洞院花屋町	85.06.27 ～07.26	229	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	近世の路面を確認	百瀬	
京	10	60-5-5 左京七条一坊三・四・五・六町 (85HK-G-9633)	下京区朱雀正会町地先～夷馬場町地先	85.12.23 ～86.04.25	430	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	時期不明の池或いは流路状の遺構を確認	百瀬	
	11	60-2-17 左京六条四坊七・八・九・十町 (85HK-W-17)	下京区松原中之町・堅田町他 下京区花屋町	85.04.11 ～05.11	465	立会	京都市水道局 配水管施設	時期不明の流路・湿地	百瀬	59年度に報告
	12	60-26-1 左京七条一坊八町 (85HK-XE)	下京区花屋町通櫛笥西入小阪児童公園	85.09.17	32	試掘	防火水槽埋設	地表下1.2mまで近世攪乱	平尾	
	13	60-26-3 左京七条四坊九町 (85HK-FM)	下京区西木屋町通上ノ口上る梅浜 菊浜小学校	85.07.15 ～07.16	25	試掘	防火水槽埋設	攪乱のみ	平安京調査会	

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	種類	調査契機	概要	担当	本文番号
平安京左京	14	60-2-12 左京八条二坊一・二・七・八・九・十町 (85HK-W-12)	下京区七条通～塩小路間の大宮通～堀川通	85.03.01 ～ 05.18	900	立会	京都市水道局 配水管敷設	猪熊小路・塩小路の側溝・路面	百瀬 吉村	2
	15	60-5-6 左京八条二坊八・九町 (85HK-G-9285)	下京区下魚棚通大宮東入大工町地先～七条通油小路西入油小路町地先	85.04.29 ～ 07.18	370	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	平安時代の大宮大路・猪熊小路関係の遺構、中世の蔵骨器・土壘・井戸・柱穴	百瀬	3
	16	60-51 左京九条三坊四・五・十二・十三町 四坊四・五町 (85HK-W-51)	南区東九条下殿田町～東御霊町	86.01.25 ～ 02.27	580	立会	京都市水道局 配水管敷設	弥生時代の土壘・包含層。鎌倉・室町時代の井戸・土壘・柱穴	百瀬	4
平安京右京	17	60-31 右京二条三坊 (85HK-SE6)	中京区西の京中御門西町25 朱雀第八小学校	85.08.20 ～ 08.22	114	試掘	体育館施設	時期不明の流路・土壘	平尾 本	
	18	60-5-8 右京四条一坊五・六町 (85HK-G-9423)	中京区壬生森町地先～神明町地先	85.06.27 ～ 07.11	306	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	近世の道路側溝	百瀬	
	19	60-5-7 右京四条一坊十・十一・十二・十三・十四町 (85HK-G-9345)	中京区壬生中川町地先～森町地先	85.06.08 ～ 10.31	1867	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	平安時代の遺物包含層、中世の土壘、近世の池・流路	百瀬	
	20	60-26-2 右京五条三坊・五条大路 (85HK-QB)	下京区西院清水町 西院清水児童公園	85.09.17	32	試掘	防火水槽	遺構無し、地表下3mまで攪乱	平尾	
	21	60-5-9 右京九条一坊九町・西寺跡 (85HK-G-9700)	南区唐橋門脇町地先～井園町地先	86.03.12 ～ 04.24	311	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	弥生時代から古墳時代の土壘・遺物包含層、平安中期の遺物包含層	百瀬	6
鳥羽離宮跡	22	60-4、59-57 鳥羽離宮跡 (84TB-SW-57)	伏見区竹田浄善院町他	85.03.04 ～ 08.24	628	立会 試掘	京都市下水道局 公共下水道工事	平安時代の溝・池・井戸・地業跡・突堤状遺構	磯部 鈴木(久)	7
	23	60-33 鳥羽離宮跡 (85TB-SW-33)	伏見区樋ノ井町竹田内畑町他	85.08.19 ～ 05.14	450	立会 試掘	京都市下水道局 公共下水道工事	弥生～古墳時代の流路。平安～鎌倉時代の溝・土壘・池	同上	7
	24	60-38 鳥羽離宮 (85TB-SW-38)	伏見区中島御所ノ内町・中島前山町	85.10.11 ～ 11.23	250	立会	京都市下水道局 公共下水道工事	平安時代後期の流路又は池跡	磯部	8
	25	60-41 鳥羽離宮 (85TB-SW-41)	伏見区中島堀端町・竹田露川町	85.11.09 ～ 12.21	410	立会	京都市下水道局 公共下水道工事	弥生時代の流路	磯部	9
	26	60-43 鳥羽離宮 (85TB-SW-43)	伏見区竹田露川町・堀端町・中島外山町・中道町	85.12.09 ～ 86.01.23	450	立会	京都市下水道局 公共下水道工事	時期不明の流路	磯部	10
	27	60-5 鳥羽離宮 (85TB-G-9613)	伏見区竹田内畑町地先	85.11.09 ～ 12.03	250	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	室町時代後期の流路域或いは池状遺構	百瀬	

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	種類	調査契機	概要	担当	本文番号
鳥羽離宮跡	28	60-5 鳥羽離宮 (85TB-G-9692)	伏見区竹田真幡木町地先 ～桶ノ井町地先	86.02.18 ～ 03.18	355	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	遺構・遺物無し	百瀬	
	29	60-5 伏見城跡 (85TB-G-9350)	伏見区深草墨染町地先～ 大亀谷六鉢町地先	85.11.30 ～ 86.02.03	396	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	時期不明の遺物包含層	百瀬	
	30	60-42 伏見城跡 (85FD-AC)	伏見区桃山町金森出雲3 -3、3-4	85.11.25 ～ 12.21	509	試掘	分譲住宅造成工事	発掘調査に切り替え	平安京調査会	
洛東地域	31	60-26-4 中臣遺跡 (85-RT-NK-62)	山科区勤修寺東金ヶ崎町	85.09.13	29	試掘	防火水槽埋設	遺構なし	丸川	
	32	60-54 山科本願寺 (85-RT-SW-54)	山科区音羽伊勢宿町・西 野広見町・大御手洗町他	86.03.06 ～	1858	立会	京都市下水道局 公共下水道工事	次年度へ	百瀬	
	33	60-2-5 白河街区跡 (85-KS-W-5)	左京区岡崎北御所町他	85.04.17 ～ 05.02	268	立会	京都市水道局 配水管敷設	平安時代後期の瓦溜り、整地層を検出	家崎	
	34	60-5-11 白河街区跡 (85-KS-G-9289)	左京区聖護院西町2～中 町7	85.05.13 ～ 08.09	350	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	中世土壌・柱穴、縄文時代後期の土壌	百瀬	11
	35	61-13-11 白河街区跡 (85-KS-G-9678)	左京区東丸太町地先～岡 崎天王町地先		673	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	平安時代後期の瓦を多量に含む遺物包含	百瀬	12
	36	60-20 白河街区跡 (85-KS-ZO-05)	左京区岡崎法勝寺町 京都市動物園	85.06.17 ～ 06.20	41	試掘	休憩所建設	古墳時代の遺物包含層、平安時代の整地層と柱穴	平安京調査会	13
その他の遺跡	37	60-8 長岡京跡 (85-NG-KS-1)	伏見区久我西出町4-10	85.04.08 ～ 04.30	549	試掘	京阪ゼロファン 工場建設	発掘調査に切り替え	鈴木 (広) 長宗	14
	38	60-40 久我東町遺跡 (85-NG-PV)	伏見区羽東師古川町他	86.03.17 ～ 03.28	202	試掘	道路建設	室町時代の溝2条。 桃山～江戸時代の畦畔・溝・土壌	鈴木 (広)	
	39	60-5-10 南ノ庄正田瓦窯跡 幡枝古墳群 (85-RH-G-9518)	北区上賀茂ケシ山1地先 ～左京区岩倉北池田町地 崎	85.09.05 ～ 10.31	596	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	遺構・遺物無し	百瀬	
	40	60-2-11 南ノ庄田瓦窯跡 (85-RH-W-11)	左京区岩倉幡枝町	85.09.13 ～ 09.14	320	立会	京都市水道局 配水管敷設	遺構・遺物無し	家崎	
	41	60-2-7 常盤井殿町遺跡 (85-RH-W-7)	上京区上立売通～今出川 通同志社東通～寺町通地 内	85.08.03 ～ 09.18	952	立会	京都市水道局 配水管敷設	鎌倉時代の遺物包含層	百瀬	
	42	60-46 清水山古墳隣接地 (85-00-FM)	右京区太秦野元町1-1	86.01.16 ～ 01.18	55	試掘	防火水槽埋設	現代の溝・池	丸川	
	43	60-14 森ヶ東瓦窯跡・和泉 式部町遺跡 (85UZ-SW-27)	右京区太秦和泉式部町～ 森ヶ東町	85.05.07 ～ 11.30	541	立会	京都市下水道局 公共下水道工事	古墳時代の住居址・土壌・溝。平安時代の溝・流路。	平田	15
	44	60-27 広隆寺旧境内・一ノ 井遺跡・和泉式部町 遺跡 (85-UZ-SW-27)	右京区太秦蜂ヶ岡町・垣 内町・森ヶ西町	85.07.01 ～ 86.03.15	715	立会	京都市下水道局 公共下水道工事	古墳時代の住居址・土壌・柱穴。平安時代の落込み・土壌・溝	平田	16

	番号	契約・遺跡・記号	所在地	調査期間	面積	種類	調査契機	概要	担当	本文番号
その他の遺跡	45	60-5-12 史跡及び名勝嵐山 (85-MK-G-9647)	右京区嵯峨柳田町地先～中山町39地先	86.01.15 ～01.17	153	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	遺構・遺物無し	百瀬	
	46	60-5-13 史跡及び名勝嵐山 (85-MK-G-9618)	西京区嵐山東一川町地先	86.01.24 ～01.29	50	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	時期不明の流路	百瀬	
	47	60-37-13 史跡及び名勝嵐山 (85-MK-W-13)	西京区嵐山東一川町～嵐山茶尻町	85.11.21 ～12.20	365	立会	京都市水道局 配水管敷設	時期不明の土壌と洪水層	百瀬	
	48	山田桜谷古墳群	西京区山田桜谷町・下山田園尾町	86.2		分布		古墳2基発見 須恵器・埴輪片を採集	永田 丸川 上村	17
	49	60-359-60 極楽寺跡 (85-TB-SW-3) (84-FD-SW-60)	伏見区深草野手町・大門町・藪ノ内町	85.03.18 ～09.03	1083	立会	京都市下水道局 公共下水道工事	弥生時代の包含層。平安時代の土壌。鎌倉時代の池跡	吉村	18
	50	60-5-17 西飯食町遺跡 (85-TB-G-9322)	伏見区深草池ノ内町～飯食町	85.08.08 ～09.19	687	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	平安時代後期から室町時代の井戸・土壌・溝・柱穴	百瀬	19
	51	60-5-16 西飯食町遺跡 (85-TB-G-9313)	伏見区深草池ノ内町4-8地先	85.05.21 ～07.17	343	立会	大阪ガス ガス管入れ替え	遺構・遺物無し	百瀬	
	52	60-1-5 京都市内遺跡 BB	市内一円	85.04.01 ～ 86.03.31		試掘 立会	国庫補助		家崎	5

付表3 外部からの委託事業その他一覧表

番号	遺跡名	所在地	期間	委託事業(内容)	委託団体
1	平安京跡	下京区北小路通大宮西入御器屋町30 60-18	1985.06.01 ～07.31	写真撮影・測量	学校法人平安学園
2	京都市旧武徳殿	左京区聖護院門頓美町 60-30	1985.08.15 ～1986.03.31	写真撮影	脳阪俱二
3	加美遺跡	大阪市平野区加美東6丁目 60-34	1985.09.18 ～10.20	写真撮影 現像焼付	(財)大阪市文化財協会
4	大谷大学構内遺跡	北区小山上総町20 60-35	1985.09.18 ～10.20	写真撮影・測量・ 遺物復原	大谷大学
5	大阪城遺跡	大阪市 60-44	1985.11.02 ～11.08	写真撮影 現像焼付	(財)大阪市文化財協会
6	長岡京跡 左京南一条三坊五町 南一条第二小路	向日市鶏冠井町馬司15-1 60-52	1986.02.07	空中写真撮影	向日市教育委員会
7	長岡京跡 左京南217次調査 七条二坊五町・八条二坊八町	長岡京市調子1丁目25-1他 60-56	1986.03.13	空中写真撮影	(財)長岡京市埋文センター
8	平安京跡	下京区北小路通大宮西入御器屋町30 60-57	1986.03.20 ～1987.03.20	木器保存処理	学校法人平安学園
9	戸板遺跡	熊本市戸板町 60-24	1985.06.24 ～08.23	銅鏡復原 保存処理	熊本市長 星子敏雄
10	長岡京跡 右京209次 勝竜寺城跡 六条一坊上町・神足遺跡	長岡京市東神足2丁目1-1 60-45	1985.11.18	写真撮影	(財)長岡京市埋文センター